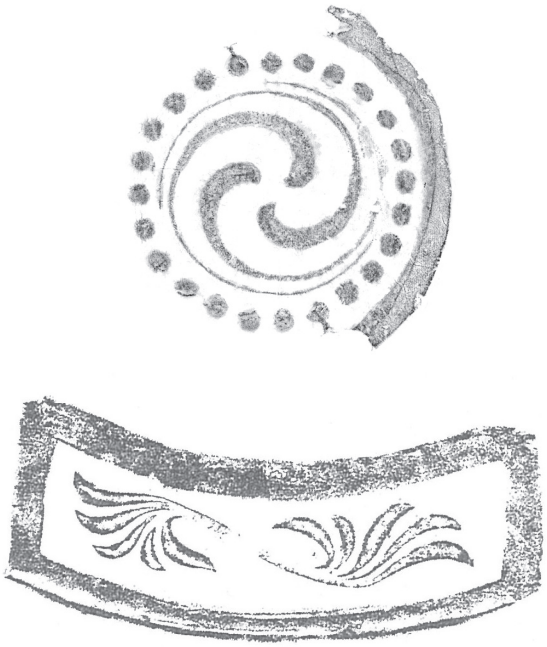
愛知県東海市

畑間（はたま）・東畑（ひがしはた）遺跡発掘調査報告



２００９年

愛知県東海市教育委員会

東畑遺跡１･２地点調査区全景（北より）

巻頭図版第 2

畑間遺跡 3 地点調査区全景（西より）

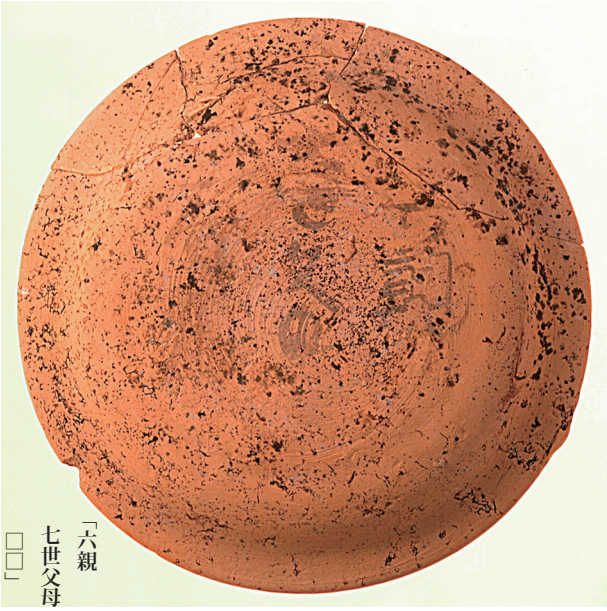
畑間遺跡 4 地点調査区全景（西より）

畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (1)(東より)

畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (2)(北より)

巻頭図版第 4

畑間遺跡 044SU 出土墨書土師器皿（77）



畑間遺跡 044SU 出土墨書土師器皿（80）

畑間遺跡 044SU 出土墨書土師器皿（79）

畑間遺跡 013SM 出土墨書山茶碗（83）

序

愛知県東海市は知多半島の付け根に位置し、伊勢湾に面する都市です。

現在では沿岸部の埋め立てにより多くの企業が立地し、海岸線を臨むことができなくなりましたが、今回報告する畑間遺跡および東畑遺跡で我々の先人が暮らしを営んでいた頃は、遺跡のすぐそばまで海水が入り込み、古代における「あゆち潟」とほぼ同じ様子であったようです。

これまで東海市における臨海部に営まれた集落については、その様相がよく分かっていませんでした。市では名古屋鉄道常滑線大田川駅周辺を市の中心街と位置づけ、平成４年度より区画整理事業を実施しています。これにともなって平成１１年度より行われてきた発掘調査において、こうした臨海部の集落の様子が明らかになってきました。

今回は平成２０年度に実施した発掘調査について、その成果を報告します。今回の調査では、これまでの調査で不明瞭であった中世における畑間遺跡の様子を知る手がかりを得ることができました。今後、本報告書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財に対する理解を深める一助となれば幸いです。

文末になりましたが、調査にあたり地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成２１年８月

愛知県東海市教育委員会

教育長　加　藤　朝　夫

例　　言

1.　本書は、愛知県東海市大田町畑間、東畑地内に所在する畑間（はたま）遺跡および東畑（ひがしはた）遺跡の発掘調査報告書である。

2.　本調査は、東海大田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より依頼を受け、国際航業株式会社に畑間・東畑遺跡発掘調査業務委託として委託し、実施した。

3.　本事業は、現地の発掘調査を平成20年11月10日から平成21年3月11日まで実施し、平成21年4月1日から平成21年8月7日まで整理作業ならびに本書の作成作業を実施し、本書の刊行をもって終了した。発掘調査面積は820㎡である。

4.　現地調査は、東海市教育委員会（社会教育課主事　宮澤浩司）の監督のもと、国際航業株式会社研究員桐山秀穂、坂野俊哉、西野順二、測量技師内田恭司、上田誠人、渡辺智、管理技師足立勤が担当した。調査・整理の体制は第1章第4節に記した通りである。

5.　調査の実施にあたって、東海市教育委員会、東海市中心街整備事務所、東海市シルバー人材センター、愛知県教育委員会、（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、知多古文化研究会など、関係各位のご協力を賜った。

6.　自然化学分析のうち、遺構013SMを形成する土層についての地質学的検討を鬼頭剛氏（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）に、山茶碗の内面に付着した赤色顔料の分析を堀木真美子氏（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）に、遺跡出土の昆虫化石の分析を奥野絵美氏（名古屋大学大学院博士課程）・森勇一氏（金城学院大学）に、木製品の樹種鑑定を株式会社吉田生物研究所に依頼した。

7.　調査および報告書作成にあたっては、赤塚次郎、芦田淳一、池田陸介、石黒立人、伊藤利和、伊藤裕偉、稲垣正宏、宇佐見守、奥川弘成、奥野絵美、尾野善裕、梶原義実、蟹江吉弘、川添和暁、鬼頭剛、小林康幸、坂本範基、真田泰光、柴垣勇夫、清水正明、鈴木敏則、鈴木とよ江、鈴木正貴、辻本彩、永井宏幸、中野晴久、中村信幸、新美倫子、贄元洋、西尾博久、　野々村光雄、　浜中邦弘、浜中有紀、早野浩二、樋上昇、福岡猛志、藤澤良祐、堀木真美子、水谷香織、水橋公恵、森勇一、矢部隆、山本信夫、山下勝年、和田英雄（五十音順）の各氏にご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

7.　遺構実測について上田と渡辺が行った。

8.　遺物実測について桐山、坂野、西野、渡辺のほか、町田義哉（国際航業株式会社）が行った。また、石器については沖野実（国際航業株式会社）が実測した。このほか、ナカシャクリエイテブ株式会社の協力を得た。

9.　写真撮影について遺構・土層は桐山と坂野が、遺物は桐山と西野が撮影した。

10.　出土した遺物、作成した図面・写真など記録・資料類はすべて東海市教育委員会で保管している。

11.　本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章第1節　宮澤浩司（東海市教育委員会）

第1章第4節・第5節、第2章第3節、第3章第3節、第4章、第5章　桐山秀穂（国際航業

株式会社）

第１章第２節・第３節、第２章第１節・第２節、第３章第１節・第２節　坂野俊哉（国際航業株式会社）

第４章第１節 鬼頭剛（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）

第４章第２節 堀木真美子（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）

第４章第３節 西野順二（国際航業株式会社）

第４章第４節 奥野絵美（名古屋大学大学院博士課程）・森勇一（金城学院大学）

12. 表紙のカットは、軒丸瓦は東畑遺跡２地点出土資料、軒平瓦は観福寺所蔵資料の瓦当の拓本を使用した。

13. 第２図では国土地理院発行の２万５千分の１地形図（鳴海）を、図版第19では国土地理院撮影の空中写真（1946年撮影）を使用した。

凡　　例

1. 調査記録の方位及び座標は世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、単位（m）を省略している。
2. 標高はすべてT.P.（東京湾平均海面高度）による。
3. 土層の土色観察および遺物の色調の観察には小山正忠・竹原秀雄編著・農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2007年度版）を用いた。
4. 遺構の略記号は以下の通りである。
   SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SM：貝塚　SP：柱穴・ピット　SU：集積遺構　SX：不明遺構　SZ：墳丘墓　NR：自然流路
5. 本書で使用する遺構番号は、遺構の種別に関係なく一連の通し番号で与えた。そしてこれらの番号の末尾に前述の遺構の略記号を付与し、遺構の種類を記すこととした。
6. 遺構図の縮尺は、各々図のタイトルに表示している。貝塚・溝については大きさにより1/50、1/100、1/200を使い分け、不同である。井戸・土坑については1/50に、遺物出土状況は1/40に統一した。
7. 遺構図中の遺構寸法の法量単位はｍである。
8. 本書で使用する遺物番号は土器・土製品・石製品の種類を問わず、通し番号を付与した。これにより本文・観察表・実測図・写真において、一つの遺物を指示する際には同一の番号を使用している。
9. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本としているが、遺物の大きさによって変更しているものがある。
10. 引用・参考文献は筆者及び発行年（西暦）を文中（ ）で示し、巻末に一括して掲載した。

目　　次

巻頭図版
例言・凡例

第 1 章 調査の経緯と遺跡の環境
第 1 節　調査にいたる経緯 ……1
第 2 節　遺跡の位置と環境 ……4
第 3 節　畑間・東畑遺跡における既往の調査 ……7
第 4 節　発掘調査の方法 ……8
第 5 節　調査経過 ……9

第 2 章 東畑遺跡の調査
第 1 節　概要と基本層序 ……11
第 2 節　遺構 ……16
第 3 節　出土遺物 ……23

第 3 章 畑間遺跡の調査
第 1 節　概要と基本層序 ……29
第 2 節　遺構 ……34
第 3 節　出土遺物 ……49

第 4 章 自然科学分析
第 1 節　畑間遺跡で検出された 013SM 硬化面の地質学的検討 (鬼頭剛) ……59
第 2 節　畑間遺跡出土山茶碗付着の赤色顔料分析 (堀木真美子)……62
第 3 節　畑間・東畑遺跡における動物遺存体（西野順二)……63
第 4 節　愛知県畑間・東畑遺跡から検出された昆虫化石について（奥野絵美・森勇一)……73

第 5 章 まとめ ……78

引用参考文献

挿図目次

第 1 図　畑間・東畑遺跡の位置 (1/1,000,000)…………………………………………1
第 2 図　調査地位置図 (1/25,000)……………………………………………………2
第 3 図　調査区の位置 (1/2,500)……………………………………………………3
第 4 図　周辺の遺跡 (1/15,000)……………………………………………………5
第 5 図　既往の調査地 ………………………………………………………………7
第 6 図　グリッド配置図 ……………………………………………………………8
第 7 図　東畑遺跡 1・2 地点土層断面図の位置 ……………………………………12
第 8 図　東畑遺跡 2 地点南壁土層断面図 (1/50)……………………………………12
第 9 図　東畑遺跡 2 地点西壁土層断面図 (1/50)……………………………………13
第 10 図　東畑遺跡 1 地点西壁土層断面図 (1/50)……………………………………14
第 11 図　東畑遺跡 1 地点東壁土層断面図 (1/50)……………………………………14
第 12 図　東畑遺跡 1・2 地点調査区全体図 (1/250)…………………………………15
第 13 図　東畑遺跡 007SZ 平面図・断面図 (平面図 1/100, 断面図 1/50)………………16
第 14 図　東畑遺跡 008SD 遺物 (4) 出土状況図 (1/40)………………………………17
第 15 図　東畑遺跡 015SD 遺物 (1･2) 出土状況図 (1/40)……………………………17
第 16 図　東畑遺跡 023SZ 平面図 (1/100)……………………………………………18
第 17 図　東畑遺跡 017SD 遺物 (5) 出土状況図 (1/40)………………………………18
第 18 図　東畑遺跡 024SZ 平面図・断面図 (平面図 1/100, 断面図 1/50)………………19
第 19 図　東畑遺跡 013SU 遺物出土状況図 (1/40) …………………………………20
第 20 図　東畑遺跡 004SD 遺物出土状況図 (1/40)……………………………………20
第 21 図　畑間遺跡 3・4 地点土層断面図の位置 ……………………………………29
第 22 図　畑間遺跡 4 地点西壁土層断面図 (1/50)……………………………………29
第 23 図　畑間遺跡 3 地点西壁土層断面図 (1/50)……………………………………30
第 24 図　畑間遺跡 3･4 地点北壁土層断面図 (1/50)…………………………………31
第 25 図　畑間遺跡 3･4 地点Ⅱ層上面調査区全体図 (1/250)…………………………32
第 26 図　畑間遺跡 3･4 地点Ⅱ層下面調査区全体図 (1/250)…………………………33
第 27 図　畑間遺跡 013SM 平面図 (1/200)……………………………………………35
第 28 図　畑間遺跡 037SD 平面図・断面図 (1/50)……………………………………36
第 29 図　畑間遺跡 011SB 平面図・断面図 (1/50)……………………………………37
第 30 図　畑間遺跡 038SE 平面図・断面図 (1/50)……………………………………38
第 31 図　畑間遺跡 023SD・024SD・028SD・034SD・035SD・036SD・050SD・057SD・029SK・032SK
・046SK・058SK・067SK・043SU・044SU・045SU・042SX 平面図 (1/200)……………39
第 32 図　畑間遺跡 044SU 遺物出土位置図 (1/50)……………………………………39
第 33 図　畑間遺跡 043SU・045SU 遺物出土位置図 (1/50)……………………………39
第 34 図　畑間遺跡 044SU 土師器皿集積遺構の構造 (模式図)………………………41
第 35 図　畑間遺跡 041SD・047SK・051SK 平面図・断面図 (1/50)…………………43
第 36 図　畑間遺跡 021SM 平面図・断面図 (1/50)……………………………………44
第 37 図　畑間遺跡 026SM 平面図・断面図 (1/50)……………………………………45
第 38 図　畑間遺跡 048SK 平面図・断面図 (1/50)……………………………………47
第 39 図　畑間遺跡 049SK 平面図・断面図 (1/50)……………………………………47
第 40 図　畑間遺跡 013SM の土壌サンプルの取得位置 (1/500)………………………59

第 41 図　畑間遺跡 013SM 土壌サンプルの X 線透過写真 ･･････････････････････････････････････60
第 42 図　畑間遺跡出土の赤色顔料分析結果 ･･62
第 43 図　畑間遺跡における貝層サンプル取得位置 (1/500)･･････････････････････････････････63
第 44 図　013SM における貝類の組成 ･･64
第 45 図　021SM における貝類の組成 ･･65
第 46 図　026SM における層位別貝類の組成 ･･65
第 47 図　026SM における貝類の組成 (1)･･65
第 48 図　026SM における貝類の組成 (2)･･66
第 49 図　022NR 出土イヌ頭蓋骨 ･･66
第 50 図　東畑遺跡・畑間遺跡における昆虫サンプリング位置 (1/500)･･････････････････････73

付表目次

第 1 表　東畑遺跡 1・2 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成 ･･････････････････････23
第 2 表　畑間遺跡 3・4 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成 ･･････････････････････49
第 3 表　畑間遺跡 3・4 地点における遺構出土中世土器・陶磁器の組成 ･･････････････････49
第 4 表　検出動物分類一覧 ･･70
第 5 表　出土動物遺存体一覧表 (脊椎動物)　個別採取 ･･････････････････････････････････71
第 6 表　出土動物遺存体一覧表 (無脊椎動物)　個別採取 ･･････････････････････････････71
第 7 表　出土動物遺存体　貝層サンプル ･･72
第 8 表　畑間遺跡から産出した昆虫化石 ･･74
第 9 表　東畑遺跡出土土器・陶磁器観察表 ･･85
第 10 表　東畑遺跡出土軒丸瓦観察表 ･･88
第 11 表　東畑遺跡出土瓦観察表 ･･88
第 12 表　東畑遺跡土製品観察表 ･･88
第 13 表　東畑遺跡石器観察表 ･･88
第 14 表　畑間遺跡出土土器・陶磁器観察表 ･･89
第 15 表　畑間遺跡出土軒丸瓦観察表 ･･96
第 16 表　畑間遺跡出土軒平瓦観察表 ･･96
第 17 表　畑間遺跡出土瓦観察表 ･･96
第 18 表　畑間遺跡出土土製品観察表 ･･97
第 19 表　畑間遺跡出土石器・石製品観察表 ･･97
第 20 表　畑間遺跡出土木製品観察表 ･･97

図版目次

巻頭図版第 1　東畑遺跡 1･2 地点調査区全景 (北より)
巻頭図版第 2　上　畑間遺跡 3 地点調査区全景 (西より)
　　下　畑間遺跡 4 地点調査区全景 (西より)
巻頭図版第 3　上　畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (1)(東より)
　　下　畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (2)(北より)
巻頭図版第 4　畑間遺跡 044SU 出土墨書土師器皿 (77・79・80)・013SM 出土墨書山茶碗 (83)

図版第 1　東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1)
図版第 2　東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (2)
図版第 3　東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (3)

図版第 4　東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (4)
図版第 5　東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (5)・瓦実測図
図版第 6　東畑遺跡 1･2 地点出土石器実測図・土製品実測図
図版第 7　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1)
図版第 8　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (2)
図版第 9　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (3)
図版第 10　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (4)
図版第 11　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (5)
図版第 12　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (6)
図版第 13　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (7)
図版第 14　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (8)
図版第 15　畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (9)
図版第 16　畑間遺跡 3･4 地点出土瓦実測図・土製品・銭貨実測図
図版第 17　畑間遺跡 3･4 地点出土石器・石製品実測図 (1)
図版第 18　畑間遺跡 3･4 地点出土石器・石製品実測図 (2)・木製品実測図
図版第 19　畑間・東畑遺跡周辺空中写真（上空から）
図版第 20　上　東畑遺跡 1 地点調査区全景 (北より)
　　下　東畑遺跡 2 地点調査区全景 (北より)
図版第 21　上　東畑遺跡 007SZ 完掘状況 (1)(南東より)
　　下　東畑遺跡 007SZ 完掘状況 (2)(北東より)
図版第 22　上　東畑遺跡 023SZ 完掘状況 (北西より)
　　下　東畑遺跡 023SZ 断面 (南西より)
図版第 23　上　東畑遺跡 017SD・021SP 完掘状況 (西より)　東畑遺跡 017SD 土器出土状況 (1)(西より)　同 (2)(北より)　東畑遺跡 008SD 断面 (西より)
　　下　東畑遺跡 015SD 断面 (東より)　東畑遺跡 008SD 土器 (4) 出土状況 (北より)　東畑遺跡 015SD 土器 (3) 出土状況 (東より)　東畑遺跡 015SD 土器 (1･2) 出土状況 (北より)
図版第 24　上　東畑遺跡 1 地点西壁土層断面 (1)(北東より)　同 (2)(北東より)　東畑遺跡 2 地点西壁土層断面 (北東より)　東畑遺跡 002SM 検出状況 (北より)
　　下　東畑遺跡 001SU 検出状況 (1)(北東より)　同 (2)(東より)
図版第 25　上　東畑遺跡 004SD 土器出土状況 (1)(南東より)　同 (2)(北西より)
　　下　東畑遺跡 004SD 断面 (北より)　東畑遺跡 004SD 土器出土状況 (3)(北西より)　東畑遺跡 012SU 検出状況 (北西より)　東畑遺跡 006SD 断面 (東より)
図版第 26　上　畑間遺跡 3 地点西半完掘 (1)(北東より)
　　下　畑間遺跡 3 地点西半完掘 (2)(南より)
図版第 27　上　畑間遺跡 4 地点調査区全景 (東より)
　　下　畑間遺跡 4 地点西半完掘 (西より)
図版第 28　上　畑間遺跡 3 地点西壁断面 (1)(東より)
　　下　畑間遺跡 3 地点西壁断面 (2)(東より)　同 (3)(東より)　同 (4)(東より)　同 (5)(東より)
図版第 29　上　畑間遺跡 3 地点 013SM 検出状況 (西より)
　　下　畑間遺跡 3 地点 013SM 完掘状況 (南より)
図版第 30　上　畑間遺跡 4 地点 013SM 検出状況 (西より)
　　下　畑間遺跡 4 地点 013SM 完掘状況 (東より)

図版第 31　上　畑間遺跡 3 地点 013SM 断面（南東より）　畑間遺跡 4 地点 013SM 断面および上面（東より）　畑間遺跡 4 地点 013SM 上面（拡大）　畑間遺跡 4 地点 013SM 断面（拡大）

下　畑間遺跡 037SD 検出状況（南より）　畑間遺跡 037SD 断面（南西より）　畑間遺跡 037SD 完掘状況（南東より）　畑間遺跡 019SU-10 検出状況（北より）

図版第 32　上　畑間遺跡 011SB 完掘状況（北より）

下　畑間遺跡 011SB 断面東半（北より）　畑間遺跡 011SB 断面西半（北より）

図版第 33　上　畑間遺跡 038SE 完掘状況（北西より）

下　畑間遺跡 038SE 断面（北より）

図版第 34　上　畑間遺跡 026SM 検出状況 (1)（南より）

下　畑間遺跡 026SM 検出状況 (2)（西より）

図版第 35　上　畑間遺跡 026SM 完掘状況（南東より）

下　畑間遺跡 026SM 断面（南東より）

図版第 36　上　畑間遺跡 021SM 検出状況（北より）　畑間遺跡 021SM 断面（北より）　畑間遺跡 025SM 検出状況（東より）　畑間遺跡 027SM 検出状況（西より）

下　畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (3)（東より）　同 (4)（東より）　同 (5)（東より）　同 (6)（東より）

図版第 37　上　畑間遺跡 045SU 検出状況（東より）　畑間遺跡 041SD 断面（南より）　畑間遺跡 058SK 木製品出土状況（南より）　畑間遺跡 047SK 断面（南西より）

下　畑間遺跡 048SK 完掘状況（南より）　畑間遺跡 048SK 断面（南より）　畑間遺跡 049SK 完掘状況（南より）　畑間遺跡 049SK 断面（南より）

図版第 38　上　東畑遺跡 1 地点包含層掘削　東畑遺跡 2 地点 013SU 遺物検出作業　畑間遺跡 3 地点包含層掘削・測量作業　畑間遺跡 3 地点 013SM 貝層サンプリング作業

下　畑間遺跡 3 地点 026SM 掘削作業　畑間遺跡 4 地点 044SU 遺物検出作業　畑間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (1)　畑間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (2)

図版第 39　東畑遺跡 015SD 出土土師器　東畑遺跡 017SD 出土土師器　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (1)　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (2)　東畑遺跡出土 004SD 弥生土器 (3)　東畑遺跡 013SD 出土弥生土器 (1)

図版第 40　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (4)　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (5)　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (6)　東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (7)　東畑遺跡 013SD 出土弥生土器 (2)　東畑遺跡 013SD 出土弥生土器 (3)

図版第 41　上　東畑遺跡出土山茶碗耳皿・小碗・小皿

下　東畑遺跡出土土師器鍋・山茶碗・常滑　東畑遺跡出土山茶碗・常滑　東畑遺跡出土弥生土器・瓦器椀・瀬戸美濃平碗　東畑遺跡出土石器

図版第 42　東畑遺跡出土瓦 (1)　東畑遺跡出土瓦 (2)　東畑遺跡出土瓦 (3)　東畑遺跡出土土製品

図版第 43　上　畑間遺跡 038SE 出土山茶碗

下　畑間遺跡 024SD 出土山茶碗

図版第 44　上　畑間遺跡 034SD(044SU) 出土土師器皿

下　畑間遺跡 034SD 出土山茶碗・常滑　畑間遺跡 034SD(045SU) 出土瀬戸美濃・常滑　畑間遺跡 036SD 出土瓦質土器鍋・山茶碗・常滑　畑間遺跡 038SE 出土常滑擂鉢

図版第 45　上　畑間遺跡 024SD・057SD 出土土師器皿・鍋　畑間遺跡 024SD・057SD・022NR 出土常滑　畑間遺跡 022NR 出土山茶碗　畑間遺跡 052SK・057SD 出土山茶碗

下　畑間遺跡 013SM 出土山茶碗・常滑　畑間遺跡 026SM 出土土師器鍋　畑間遺跡 026SM・027SM 出土土師器皿・鍋・山茶碗　畑間遺跡 029SK 出土山茶碗

図版第 46　上　畑間遺跡出土須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器　畑間遺跡出土白磁・青磁　畑間遺跡出土瀬戸美濃　畑間遺跡出土土師器・瓦質土器・山茶碗
下　畑間遺跡出土土製品　畑間遺跡出土焼土塊　畑間遺跡出土石器・石製品 (1)　畑間遺跡出土石器・石製品 (2)
図版第 47　畑間遺跡出土瓦 (1)　畑間遺跡出土瓦 (2)　畑間遺跡出土瓦 (3)　畑間遺跡出土瓦 (4)　畑間遺跡出土木製品 (1)　畑間遺跡出土木製品 (2)
図版第 48　畑間遺跡出土動物遺体 (1)(貝類)
図版第 49　畑間遺跡出土動物遺体 (2)(脊椎動物骨)
図版第 50　畑間遺跡出土動物遺体 (3)(脊椎動物骨)
図版第 51　畑間遺跡出土昆虫化石写真 (1)
図版第 52　畑間遺跡出土昆虫化石写真 (2)

第１章　調査の経緯と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯（第１～３図）

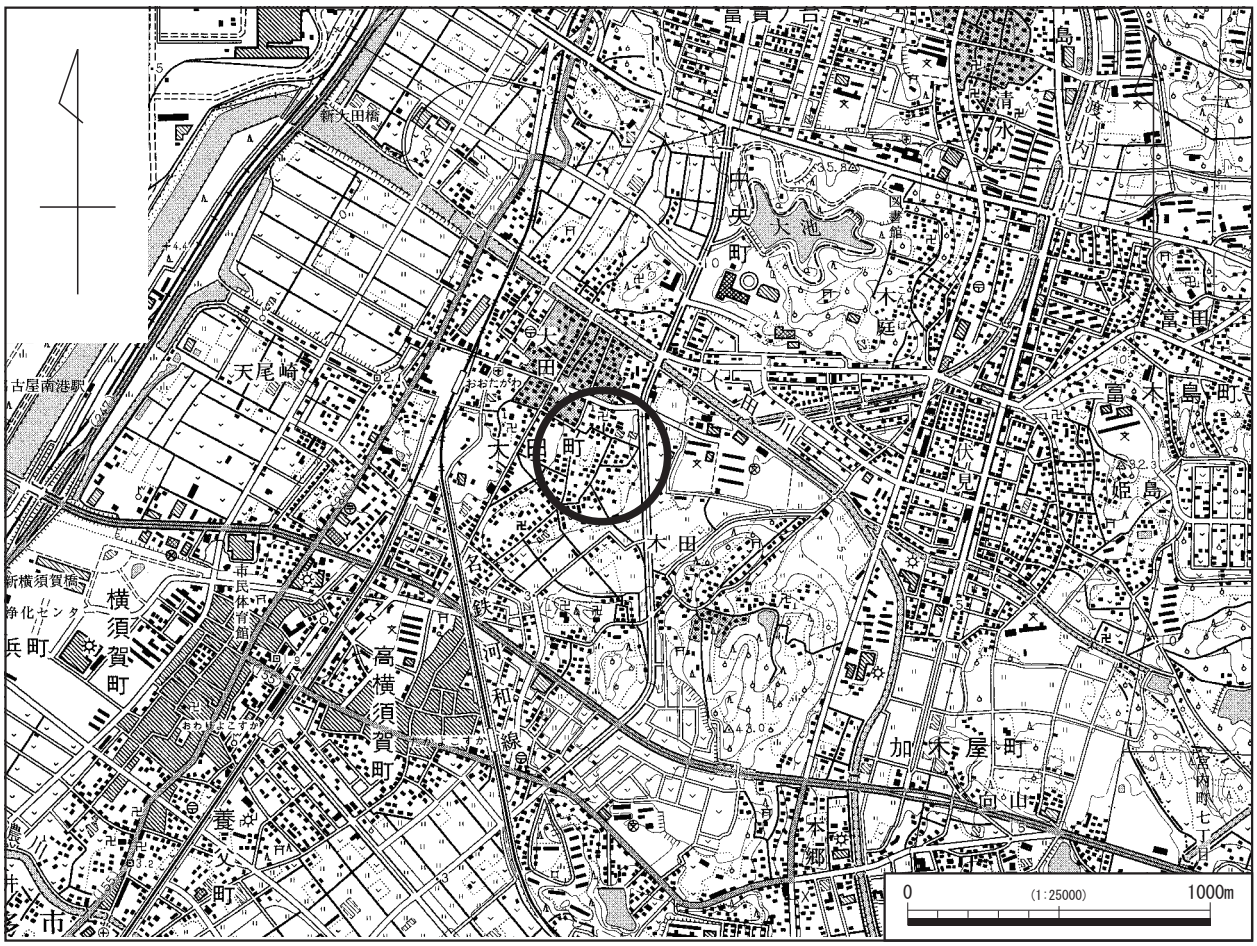
畑間遺跡および東畑遺跡（以下畑間･東畑遺跡）は愛知県東海市の大田町に位置する（第1･2図）。平成８年から10年にかけて愛知県教育委員会によって実施された知多半島遺跡詳細分布調査報告書（長島・柴田1999）によると畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての散布地、東畑遺跡は弥生から中世にかけての散布地とされている。

本市では名古屋鉄道大田川駅周辺を中心市街地として位置づけ、平成４年より土地区画整理事業を実施している。これに伴い、平成８年度には事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲ならびに性格を把握するため試掘調査を実施した。この調査により､事業区域内には畑間･東畑遺跡を始め、後田遺跡、郷中遺跡、龍雲院遺跡が存在することが確認された。この調査成果に基づき土地区画整理事業担当部局である中心街整備事務所と協議・調整を図り、平成11年度から東海市教育委員会によって主に道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成19年度末時点での調査済面積は7,490㎡である。

平成11年度から平成19年度までの調査については東海市教育委員会直営による発掘調査を実施している。この間、平成13年度調査の一部については発掘調査報告書を刊行している（立松・永井2004)。これを除く分については発掘調査概報の形で調査の概要を報告しており、現在本報告書作成に向けて整理作業を実施中である（永井・宮澤2007，宮澤2009)。調査成果の詳細はこれら報告書等を参照されたいが、平成20年度調査地点と隣接する地点について、その概略を示しておきたい（第３図）。

平成19年度調査では平成20年度調査１・２地点に接する北側区域を調査した。確認した主な遺

第１図　畑間・東畑遺跡の位置（1/1,000,000）

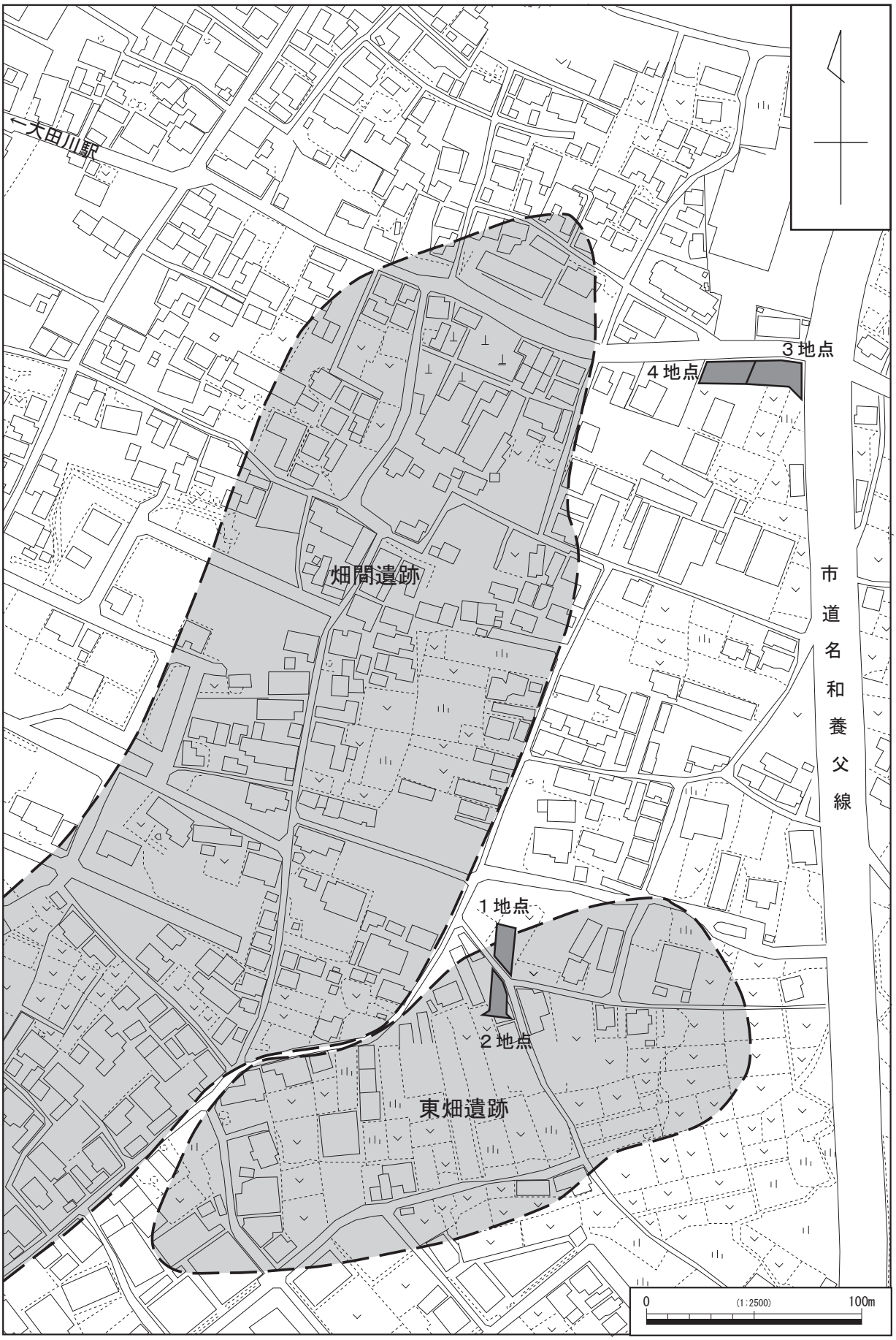


第２図　調査地位置図（1/25,000）

構としては方形周溝墓２基（弥生時代中期）、井戸１基（室町以降）がある。この内１基の方形周溝墓は調査区境界で確認したことから、平成 20 年度調査１地点に広がることが予想された。平成 20 年度調査３・４地点については平成８年度に試掘調査、および平成 19 年度に試掘調査を実施している。いずれの調査においても遺物包含層を確認している。出土遺物は山茶碗、茶臼等が主体であり、主に中世の遺構の存在が予想されていた。

平成 20 年度調査については、平成 20 年４月 22 日付け中第１号にて東海大田川駅周辺土地区画整理事業施行者である東海市より愛知県教育委員会に対して文化財保護法 94 条に基づき埋蔵文化財の発掘調査の通知がなされ、５月 14 日付けで愛知県教育委員会より発掘調査指示の通知があった。これを受けて東海市教育委員会に対して５月 30 日付け中第２号にて発掘調査依頼があった。このため調査対象区域 840 ㎡について、現地調査、整理作業、報告書作成業務について７月２日付けで国際航業株式会社名古屋支店と業務委託契約を締結した。用地交渉が当初見込みより遅れたため、調査着手が４か月ほど遅れたが、11 月 10 日より現地調査に着手し、平成 21 年３月 11 日に現地調査を終了、その後整理作業、報告書作成作業を進め、８月７日付けで成果品の納入を受けた。

（宮澤）



第３図　調査区の位置（1/2,500）（遺跡の範囲は東海市遺跡地図による）

第 2 節　遺跡の位置と環境（第 4 図，図版第 19）

畑間遺跡と東畑遺跡は、東海市南部の海岸平野に展開する大規模な砂堆上に形成された遺跡である。

知多半島の伊勢湾岸にはいくつかの海岸平野が発達しているが、東海市の大田町周辺から知多市北部にかけての平地は、もっとも大規模なものである。ここではこれを大田の谷と呼ぶことにする。この大田の谷には、旧海岸線に沿って複数列の砂堆が形成されているが、現在でも西側から 3 列の砂堆が確認できる（第 4 図，図版第 19）。

もっとも西側の旧海岸線に沿って形成された第 3 砂堆上には、古代土器製塩遺跡として著名な松崎遺跡や上浜田・下浜田遺跡が存在する。この第 3 砂堆は、何か所かで丘陵地に水源を発する中小規模の河川で分断されるものの、南に行くにつれて徐々に幅を広め、知多市側では砂堆上に中心的な集落が展開している。

第 2 砂堆は幅の狭く細長い未発達な砂堆で、名鉄大田川駅から北の大宮神社あたりまで確認でき、後田遺跡（古墳時代）が存在する。

第 1 砂堆は、真言宗の古刹弥勒寺の存在する丘陵と、天台宗の古刹である観福寺の存在する木田の丘陵に夾まれた平地のほぼ中央に展開する大規模な砂堆である。弥勒寺の山腹には戦国期の知多弥勒寺遺跡が、山裾には王塚古墳（古墳時代後期＝消滅）が、その南には今回報告する畑間遺跡や東畑遺跡が展開している。

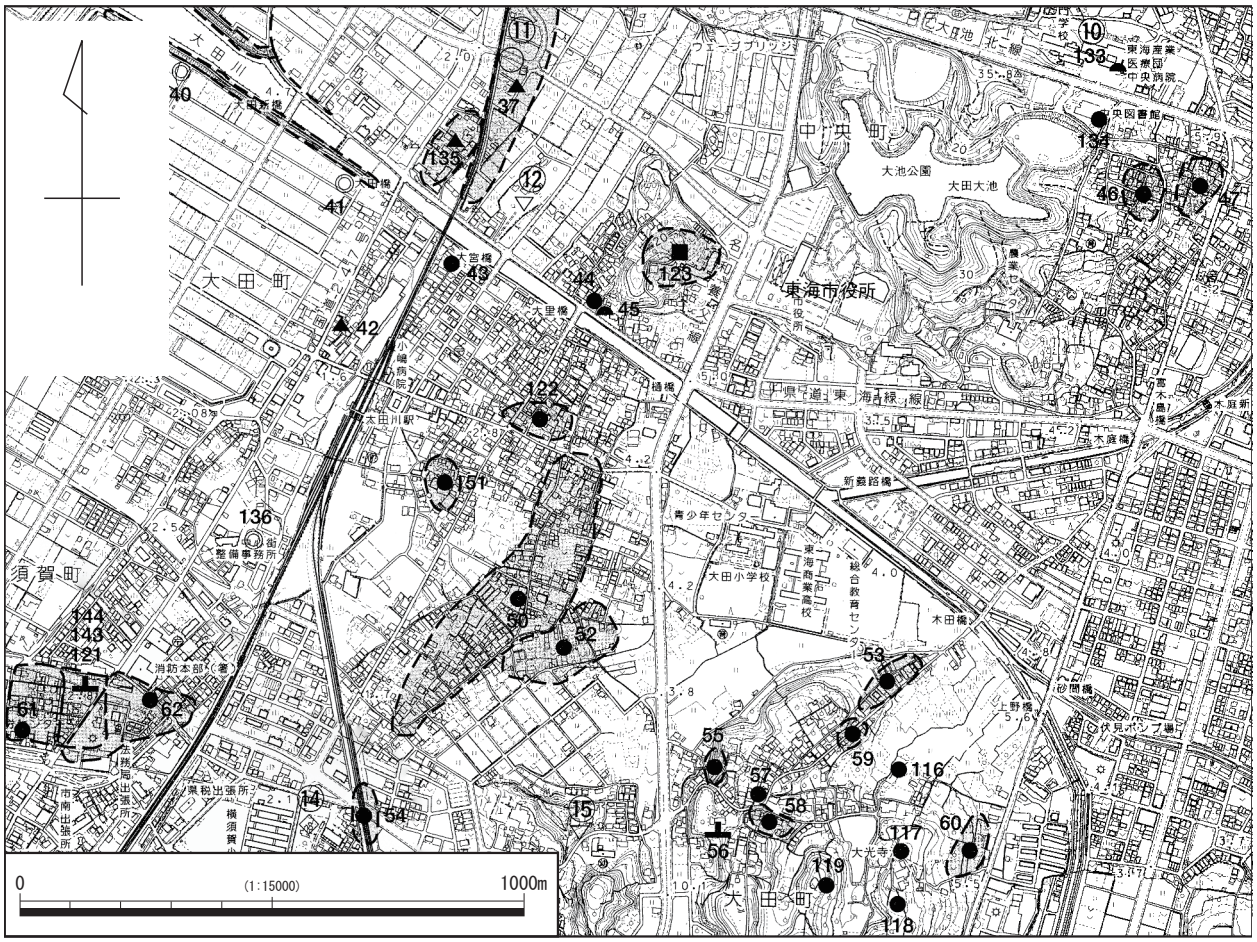
これらの砂堆の平均的な最高標高は 5m 前後であり、伊勢湾周辺に於ける縄文海進最高期の海水準が 4m 前後であったことを考えると、海進期から海退期にかけて、谷奥から順次形成されたものであろう。

現在の大田川は、これら 3 列の砂堆を東西に直線的に貫通して伊勢湾に注いでいるが、これは江戸時代の改修工事によるものである。すなわち尾張藩二代藩主徳川光友が現在の高横須賀町の地先に潮湯治のための別荘である横須賀御殿を造営する際に改修したものと伝えられている。改修以前の流路は耕地整理以前の航空写真や地形図などから容易に復元することができたが、第 1 砂堆南端を大きく迂回し、横須賀御殿用地のすぐ脇に河口を開いていた。

この大田の谷は奥で南北に走る断層谷へと分岐するが、大田川源流は南枝に伸びる加木屋の谷方面にある。北枝には荒尾方面から渡内川が流れており、富木島方面からの短い流れと合流する。これら 3 河川の合流地は第 1 砂堆のすぐ西側にあって、常に流路を変化させて長年にわたり後背湿地を形成していたようである。

大田の谷周辺にはさまざまな時代の遺跡が存在するが、現在知られている最古の遺跡は木田の高ノ御前遺跡である。谷奥の丘陵縁辺にあるこの遺跡は縄文時代前期の所産で、小規模な貝塚を伴う。縄文時代中期後期の遺跡は発見されていないが、晩期の土器片は少量が数か所で発見されている。

弥生時代前期の中心的な遺跡は隣接する知多市八幡の砂堆上に多くみられるが（荒古遺跡・細見遺跡など）、畑間遺跡でもこれまでに樫王式条痕文土器とそれに伴う無紋粗製小形平底深鉢形土器が出土し、この時期の土器製塩の可能性が指摘されている（立松・永井 2004）。また今回の調査でも遠賀川式土器が発見されたことは新しい知見である。弥生時代中期になると東畑遺跡では方形周溝墓の構築が始まり、後期を通じて営まれていく。



⑩　丸根古墳跡
⑪　松崎貝塚
⑫　大宮神社のクスノキ
⑭　万葉の歌碑
⑮　観福寺のツブラシイ
37　松崎貝塚
41　後浜新田堤防
42　下浜田遺跡
43　後田遺跡
44　神宮前遺跡
45　大塚古墳
46　峰畑貝塚
47　北屋敷遺跡
50　畑間遺跡
51　龍雲院遺跡
52　東畑遺跡
53　高ノ御前遺跡
54　太田川第３踏切貝塚
55　庄之脇遺跡
56　木田城跡
57　木田遺跡
58　下畑遺跡
59　前畑遺跡
60　北広遺跡
61　御亭遺跡
62　烏帽子遺跡
116　上前田遺跡
117　西広１号遺跡
118　西広２号遺跡
119　山畑遺跡
121　横須賀御殿跡
122　郷中遺跡
133　丸根古墳
134　大池北貝塚
135　上浜田遺跡
136　御州浜庭園跡
143　滝川半斎屋敷
144　横須賀代官所

第４図　周辺の遺跡（1/15,000）

古墳時代から古代前半にかけての遺跡は第１砂堆上にもみられるが、同時に第３砂堆の方にも拡大傾向が顕著に見られるようになる。このような様相は製塩土器の型式変化と同期し、古代を通じて伊勢湾湾奥部における塩生産の中心地として地位を確立していった。古墳としては、北側の丘陵裾に存在していた王塚古墳（消滅）や、弥勒寺遺跡地内でも古墳石室の痕跡が確認されたが、いずれも詳細は不明である。

古代末から中世の遺跡としての様相は詳らかでなかったが、遺物は砂堆上のいたるところで発見されていた（立松 1997，立松ほか 1998・2004 など）。知多古窯群と呼ばれる古窯遺跡も、いくつかの群をなして谷奥の丘陵地から発見されている。なかでも、今回の調査で加木屋周辺の古窯で生産されたと推測される瓦が大量に発見されたことは、中世の荘園の存在を考える上でも重要な情報である。特に、今回発見された杏葉唐草文の瓦当は極めて独創性に富んだ意匠を持つもので、以前

には観福寺境内、熱田神宮寺、社山古窯、論田古窯からの出土が知られていた（半田市 1993）。

加木屋の社山古窯では京都の法金剛院や鳥羽離宮東殿安楽寿院に供給する瓦が生産されていたことが知られているが、畑間・東畑両遺跡は古窯から最も近い距離に存在する消費遺跡でもある。同時に、知多や瀬戸などで生産された日常雑器も大量に発見されており、各生産地からの製品流通を知る上でも興味深い情報を提供してくれた。

なお、鎌倉時代までの記録に見られる荘園や国衙領の名前としては、荒尾郷、御幣田郷、木田郷、大郷（おおさと＝大里）郷、額石保などがみられる。荒尾郷は現在の荒尾町付近に、木田郷は観福寺の存在する丘陵地周辺に、大郷郷は近世の大里村、即ち第 1 砂堆周辺に比定されている。

戦国時代から近世にかけての遺跡は、各砂堆上で断片的に存在が知られており、第 1 砂堆の北、標高 26m 丘陵上に存在する弥勒寺境内の発掘調査では、戦国期に属する生活に伴う鍋などの遺物が大量に発見されており、注目される（立松ほか 1998）。弥勒寺は天平勝宝元年（749）行基によって開基されたという伝説を持つ真言宗の古刹であるが、創建時の様相はよくわかっていない。しかし、秘仏とされる弥勒菩薩座像は平成 20 年に再建された山門の旧仁王像とともに平安時代末期のものとされることなどから、少なくとも平安時代末までには弥勒寺が存在していた可能性が指摘できる。

今回畑間遺跡で発見された中規模の矩形区画溝の掘削は、平安時代末期に開始されたものと思われるが、13 世紀を通じて埋積されていった後にも、同一区画内周辺に仏教的な施設（小規模な仏堂など）が引き続き存在していた可能性が高い。畑間遺跡で発見された礎石群や焼土塊（土壁）の存在は一般的な集落の家屋で用いられていたものとは考えられず、続く戦国期においても同地内でかわらけを集積してまじない供養を行なっていたことから、宗教的色彩の強い空間であり続けた可能性が高い。

なお、畑間遺跡に隣接した常蓮寺は明応 2 年（1493）の開基と伝えられており、かわらけの集積が発見された地点からは指呼の距離にある。鎌倉期に今回の調査区内で検出された区画溝周辺で営まれていた寺院的空間が、戦国時代にすぐ西側に移転した可能性も考えられる。更にそのすぐ西側にある龍雲院は大永 6 年（1526）の開基とされるが、これらの寺院は戦国時代末期には悉く兵火に焼かれたと伝えられる。『横須賀町誌』（石川 1928）には龍雲院について「天文年中火災に罹って全部烏有に帰し云々」とあるが、弥勒寺遺跡で発見された硯には「天文十五年」（1546）という紀年線刻が見られた。弥勒寺の寺伝によれば、往時の七堂伽藍は信長の兵火に罹り頽廃したが、天文 11 年（1542）中興開山第一世顕昌上人により復興とされる。この記録を裏付けるように、発掘調査も焼土塊や廃棄土坑など確認されており、畑間遺跡も一連の歴史的様相から考えていく必要がある。

このように、畑間遺跡や東畑遺跡の存在する大規模砂堆は、そのほぼ全面が現在に至るまでの歴代遺跡であった可能性が高いが、時代による遺物・遺構の濃淡も明らかになりつつある。砂堆の上面は各時代で常に整地・削平され続け、現在にまで至っていたのである。

また、少なくとも近世以前は重要な交通や運搬の手段であった海運を考える場合も、旧河道を念頭に伊勢湾に面した川湊と一体化した集落の様相を考えるべきであろう。特に、京都方面まで運ばれていった瓦の集積や積み出しに関連した施設が、砂堆上の畑間や東畑地内に存在していた可能性は高いのである。

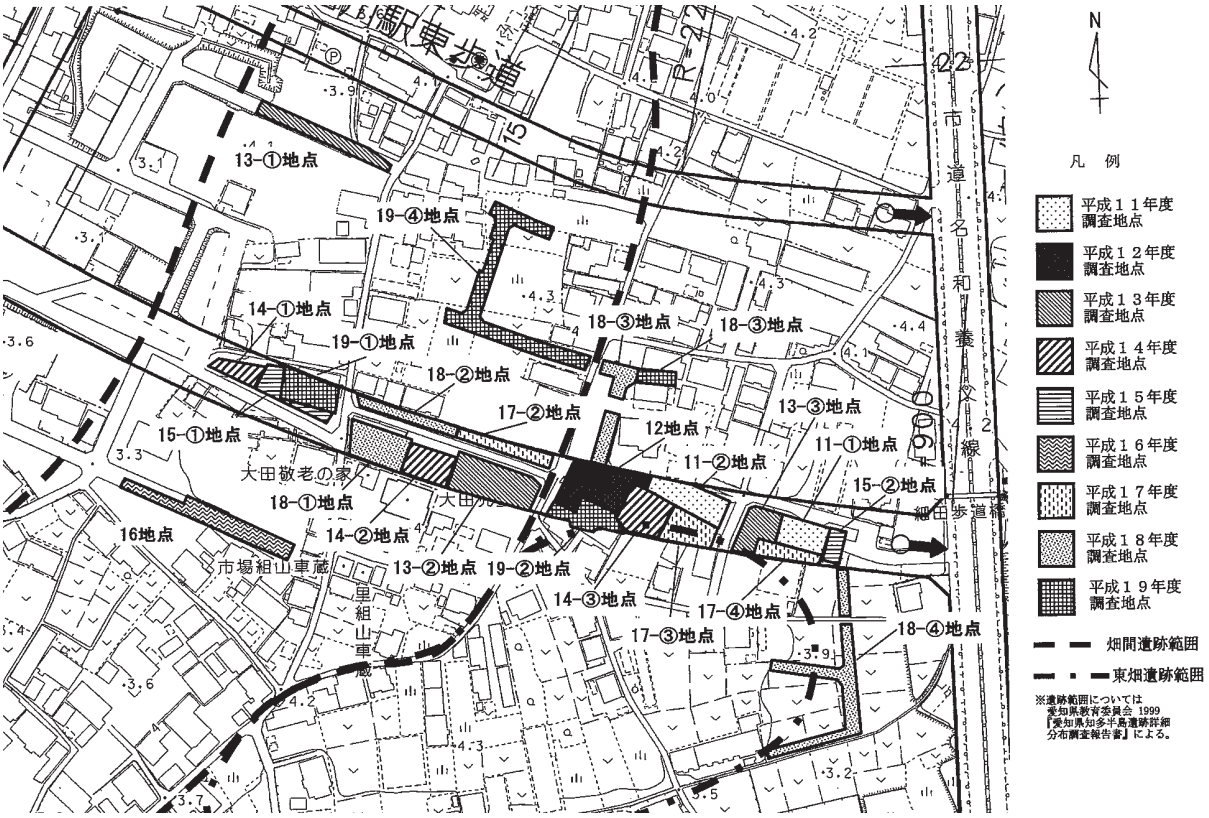
更に、地理的地形的環境から、砂堆上は何度も丘陵地側から押し寄せる洪水の被害を受けた痕跡が認められたが、また同時に海側から台風や高潮の影響も受け続けてきたことだろう。事実、東畑

遺跡では遺跡の基盤を為す砂層には、背後の丘陵地粘土層間に存在する鬼板（地中の鉄分が板状に堆積したもの）の摩耗した破片が多く混入していたし、畑間遺跡では中世の遺物包含層や貝層を削り覆う洪水性の砂層が確認されている。（坂野）

第３節　畑間・東畑遺跡における既往の調査（第５図）

畑間遺跡および東畑遺跡の存在は以前より知られていたが（文化庁 1975）、初めて調査されたのは、1996 年の東海市教育委員会による中心街整備計画に先立つ事前分布調査においてである。畑間遺跡・東畑遺跡で計 16 か所のトレンチを試掘し、遺跡の分布範囲と時期を確認した。畑間遺跡では中世を中心とする時期が考えられ、東畑遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期と古代・中世の時期が考えられた（立松 1997）。また、平成８年から平成 11 年に実施された愛知県教育委員会による知多半島詳細遺跡分布調査において、畑間遺跡は土師器、須恵器、製塩土器、山茶碗、鍋などが採集され、古墳時代から中世の散布地として、東畑遺跡は弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗が採集され、弥生時代から中世の散布地として周知されるようになった（長島・柴田 1999）。

大田川駅周辺土地区画整理事業が実施に移されてから、それに関連して道路整備用地に関しては記録保存を図る目的で東海市教育委員会が平成 11 年より発掘調査を継続して行ってきている（第５図）。それは平成 19 年度までで発掘総面積 7,490 ㎡に及ぶ。その結果一部先述したが、弥生時代前期の製塩土器が出土し、弥生時代中期の竪穴住居群、弥生時代中期・終末期の方形周溝墓群、古代の竪穴住居、中世の井戸や土坑が発見され、弥生時代前期から近世にいたる複合遺跡であることが明らかになってきた（立松・永井 2004, 永井・宮澤 2007, 宮澤 2009）。



第５図　既往の調査地

第４節　発掘調査の方法（第６図）

今回の発掘調査地は、土地区画整理に伴う市道建設箇所の発掘調査であり、畑間遺跡と東畑遺跡とで大きく２地点に分かれている。したがってそれぞれにグリッドを設定した（第６図）。

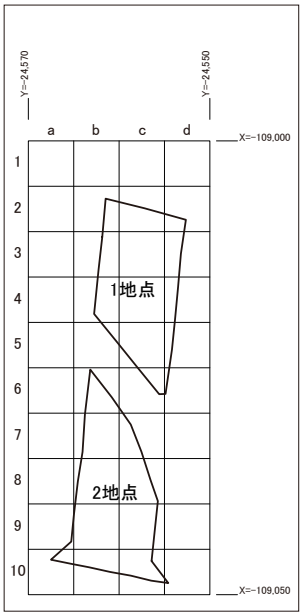
グリッドの設定については、世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系の座標に基づく 5m グリッドを設定した。すなわち東西・南北ともに座標値の１の位が５ないし０のラインを使い、調査区に 5m の方眼で覆い、調査区を含む範囲の西北隅の交点をグリッドの原点とする。これより X 軸上の 5m おきの点にアルファベット、Y 軸上の 5m おきの点にアラビア数字を順に割り振った。これらの交点は数字とアルファベットの組み合わせとして示すことができ、これを交点の名称とした。例えば原点では１ａである。そしてこの交点の南東の方眼（グリッド）の名称もこれを使用することとした。逆に言えばグリッドの名称はその西北隅の杭の名称を使用した（第６図）。

東畑遺跡の地点は、9m 道路の予定地であるが、調査対象地の中央を生活道路が通っており、それを避けて１地点、２地点と２つの地点に分かれている。1・2 地点については幅 9m 南北の長さ 40m の１連の調査地として発掘調査等を行うこととし、グリッドを設定した。グリッドは（X=-109,000,Y=-24,570）の点を原点とし、東西方向へａ～ｄ列を、南北方向で１～10 列を設定した。

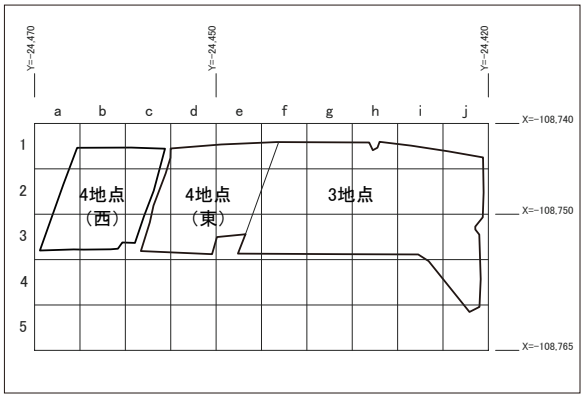
畑間遺跡の地点では、調査区を半分にして反転して調査を行った。先行する東半部が３地点、後で調査を行う西半部が４地点である。また、４地点では使用中の水道管、ガス管を埋設したまま、調査を行うこととなったため、４地点の中央を南北にアゼを残すこととなった。そこで、４地点については、便宜的にこのアゼの東側を「4 地点東区」、西側を「4 地点西区」として、地区名としてグリッドと併用した。グリッドは（X=-108,740,Y=-24,470）の点を原点とし、東西方向へａ～ｊ列を、南北方向で１～５列を設定した。

ほか、発掘調査および整理については基本的に愛知県埋蔵文化財センター編集・発行『埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル 2002』に基づいている。

遺跡の略号については畑間遺跡を「HM」、東畑遺跡を「HH」とした。



東畑遺跡グリッド配置図



畑間遺跡グリッド配置図

第６図　グリッド配置図

遺構について、番号は遺構の種類に関わらず通し番号を付した。そしてその末尾に記号を付し、遺構の種類を表した。今回の調査で使用した遺構の種類を表す記号は以下のとおりである。

溝：SD　井戸：SE　土坑：SK　柱穴・ピット：SP　貝塚：SM　集積遺構：SU　不明遺構：SX
墳丘墓：SZ　自然流路：NR

第 5 節　調査経過（図版第 38）

畑間・東畑遺跡発掘調査業務委託は平成 20 年 7 月 2 日に契約を締結し、翌 3 日に着手したが、発掘調査地にあった既存の建物及び生産地の移転が進んでおらず、すぐに調査に入れない状態であることが判明した。そこで東海市教育委員会と国際航業株式会社の協議を行い、7 月 14 日の協議にて工程の変更を行い、既存建物が取り壊される 10 月以降に調査に入り、工期は当初計画どおり 9 ヶ月で、納期を 3 月末から延長することで合意した。10 月 31 日に再び打合せを行い、現場の状況や現場事務所の予定地を確認した後、11 月 10 日より現地調査に入ることで合意した。その後、詰所・仮囲いの設置、調査区の位置出し、周辺住民に対する挨拶等、準備工を行い、予定通り、11 月 10 日より現地の発掘調査を開始した。

調査は畑間遺跡の 3 地点から着手した。機械表土掘削を 11 月 13 日まで行い、12 日からは作業員を入れて調査区の壁面清掃など整備を行った。近代の大きな撹乱が東半にあったが、その壁面の清掃中に包含層 50cm ほど堆積している下に幅 5m 以上の溝状の遺構が少なくとも 3 本切り合っていることを確認した。14 日からは包含層掘削を開始し、12 月 1 日から溝状遺構の掘削を開始する。12 月 2 日には、溝状遺構の中から、かなり広がりがある貝層（026SM）を検出する。サンプリングしつつ、掘削する。溝状の遺構のうち、最も新しい遺構は流水性の堆積を示しており、自然流路（022NR）と判断した。これは調査区を完掘した後の土層の再検討で洪水砂層として捉え直した。青磁・白磁・瓦が目立って出土した。12 月 3 日には区画溝 024SD の存在が判明し、4 日にかけて掘削する。最下層は腐植物を多く含むシルト層であり、中世の陶磁器類のほか、木製品などが多く出土した。4 日には完掘し、全景写真の撮影を行った。

12 月 8 日から 15 日に、3 地点の埋め戻し及び仮設駐車場の設営、4 地点の機械表土掘削を行った。16 日から作業員を入れて調査区の整備をした後、包含層の掘削を開始する。3 地点と同様瓦の出土が目立つ。また、25 日には墨書が施された土師器皿が出土した。12 月 26 日に包含層掘削を終了。冬休みの後、1 月 5 日より調査を再開し、遺構掘削を行う。奥野絵美氏による昆虫化石サンプリングを 1 月 5 日と 8 日に行った。6 日には溝 034SD 内に土師器皿の集積（044SU）を発見した。この中には墨書のある土師器皿が数枚含まれていた。13 日には完掘し、同日全景写真の撮影を行った。14 日には測量と写真撮影の補足を行い、埋め戻しを開始した。埋め戻しは 16 日に終了し、同日仮囲い等の 4 地点からの撤収も完了した。

次に 1・2 地点の調査に移った。1 月 19 日から 23 日に機械表土掘削を行い、1 月 22 日から作業員による調査区の整備と包含層掘削を行った。1 地点では弥生時代の周溝墓 007SZ を、2 地点では弥生時代の大溝を 2 本（004SD・006SD）検出した。2 月 4 日から遺構掘削を開始した。2 地点の大溝からは弥生土器の集積が見つかり、かつ 2 本の大溝は同一の方形周溝墓 024SZ の周溝であることも判明した。一方、1 地点では確認されていた周溝墓以外にもう 1 基、方形周溝墓 023SZ があることが確認された。1・2 地点は 12 日に完掘し、翌 13 日に全景写真の撮影を行った。そして 16 日から

19 日に埋め戻しを行い、19 日に仮囲い等の撤収も行い、現場作業を終了した。

整理作業は 1 月 14 日より開始した。現場事務所にて遺物洗浄を行い、3 月 3 日に終了した。現場作業終了後、現場事務所では写真整理、図面整理、台帳類・書類の作成を行い、3 月 13 日に撤収した。

その後は清須市の中部調査事務所に遺物と記録類を持ち帰って整理作業を進めた。ジェットマーカーにより遺物に注記した後、遺物台帳登録・実測・デジタルトレース・遺物写真撮影を行った。5 月 23 日には東海市平洲記念館にて遺物検討会が行われた。愛知県内外あわせて 18 名もの研究者が集まり、活発で有意義な議論が交わされた。この後報告文執筆や図版作成など報告書の作成作業を 8 月 7 日までに行い、本書を刊行することとなった。

発掘調査及び整理の体制は以下のとおりである。

調査監督員　宮澤浩司（東海市教育委員会社会教育課）
主任調査員　桐山秀穂（国際航業株式会社中部調査事務所所長）
調　査　員　坂野俊哉（国際航業株式会社主任研究員）
調査補助員　西野順二（国際航業株式会社研究員）（発掘調査では平成 20 年 12 月 1 日から平成 21 年 1 月 9 日まで）
計　測　員　内田恭司（国際航業株式会社測量技師）
　　上田誠人（国際航業株式会社測量技師）
　　渡辺　智（国際航業株式会社測量技師）
管 理 技 師　足立　勤（国際航業株式会社協力員）
発掘作業員・整理作業員
神野攻一・神野満喜夫・杉江功・中村勇夫・馬場翔子・原田剛男・平野幸治・三輪式尾・森岡錠一・山盛愛子・百合草陳之・吉田悠歩（50 音順・敬称略）

（桐山）

第 2 章　東畑遺跡の調査

第 1 節　概要と基本層序（第 7 ～ 12 図，巻頭図版第 1，図版第 20・24 上）

東畑遺跡 1・2 地点は第 1 砂堆上の遺跡であるが、砂堆の南西端に近く、南側に大田川の旧河道を擁する。基本層序は以下のとおりである（第 7 ～ 11 図）。

Ⅰ層：表土層。近現代の耕作土ないしは盛土である。

Ⅱ層：近世・近代の耕作土層。

1 地点の 1 の 7.5YR4/4 褐色砂、2 地点西壁土層 1 の 10YR3/3 暗褐色砂、2 の 7.5YR3/3 暗褐色砂、3 の 10YR3/2 黒褐色砂の各層がこれにあたる。有機質を含み黒色化しているが、これは耕作に由来するものであろう。

Ⅲ層：遺物包含層

7.5YR3/2 黒褐色砂層がこれにあたる。

遺跡の基盤層は粗砂主体の砂層であるが、その表面近くには周辺の丘陵地由来の鬼板片（地中の酸化鉄分が板状に凝固したもの）が多く含まれており、畑間遺跡の 3・4 地点では見られない特徴である。

大規模な撹乱を含む表土層以下、遺物包含層はやはり全て砂層中に完結するが、基盤層を掘削して構築された弥生・古墳時代の遺構（多くは方形周溝墓の周溝）を充填する埋土だけはより黒色が強ひさごひい。しかし、ここでは溝埋土中にシルト層や泥炭層の形成はみられないことから、より透水性の高い粗砂の性質に由来する特徴である可能性が高い。

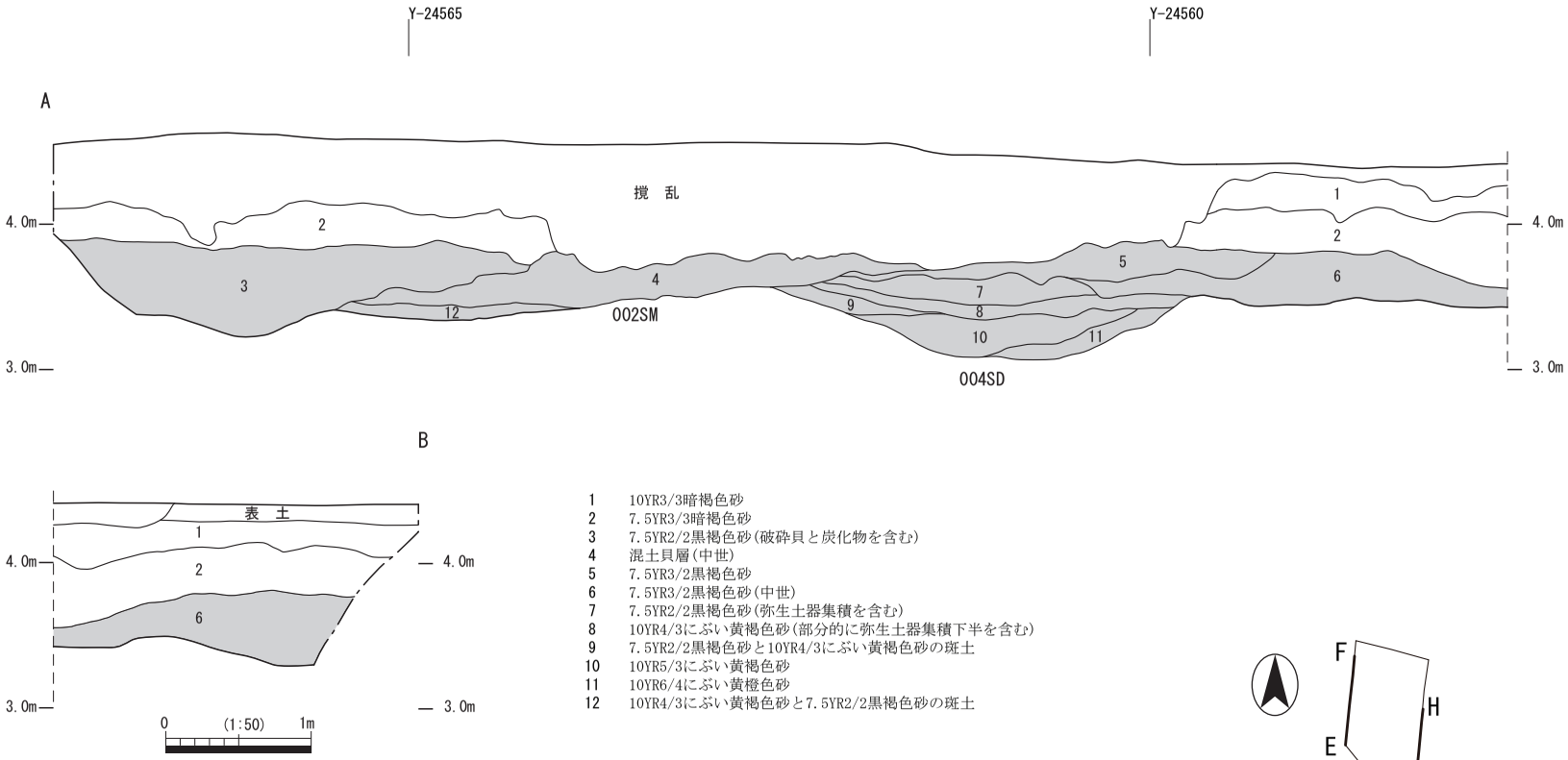
2 地点南部で検出された 004SD は 024SZ 方形周溝墓の周溝であるが（中期後半）、掘削後直ちに粗砂を主体とした砂で埋積されており、やはり洪水などの自然性の原因が想定される。その埋積層は再掘削されることなく、浅いまま大量の土器が供献（廃棄）されたのちに廃絶するが、弥生時代の加工面のほとんどは中世に撹乱されており、遺物の混合がみられる。

なお、中世の地業によって周溝墓の墳丘はほとんど削平されてしまったようだが、1 地点の 007SZ や 023SZ の場合はごく僅かに墳丘基部の残存が観察できた。しかし、各セクションにおける遺物包含層の分離は難しく、弥生時代と中世の境界は色調を除き明瞭ではない。

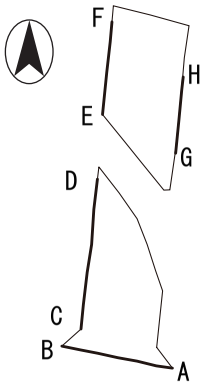
東畑遺跡 1・2 地点では、ごく少量の古代の土師器・須恵器が出土していることを除けば、遺構の主体は弥生・古墳時代と、中世という 2 時期に大別される。今回発見された遺構は、弥生・古墳時代の方形周溝墓 3 基、中世の溝 4 条、土坑 3 基、地点貝塚 1 基、土器集積遺構 2 基、ピットである（第 7 図，巻頭図版第 1，図版第 20）。

既に過去の東海市教育委員会の調査で、この周辺には弥生時代の方形周溝墓が、密度はさほど高くないが、群を為して展開する様相が知られており、該期の墓域として理解することが出来よう。なお、居住域に相当する傾向は未発見である。

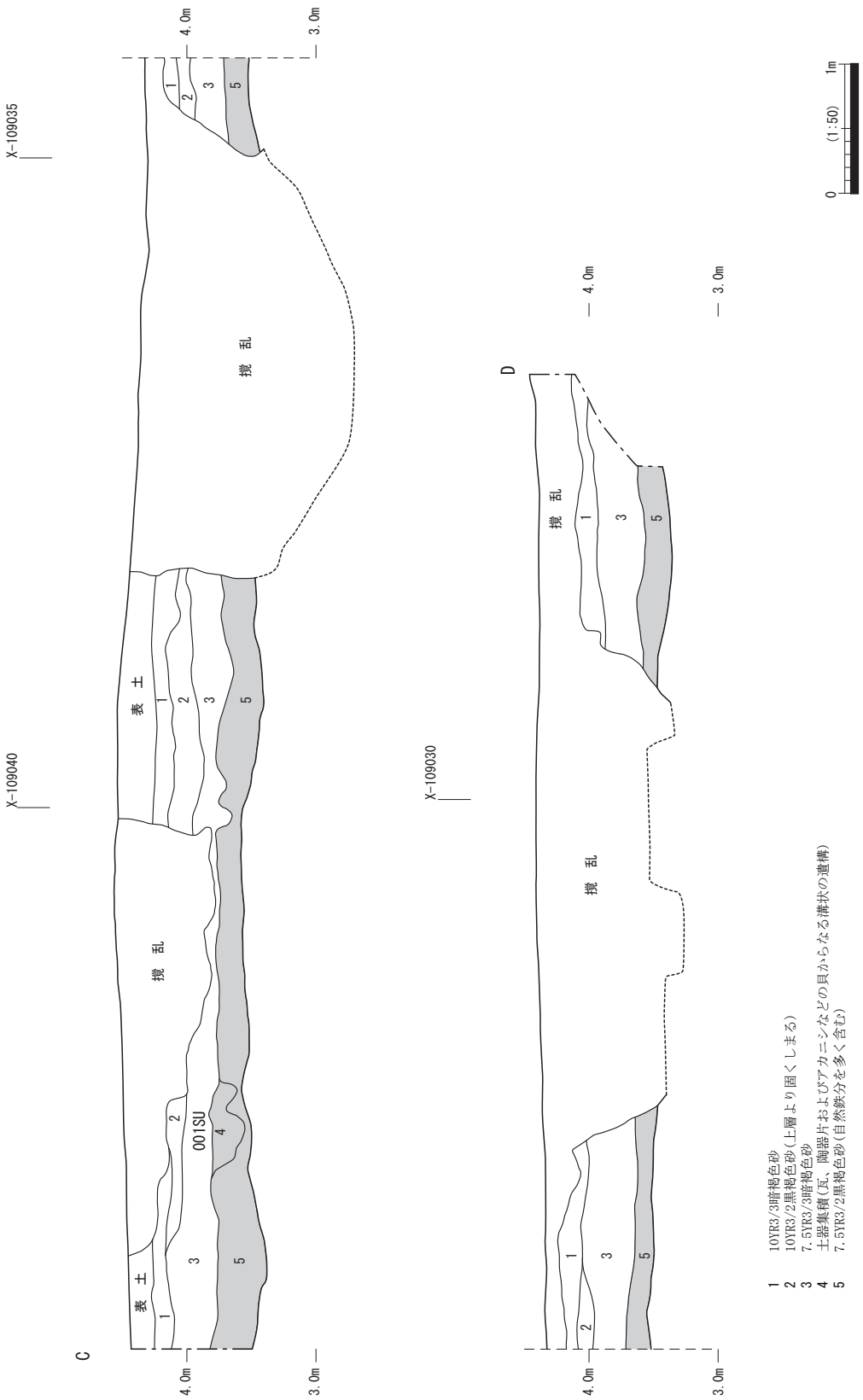
主に 2 地点で集中的に発見された瓦は、後述の畑間遺跡 3・4 地点で発見されたものと同質のものであり、本来は荘園などの産物としての流通品であろう。東畑遺跡周辺に寺院が存在し



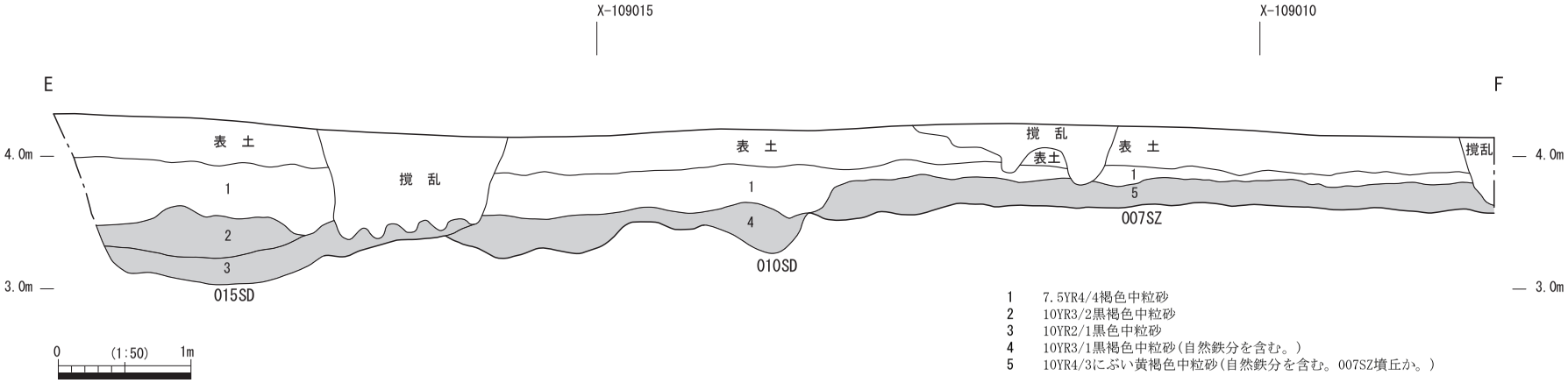
第８図　東畑遺跡２地点南壁土層断面図（1/50）
（トーンは遺物包含層または遺構埋土である。）



第７図　東畑遺跡１･２地点土層断面図の位置
（A～Fは第９～第13図の土層断面図と対応する）

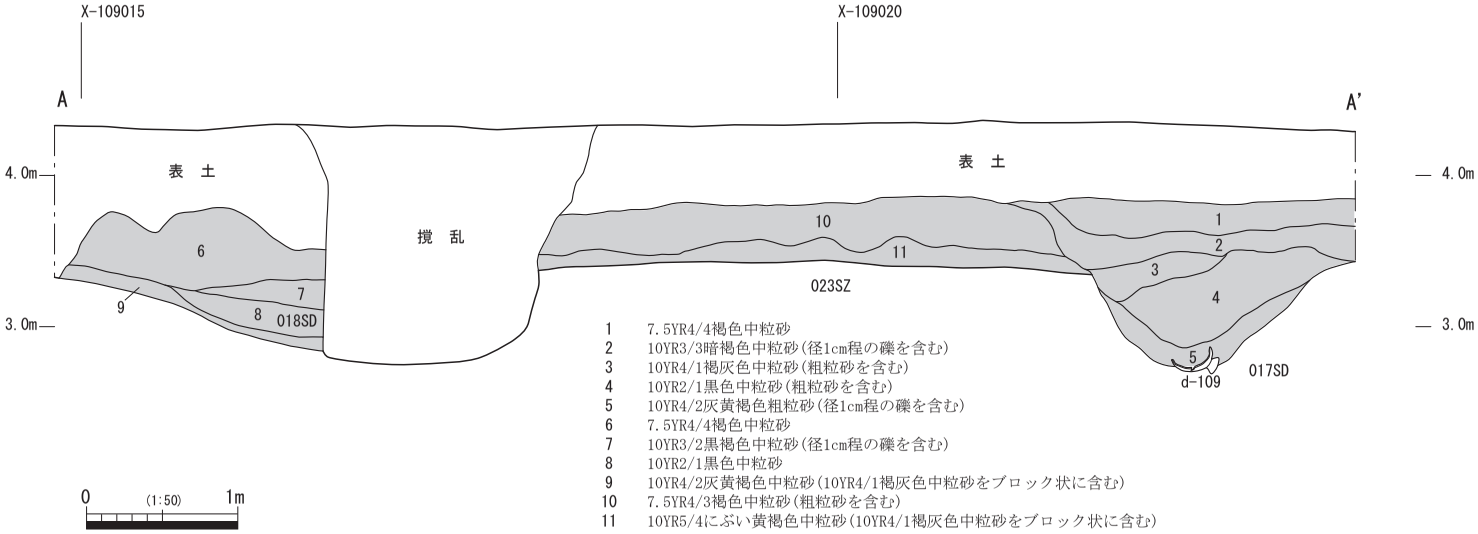


第９図　東畑遺跡２地点西壁土層断面図（1/50）
（トーンは遺物包含層または遺構埋土である。）



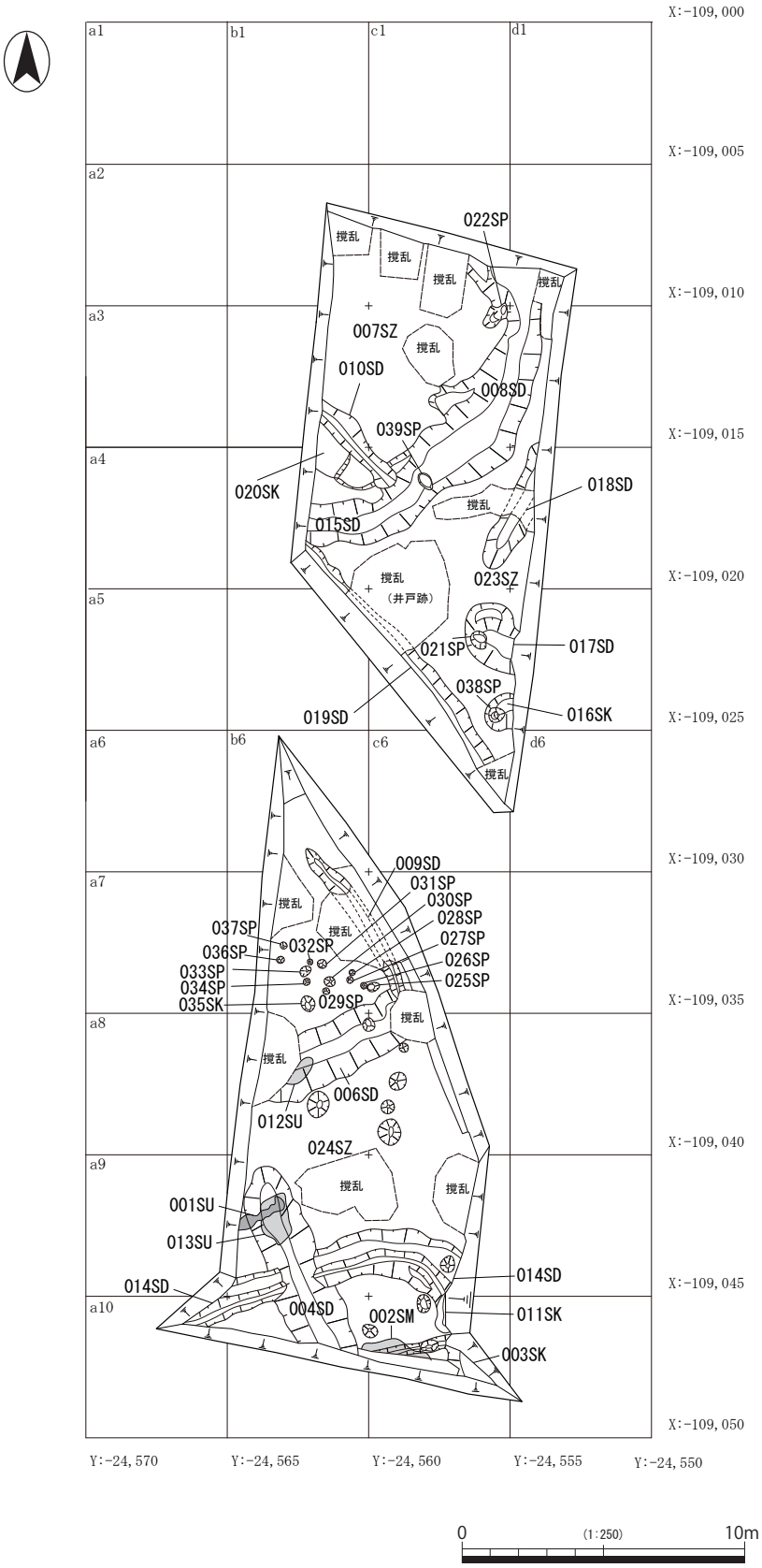
第 10 図　東畑遺跡 1 地点西壁土層断面図 (1/50)

(トーンは遺物包含層または遺構埋土である。)



第 11 図　東畑遺跡 1 地点東壁土層断面図 (1/50)

(トーンは遺物包含層または遺構埋土である。断面の位置は第 16 図参照)



第 12 図　東畑遺跡 1･2 地点調査区全体図 (1/250)

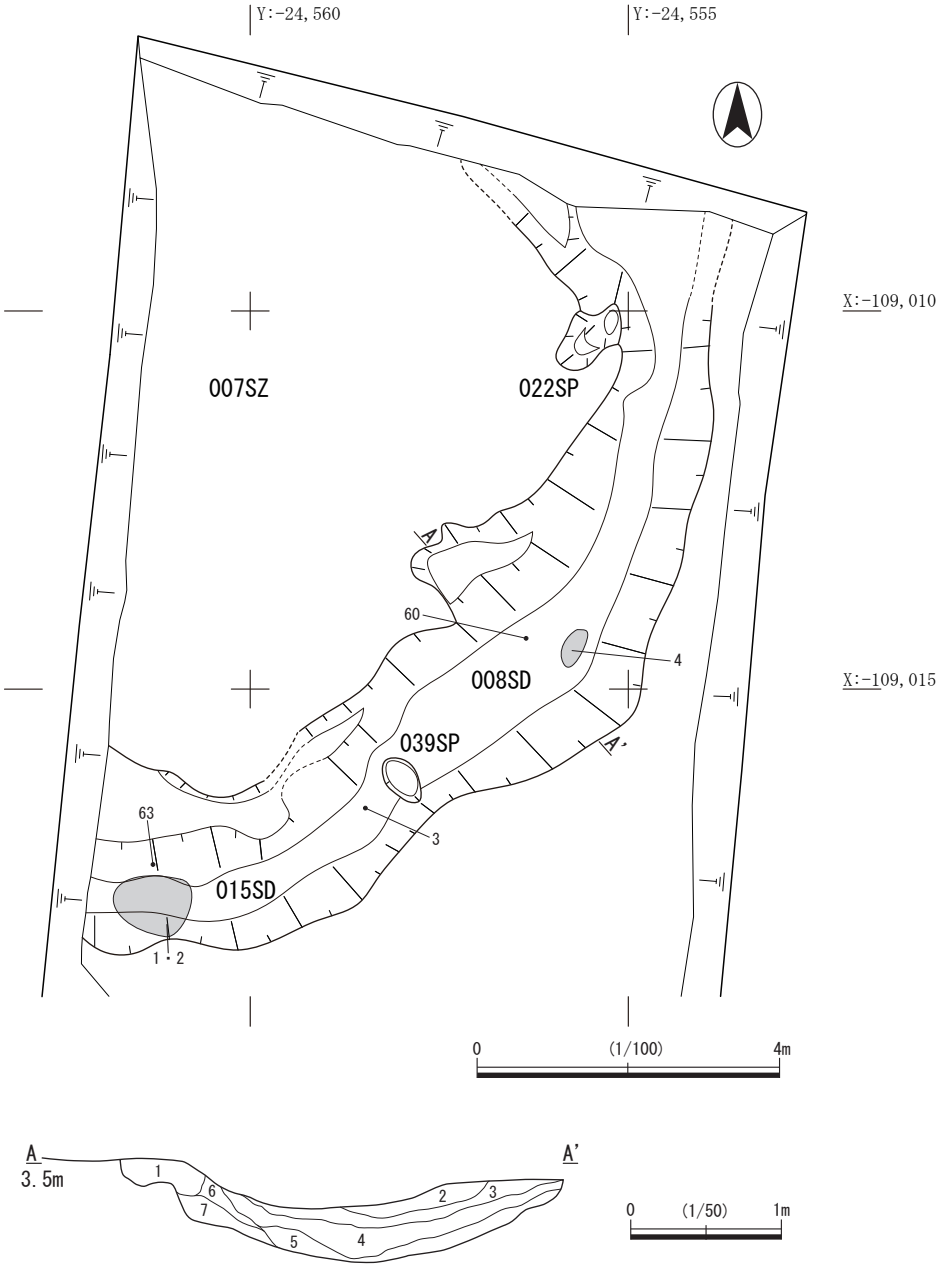
た可能性も否定できないが、現状ではやはり旧河道に隣接した地理的環境などから、製品としての瓦の集積や積み出しに伴った遺構である可能性もある。

第２節　遺　　構（第 13 ～ 20 図，図版第 21 ～ 25）

A　弥生・古墳時代

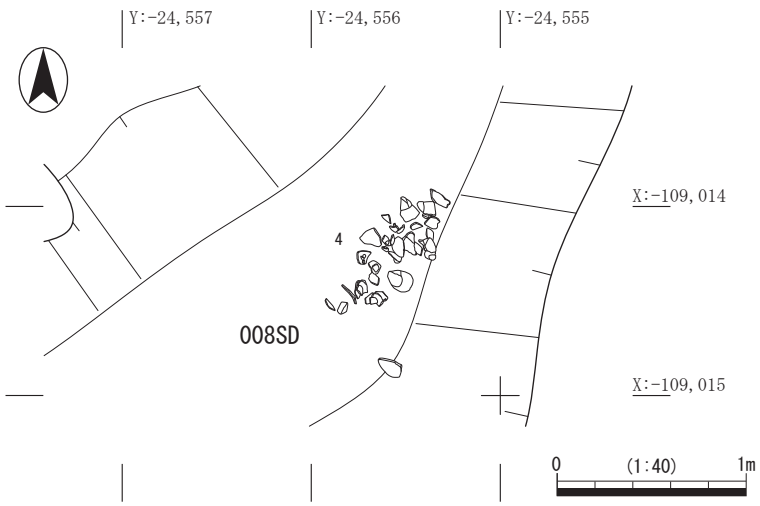
方形周溝墓

007SZ：1 地区の北半、b ～ d2 ～ 4 区に位置する方形周溝墓で、008SD と 015SD が周溝として伴

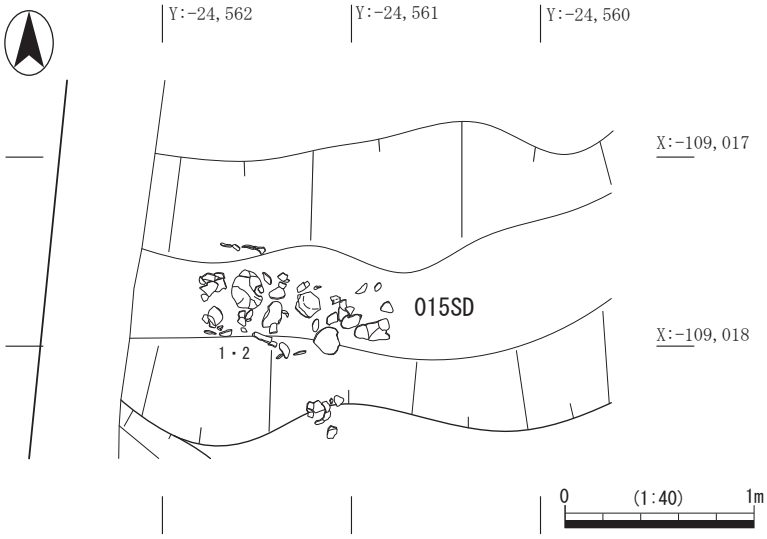


1　2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂(2.5Y4/6オリーブ褐色中粒砂ブロックを下部に含む。根の痕跡)
2　10YR2/1黒色中粒砂
3　10YR2/2黒褐色中粒砂
4　10YR1.7/2黒色細砂含む中粒砂
5　10YR1.7/2黒褐色中粒砂(10YR5/3にぶい黄褐色中～粗粒砂ブロックを含む)
6　10YR3/3暗褐色粗砂含む中粒砂(礫、10YR1.7/2黒色中粒砂ブロックを含む)
7　2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂(礫含む)

第 13 図　東畑遺跡 007SZ 平面図・断面図（平面図 1/100，断面図 1/50）



第 14 図　東畑遺跡 008SD 遺物 (4) 出土状況図 (1/40)

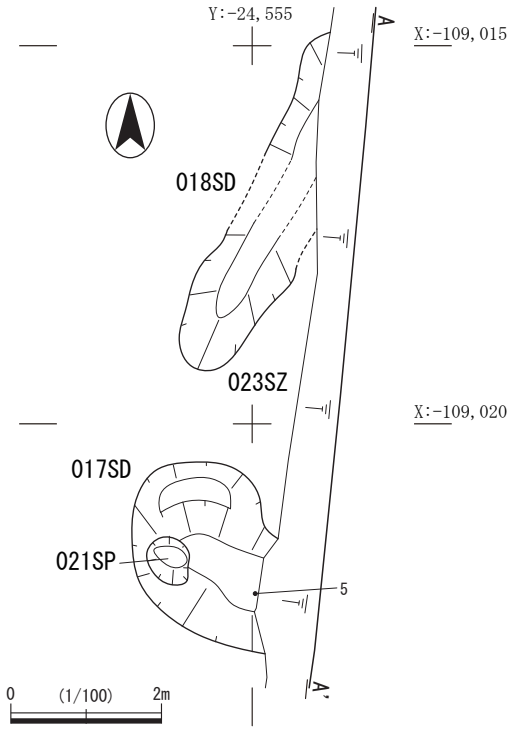


第 15 図　東畑遺跡 015SD 遺物 (1･2) 出土状況図 (1/40)

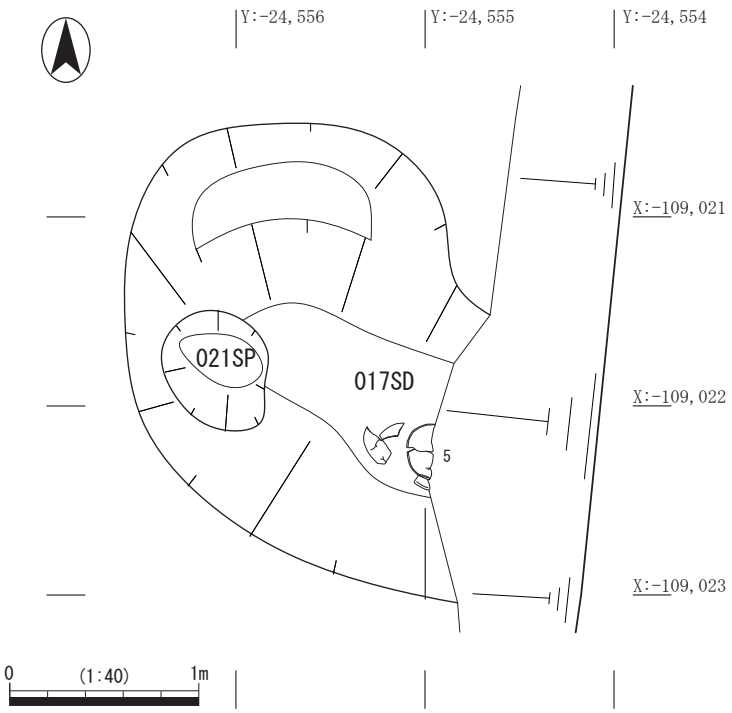
う（第 13 図，図版第 21)。北に隣接する昨年度の東海市教育委員会の調査区では、これの一部と考えられる弥生時代の溝が調査されている。今回の調査では、弥生時代中期後葉に構築され、その後埋没するが、古墳時代前期に一部が再掘削され利用された遺構と考えられた。

まず墳丘について、平面形状は楕円形に近いが整っていない。昨年度の調査では見つかった周溝の一部から方形周溝墓の可能性が指摘されたが、今回の調査結果では具体的には楕円形に近い形状であるころが明らかになった。長軸は北東－南西方向である。中世以降に削平されているが墳丘盛土は約 20cm の高さで残存する。周溝底から約 74cm 残っている。墳丘からは c3 区でピットが 1 基検出されている。022SP で墳丘斜面を抉り込むように穿たれたピットである。長径 109m、短径 60cm の平面楕円形を呈し、深さ 47cm で埋土はオリーブ褐色砂である。地山ブロックを含み、これを抜き取り痕ととらえれば、柱などが立てられていた可能性が考えられる。しかし、このほかの遺構、すなわち主体部などの遺構は検出できなかった。このことから、主体部が未調査区域で見つかる、あるいは撹乱により既に消失した可能性もあるが、本来的に主体部がなかった可能性も否定できず、その場合は墓ではなく祭祀にかかわる壇状遺構ということになろう。推定規模は長径 11.5m 以上、短径 9m 以上である。なお、墳丘本体の加工面である地山砂層表面には、周辺の丘陵地の粘土層中にふつうにみられる鬼板層の破片が多く包含されており、基盤層形成のプロセスを垣間見ることができる。

ついで周溝について、008SD と 015SD がある。008SD と 015SD は連続するが、当初切り合いの可能性も考慮して、010SD と交わる部分で遺構を分けて掘削した。ここではとりあえずそのままにしておく。008SD は c･d2 ～ 4 区に位置し不規則な幅で湾曲している。幅は 1.2 ～ 3.4m で、形状も安定しないが、深さは 60cm 前後で安定している。断面形状についても、幅が狭いところでは立ち上がりが急で、断面 U 字状を呈するが、幅が広いところでは、立ち上がりも緩やか



第 16 図　東畑遺跡 023SZ 平面図 (1/100)
(A-A’断面については第 12 図参照)



第 17 図　東畑遺跡 017SD 遺物 (5) 出土状況図 (1/40)

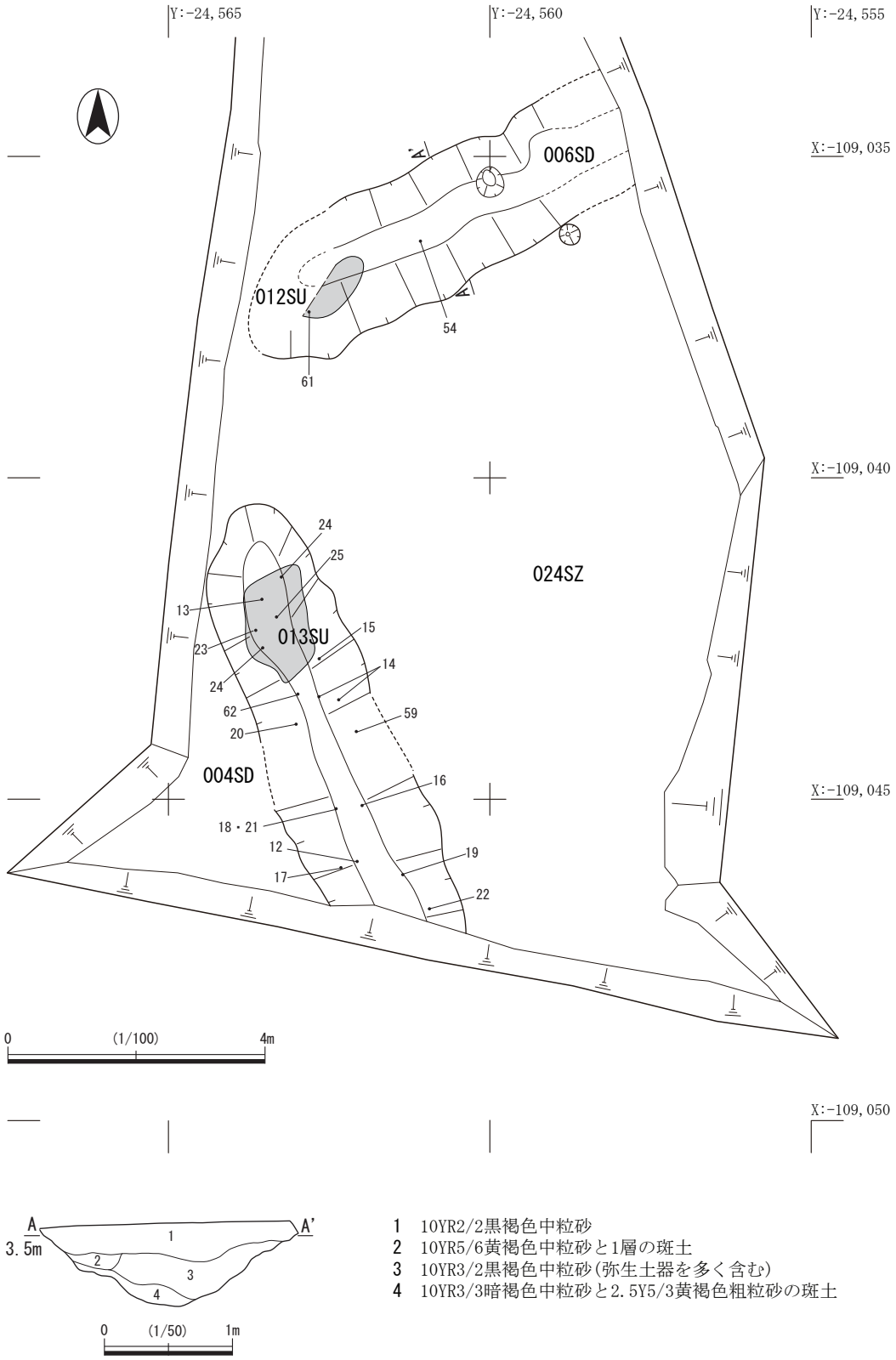
で断面碗状を呈する。008SD の断面では 1 回の再掘削が認められる。そして再掘削後の堆積層から出土する遺物は古墳時代前期の土器が中心で、部分的に供献を思わせる集積をみる（第 14 図，図版第 23)。ただし、出土した土器の風化が進んでおり、遺存状態はよくない。埋土は黒色砂層で、泥炭の成熟などは見られなかった。昆虫化石抽出用のブロックサンプリングを行ったが、昆虫化石は検出できなかった。c4 区の 008SD 底には楕円形の小土坑 039SP がある。長径 71cm、短径 31cm、深さ 30cm。埋土はオリーブ褐色砂である。性格は不明である。

015SD は b・c4 区に位置し、幅 2.4 ～ 3.4m と比較的一定しており、深さは 60cm 前後である。断面形状は碗状である。埋土は黒色砂層。西端に数個体からなる土器集積が認められたが、これは弥生時代中期後葉の所産である (第 15 図，図版第 23 下)。しかし、少し離れた地点からは古墳時代前期初頭に特徴的な長頸壺を含んでいた (図版第 23 下)。この長頸壺は 008SD で指摘した再掘削後の遺物と考えたい。遺構の構築時期が弥生時代中期後葉と考えられるが、その後周溝については、古墳時代前期に再掘削されており、何らかの利用がなされていた可能性がある。

また、同じ場所から紡錘車が 1 点発見されており、墳墓への供献という観点で考えると興味深い発見である。このほか、石斧破片などが出土している。

023SZ：1 地点南半、c・d4・5 区に位置する方形周溝墓で周溝として 017SD と 018SD が伴う。出土土器から所属時期は古墳時代前期である。今回の調査区では隅を部分的に検出したが、遺構は調査区外にさらに広がっている (第 12・16 図，図版第 22・23 上)。

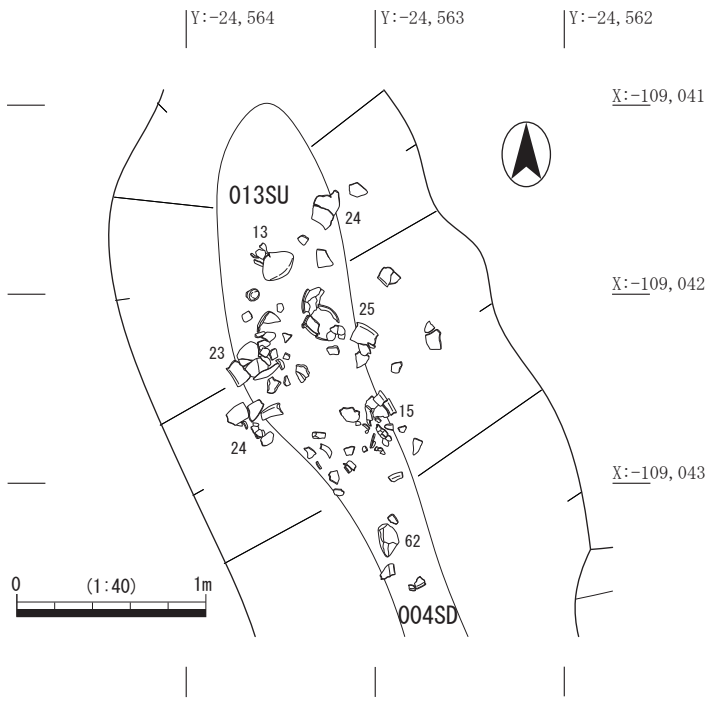
まず墳丘について、平面形状は、周溝 017SD と 018SD に区画された部分を周溝墓の隅の部分と考えれば、2m 以上× 5m 以上の方形と推測される。その場合墳丘の主軸は、周溝から類推すれば、北西 - 南東方向と推測される。またその部分は中世以降の削平を受けているが墳丘盛土



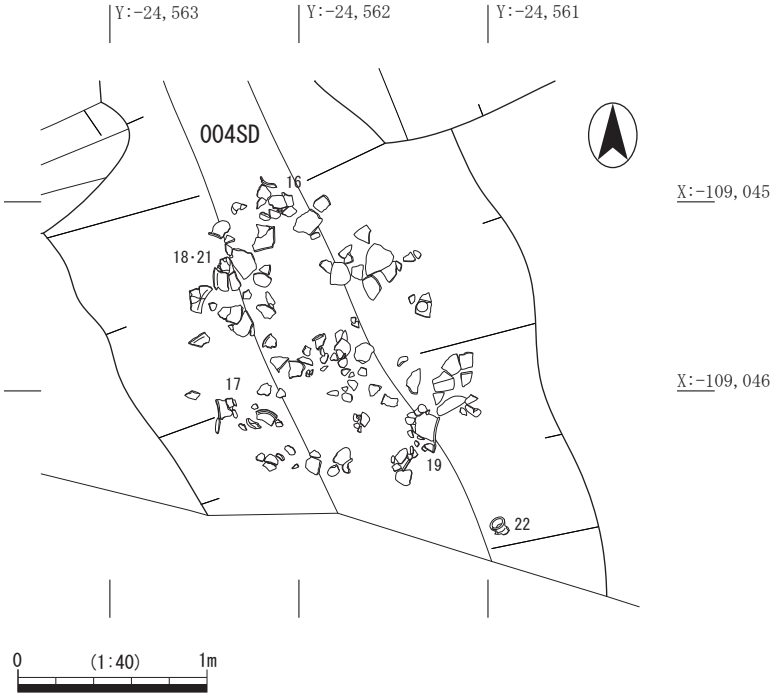
第 18 図　東畑遺跡 024SZ 平面図・断面図 (平面図 1/100, 断面図 1/50)

は約 50cm の高さで残存する。周溝底からは約 1.2m で残っている。墳丘から遺構は見つかっていないが、未調査区域で主体部が見つかる可能性が充分にある。

ついで周溝について、017SD は方形周溝墓 023SZ の南西辺を画する周溝である。c・d5 区に位置し北西 - 南東方向の溝で検出された長さ 2.3m、幅 1.6m、深さ 70cm で断面碗状を呈する (



第 19 図　東畑遺跡 013SU 遺物出土状況図 (1/40)



第 20 図　東畑遺跡 004SD 遺物出土状況図 (1/40)

第 17 図，図版第 22・23 上）。埋土は褐灰色砂ないし黒色砂であるが底近くは灰黄褐色砂が堆積する。溝の南東側終点は調査区外にあり、北西側の溝の終点については円形に収束し、擂鉢状に落ち込む。溝底からは古墳時代前期の壺が発見されており、墳墓への供献が想像される。溝斜面部分に 021SP を伴う。021SP は 017SD 末端斜面に穿たれたピットで、周溝墓に伴う柱穴である可能性が考えられる。長径 64cm、短径 56cm、深さ 64cm で断面碗状を呈する。埋土はオリーブ褐色砂である。墳丘への祭祀か、出入り口に関連したものかもしれない。018SD は方形周溝墓 023SZ の北西辺を画する周溝である。c・d4 区に位置する。撹乱で分断された部分もあるが、北西－南東方向の溝で検出された長さ 3.5m、幅 1.1m、深さ 45cm ほどである。溝の北東側終点は調査区外にあり、南西側の溝の終点については、平面では徐々に細く丸く収束し、底からは緩やかに立ち上がる。017SD と 018SD は直角を呈する方向にあるが、離れて収束しており、つながっていない。

以上からこの方形周溝墓について四隅が切れたタイプまたは周溝の 1 か所が切れたタイプで、1 辺の規模は 5m を上回る可能性が高い。

024SZ：2 地点、b・c8 ～ 10 区に位置する方形周溝墓で 004SD と 006SD が周溝として伴う。出土土器から所属時期は弥生時代中期後葉である。今回の調査区では約 2/3 を確認したが、残りの部分は調査区外に広がっている（第 18 図）。

墳丘について、盛土は中世の削平や撹乱によって消滅しており確認できなかった。周溝 004SD と 006SD に区画された部分が墳丘部分として、8m 以上× 10m 以上の方形周溝墓と推測される。その場合主軸は北北西－南南東方向である。主体部など遺構は残存していない。

周溝について、004SD と 006SD がある。004SD は 2 地点南部西側で北北西－南南東の方向に延びる溝である。検出部分は長さ 7m 弱、幅は 2m ほどで、深さは 40cm 前後。北北西側の終点は平面形で丸く、底からは緩く立ち上がり収束する。南南東側の終点は調査区外である。断面形状は緩やかに立ち上がる碗状である。埋土は上層と下層の 2 層に分けられる。上層は 10YR4/3 にぶい黄褐色砂、下層は 10YR5/3 ないし 6/4 のにぶい黄褐色砂である。上層は下層に比べやや暗い。そして埋土上層には大量の弥生土器の集積がみられたが下層には遺物がほとんど含まれていない状況であった。これは埋積状況に特徴があり、溝の掘削直後に大量の砂で埋没した様子が観察でき、土器集積（013SU）も含む大量の弥生土器は溝が半分以上埋積されてから廃棄されている。なお、この溝の北半、b9 区の上層中に広がっていた弥生土器の集積について 013SU として記録して取り上げた。高蔵式の時期の弥生土器で大形破片や完形土器を含んでいる（第 19・20 図・図版第 25）。

006SD は 2 地点 b・c8 区、すなわち 2 地点のほぼ中央を東北東－西南西の方向に横断する溝で、溝の主軸方向が先の 004SD と直交することなどから、一連の方形周溝墓の溝であると判断した。両端が撹乱によって失われているため全長は不明だが、検出部分は長さ 3.5m、幅 2m、深さ 40cm 前後である。断面形は碗状を呈する。埋積状況は 004SD と多少様相を異にし、埋土下半はやはりほとんど遺物を含まない砂であったが、弥生土器の集積が部分的にあり、埋土上半には大量の中世陶器が包含されていた。この弥生土器の集積を 012SU として記録し取り上げた。高蔵式の時期の弥生土器で、土圧による破砕が著しく細片が多い（図版第 25 下）。

以上からこの方形周溝墓について四隅が切れたタイプまたは周溝の 1 か所が切れたタイプで、1 辺の規模は 10m を上回る可能性が高い。

B　中世

地点貝塚

002SM：2 地点最南端、b10 区で検出された中世の貝層で、破砕されていない保存の良いシオフキ・ハマグリなどの貝殻を多く含む（図版第 24 上）。長さ 2.5m、幅 0.9m を検出したが、貝層はさらに調査区外に広がっている。貝層の中心は調査区外南方のようである。出土遺物には山茶碗の小皿がある。なお、この周囲の包含層中からは小形の管状土錘が多く発見されている。

土器集積遺構

001SU：2 地点南西、b9 区に位置する土器集積遺構である。検出された範囲は長さ 1.7m、幅 20 ～ 50cm ほどで、東北東から西南西方向に延びていたが、調査区外西方にもこのまま続いている（図版第 24 下）。土層断面で分かるように本来は溝に遺物がまとまって廃棄された状態の遺構である。出土遺物は極めて特徴的な内容を示す。三巴文の軒丸瓦瓦当を筆頭に、丸瓦の破片、伊勢型鍋などの土器類、土錘などの他、大きなアカニシを中心とした、貝塚でみられるような自然遺物が渾然一体となって帯状に展開していた。出土遺物より中世、鎌倉時代の遺構である。

溝

009SD：2 地点 b6・b7・c7 区、すなわち 2 地点北辺に沿って検出された細い溝で、中央部や端部を撹乱によって消失している。北西－南東方向の溝で、ゆるやかに湾曲がみられるが、幅は 50cm 前後、断面形状は逆三角形に近く、深さは 30 ～ 40cm ほどある。出土遺物には土師器鍋、

山茶碗、常滑、弥生土器がある。中世の所産である。

010SD：1 地点中央西側、b3、b4、c4 区に位置する北西－南東方向の溝である。検出された全長 3.5m、幅 60 ～ 80cm、深さ 30cm 以下で、断面逆台形を呈する。008SD や 015SD を切るが、c4 区で収束する。北西側は調査区外に延びる。当初 007SZ の墳丘との関連から周溝ではないかと思われたが、遺物や検出状況を検討した結果中世に属することが判明した。出土遺物には弥生土器、中世土師器鍋、山茶碗、常滑の甕や釜、土錘がある。

014SD：2 地点南部、a・b10 区及び b・c9 区に位置する。a・b10 区及び b9 区ではほぼ西南西－東北東の方向の直線的な溝であるが、c9 区では緩やかに折れ曲がり北西－南東方向に向きを変える。溝は東西とも調査区外に延びる。004SD を切る。溝の北岸は 60cm 前後の犬走り状の平坦部分を伴う。幅 1.1 ～ 1.8m、深さ 20 ～ 40cm。断面形は段が付いた逆台形である。出土遺物には弥生土器、須恵器、中世土師器の皿や鍋、山茶碗、常滑の甕や片口、瀬戸美濃がある。所属時期は中世である。周辺から管状土錘の出土が多い。

019SD：1 地点 b4・5 区および c4・5 区、すなわち 1 地点南辺に沿うように延びた細い溝で、中央部は近代の井戸で大きく撹乱されている。北西－南東の方向の溝でゆるやかに湾曲がみられるが、幅は 60cm 前後、断面形状は逆三角形に近く、深さは 20 ～ 30cm ほどある。出土遺物には山茶碗、常滑、弥生土器などがある。中世の所産である。遺構の形態や規模、主軸方向が一致し、出土する遺物の特徴や時期が共通することから、2 地点の 009SD と関連する可能性がきわめて高い。

土坑

003SK：2 地点最南端の東側、b・c9・10 区に位置する土坑で、平面形は不整形で、ゆるやかな擂鉢状の断面形状を呈し更に東側に落ち込んでいく。直径 2.9m、深さ 41cm。出土遺物には弥生土器、須恵器、中世土師器鍋、山茶碗、常滑甕がある。遺跡基盤の地山砂層を大きく抉るように掘り込まれているが、中世の遺構である。

016SK：1 地点南端、c・d5 区に位置する不整形な土坑で、溝状に展開する可能性がある。一部調査区外に広がるがほぼ平面楕円形を呈し、長径 12m、短径 11m である。断面形は浅い皿状を呈し深さ 27cm である。埋土は褐灰色砂である。底に 038SP を伴う。038SP は 016SK の斜面にあるピットである。直径 50cm で西側に中段を持ち、最深部分は地表から 1m 近くに達する。それは抜き取りの痕跡と考えられるので柱穴である可能性が高い。

020SK：1 地点西部の b3・4 区に位置する曖昧な輪郭を持つ浅い土坑である。遺構は調査区外に広がっているが、平面形は不整形で東側を 010SD に切られる。南側は 015SD を一部切っている。長辺 1.6m 以上、短辺 1.2m 以上を測る。断面形は立ち上がりがかなり緩やかな浅い逆台形を呈し深さ 9cm である。埋土は黒褐色砂である。出土遺物には中世土師器鍋、山茶碗がある。ほか軒平瓦の瓦当部分が出土している。中世の遺構である。

ピット群

025 ～ 037P：2 地点北部の b・c7 区、006SD 北側にピット群が集中する。性格は不明である。深さは 50cm に達するものもいくつかあり、柱穴群のような印象を受けるが、その並びに規則性は見出せなかった。（坂野）

第 1 表　東畑遺跡 1･2 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成

種類	弥生土器	土師器	須恵器	中世土師器	瓦器	瓦質土器	山茶碗	常滑	瀬戸美濃	合計
破片数	3710	122	5	157	1	1	795	104	4	4899
	3710	122	5	1062						4899
比率	75.7%	2.5%	0.1%	21.7%						100.0%

第 3 節　出土遺物（図版第 1 ～ 6・第 39 ～ 42, 第 1 表・第 9 ～ 13 表）

出土遺物はコンテナにして 20 箱出土した。その内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、製塩土器などの土器・陶磁器、瓦類、土錘、陶丸、加工円盤、土製紡錘車などの土製品、石斧、敲石、台石、軽石などの石器･石製品、鉄釘などの鉄製品である。第 1 表は遺構から出土した土器・陶磁器の組成である。このうち、弥生時代の土器が最も多く、全体の 7 割を占める。ついで中世の土器・陶磁器がある。土製紡錘車や石器は弥生時代に、瓦や管状土錘など土製品は中世に属する。この 2 つの時期の遺物は遺構に伴うものも多い。なかでも瓦は、コンテナ 2 箱分出土しており、かなり多い印象がある。しかし、古墳時代の遺物も少数ではあるが遺構に伴ってまとまって出土している。奈良時代のものも、極少数であるが後世の遺構に混入して出土している。以下、遺物の種別、時代別に報告するが、畑間遺跡出土遺物も含め報告および遺物観察表における出土遺物の分類と編年はこれまでの研究成果に準拠して整理を進めた。それは巻末に引用参考文献として掲げた。なお、自然遺物については、自然科学分析の章で、一括して報告する。また、今回、須恵器や製塩土器など古墳時代・奈良時代の遺物は図化に堪えうる遺物はなく、割愛した。

A　弥生土器・土師器

007SZ 出土土器：弥生土器の壺 (1・2) と土師器の長頸壺 (3) と広口壺 (4) がある。このうち 1 と 2 は 015SD 西の土器集積から出土したものである。また、3 も同じく 015SD のそれに近いところから単体で出土した。4 は 008SD の土器集積から出土したものである。

1 は弥生土器の太頸壺の口縁部から体部上半である。全体に摩滅が著しく、調整や文様は残っていない。口縁は外反するが、口縁外側はやや内湾気味である。頸部はすぼまるが、体部にかけて大きく広がり肩がやや張り気味である。頸部下に粘土接合痕がみられる。器形から古井式の太頸壺と判断した。弥生時代中期後葉のものである。2 は弥生土器の壺の体部から底部である。胴から腰にかけて張り気味で底部に至る。底部は平底である。外面にはタテハケが残存する。器形から高蔵式の細頸壺の底部ではないかと思われる。弥生時代中期後葉のものであろう。3 は土師器の長頸壺である。口縁部はかなり摩滅しており、本来の形状を留めていない可能性がある。頸部から口縁部は内湾しつつ立ち上がる。体部は中央より下に胴部最大径がある。下膨れであるが、丸みを帯びた形状である。底部は丸底であるが、中央に浅いくぼみがある。調整について、外面は全体に縦方向のヘラミガキが施されるが、体部に横方向のヘラミガキがその後施されている。また、内面は体部下半に板ナデが施される。いわゆる内彎長頸壺ないし内彎口頸壺といわれるものである。器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間Ⅱ式のものと考え

られる。4 は土師器の広口壺の体部である。頸部下には突帯が 1 条巡り、その上に刺突紋が施される。体部は中央よりやや下に最大径があるイチジク形を呈する。外面は縦方向のヘラミガキが施され、内面には縦方向のハケメが残る。これも器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間Ⅱ式のものと考えられる。

007SZ から出土した土器について大きく 2 時期ある。まずは弥生時代中期後葉、古井式の時期であり、もうひとつは古墳時代前期初頭の廻間Ⅱ式の時期である。

023SZ 出土土器：土師器の広口壺 (5) がある。017SD の底から出土した完形品である。口縁部は直線的に外に開く。体部は中央よりやや下に最大径があるイチジク形を呈する。底部は外に突出し平底である。外面は縦方向ないし斜め方向のハケメが施される。内面について口縁部から頸部にかけては横方向のハケメ、体部については縦方向ないし斜め方向の板ナデが施される。器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間Ⅱ式のものと考えられる。

024SZ 出土土器：弥生土器の壺 (12 ～ 16・23) と甕 (18 ～ 22・24・25)、高坏 (17) が出土した。すべて 004SD からの出土であるが、23 ～ 25 は特に土器集積 013SU からの出土である。

12 は太頸壺の口縁部から頸部である。受口状口縁で、口縁の立ち上がりに強いナデが 1 周し、しっかりとした立ち上がりを作り出しているが、やや外に開く。口縁端部には全面に押圧が施されている。頸部から口縁部は大きく外反する。頸部から体部にかけては緩やかに開くが、中位あたりでやや外に膨らむ。また、頸部から体部にかけての外面にはヘラによる斜格子紋が 3 つの帯状に施され、その間を 2 条単位の櫛描直線紋により区画されている。斜格子紋について 1 番上の斜格子は左下がりの斜線を施した後、右下がりの斜線を施しているが真ん中の斜格子と下の斜格子は逆で左下がりの斜線が後である。内面は口縁部がナデにより仕上げられている。器形と紋様から弥生時代中期後葉の古井式のものである。13 は細頸壺の完形品である。袋状口縁で、体部の最大径が中央よりやや下あたりにあり、強く張る。口縁外面には凹線紋が 4 条巡る。頸部上半には櫛原体による刺突紋が 2 段施されている。頸部から体部上半にかけてはタテハケの後 4 本 1 単位の櫛描直線紋が 12 条施され、その下位、体部最大径あたりに同じ櫛原体による波状紋が施される。高蔵式の凹線紋系土器群の土器であり、弥生時代中期後葉のものである。14 は太頸壺の体部である。体部の最大径は底部に近い下位にあるが、体部上半は丸みを持って大きく外に張る。底部にむかっては急にすぼまるようで、残っている体部の下部はむしろ底部の一部ともみることができる。体部上半には 16 本単位の櫛描直線紋と波状紋、ヘラによる斜格子紋が施される。これはまず斜格子紋が施され、ついで櫛描直線紋により画され、最後にあいたところに櫛描波状紋が施されている。斜格子紋は左下がりの斜線が先で右下がりの斜線が後である。体部最大径の部位以下には横方向のヘラミガキが施される。内面はナデが施されている。体部最大径の部位に粘土接合痕が見られる。器形と紋様から弥生時代中期後葉の古井式のものである。15 は太頸壺の口縁部である。受口状口縁で、口縁の立ち上がりも大きく外に開く。口縁端部には 14 個単位の部分押圧が施される。これも器形・紋様から弥生時代中期後葉の古井式である。16 は細頸壺の体部である。体部中央より下に最大径があるが、丸みを帯びた器形である。肩部には 2 本単位の櫛描直線紋の後にその上下に沈線による斜線が施され羽状に施紋されている。またその下 3 条単位の櫛原体による斜格子紋が施され、これは後で上下に 3 条単位の櫛描直線紋によって画される。なお、この斜格子紋は右下がりの斜線の

後左下がりの斜線が施される。このような紋様は知多半島含め愛知県内には類例が見当たらず、他地域の影響を受けた土器と見られる。胎土について、風化は進んでいるが、他の土器と大きな違いは見えない。器形や紋様から弥生時代中期後葉のものと考える。17 は高坏の口縁部である。鍔状口縁であるが、口縁端部は肥厚しない。坏部底部からの立ち上がりは直線的に開く。調整について、口縁部がヨコナデにより仕上げられている以外は、摩滅のためはよくわからない。器形から弥生時代中期後葉の高蔵式のものであろう。18 ～ 22 は弥生土器の台付甕である。口縁部は短く外反する。口縁端部について 18・20 はハケの原体らしきものを当てているが、19 と 21 は板状の原体で刻目を入れている。体部は最大径が上位にあり緩やかに底部につながる。底部は、18 ～ 21 は欠損しているが、22 のような台が付く。調整について、18・20・21・22 では、外面はタテハケの後タタキが施され、最後に体部下半にタテハケが再度施される。20 は体部中位に横方向のタタキ痕の上からさらに左上がりのタタキ痕がある。19 はタタキ痕について口縁外面と体部に一部残存する。これは口縁を外反させる前にタタキ調整を施していたことを示す。そしてタタキの後、タテハケが施される。内面はいずれも口縁部にヨコハケ、体部上半にはタテハケでその後、下半に上方向のケズリが施される。器形・調整から 18 ～ 22 はいずれも弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。23 は細頸壺の体部から底部である。体部最大径は体部のほぼ中位にあり、全体に丸みを帯びている。頸部下には簾状紋が一部残る。その下には 2 本単位が 2 単位で 1 組となる複合櫛描紋による直線紋が 12 単位施される。その下、ほぼ最大径の位置にこれも 2 本単位が 2 単位で 1 組となる複合櫛描紋による波状紋が施される。体部下半はヨコハケの後タテハケが施される。内面については、体部上半はタテハケ、下半は縦方向の板ナデが施される。器形・調整から 23 は弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。24・25 は弥生土器の甕である。底部が欠損しているが、台が付く。24・25 とも、口縁は短く外反するが、口縁端部について 24 はハケの原体のようなものを当てており、25 は板状の原体により刻んでいる。体部の器形は 24・25 とも体部最大径は上位にある。外面調整について、24 はタタキ痕がなく全体にタテハケを施した後、下半にタテハケが再度施される。一方 25 はタタキが施された後、タテハケが全体に施される。内面についてはともに、口縁部ヨコハケ、体部上半タテハケ、下半に上方向のケズリが施される。どちらも器形・調整から弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。

024SZ から出土した土器について、古井式と高蔵式があるが、弥生時代中期後葉の時期に限定される。

中世の遺構・包含層出土土器：中世の遺構や包含層から出土した特徴的な弥生土器・土師器を取り上げる。弥生土器では条痕紋系土器の深鉢 (6・8・10)、内傾口縁土器 (7)、壺 (9)、土師器には器台 (11) がある。6 は深鉢の口縁部である。調整はナデのみで条痕等は特に認められないが、口縁端部が内外面に拡張する。おそらく弥生時代前期の条痕紋系土器に伴うものであろう。8 は深鉢の底部である。右下がりの条痕が施される。体部の立ち上がりが底部から上方へ直線的に立ち上がることから弥生時代中期に入るものと考えられる。10 は深鉢の体部の破片である。外面に縦位の羽状条痕が残っている。弥生時代前期の水神平式のものである。7 は内傾口縁土器の口縁部で端部が肥厚し丸く収められている。外面には条痕が残る。弥生時代前期のものであろう。9 は壺の体部の破片である。上半には横方向の条痕紋が、下半には左下が

りの条痕が残る。これも弥生時代前期の条痕紋系土器に伴うものと推測される。11 は土師器の器台の坏底部と脚部上半部である。坏部は水平な底面から一旦上方に立ち上がり、そして湾曲して外に大きく開く。脚部はわずかに外に開くようである。外面には細かなヘラミガキが残る。坏底部のみ横方向で、あとはほぼ縦方向のミガキである。器形から古墳時代前期の廻間Ⅱ式のものである。

B　中世の土器・陶磁器

001SU 出土土器・陶磁器：瓦質土器鍋 (26) と瓦器椀 (27) が出土している。26 は、断面を観察したところ、表面は黒色化しているが器壁内部は白く還元しており、瓦質土器とした。受口状口縁の鍋である。体部はわすかに内湾しつつ立ち上がる。頸部で一旦大きく外に開くが、口縁は再び上方に屈曲して短く立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚して、平坦な面を形成する。外面調整は、頸部に指頭圧痕があるほかは摩滅のため残っていない。内面は板ナデである。外面にはススが付着し、使用痕は良く残っている。27 は、内面に黒色化とヘラミガキが施されていることから一応瓦器の椀とした。しかし断面の観察から赤く発色しており十分に還元焔焼成はなされていない。しかし中世畿内の瓦器椀の影響を受けているものと考えている。椀の底部である。内面にはジグザグ状のヘラミガキが施される。外面は黒色化せず、かつヘラミガキも残っていない。高台は付高台で低くややつぶれ気味である。

このほか山茶碗の碗や小皿が出土しているが、知多窯産の中野編年で 4 型式から 6a 型式が主である。したがって 13 世紀第 1 四半期から第 3 四半期の時期が考えられる。

002SM 出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿 (28) が出土している。知多窯製品で時期は中野編年の 5 型式である。この遺構からはこの前後の時期の山茶碗が出土している。

その他の遺構・包含層出土土器・陶磁器：中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃が出土している。順に説明する。

中世土師器については、伊勢型鍋 (29) が出土している。29 は鍋の口縁部から頸部である。北村編年の A4a 類に当たる。

山茶碗については、耳皿 (30)、小碗 (31 ～ 35)、小皿 (36 ～ 42)、碗 (43 ～ 45)、片口鉢 (46) が出土している。30 は耳皿である。薄く高い高台が付く。藤澤編年の尾張型第 3 型式である。31 ～ 35 は小碗である。31 は高台が薄く高く整えられているが、32 ～ 35 は断面三角形状になっている。35 にはモミ圧痕が残る。31 は胎土がよく、猿投窯産である。藤澤編年の尾張型第 3 型式である。32 ～ 35 は知多窯産で、32 は中野編年の 1b 型式、33 は同じく 2 型式、34・35 は藤澤編年の尾張型第 3 型式である。36 ～ 42 は小皿である。このうち 36 ～ 39・41 が知多窯産である。36・37 は中野編年の 4 型式、38・39 は 5 型式、41 は 6a 型式。40 は内面が板状工具により整形されている。瀬戸窯産で藤澤編年の尾張型第 6 型式。42 は産地不明の小皿である。ほかと比べて器高が高い。また底部は突出するようで、中央にくぼみがある。中野編年の 3 型式に併行すると考えることもできる。43 ～ 45 は碗である。43・44 は瀬戸窯産の碗である。43 は藤澤編年の尾張型第 9 型式か。44 は第 10 型式である。45 は東濃型の碗である。藤澤編年の東濃型第 10 型式、すなわち大洞東 1 号窯式である。46 は片口鉢の底部である。体部は底部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。外面の体部高台付近は回転ヘラケズリが施されている。内面は自然釉が多量に付着している。使用の痕跡が認められない。知多窯産で中野編

年の 5 型式である。

常滑については小形盤 (47)、甕 (48・49)、片口 (50) がある。47 は小形盤で、全体の 1/6 の破片である。ほかの遺跡ではあまり見かけない器種である。48 は甕の口縁部である。口縁は外反するのみで端部は薄く丸く収まる。中野編年の 3 型式である。49 は甕の口縁部から頸部で、口縁端部を N 字状に成形している。頸部と拡張した口縁部との間に隙間がわずかにあく。押印がある。中野編年の 6b 型式である。50 は片口の口縁部から体部である。全体に丸い器形で外面下半にはヘラケズリが施される。中野編年の 6a 型式である。

瀬戸美濃について、古瀬戸の平碗 (51) がある。51 は平碗の底部である。高台内に卸目が施されている。内外面には灰釉が施されるが、高台内のみ露胎である。藤澤編年の古瀬戸中 I 期のものである。

C　瓦

軒丸瓦 (52 ～ 56)、丸瓦 (57)、器種不明の瓦片 (58) が出土している。

52 ～ 56 は軒丸瓦である。いずれも瓦当部分の破片である。右巻きの三巴文で、珠文を巴の周囲に配する。内区が完存する 52 では珠文は 24 個ある。52 ではまた笵傷が上の中央やや左側の珠文のあたりと、下の中央やや右側の珠文にみられる。この笵傷は 53 にも見られ、52 と 53 は同笵であることがわかる。54 と 55 は他と比べると瓦当が若干薄い。いずれも硬質緻密に焼きあがっており、一部灰釉が掛かる。知多窯産の瓦で、12 世紀後半のものである。ただし、56 のみ比較的焼成が甘く、灰色を呈する。巴文も厚みがなく平面的である。若干時期が新しく考えられる。52 と 55 は 001SU、54 は 006SD、53・56 は包含層から出土した。

57 は丸瓦の挟端部側の約 1/2 片である。玉縁がなく行基葺きの丸瓦である。釘孔がある。凸面は、灰釉が掛かり明確ではないが、おそらくナデにより仕上げられている。凹面には布目痕が残る。側面は凹面側、凸面側ともに面取りをする。挟端面は凹面側のみ面取りをする。硬質緻密に焼きあがっている。知多窯産の瓦である。001SU から出土した。

58 は、上方を欠く破片で、他の瓦と同様に硬質緻密に焼きあがっており、知多窯産の瓦の 1 種と思われるが、種類については不明である。側面三角形状に残り、1 辺はケズリにより面があるが、それ以外はナデおよびユビオサエにより整形されている。包含層から出土したが、同様の遺物は他にもう 1 点ある。

D　土製品

紡錘車 (63)、管状土錘 (64 ～ 68)、陶丸 (69)、加工円盤 (70) が出土している。

63 は紡錘車である。円盤状の中央に孔があけられている。64 ～ 68 は管状土錘である。64 は一部欠損するが、ほかは完形である。土師質に焼きあがる。64 のように大形のものと、65 ～ 68 のように小形のものがある。69 は陶丸で、知多窯産である。70 は山茶碗を打ち欠いて作った加工円盤である。63 は弥生時代、64 から 70 は中世のものである。63 は 015SD、64・66・69・70 は 006SD、67 は 014SD、68 は 002SM、65 は包含層から出土した。

E　石器

抉入柱状片刃石斧 (59)、両刃石斧 (60)、敲石 (61)、台石 (62) が出土している。

59 は抉入柱状片刃石斧の基部の破片である。全体に研磨されているが、製作時の剥離痕がところどころくぼみとして残る。抉りは浅いが、この部分のみよく研磨されている。60 は一

部欠損した両刃石斧である。刃部はやや丸みをおびた弧状を呈する。基部は特に加工が施されていない。全体に研磨されているが、体部には製作時の剥離痕、敲打痕が残る。61 は完形の敲石である。棒状礫の上下の端部に敲打痕の面が残る。石器製作用の敲石である。62 は完形の台石である。表面と裏面には使用によるとみられる摩耗痕が認められる。

ともに出土した土器からこれらは弥生時代のものと考えられるが、59 の抉入柱状片刃石斧のみはその形状から弥生時代でも前期のものであろう。59 は 004SD、62 は 006SD、60・61 は包含層から出土した。

F　鉄製品

所属時期は不明で実測図や写真を掲げていないが、鉄釘や鉄片が出土している。

（桐山）

第 3 章　畑間遺跡の調査

第 1 節　概要と基本層序（第 21 ～ 26 図，巻頭図版第 2, 図版第 26 ～ 36）

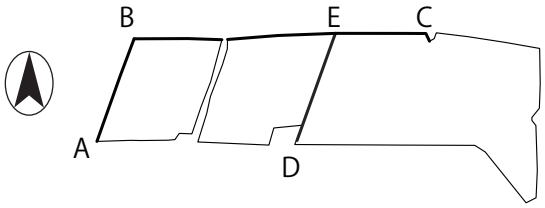
3・4 地点の北セクションに見られるように、現代の表土層以下、基盤層の一部を除き全て砂層である。基本層序は以下のとおりである（第 21 ～ 24 図，図版第 28）。

Ⅰ層：表土層。近現代の盛土ないしは耕作土である。
Ⅱ層：遺物包含層。8 の 10YR3/3 暗褐色砂層以下の砂層がこれに当たる。
Ⅲ層：基盤層。10YR5/4 にぶい黄褐色砂層で地山層である。この下に固結シルト層がある。

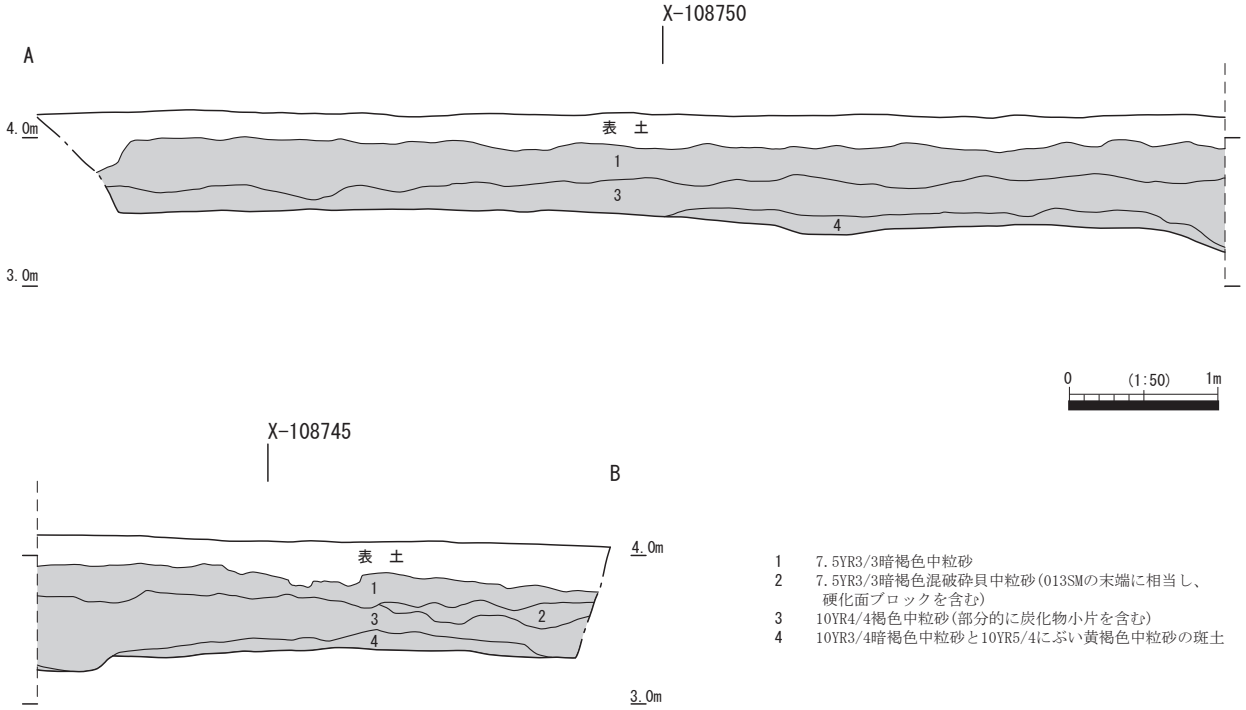
3 地点の東半は大規模な撹乱によって基盤層まで全て消失していたが、10 ～ 40cm の表土層下は直ちに暗褐色砂の遺物包含層となる。

時期の安定した遺物が見られるのは、013SM 貝層に伴う硬化面（8 層）以下であり、おおむね中世に収斂される。

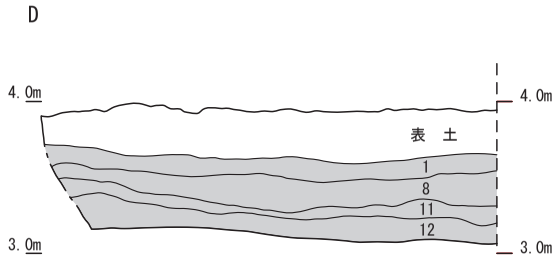
貝層 013SM より下の砂層は、より黒色を強め、部分的に純貝層や泥炭層が含まれている。また、3 地点西セクションで明らかなように、基盤砂層下のシルト層まで掘削された 024SD 埋土には、部分的に洪水性の砂層の堆積がみ



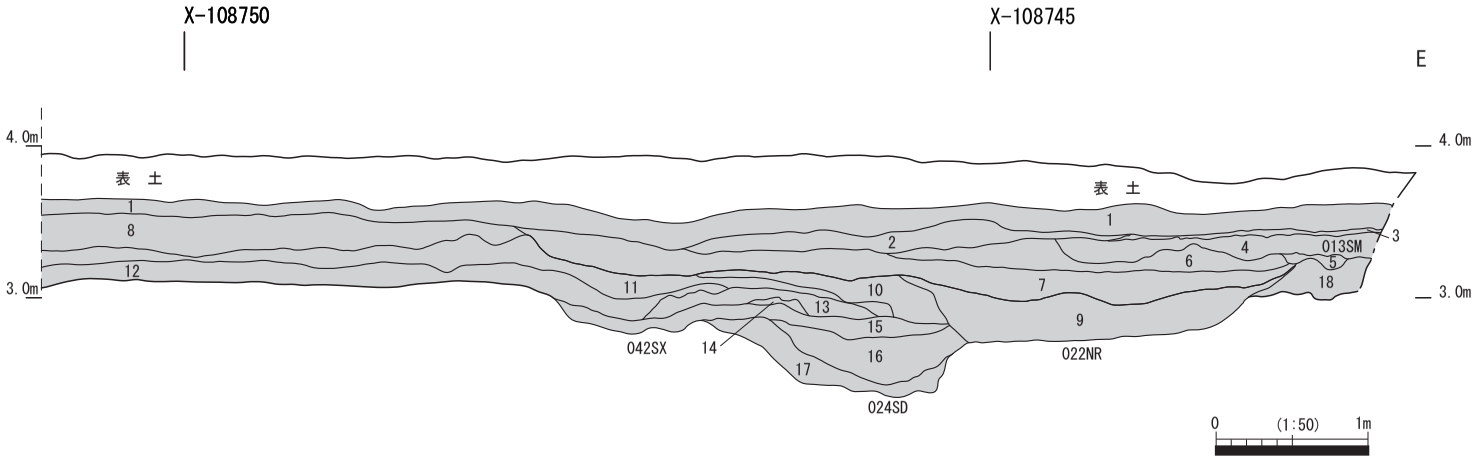
第 21 図　畑間遺跡 3･4 地点土層断面図の位置
（A ～ E は第 22 ～ 24 図の土層断面図と対応する）



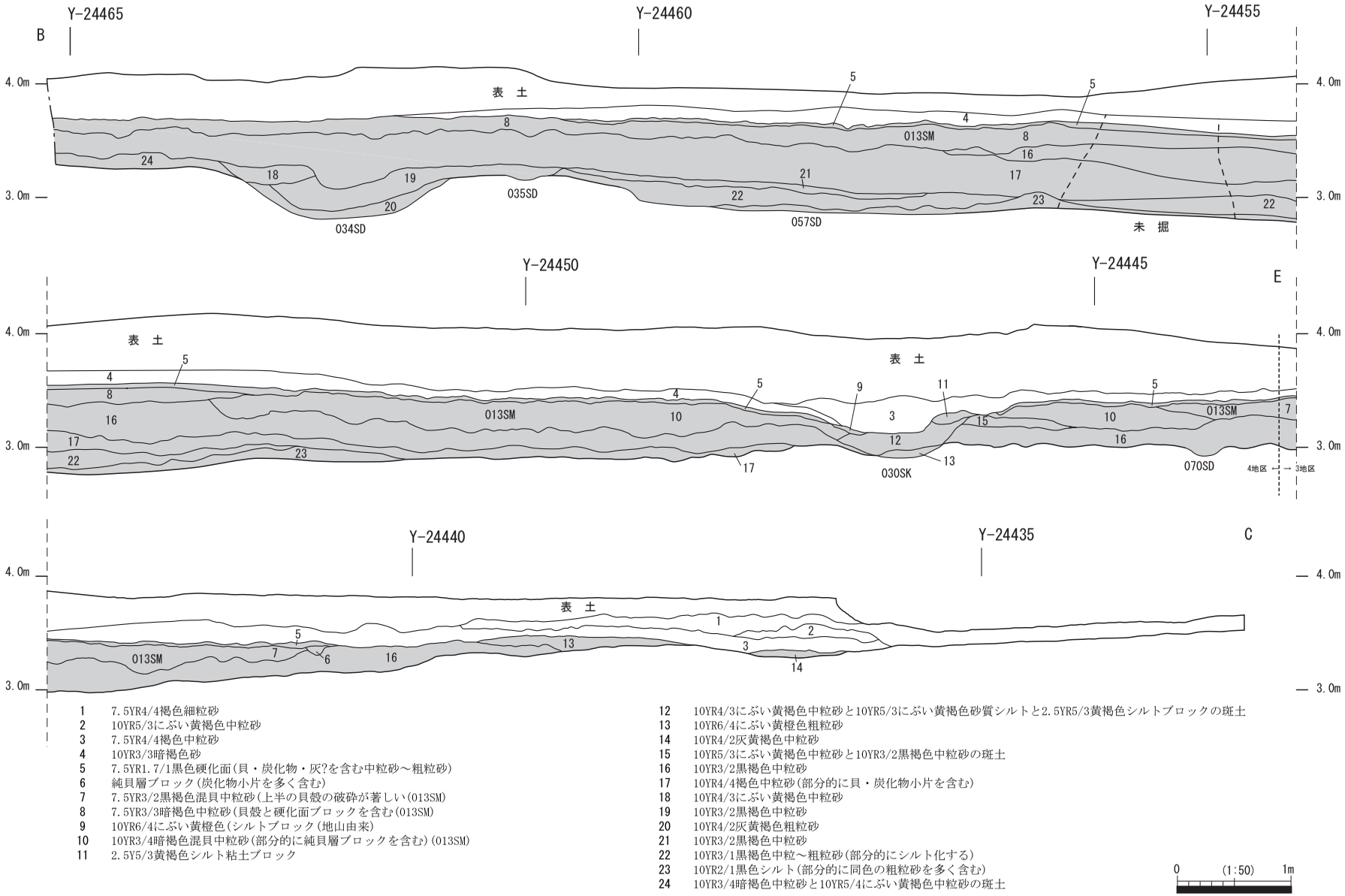
第 22 図　畑間遺跡 4 地点西壁土層断面図 (1/50)
（トーンは遺物包含層または遺構埋土である）



1　7.5YR4/4褐色中粒砂
2　10YR3/3暗褐色中粒砂(炭化物・貝を少量含む)
3　7.5YR1.7/1黒色硬化面(貝・炭化物・灰を含む、中粒砂～粗粒砂)
4　10YR3/4暗褐色混貝中粒砂(炭化物小片を多く含む)(013SM)
5　純貝層(013SM)
6　10YR3/1黒褐色中粒砂(貝層ブロック・炭化物・硬化面ブロックを含む)
7　10YR3/2黒褐色中粒砂(下半は漸移層)
8　10YR3/3暗褐色中粒砂
9　10YR3/2黒褐色砂と10YR3/1黒褐色砂のラミナ層中粒砂と細粒砂(洪水性の堆積層である可能性が高い)
10　10YR3/3暗褐色砂質シルト
11　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
12　10YR3/2黒褐色砂質シルト
13　純貝層(026SM)
14　10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂
15　10YR2/2黒褐色泥炭層
16　10YR2/1黒色泥炭層(2.5Y6/2灰黄色細粒砂をラミナ状に含む、木質・腐植物を多く含む)
17　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂と10YR3/2黒褐色細粒砂のラミナ層)
18　10YR2/3黒褐色粗粒砂シルト



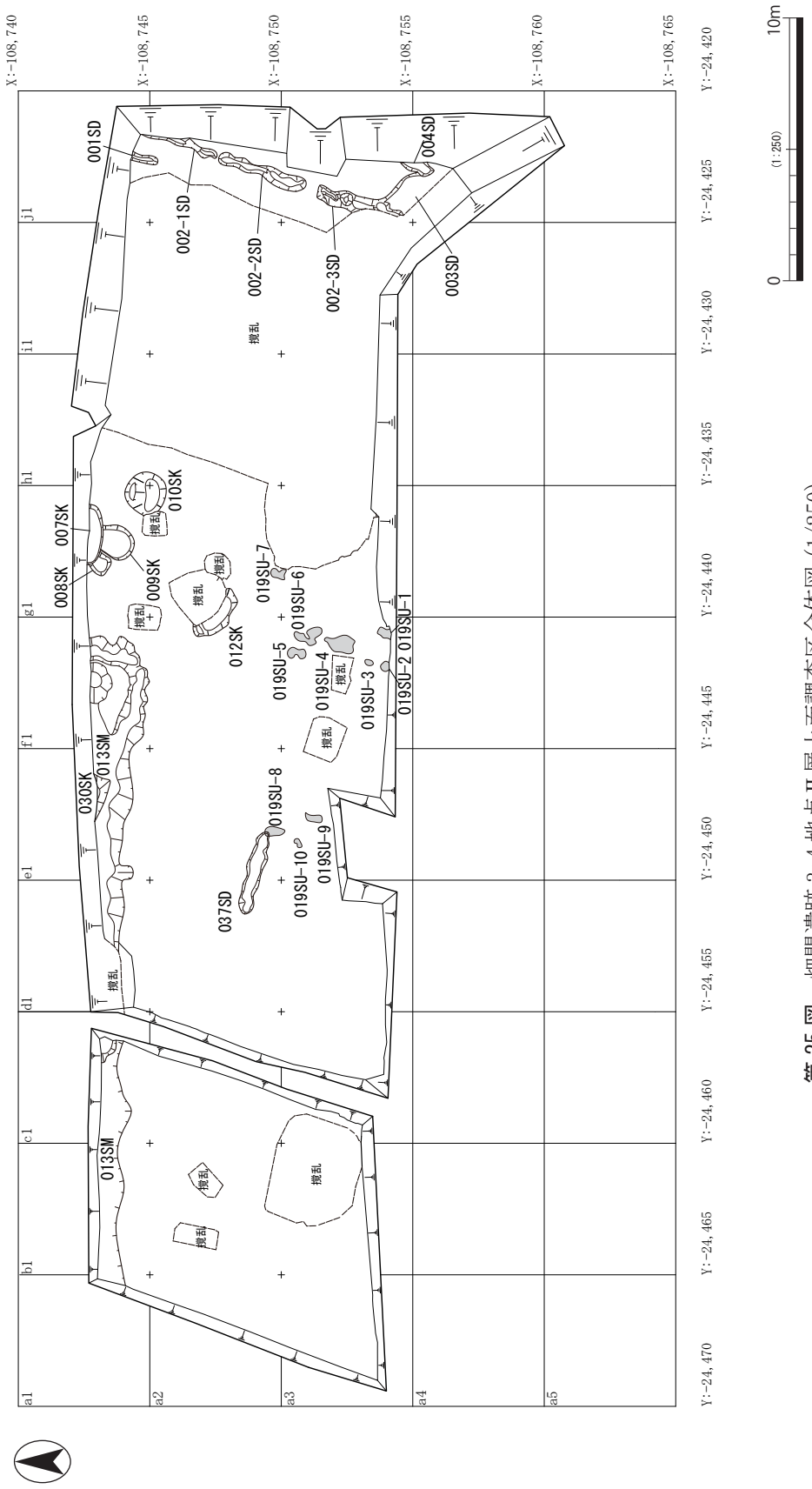
第 23 図　畑間遺跡 3 地点西壁土層断面図（1/50）
（トーンは遺物包含層または遺構埋土である。）



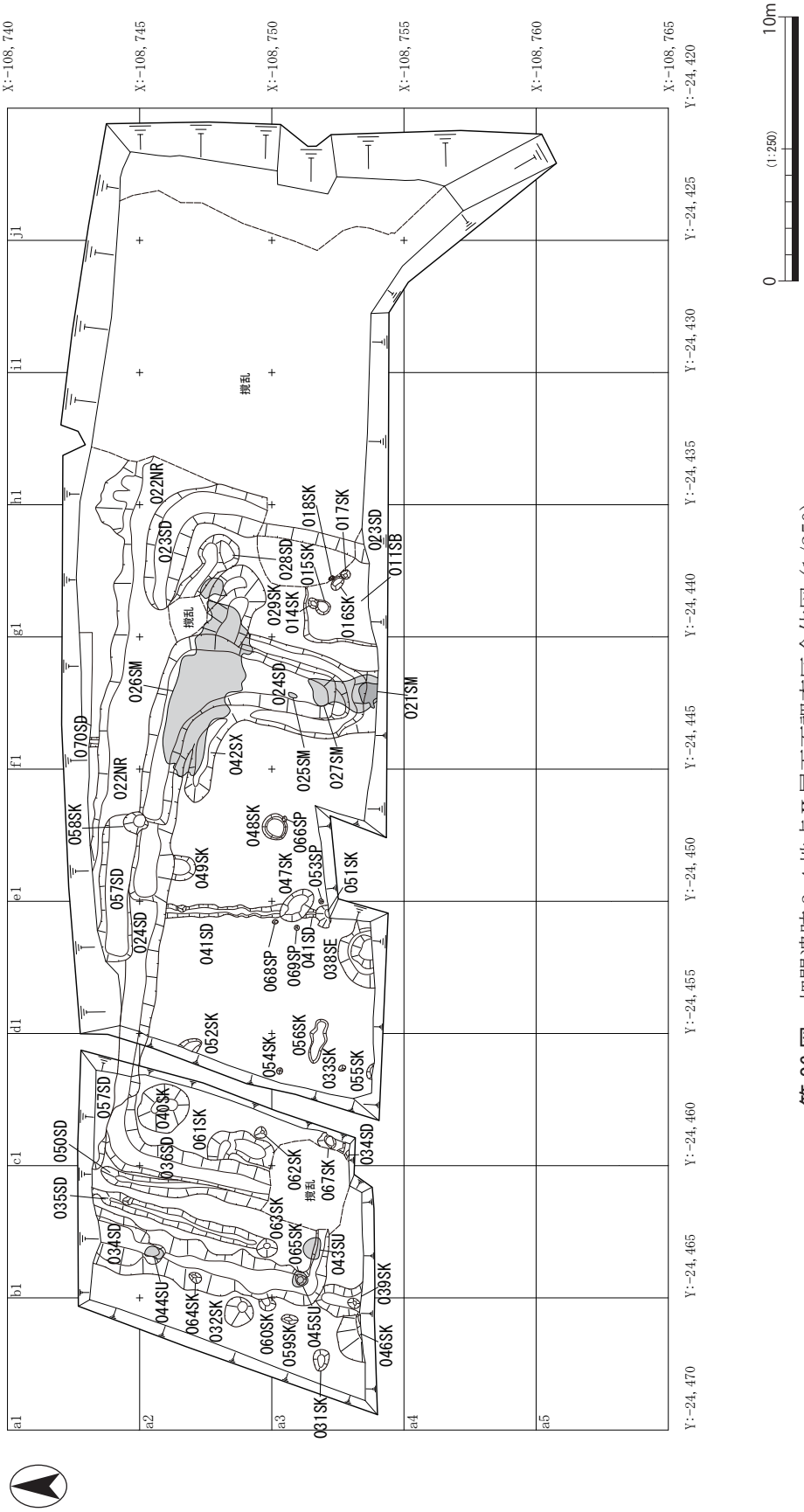
1　7.5YR4/4褐色細粒砂
2　10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂
3　7.5YR4/4褐色中粒砂
4　10YR3/3暗褐色砂
5　7.5YR1.7/1黒色硬化面(貝・炭化物・灰?を含む中粒砂～粗粒砂)
6　純貝層ブロック(炭化物小片を多く含む)
7　7.5YR3/2黒褐色混貝中粒砂(上半の貝殻の破砕が著しい(013SM)
8　7.5YR3/3暗褐色中粒砂(貝殻と硬化面ブロックを含む(013SM)
9　10YR6/4にぶい黄橙色(シルトブロック(地山由来)
10　10YR3/4暗褐色混貝中粒砂(部分的に純貝層ブロックを含む)(013SM)
11　2.5Y5/3黄褐色シルト粘土ブロック
12　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂と10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトと2.5YR5/3黄褐色シルトブロックの斑土
13　10YR6/4にぶい黄橙色粗粒砂
14　10YR4/2灰黄褐色中粒砂
15　10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂と10YR3/2黒褐色中粒砂の斑土
16　10YR3/2黒褐色中粒砂
17　10YR4/4褐色中粒砂(部分的に貝・炭化物小片を含む)
18　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂
19　10YR3/2黒褐色中粒砂
20　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂
21　10YR3/2黒褐色中粒砂
22　10YR3/1黒褐色中粒～粗粒砂(部分的にシルト化する)
23　10YR2/1黒色シルト(部分的に同色の粗粒砂を多く含む)
24　10YR3/4暗褐色中粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂の斑土

0　(1:50)　1m

第24図　畑間遺跡３・４地点北壁土層断面図（1/50）（トーンは遺物包含層または遺構埋土である。）



第 25 図　畑間遺跡 3・4 地点Ⅱ層上面調査区全体図 (1/250)



第 26 図　畑間遺跡 3・4 地点Ⅱ層下面調査区全体図 (1/250)

られる。この洪水層は南北に展開する遺跡の存在する砂堆に対しほぼ垂直に、東側の後背湿地方面から流入し、遺物包含層を削り取ったことが推測されるものであるが、これ以外にもラミナ状の構造を持つ砂層が部分的に見られることから、砂堆東辺は何度も洪水に見舞われていたようである。

024SD本体下半は急角度でシルト層まで掘り込まれていたが、溝下半には泥炭層がみられたことから、掘削後一定期間は滞水していたのであろう。しかし、深い掘削は区画溝全体には及んでおらず、西半では基盤砂層内で完結していた。

遺跡の存在する大規模砂堆（第1砂堆）の平均的な標高は4～5mであるが、調査範囲内では西側（4地点）に向かって次第に標高を高める傾向にある。

現在、3地点より東側には県道を隔てて水田が展開しているが、標高2m前後の水田地帯が大田川の旧河道に相当する。多くの場合、洪水は周辺の丘陵地方面から旧河道に沿って砂堆に向かって発生し、河道湾曲部を閉塞させて砂堆上にあふれ出していったのだろう。

第1砂堆はちょうど佐渡島のような中央が斜めに括れた形状を呈しているが、ほぼ中央の括れ部分東端に位置する畑間遺跡での観察結果から、この形状自体もいく度もの河道の変化や洪水による結果である可能性が高い。

畑間遺跡3・4地点では、遺物に弥生土器・土師器・須恵器が少量混じるが、遺構としてはほぼ中世に限られる。今回見つかった遺構は、竪穴建物跡1基、井戸1基、溝15条、土坑35基、貝層5基、土器集積遺構3基、焼土集積遺構10基、ピット3基、洪水砂層1条である。

しかし、調査結果としてはⅡ層の上面と下面において遺構をとらえており、遺構面としては2面認識している（第25・26図，巻頭図版第2，図版第26・27）。

Ⅱ層上面の遺構は貝層1基と溝5条、土坑5基、焼土集積遺構10基があるが、007SK・008SK・010SK・012SK・030SKの5基は木の根の撹乱で特に報告しない。また、溝の内001SD・002SD・003SD・004SDの4条は3地点東端部で検出した溝で、いずれも現代に近い時期の耕作に係わる溝である。これも特に報告しない。

Ⅱ層下面の遺構については、竪穴建物跡1基、井戸1基、溝10条、土坑30基、貝層4基、土器集積遺構3基、ピット3基、洪水砂層1条である。これらは次節報告する。

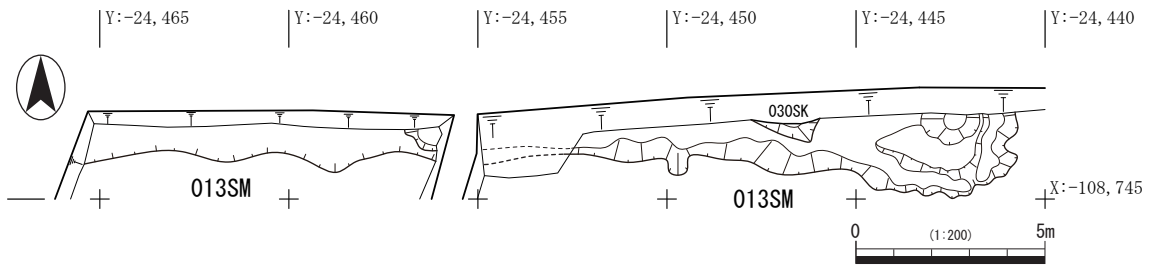
砂堆上に展開した遺跡は各時代での濃淡は見られるが、基本的に中世以降近代に至るまでの歴代遺跡であり、各時代で常に整地や掘削が行われていたようである。

第2節　遺　　構（第27～39図，巻頭図版第3，図版第29～36）

A　Ⅱ層上面の遺構

地点貝塚

013SM：3地点・4地点調査区の北辺に沿って東西に直線的に延びる、貝層を伴う遺構である（第27図，図版第29～31）。b1～f1区に位置する。f1区に東端があり、約25mの長さで確認されたが、西へ調査区外にさらに続く。幅については調査区外にも続くが、2.14m以上ある。つまり約2.1ｍ以上の幅で細長く西北西に延びる遺構である。またこの横断面は浅い皿状を呈する。埋土について上面は炭化物や脱灰した貝殻などを多く含みほぼ水平な硬化面を形成している。含まれる貝層中にはまったく破砕を受けていない純貝層部分もあるが、貝層上面は踏み



第 27 図　畑間遺跡 013SM 平面図 (1/200)

しめられたように破砕がみられ硬化していた (図版第 31 上)。この遺構を硬化面で捉えれば、硬化面が帯状に延びる遺構である。そうした場合、道路遺構の可能性を指摘することはきわめて自然であろう。

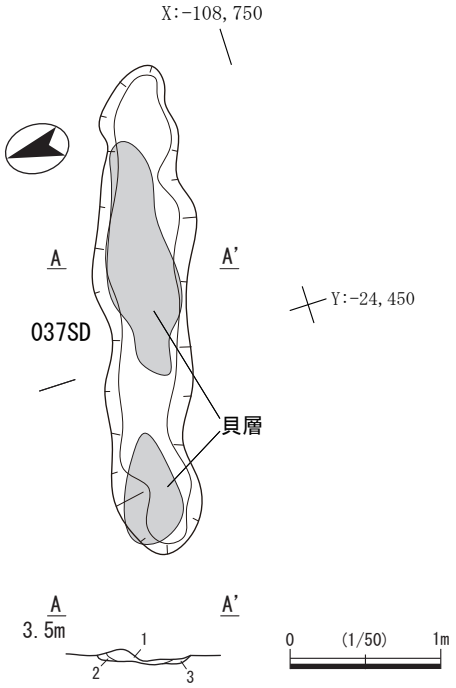
また 001SD、002SD、037SD など、この遺構とほぼ平行ないし直交する方向の溝が複数あり、Ⅱ層上面において一定の地割の原理が働いていたと推測される。あるいは、この 013SM の延長上には、現在幅 3m ほどの小道が同一直線上に乗ってくる。この道は明治時代の地籍図にもある古い道である。したがって、013SM が道かどうかという問題は、調査区内で収束する仮説ではなく、調査区外の地割も含めて検討されるべきものもある。言い換えれば、013SM については、まずこうした地割のルールの上に形成された遺構であることは指摘できよう。そのうえで上面の硬化面から道路遺構の可能性が指摘できる。その上で規模や形状から推測すれば貝殻を用いた道路の舗装である可能性もある。それには、路面を硬化させる材料のひとつとして貝殻を意図的に土に混ぜたのではないかという想定も含む。なお、4 地点西区では貝層の縁辺部に相当するようで、貝殻の密度は低い。また、貝類の分析によれば、出土した貝類はハマグリとシオフキが 9 割を占めている。

ただし、埋土については愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏により軟 X 線による土壌構造分析も行っている (第 4 章第 1 節参照)。そこでは埋土中の貝の残存度について上面に近いものは脱灰しているが、下部のものは脱灰せず貝の形状が保たれているという興味深い指摘がある。しかし鬼頭氏はこの貝殻の脱灰と土壌の硬化については、二酸化炭素を含んだ水 (雨水) により貝殻の炭酸カルシウムが酸性炭酸塩となって砂層に溶出し、それが堆積物を固化したのではないかとしている。硬化面が踏み固めた結果ではなく、別の要因が作用した結果なので、分析結果から道路遺構とはいえないと警鐘を鳴らしている。傾聴すべき意見である。しかし、この貝殻を混ぜた土が路面を硬化させるための人為的な技術としたらどのようになるのであろうか。路面の構築方法として認識できないであろうか。これには鬼頭氏も指摘するように考古学的証拠を積み重ねるしか方法はなさそうである。今後の課題である。

遺物は貝殻と同様、埋土に含まれる形で出土している。土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。その中には常滑三筋壺も含まれている。出土した貝類の分析は自然科学分析の節で別途報告する (第 4 章第 3 節参照)。

溝

037SD：4 地点東区の中央、d2・e2 区に位置する。全長約 3.2m で平均的な幅は 50cm 前後の溝状の遺構である。断面形について浅い皿状を呈するが、下位への掘り込みはほとんどなく、むしろプランに沿って埋土の混土貝層が盛り上げられていた (第 28 図，図版第 31 下)。遺構の方



1　5Y3/1オリーブ褐色中粒砂(シルト含む。貝を多量に含む)
2　2.5Y3/1黒褐色中粒砂(シルト含む。固くしまる)
3　2.5Y3/1黒褐色中粒砂(シルト含む。炭化物と焼けた貝を含む。固くしまる)

第 28 図　畑間遺跡 037SD 平面図・断面図 (1/50)

向は東南東－西北西で 013SM と平行する。013SM で指摘したような何らかの関係が推測される。出土遺物には山茶碗と貝類がある。013SM と時期的にも近いと考えれば、出土した土器・陶磁器はすべて混入である。貝類について、詳細は自然化学分析の章で報告されるが､最も多いのはシオフキ、ついでハマグリでこの 2 種類で 9 割以上を占めている。生活残滓を廃棄したように推測される。

焼土集積遺構

019SU-1 ～ 10：一連の焼土塊群で、e3・f3・g3 区にかけて広く分布する。焼土塊の中にはかなり分厚く、スサやコマイの痕跡を残すものもみられることから（図版第 31 下・第 44 下）、建物の土壁が火災などによって被熱したものの残欠である可能性が高い。

B　Ⅱ層下面の遺構

竪穴建物跡

011SB：3 地点南辺の f3・g3 区に位置する。ほぼ正方位の方形のプランを呈する竪穴建物跡と考えられる（第 29 図，図版第 32)。遺構の東側を撹乱と 023SD に切られており、また南辺は調査区外である。東西 3.32m、南北 2.79m で深さは 26cm である。断面形は箱形を呈する。遺構は基盤層であるにぶい黄褐色砂層に構築され、埋土は 6 層に分けられる。この内 3 層までが遺構が埋没する過程の堆積土である。この中に焼土が含まれていることから、焼土は流れ込みであることがわかる。4 の暗褐色中粒砂層はシルトを含みやや粘土質で締まる。木質の痕跡と考えられ壁材や床の柱材の痕跡ではないかと考えられる。5・6 はブロック土を含み、人為的に置いた土であろう。ただし、締まっていないので貼り床の土とは断定しがたい。

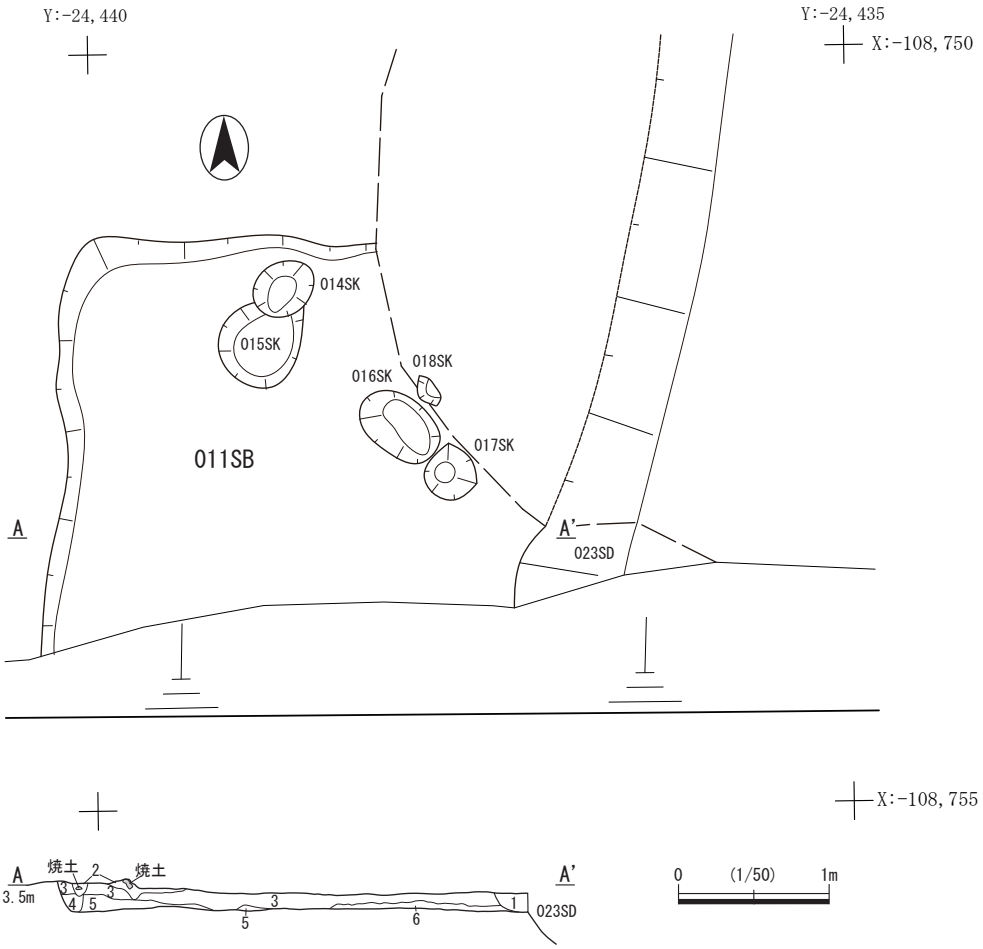
この遺構の底面から 5 基の小土坑 014 ～ 018SK を確認した。このうち 017SK は柱穴での掘方、018SK は柱の抜き取り穴である可能性が高い。とするとこの竪穴建物は主柱 2 本である可能性が高い。

Ⅱ層上面で検出し掘り下げたが、北セクションでもわかるようにこのあたりは地山が高くなっており、本来Ⅱ層下面で検出されるべき遺構がⅡ層上面で検出されている。それはまた 011SB が 023SD に切られている事実からも 011SB は本来Ⅱ層下面の遺構とすべきことが明らかである。

なお出土遺物には弥生土器、中世土師器、山茶碗がある。いずれも小破片であり、時期を決定する根拠としては難しい。

以上から 011SB は、方形で主柱 2 本の竪穴建物であると考えられた。それは、遺物から所属時期を決めるのは困難であるが、遺構の切り合い関係から少なくとも 023SD 掘削以前である。

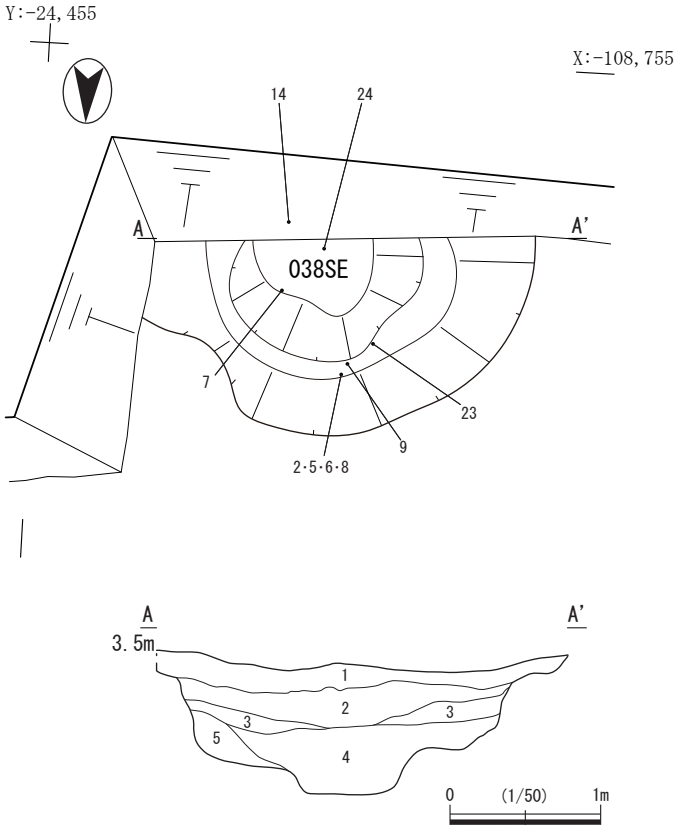
井戸跡



1　2.5Y3/1黒褐色中粒砂(023SD埋土。10R5/8赤色焼土粒を微量含む)
2　7.5YR3/3黒暗褐色中粒砂(2.5YR4/6赤褐色焼土粒を含む)
3　10YR3/1黒褐色中粒砂(10YR4/2灰褐色砂を少量含む)
4　10YR3/3暗褐色中粒砂(粘土質が強い。シルト含む。ややしまる)
5　10YR3/1黒褐色中粒砂(7.5YR5/6暗褐色粘土質シルトを微量含む。10YR6/1褐灰色砂を含む)
6　2.5YR8/4淡黄色中粒砂と10YR3/1黒褐色中粒砂の斑土

第 29 図　畑間遺跡 011SB 平面図・断面図 (1/50)

038SE：4 地点南辺、d3 区に位置する井戸跡である (第 30 図，図版第 33)。調査区の範囲には北半のみで、南半は調査区外である。平面形はほぼ円形であり、半円状に遺構を掘削した。東西 2.66m、南北 1.3m を計る。この遺構の底面は直径 77cm の円形で、深さ 18cm ほどさらに深く掘りくぼめている。この部分は本来井戸枠が据えられえていた部分と考えられる。したがって断面形は 2 段落ちの箱形であるが、1 段目の底面までの深さは 73cm、2 段目の底面までは 91cm である。基盤砂層下のシルト層まで掘り抜かれており、砂層とシルト層の境が湧水点である。埋土は 5 層に分かれるが、1 層は最終段階の埋土、堆積状況から 2 ～ 4 層は井戸枠抜き取り時の埋土である。シルトブロックを多く含むのは、もともと井戸を掘削して掘りあげた土で、井戸掘り方の埋土であったものが、抜き取りの際に再度井戸の中に堆積したためである。5 層はシルトブロックの量が少ないが、2 ～ 4 層に切られていることからもともとの井戸の掘り方埋土である。井戸枠については抜き取られてないので形状等よくわからない。なお 038SE の東側には本体プランより浅く帯状に延びる掘り込みが見られるが、この上には掘り方埋土の残存層が堆積しており井戸の掘削時の痕跡であると考えられる。



1　7.5YR3/3黒褐色中粒砂と7.5YR2/2黒色砂の斑土
　(7.5YR8/2のシルトブロックを少し含む)
2　7.5YR3/2黒褐色中粒砂と7.5YR7/1明褐色中粒砂の斑土
　(7.5YR8/2のシルトブロックを多く含む)
3　7.5YR4/1黒褐色中粒砂と7.5YR2/1黒褐色中粒砂の斑土
　(7.5YR8/2のシルトブロックを多く含む)
4　7.5YR1.7/1　黒色中粒砂と7.5YR3/1黒褐色の斑土
　(7.5YR8/2のシルトブロックを含む)
5　7.5YR1.7/1　黒色中粒砂
　(7.5YR2/2のシルトブロックを少し含む)

第 30 図　畑間遺跡 038SE 平面図・断面図 (1/50)

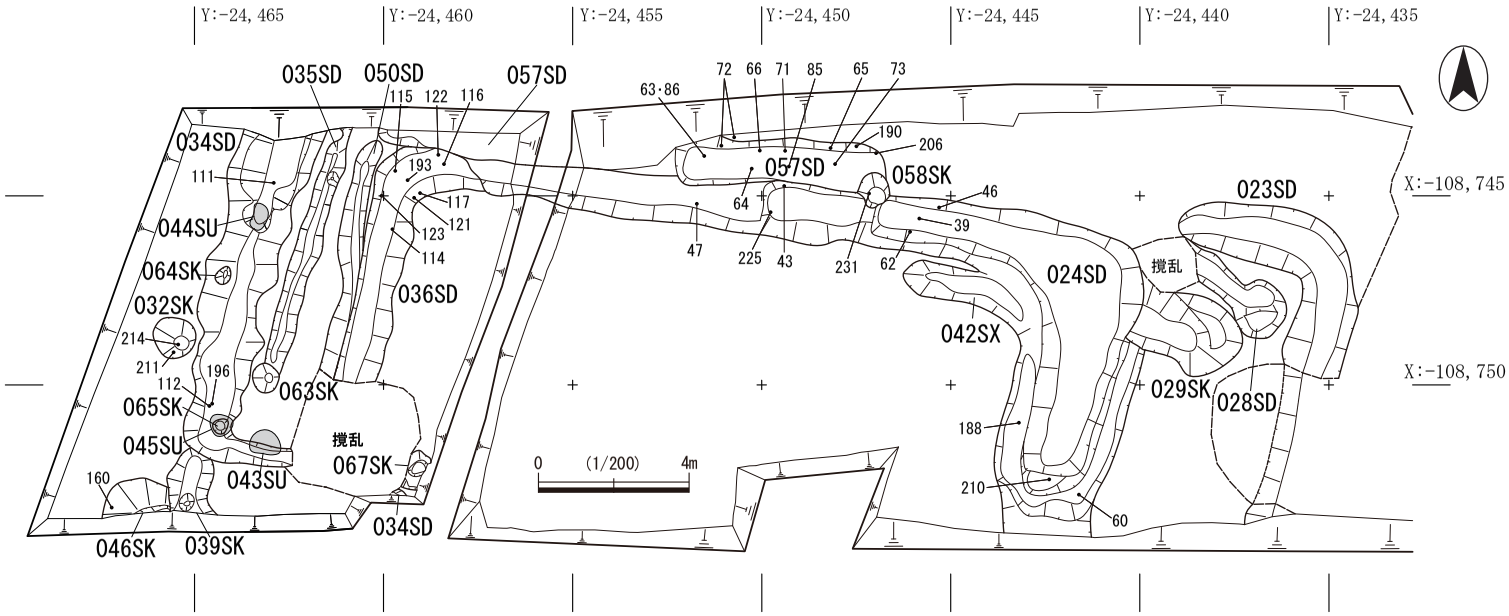
出土遺物には弥生土器、土師器、中世土師器、緑釉陶器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃が出土している。特に緑釉陶器火舎香炉の一部が出土していることは特筆される。この破片はほかに 024SD と 3 地点の包含層から出土しており、それらは接合した。このほか土器は地元の古窯で生産された山茶碗の碗や小皿が主体であるが、型式的には中野編年の 2 型式から 4 型式までと時間幅が広いことが特徴である。ただし、5 型式や 6a 型式の碗や小皿も出土しているが、埋土 1 層出土であり、混入の可能性が高い。遺構の時期はしたがって、12 世紀後半から 13 世紀の第 1 四半期であり、12 世紀後半に掘削・構築され、13 世紀第 1 四半期に廃棄されたと考えることができよう。

溝

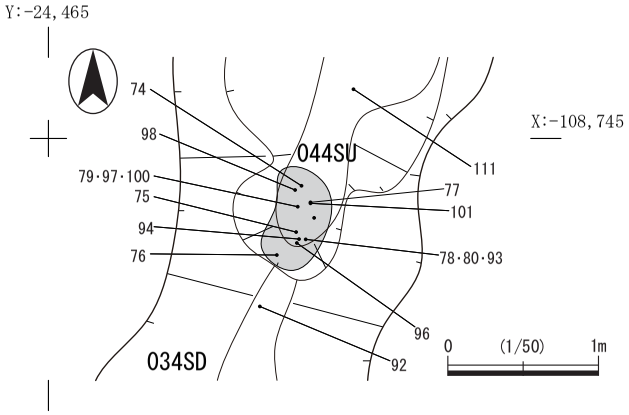
023SD：3 地点のほぼ中央、g2・g3・h2・h3 区に位置する L 字状に曲がる溝である。g3 区では撹乱に切られる（第 31 図，図版第 26)。g2・g3 区では南南西－北北東方向に向かう溝であるが、g2・h2 区の境界あたりから 90 度向きを変え西北西に向かう。そして西に向かって 4m ほどの地点、g2 区で消滅する。その状況から洪水砂層 022NR によって削られた可能性が高い。南側については調査区外へさらに延びる。断面形状は U 字状または逆台形で、基盤層である砂層に掘り込まれている。幅 1.59m、深さ 40cm である。屈曲部周辺の底部には植物遺体の堆積が薄くみられるが、流水の痕跡となるような砂の堆積は認められなかった。したがって滞水はしていたが、水流はなかったようである。また、西岸の一部に杭が打ち込まれた痕跡がみられ、護岸または何らかの施設が設けられていた可能性もある。

出土遺物には弥生土器、須恵器、灰釉陶器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。時期を明確に示す資料に乏しいが、中野編年 6a 型式や藤澤編年第 8 型式を示す山茶碗も小破片ながら存在するので、後述する 024SD より新しい様相である。そして最終的な遺構プランの検討と出土遺物の時期から、023SD は区画を示す溝で、次に述べる 024SD が東側に約 5m 拡張されたものと考えられる。

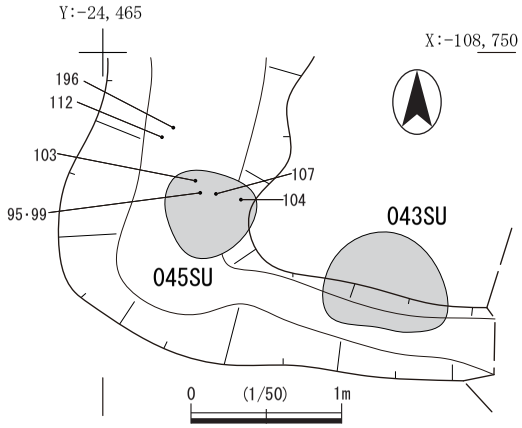
024SD・042SX：024SD は 3 地点・4 地点の中央、c1・c2・d1・d2・e1・e2・f2・f3 区に位置する L 字状に曲がる溝である。042SX はその西側に溝に沿って走る犬走り状の遺構である（第 31 図，図版第 26・27)。024SD は f3 区南端から、北北東－南南西の方向に延び、f2・g2 区におい



第 31 図　畑間遺跡 023SD・024SD・028SD・034SD・035SD・036SD・050SD・057SD・029SK・032SK・046SK・058SK・067SK・043SU・044SU・045SU・042SX 平面図（1/200）



第 32 図　畑間遺跡 044SU 遺物出土位置図（1/50）
（トーンは 044SU の範囲を示す。）



第 33 図　東畑遺跡 043SU・045SU 遺物出土位置図（1/50）
（トーンは 043SU・045SU の範囲を示す。）

てほぼ直角に屈曲し、西南西‐東南東の方向に直線的に延びる。そしてc1区において036SDと接続する。幅は最大で3.13mあるが、平均的な幅は2m前後で、断面形状は逆台形または箱形である。ちょうど調査区f3区の南端に溝の開始部分が有り、3段の階段状に掘り上げられていた。溝は基本的に遺跡の存在する砂堆の基盤層まで掘り抜かれているが、北東の角部分が最深で、砂層より更に下位に存在するシルト層をほぼ垂直に掘り込まれている。深さは約80cmを計る。これより西側については、北東の角から西に6mのe1区で1段、e1・d1区の境界でもう1段と階段状に約30cm浅くなって西に延びている。また北東部周辺の区画内側には、042SXとしたが幅約50cm以下の犬走り状の狭い段状地形が造り出されている。このほかに柱穴や土坑などが認められず、溝に付属する柵や塀など遮蔽物の痕跡については見付けられなかった。なお、この024SDの東北隅の最深部には、溝の掘削直後よりかなりの時間滞水していたようで、泥炭層が堆積していた。この泥炭層中には多くの植物遺体や自然木、木製品の残欠が含まれていた。昆虫化石も多数見られたため、分析用にサンプリングを行っている。

明らかに北側に展開していく溝057SDとは切り合っており、024SDは057SDに切られている。また溝036SDは、発掘の便宜上分離しておいたが、同一区画の西辺を画する溝で024SDとは一連の溝と考えられる。また、後述するが021SM・025SM・026SM・027SMといった4基の地点貝塚は、この024SDが埋没する過程で形成された貝塚である。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、青磁がある。また、被熱した人頭大の礫もまとまって出土している。平坦な面を持つ礫であることから礎石に使用された可能性がある。被熱痕はそうした場合、火災によるものと考えることも可能である。遺物の時期は12世紀後半から15世紀後半まであり、量的に多数を占めるのは12世紀後半から13世紀中葉の資料である。また13世紀中葉以降の遺物は上層から出土している。したがって、溝が機能していたのは12世紀から13世紀中葉までであり、それ以降埋没したと考えられる。

028SD：3地点の中央、g2区に位置し、023SDと024SDの間隙に掘られた溝状の遺構である（第31図）。北西‐南東方向にやや湾曲しつつ延びる遺構で、南東端は円形に収束する。円形部分からは犬の頭骨が発見されたが、埋葬されたような状況は看取できなかった。溝の北西端は、022NRによって消滅している。断面形は碗状で、幅は東南端が最大で1.49m、深さは最深で27cmを計る。出土遺物は山茶碗の破片が少量出土しているのみである。13世紀中葉以降の遺構であろうと推測される。

034SD(043SU・044SU・045SU)：溝034SDの報告であるが、溝の埋没の過程で土器集積遺構が形成されており、溝の時期を考える上で必要な情報となることから、ここでまとめて報告する（第31～34図，巻頭図版第3，図版第27・36下・37上）。034SDは4地点西辺に沿って南北に展開する溝で、南端は東側に屈曲する。グリッドではa3・b1・b2・b3・c3区に位置する。b1区からb2区でやや東に振れるが南北方向に延び、a3・b3区の境界で直角に屈曲し東に向きを変える。北には調査区外へさらに延びる。また、東端については撹乱に切られるが、c3区で再び現れ、調査区外へ延びる。幅は最大2.12m、平均1.5m前後で、深さは最深で48cmである。断面形状は碗状を呈する。埋土上半には遺物集積が3か所見つかったほか中世遺物を多く含むが、下半には少ない。下半の埋土は粗砂が目立つことから、降雨や洪水などの理由で短期間に

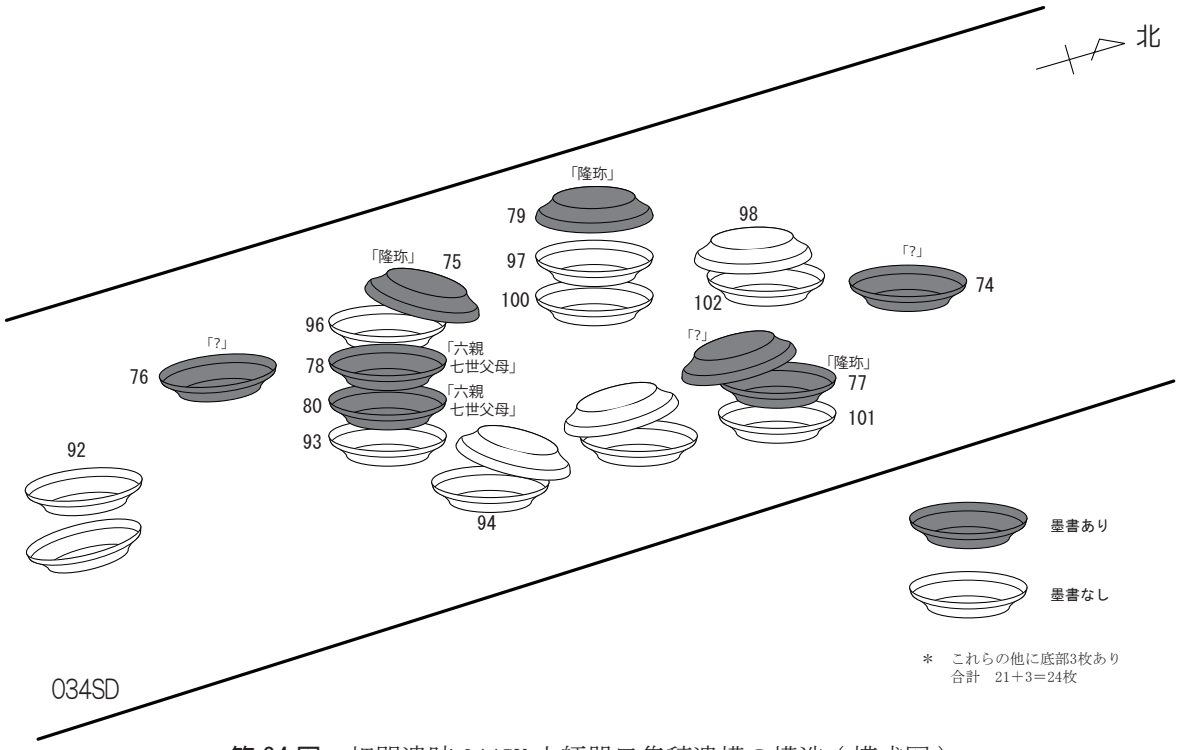
埋積された可能性も考えられる。溝の方向は北北東－南南西で、024SD など隣接する他の溝遺構と同方向である。

次に土器集積遺構を順に説明する。

043SU は b3 区 034SD の北岸に形成された土器集積である。034SD が埋没する過程で形成された。東西 85cm、南北 64cm の範囲に広がる。瀬戸美濃の古瀬戸祖母懐壺や常滑の甕の破片、ロクロ調整土師器皿などがある。祖母懐壺は体部の破片のみで図化しなかったが、おおよそ古瀬戸後期Ⅳ期のものである。そのほかもほぼこれに近い時期のものと見られる。したがって 15 世紀中葉の遺構と考えられる。土器はすべて破片であまり接合しない。破片を廃棄した遺構である。

044SU は b2 区 034SD 中央に形成された土師器皿の土器集積である（第 31・32・34 図，巻頭図版第 3，図版第 27・36 下）。034SD がほぼ埋没した段階で、土師器皿を少なくとも 25 枚近く用い、いくつかの山に重ね置き構築したものである。南北 71cm、東西 39cm の範囲に広がる。ほとんどの土師器皿はロクロ調整で極めて丁寧に仕上げられており、底面には糸切りの痕跡が顕著である。その底面に墨書を持つものも多く、「隆珎」という人名と思われるものの他に、施餓鬼経からの供養文である「六親（眷属）・七世父母」が見られる。いくつかの山は数枚から 5 枚ほどのかわらけを積み置いたものだが、いちばん上のものは底を上にして蓋のように置かれており、中に何か供物が置かれていた可能性もある（第 34 図）。こうした状況から単なる土器集積遺構ではなく、まじないなどの祭祀遺構と考える必要がある。土師器皿のみの出土で、その形態からおおよそ 15 世紀後半から 16 世紀の所産と見られる。

045SU は b3 区の 034SD の屈曲部分の内側に位置する土器集積である。これも溝の埋積が進んでから形成された遺構である（第 31・33 図，図版第 37 上）。径 61cm の範囲に広がる。特徴的な遺物としては、常滑の壺口縁部、瀬戸美濃の平碗・卸皿・甕・桶、ロクロ調整土師器皿などがあるが、とりわけ赤色に発色した土師器皿が含まれる。常滑の壺（103）は 16 世紀後半のも



第 34 図　畑間遺跡 044SU 土師器皿集積遺構の構造（模式図）

のとされる。おおよそ 15 世紀中葉から 16 世紀の時期にまとまっている。

ほか 034SD の出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、青磁がある。土器集積遺構の遺物も含め遺物の時期は概ね 13 世紀中葉から 16 世紀後半のものであるが、土器集積遺構が形成されかつ遺物量が多いのは 15 世紀中葉から後半である。先述の 024SD よりも新しい様相で、023SD と併行する可能性が高い。13 世紀中葉から 14 世紀の遺物は少なく小破片で、混入したものかどうか判断が付かない。したがって掘削の時期を特定することは難しい。少なくとも 15 世紀中葉には機能しており、15 世紀後半あるいは 16 世紀後半に埋没したと考えることができる。

035SD：4 地点西区中央、b1・b2 区に位置する溝である（第 31 図，図版第 27）。北北東 - 南南西方向の溝である。034SD の東側にほぼ平行して走る細い溝であるが、034SD よりも東に振る。北は調査区北壁でほぼ収束にする。南は 063SK に切られ、その先に続かない。断面形は浅い皿状を呈し、幅約 60cm、深さわずかに 10cm 前後である。出土遺物はない。溝の方向から考えれば、024SD や 034SD とは異なり、023SD や 057SD に近い。これらと関係する遺構と考えたい。

036SD：4 地点西区中央、b1・b2・c1・c2 区に位置する溝で、北北東 - 南南西方向の溝である（第 31 図，図版第 27）。先述したように 024SD と接続し、それと一連の遺構である可能性が高い。その場合方形区画の西辺を画する溝である。南端は撹乱によって消滅しているが、その先に続かず、調査区南辺方向には貫通しないようである。断面形は逆台形を呈し、幅 1.12m、深さ 46cm を計る。

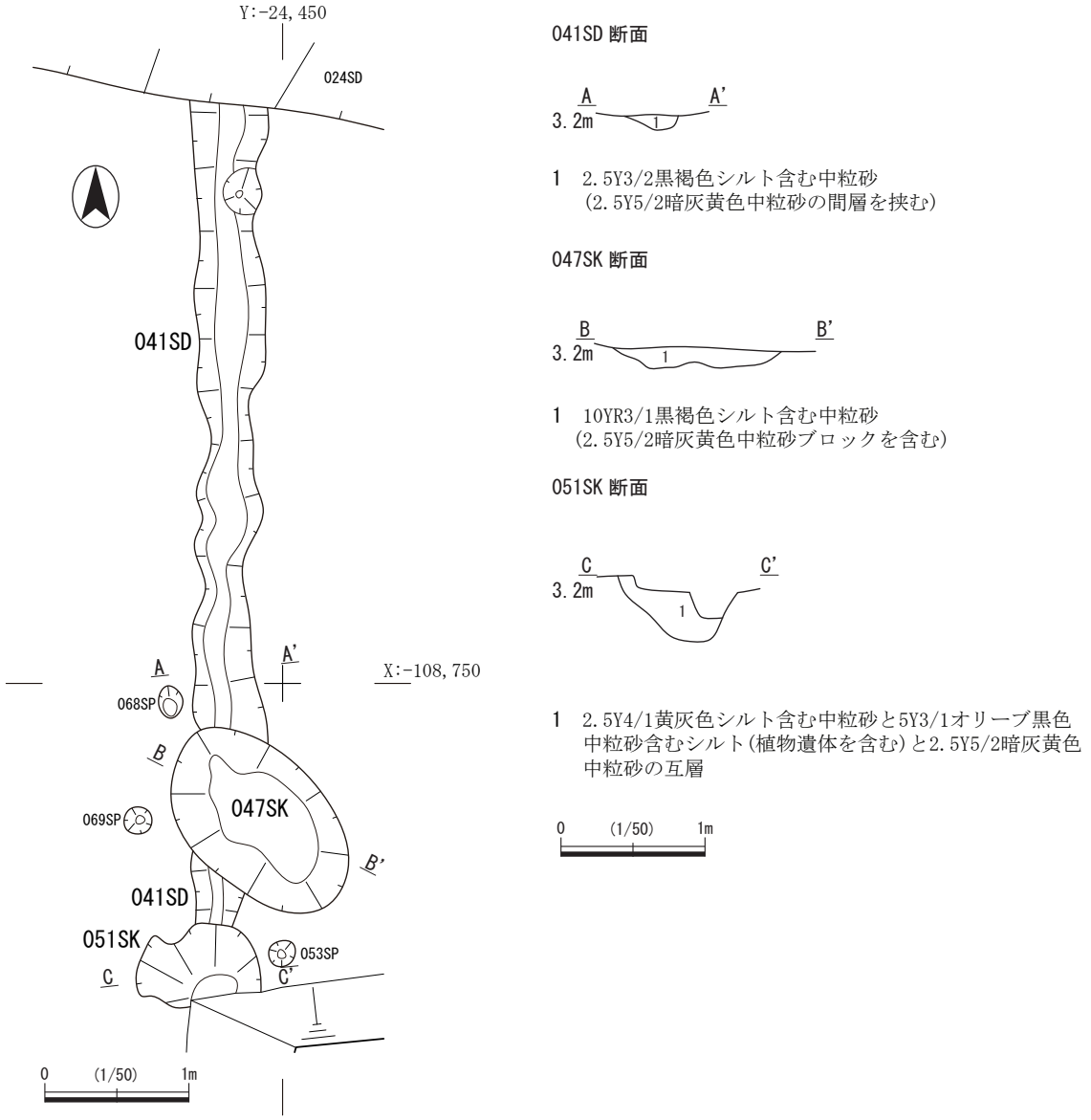
出土遺物には弥生土器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗がある。多数を占めるのは 13 世紀前半から中葉のものであり、遺構の時期もその時期である。

041SD：4 地点東区中央、d2・d3 区に位置する溝で、ほぼ正南北方向の溝である（第 35 図，図版第 37 上）。断面形は碗状を呈する。埋土には流水の痕跡はなく、自然埋没であることを示す。この溝は南側で 047SK、051SK に切られる。他の遺構が真北に対して東に 20 度ほどの傾きをみせるのに対し、この溝は正南北方向に直線的に延びているのが特徴である。また、この溝の東西で面の標高が異なる。西側が東側に比べ 5cm 高い。

出土遺物には弥生土器と山茶碗がある。山茶碗は小破片ばかりであるが、中野編年の 3 型式から 4 型式が主のようである。時期を明確に示す遺物に恵まれないが、遺構の切り合いから考えても古い段階の遺構であると推測される。

050SD：4 地点西区中央、b1・b2 区に位置する溝で、北北東 - 南南西方向の溝である（第 31 図，図版第 27）。035SD の西側にほぼ平行する細い溝であるが、035SD ほど東に振れない。むしろ 034SD に方向は近く、これとの関連を考えたい。断面は浅い皿状を呈し、幅 62cm、深さ 28cm を計る。先述の 035SD と規模は近似している。036SD を切る。出土遺物はない。したがって遺構から時期を推測することになるが、先に指摘したように 034SD と関連が指摘できることから 034SD と近い時期が推測される。

057SD：4 地点調査区北辺、b1・c1・d1・e1 区に位置する溝で、西北西 - 東南東方向の溝である。断面は逆台形を呈し、幅 1.32m を計る。上部は洪水砂層 022NR に切られてよくわからない。024SD の地山のシルト層を掘り抜いた部分の終点の北隣から始まり直線的に西に延びる。この溝も東端から 6m 西の地点、d1 区までは溝の最深部にあたりシルト層まで掘り込まれている。



第 35 図　畑間遺跡 041SD・047SK・051SK 平面図・断面図 (1/50)

残存する深さ 21cm である。それより西は 20cm ほどの段差で溝の底面が高くなっている。このような段差を有する溝の底面は 024SD と共通するが、この理由についてはよくわからない。なお、ここでの調査は当初 057SD の一部を 024SD 上層として掘削してしまっている。最終段階になって 024SD と重なっていることが判明し、別の遺構として捉えなおした。

出土遺物について、中世土師器、山茶碗が出土している。12 世紀後半から 15 世紀後半のものまである。024SD からの混入もあろうが、15 世紀後半の遺物など 024SD よりも新しい時期の遺物が含まれている。また 057SD は 023SD の西に向かう延長上に位置し、方向もほぼ共通であることから一連の溝である可能性が高いと考えられる。このように考えた場合 057SD は 024SD を北に拡張した区画溝ととらえることができる。遺構の時期も 024SD よりも新しい時期で 023SD と同時期と考えて、13 世紀後半以降の掘削で、15 世紀後半ごろの埋没を考えたい。

070SD:4 地点調査区北辺に短く残る南北溝である。f1 区に位置する。断面形は浅い皿状を呈し、幅 35cm、深さ 15cm を計る。北には調査区外にさらに延びるが、南については 022NR に切られて続かない。自然埋没した遺構である。出土遺物はない。調査できた範囲が断片的で遺構の性

格や時期等についてはよくわからない。

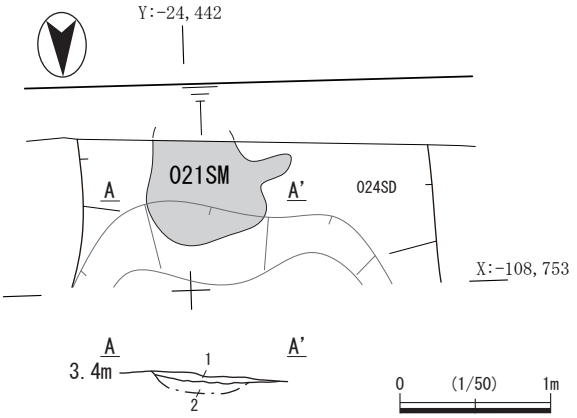
洪水砂層

022NR：3地点ほぼ中央から4地点北辺にかけてみられた流水堆積の砂層で当初は自然流路ととらえていた。しかし、常時流水があったような砂礫の堆積は認められず、一過性のものと考えられるようになり、最終的には洪水による堆積物と判断した。ただし、遺構の記号はそのままにしている。d1・e1・e2・f1・f2・g1・g2・h1・h2区に広がり、幅4.09m、厚さは54cmを計る。023SDや024SDのような下層に存在した溝を覆うように砂層が堆積しており、あるいはこの砂層に切られている。洪水の流れが低いところに狙って、東から西に向かって急激に流れたものと考えられた。また、この砂層に覆われた022NRの北岸からは大中小の亀化石が一箇所からまとまって発見されているが、その様子は洪水砂によって一気に埋没したような状況であった。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、中国産陶器がある。これらは洪水時にあたりの遺物を巻き込んで再堆積したものである。洪水の時期を特定するような遺物は見つかっていない。ただし、層位的にはほとんどの遺構を覆う形で堆積しており、砂層の上に013SMが形成されていることから15世紀後半か16世紀以降で近世以前の堆積と思われる。

地点貝塚

地点貝塚から出土した貝類の分析は自然科学分析の節で別途報告する（第4章第3節参照）。

021SM：3地点調査区の南端、f3区に位置する小規模な地点貝塚である（第36図，図版第36上）。024SD内にあり、024SDがある程度埋没した状態で遺構が形成された。東西63cm、南北72cmであるが、南は調査区外にさらに続く。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは6cmである。その下に貝がまばらに混じる層があるが、これは024SDの埋土に021SMの貝が混入した部分である。この断面形から、021SMは人為的に掘削してできた遺構ではなく、貝類を廃棄して形成された遺構であることがわかる。



1　2.5Y3/2黒褐色中粒砂(シルト多く含む。貝多く含む。粘性あり)
2　5Y2/1黒褐色中粒砂(シルトを極微量含む。貝少量含む。粘性弱い。024SD埋土)

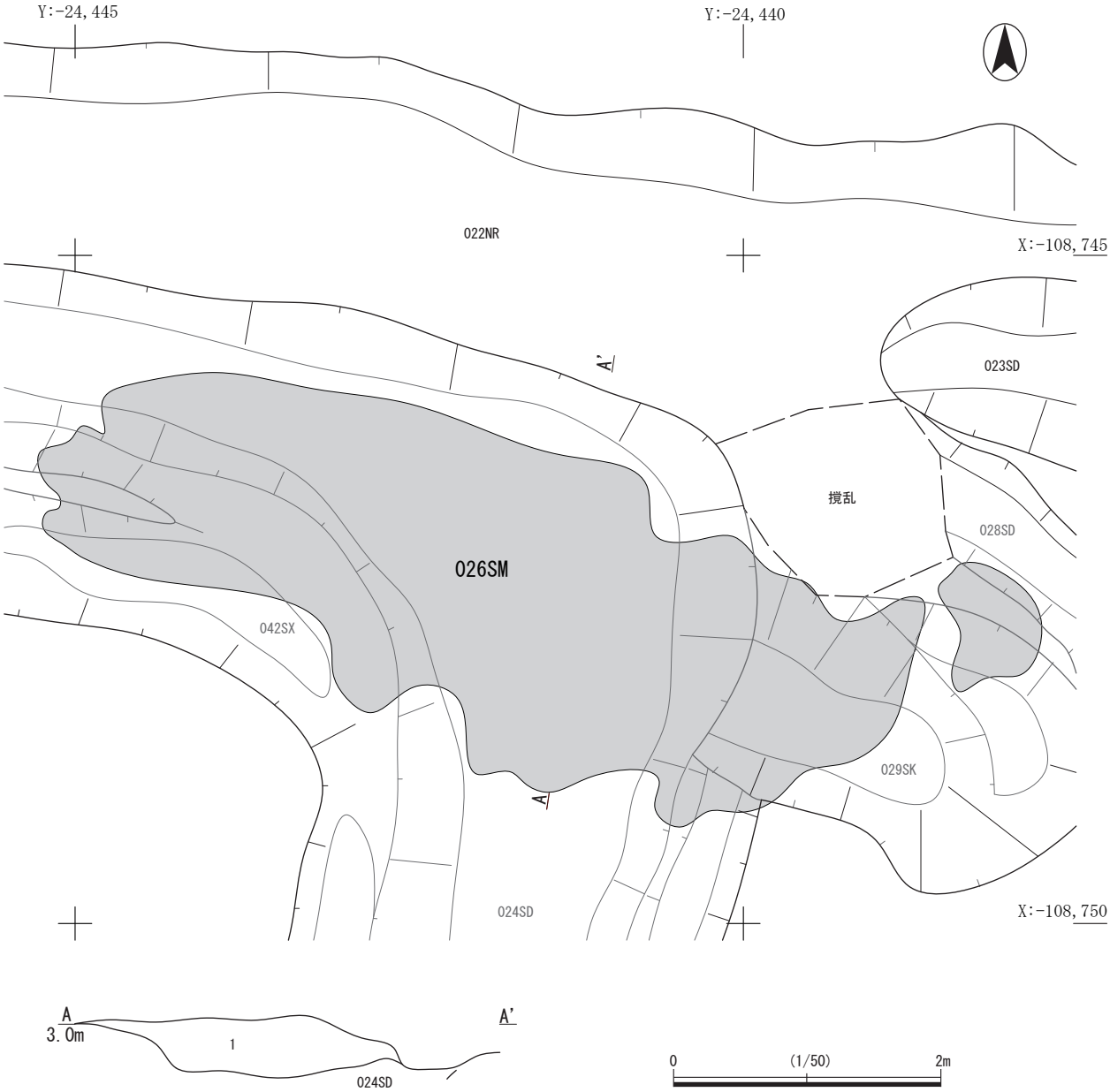
第36図　畑間遺跡021SM平面図・断面図(1/50)

構成する貝類はシオフキが最も多く、全体の4割を占め、ついでハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが多い。この4種でほぼ9割以上を占める。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物には弥生土器と山茶碗の小片があるが、024SDからの混入の可能性がある。時期決定の証拠とはなりにくい。

025SM：3地点調査区の南西、f3区に位置する小規模な地点貝塚である（図版第36上）。024SD内にあり、024SDがある程度埋没した状態で遺構が形成された。東西36cm、南北17cmで平面形はいびつな楕円形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは4cmである。この断面形から、025SMは廃棄して形成された遺構であることがわかる。貝類についてはサンプルを採取しなかったので詳細は不明であるが、他の地点貝塚と同様、シオフキ、ハマグリ、ア

サリ、ヤマトシジミが目に付いた。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物はなく時期については遺物からは決められない。

026SM：3 地点調査区の西側中央、e2・f2・g2 区に位置する比較的規模の大きい貝塚である（第 37 図，図版第 34・第 35）。024SD が半分ほど埋没したところで、その窪地を利用して廃棄されたと考えられる貝塚である。東西方向に帯状に広がり、長さ 7.61m、幅 2.53m を計る。中心部分は純貝層で、最大層厚 45cm 以上を確認した。ブロックサンプリングを行い、構成する貝類の分析を行っている。その詳細は自然化学分析の章に譲るが、主体となる貝類はシオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミニナ類であるが、これらが地点や層位ごとに偏る傾向があり、種類別に大量に処理し廃棄した可能性がある。また、貝類ばかりでなく、魚類の骨も出土している。こうした状況で、比較的短期で形成された貝塚を想定するならば、それは日常生活の残滓などというものではなく、もっと特別ななにか大量生産する必要に迫られた事情を



1　純貝層（026SM）

第 37 図　畑間遺跡 026SM 平面図・断面図（1/50）

背景に考えるべきであろう。出土遺物には弥生土器、灰釉陶器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、白磁がある。遺物の時期から遺構の時期を考えると 14 世紀前半と考えられる。

027SM：3 地点調査区の南端、f3 区に位置する比較的規模の大きな地点貝塚である（図版第 36 上）。024SD 内にあり、024SD がある程度埋没した状態で遺構が形成された。また、021SM より下位で検出しており、層位的にも 021SM に先行する貝塚である。東西 1.4m、南北 2.65m であるが、南は調査区外にさらに続く。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは 10cm ほどである。この断面形から、027SM も貝類を廃棄して形成された遺構であることがわかる。貝類についてはサンプルを採取しなかったので詳細は不明であるが、他の地点貝塚と同様、シオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが目に付いた。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物は弥生土器、中世土師器、山茶碗、常滑がある。1 点実測図を掲載したが（図版第 13 の 152)、024SD からの混入の可能性がある。時期決定の証拠とはなりにくい。

土坑

029SK：3 地点調査区の中央、g2 区に位置する土坑である（第 31 図）。024SD の北東角の外側に重複する不整形な土坑で長径 3.01m、短径 2.05m を計る。断面は擂鉢状を呈し、深さは 56cm である。024SD との切り合いは認められず、埋土は共通するので、同時に存在した遺構で、ほぼ同時に埋没した遺構と考えられる。出土遺物には灰釉陶器、山茶碗、常滑がある。遺物の時期は 12 世紀後半から 13 世紀中葉であり、024SD の時期と近い。遺構の性格については 024SD と関係すると考えられるが、それ以上はよくわからない。

031SK：4 地点西南隅の a3 区で検出された小規模な土坑である（第 26 図）。調査区西端であるこの辺りの基盤層の標高は 3.4m 前後であるが、024SD で区画された部分より 20cm 以上高い。平面形はややいびつな楕円形を呈し、長径 83cm、短径 59cm を計る。断面形は碗状を呈するが、深さは 16cm である。出土遺物には連珠文の軒平瓦や三巴文の軒丸瓦など、14 世紀から 15 世紀前葉の遺物を多く含む。なお、周辺にも同時期の遺物が多く分布していた。

032SK：4 地点西端の a2 区に位置する土坑である（第 31 図）。平面形は円形を呈し、長径 1.13m、短径 1.1m である。基盤砂層に掘り込まれている遺構で、断面形は擂鉢状を呈し、深さは 26cm である。中世土師器や山茶碗のほか、石鏃やチャート製の敲石、両刃石斧など弥生時代の遺物も多く出土している。

033SK：4 地点東区西南隅、e3 区に位置する土坑である（第 26 図）。平面形は直径 20 ～ 30cm のほぼ円形を呈するが、断面形は U 字状で、深さは 36cm もある。柱穴であった可能性もある。出土遺物には知多窯産山茶碗の破片がある。資料に乏しく時期は限定できない。

039SK：4 地区南西隅近く、034SD の延長線上に位置する土坑だが、南側の未調査区に溝状に展開する可能性もある（第 31 図）。中央部にピット状の掘り込みがあるが、性格は不明である。南北 1.81m で、南にさらに延びる。東西 1.16m で深さ 41cm を計る。断面形は擂鉢状を呈するが、中央にピットがあるので 2 段落ちになる。出土遺物には弥生土器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、製塩土器が出土している。このうち瀬戸美濃の卸皿 1 点は 045SU の卸皿と接合した。この卸皿は古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。山茶碗はこれより古く、藤沢編年の尾張型第 6 型式から第 8 型式までである。したがって遺構の時期は瀬戸美濃の卸皿の時期に近づけて考え

て、15 世紀中葉としておきたい。

040SK：4 地点西区北東隅、c2 区に位置する土坑である（第 31 図）。平面形はややいびつな円形を呈し、長径 2.03m、短径 1.92m である。断面形は擂鉢状を呈し、深さは 38cm である。出土遺物はない。遺構の時期、性格ともよくわからない。

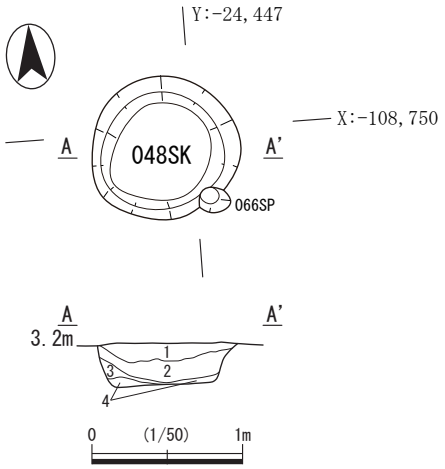
046SK：4 地点西区南西隅に位置する土坑である（第 31 図）。039SK に東側が切られ、また遺構の南辺については調査区外である。東西 1.84m、南北 0.95m を計る。擂鉢状の断面形状を呈し深さは 43cm である。南側に展開する溝状遺構の一部である可能性もある。

出土遺物には中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。12 世紀後半から 15 世紀中葉の時期のものである。部分的な発掘で断定できないが、遺構も掘削から埋没までがその期間である可能性がある。

047SK：4 地点東区南辺、d2・d3 区に位置する土坑である（第 35 図）。041SD 南端を切っている。平面形楕円形の土坑で、長径は 1.34m、短径は 0.93m を計る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ 18cm である。出土遺物には山茶碗がある。12 世紀第 4 四半期のものであるが、041SD からの混入の可能性もある。遺構の底面は一定ではなく、立ち上がりもゆるやかであることから、人為的な掘削の痕跡を見出しにくい。木の根の痕跡の可能性がある。

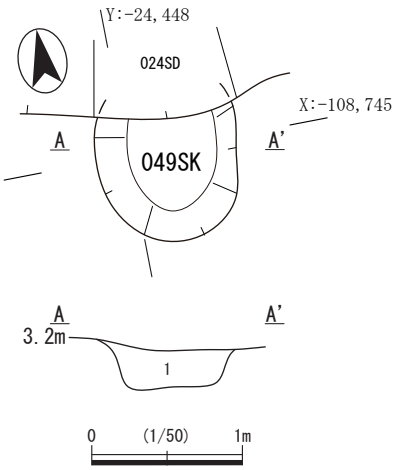
048SK：4 地点東区東辺、e2・e3 区に位置する土坑である（第 35 図，図版第 37）。直径 1m 弱、深さ 31cm の円形土坑で、断面形状は箱形である。埋土は自然埋没を示している。出土遺物には弥生土器と山茶碗がある。山茶碗は 13 世紀第 1 四半期のものであり、その時期の遺構と考えられる。廃棄土坑か、あるいはさほど深い土坑ではないが、湧水点レベルには達しており、小規模な水溜めとして利用されていた可能性もある。

049SK：4 地点東区東辺、e2 区に位置する土坑である（第 39 図，図版第 37）。直径 93cm、深さ



1　2.5YR2/1黒褐色中粒砂
　(2.5YR6/2明褐色中粒砂を少し含む)
2　10YR1.7/1黒色中粒砂と2.5YR6/2明褐色中粒砂
　の互層(しまっていない。泥炭含む)
3　2.5YR5/3　黄褐色中粒砂
　(しまっていない。色は地山よりやや暗い)
4　10YR1.7/1黒色中粒砂と2.5YR6/2の斑土
　(しまっていない)

第 38 図　畑間遺跡 048SK 平面図・断面図 (1/50)



1　10YR4/2灰黄褐色中粒砂と
　10YR2/2黒褐色中粒砂の互層
　(しまっていない)

第 39 図　畑間遺跡 049SK 平面図・断面図 (1/50)

33cm の円形土坑で断面は箱形である。北側は 024SD によって切られている。埋土は自然埋没を示している。出土遺物はない。規模や形状、出土遺物がほとんどない点は 048SK に類似する。遺構の性格が近似しているのか、または何らかの関連が想定される。時期は 048SK に近い時期が想定できよう。

051SK：4 地点東区南端、d3 区に位置する土坑である。041SD を切る小規模な土坑で、不整形なプランを呈する（第 35 図）。南辺は調査区外である。長径 85cm、深さ 45cm で断面形は逆台形を呈する。埋土は自然埋没を示し、出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

052SK：4 地点東区西端、c2 区に位置する土坑である（第 26 図）。浅い楕円形の土坑で、埋土に少量の貝層を含む。長径 67cm 以上、短径 63cm、深さ 15cm で断面浅い皿状を呈する。出土遺物には山茶碗が少量ある。13 世紀第 1 四半期のものであり、遺構もその時期のものである。廃棄土坑の可能性がある。

055SK：4 地点東区南西隅、c3 区に位置する小土坑である（第 26 図）。南半は調査区外にある。平面形はおそらく楕円形、断面形浅い皿状を呈する。長径 62cm、深さ 13cm である。出土遺物はない。出土遺物には山茶碗が少量あるが、時期を明確にできるほどの資料ではない。時期や性格についてはよくわからない。

056SK：4 地点東区西辺、c3・d3 区に位置する小土坑である（第 26 図）。平面形は長細い不整形をしており、断面形は浅い皿状を呈する。長さ 1.69m、幅 0.61m、深さ 13cm である。出土遺物には山茶碗が少量あるが、時期を明確にできるほどの資料ではない。

058SK：4 地点東区、e1・e2 区に位置する土坑である。024SD の深掘り部分の終点北側に付随するように存在する円形の土坑である（第 31 図・図版第 37）。直径 90cm 前後、深さ 29cm で、断面碗状を呈する。埋土は 024SD と続いており、同時に埋没したと考えられる。底面標高はシルト層を掘り抜いた底面より 10cm 前後高く、溝とは別遺構である可能性が高い。木製品でたたりの未製品が出土した。こうした木材の水漬けの遺構である可能性がある。そのほかの出土遺物はない。埋土の状況から 024SD と特に時期差はないと考えられる。

059SK：4 地点西区、a3 区に位置する小土坑である（第 26 図）。平面形は楕円形で断面形は碗状を呈する。長径 64cm、短径 35cm、深さ 28cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

060SK：4 地点西区、a2・a3 区に位置する土坑である（第 26 図）。直径 55cm 前後の円形土坑で、断面形は碗状、深さ 30cm である。一部を 034SD によって切られている。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

061SK：4 地点西区、c2・c3 区に位置する土坑である（第 26 図）。036SD から東側に分岐したように曲がる溝状の遺構で、南端は撹乱に切られている。断面形は皿状である。長さ 2.48m が残り、幅は 1.02m で深さ 34cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

062SK：4 地点西区、c2 区に位置し、061SK に隣接する小土坑である（第 26 図）。直径 50cm 前後の円形土坑で、断面形は碗状、深さ 25cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

063SK：4 地点西区、b2・b3 区に位置する土坑である（第 26 図）。035SD 南端を切る。直径 70cm 前後の円形土坑で、深さは 29cm、擂鉢状の断面形状を呈する。出土遺物はない。時期や

性格についてはよくわからない。

064SK：4 地点西区、b2 区に位置し、034SD の西側斜面にある小土坑である（第 26 図）。平面形はややいびつな円形を呈し、長径 50cm、短径 38cm を計る。断面形は碗状を呈し深さは 27cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

065SK：4 地点西区、b3 区に位置し、045SU の真下に存在した小土坑である（第 31 図）。直径約 70cm の円形の土坑で、断面形は浅い皿状、深さは 034SD 底面より 18cm である。しかし、045SU とひとつの土坑を構成する可能性もある。その場合、周辺の地山面から掘り込まれることになり、その深さは約 35cm となる。065SK を認識し掘り下げた限りでは、出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

067SK：4 地点西区東南隅の c3 区に位置し、中心となるプランを撹乱に切られており、036SD か 034SD のどちらと関連するのかは遺構ではよくわからない（第 31 図）。残存する長さ 35cm、幅 35cm、深さ 15cm で断面形は碗状である。いずれかの溝の一部であるとしても、これより東側には連続しないので、土坑として収束する可能性も残されている。

出土遺物には中世土師器、山茶碗、常滑がある。東濃型山茶碗が出土しており、その時期は藤澤編年の第 7 ～第 8 型式で 13 世紀中葉から後葉のものである。ほか、遺物は小破片で時期決定の難しい資料であり、とりあえずこの時期としておきたい。（坂野）

第 3 節　出土遺物（巻頭図版第 4，図版第 7 ～ 18・第 43 ～ 47）

出土遺物はコンテナにして 40 箱出土した。その内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、山茶碗、緑釉陶器、常滑、瀬戸美濃、白磁、青磁、中国産陶器、製塩土器などの土器・陶磁器、瓦類、土錘、陶丸、加工円盤などの土製品、石鏃、石錐、石斧、敲石、礫石錘、砥石、軽石、石鍋などの石器・石製品、銭貨、鉄釘などの鉄製品、木球、板材、折敷底板、柄、たたり未製品などの木製品である。遺物の時期は中世の土器･陶磁器、瓦などの土製品が最も多く、全体の 9 割を超える。この時期の遺物は遺構に伴うものも多い。しかし、弥生土器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器はまったく少数であるが中世の遺構に混入して出土している。遺構出

第 2 表　畑間遺跡 3･4 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成

種類	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	緑釉陶器	中世土師器	瓦質土器	山茶碗	常滑	瀬戸美濃	白磁	青磁	中国陶器	合計
破片数	339	15	31	3	1	519	12	3426	583	71	1	5	1	5007
	339	15	31	3	4619									5007
比率	6.8%	0.3%	0.6%	0.1%	92.3%									100.0%

第 3 表　畑間遺跡 3･4 地点における遺構出土中世土器・陶磁器の組成

種類	中世土師器	瓦質土器	緑釉陶器	山茶碗	常滑	瀬戸美濃	白磁	青磁	中国陶器	合計
破片数	519	12	1	3426	583	71	1	5	1	4619
比率	11.2%	0.3%	0.0%	74.2%	12.6%	1.5%	0.0%	0.1%	0.0%	100.0%

土の土器･陶磁器について集計した結果は､第2表および第3表のとおりである。遺構出土土器･陶磁器の9割以上を占める中世の土器・陶磁器に限ってみれば、山茶碗が最も多く74%を占め、ついで常滑の12.6%、中世土師器の11.2%である。白磁･青磁は合わせても1%に満たず、特に目立つわけではない。こうした組成を見た場合、それほど特殊とはいえず、通有の中世の遺跡である。しかし、瓦の出土量は多く、正確に数えていないが、コンテナにして6箱出土しており、特徴的である。以下、遺物の種別、時代別に報告するが、東畑遺跡出土遺物の報告時と同様に整理を進めた。弥生土器や古代の土師器･須恵器･灰釉陶器も主要なものは報告する。また、自然遺物については、自然科学分析の章で一括して報告する（第4章第3節参照）。

A　中世の土器・陶磁器

038SE出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿（1～12）、碗（13～22）、輪花碗（23）、緑釉陶器火舎香炉（24）、常滑壺（25）、常滑擂鉢（26）が出土している。

1～12は山茶碗の小皿である。すべて知多窯産である。1は中野編年の2型式、3～8は3型式、9は4型式、10と11は5型式、12は6a型式である。13～22は山茶碗の碗である。これもすべて知多窯産である。21・22が中野編年の2型式、13・14と17～20は3型式、15・16は4型式である。23は輪花碗である。高台は付高台で断面三角形状を呈する。知多窯産であるが胎土が良い。藤澤編年で第4型式である。24は緑釉陶器の火舎香炉である。尾野善裕氏のご教示によれば、ロクロの回転方向は右回転で、胎土は山茶碗の胎土に酷似しているので、まずは日本で生産された陶器であり、そして猿投あるいはその周辺で製作された可能性が高い。また、緑釉は斑があるがこれは釉薬が十分に磨れていないためであり、12世紀の緑釉陶器生産の終末期にはこのような特徴がでてくるとのこと。また、山本信夫氏からは、12世紀の中国産の緑釉陶器であれば、黒色粒子等が胎土に含まれるが、そうしたものが一切含まれていないので中国産ではないとご教示を得た。以上のようなことからこの遺構の時期に猿投あるいはその周辺で生産された緑釉陶器の火舎香炉として報告する。3点の破片の接合資料であり、038SEのほか、024SD下層と3地点の包含層から出土した。したがって038SEと024SDの同時存在を示す資料でもある。口縁は鍔部からの粘土が折り返されて作り出されている。短く立ち上がる。また､体部下位には沈線が2条めぐる。1か所粘土が剥がれた痕跡が認められるが、脚の痕跡であろう。25は常滑の壺の口縁部である。三筋壺の可能性がある。中野編年の3型式である。26は常滑の擂鉢である。内面にはかなり細い櫛状工具により19条単位の擂目が付けられている。使用により内面がよく摩滅している。中野編年の7型式である。

038SEから出土した遺物の時期は中野編年の2型式から7型式になる。しかし、6a型式の12の資料は出土レベルが高く、あるいは4型式の3の資料も上層から出土している。おそらく最終の埋没時期を示す資料になると考えられる。一方、2型式・3型式の資料は遺構の下層や底面近くからの出土が多く、井戸の機能時や廃絶時を示す資料となろう。

023SD出土土器・陶磁器：瀬戸美濃の卸皿（27）と常滑の三筋壺（28）が出土している。27は古瀬戸卸皿の底部である。内面には卸目が格子状に付けられている。内外面とも露胎である。28は常滑三筋壺の体部下半から底部である。体部中位には3条の沈線がめぐる。これには013SMから出土した体部片が接合した。中野編年の2型式である。

023SDからはこのほか山茶碗の碗が出土しており、その中には中野編年の6a型式の知多窯

産山茶碗や藤澤編年の尾張型第 8 型式の瀬戸窯産山茶碗の破片が含まれている。したがって出土遺物の時期は 12 世紀から 13 世紀後半を中心とする時期が考えられる。

024SD・057SD 出土土器・陶磁器：4 地点の調査では 057SD の一部を 024SD として掘り下げており、024SD 上層として取り上げた遺物がある。地点を記録して取り上げた遺物については見直して 057SD 出土のものを分けた。そうした経緯からここでは併せて報告する。

024SD 出土遺物には中世土師器の皿 (29 ～ 32)、羽釜 (53)、山茶碗の小皿 (33 ～ 42・84)、碗 (43 ～ 52)、常滑の鉢 (56)、盤 (57)、羽釜 (58)、広口瓶 (59)、壺 (60)、甕 (61・62)、瀬戸美濃の四耳壺 (55)、青磁の碗 (54) がある。

29 ～ 32 は土師器の非ロクロ調整皿である。いずれも 024SD の下層から出土している。33 ～ 42・84 は山茶碗の小皿である。38 と 84 の底部外面には墨書痕がある。42 と 84 が瀬戸窯産で、あとはすべて知多窯産である。33 は中野編年の 4 型式、34 は 5 型式、35 ～ 41 は 6a 型式である。42 は藤澤編年の尾張型第 6 型式、84 は尾張型第 7 型式である。39・42 は 024SD 上層出土、これ以外は下層出土である。43 ～ 52 は山茶碗の碗である。43 ～ 47 は知多窯産、48 ～ 51 は瀬戸窯産、52 は東濃型である。43 ～ 45 は中野編年の 4 型式、46・47 は 6a 型式、48 ～ 51 は藤澤編年の尾張型第 7 型式、52 は藤澤編年の東濃型第 10 型式、大洞東 1 号窯式である。43・44・46・47・52 は 024SD 上層出土、これ以外は下層出土である。53 は土師器の羽釜の口縁部から体部である。口縁部はやや内傾しつつ上方に立ち上がる。口縁端部は外に若干拡張される。北村編年の羽釜 A2 に当たる。下層から出土。54 は青磁碗の底部である。底部内面には草花文、外面には蓮弁文がある。竜泉窯系青磁碗Ⅱ c 類である。下層から出土。55 は瀬戸美濃の四耳壺の体部から底部である。体部内面にヘラ状工具による掻き上げ痕が残る。古瀬戸前Ⅰ b 期である。下層から出土。56 は常滑の鉢である。使用により内面がよく摩滅している。中野編年の 6a 型式である。57 は常滑の盤である。中野編年の 5 ないし 6a 型式であろう。下層から出土。58 は常滑の羽釜の体部である。使用により被熱している。中野編年の 3 型式である。下層から出土。59 は常滑の広口瓶の口縁部から頸部である。中野編年の 2 型式である。60 は壺の口縁部から肩部である。肩部に花文の押印がある。中野編年の 6a 型式である。61・62 は常滑の甕の口縁部である。61 は中野編年の 5 型式、62 は 6a 型式である。61・62 は下層から出土した。

以上より遺物の時期は、知多窯産山茶碗と常滑では中野編年の 2 型式から 6a 型式まで、尾張型・東濃型山茶碗の藤沢編年では第 6 型式から第 10 型式である。これらは 12 世紀前半から 15 世紀後半までの時期にあたる。しかし、数的にみれば 15 世紀後半の資料はわずかで 12 世紀後半から 13 世紀中葉の遺物にまとまる傾向があるともいえる。

057SD の出土遺物については、中世土師器の皿 (63・64)、山茶碗の小皿 (65)、碗 (66 ～ 70)、瀬戸美濃の直縁大皿 (72)、常滑の甕 (73)、青磁の皿 (71) が出土している。63・64 は土師器のロクロ調整皿である。64 には黒斑がある。65 は山茶碗の小皿である。知多窯産で中野編年の 6a 型式のものである。66 ～ 70 は山茶碗の碗である。66 ～ 69 は知多窯産で、70 は瀬戸窯産である。66 ～ 68 は中野編年の 4 型式、69 は 3 型式である。70 は藤澤編年の尾張型第 7 型式である。70 の内面にはススが付着している。71 は青磁皿の底部である。同安窯系青磁皿Ⅰ b 類である。72 は瀬戸美濃の直縁大皿の口縁部から体部である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後Ⅰ期のものである。73 は常滑の甕の口縁部である。中野編年の 10 型式である。

以上より遺物の時期は、知多窯産山茶碗と常滑では中野編年の 3 型式から 10 型式まで、尾張型・東濃型山茶碗の藤沢編年では第 7 型式から第 8 型式（後 I 期）である。これらも 12 世紀前半から 15 世紀後半までの時期にあたる。しかし、024SD と比較すれば 14 世紀から 15 世紀後半の資料が若干多い。057SD が 024SD を切ると考えられることから、遺構の時期は 13 世紀後半から 15 世紀後半を考える。

034SD・043SU・044SU・045SU 出土土器・陶磁器：034SD の出土土器・陶磁器の報告に併せて 043SU、044SU、045SU の遺物の報告も行う。

まず 034SD の出土遺物について、中世土師器の皿（110）、瓦質土器の花瓶（111）、山茶碗の碗（120）、青磁の碗（112）、常滑の鉢（109）がある。109 は常滑の鉢の口縁部から体部である。片口が付いている。中野編年の 10 ないし 11 型式である。110 は土師器の非ロクロ調整皿である。外面はユビオサエにより仕上げている。109 と 110 は下層から出土した。111 は瓦質土器の花瓶の頸部である。外面は縦方向のヘラミガキが施される。また上位には雷文のスタンプが 2 個づつ 2 か所押され、その下には針状の工具で引っ掻いたような細い線で花弁のような紋様を施している。これはおそらく中国古銅器の花瓶を模倣したものではないかと考えられる。なお、111 は二次焼成か、あるいは焼成不良かわからないが、赤色に発色しており、表面も黒色ではない。しかし、花瓶という器種で、古銅器の模倣をした器形であり、外面に丁寧なヘラミガキが施されている。瓦質土器の特徴を備えていると考えることができ、このように分類した。112 は青磁碗の底部である。底部内面には花文がある。全面施釉した後、高台内の釉を掻き取っているが、露胎は赤く発色している。竜泉窯系青磁碗で上田分類Ⅱ類である。120 は東濃型山茶碗である。内面はよく摩滅しており、赤色顔料が付着している。この赤色顔料は蛍光 X 線分析の結果ベンガラと判明し、ベンガラを磨ったと考えられる（第 4 章第 2 節参照）。藤澤編年の東濃型第 11 型式、脇ヶ島 3 号窯式である。このほか図化しなかったが知多窯産山茶碗で中野編年の 6a 型式に相当するものがいくつか含まれている。

次に土器集積遺構の遺物を順に報告する。

まず 043SU であるが、体部の破片資料ばかりであり、図化しなった。古瀬戸後期Ⅳ期の祖母懐壺の破片が含まれている。

044SU については、遺構で説明があったように、墨書した土師器皿を埋納した可能性が強い。墨書のある土師器皿（74 ～ 81）、墨書のない土師器皿（87 ～ 94・96 ～ 98・100 ～ 102）が出土している（巻頭図版第 4，図版第 10）。74 ～ 81 は墨書のある土師器皿であるが、全てロクロ調整皿である。墨書についてみてみると、75・77・79 は以下の墨書である。

隆珎

三□

「隆珎」は僧侶の名前かと思われる。78 と 80 は以下の墨書である。

六親

七世父母

□□

「六親」は「六親眷属」のことであろう。仏教経典の一節と考えられる。

このほか 74・76・81 は墨痕で、判読不可能であった。

墨書のない土師器皿について、87 ～ 89 は非ロクロ調整皿である。ヨコナデがなくユビオサエで仕上げられている。90 ～ 102 はロクロ調整皿で、95・99 は 045SU の出土遺物であるが、これも含めて法量で大中小の 3 つに分けることができる。90・91 は小サイズのロクロ調整皿である。体部は底部から直線的に立ち上がる。92 ～ 96 は大サイズのロクロ調整皿になる。体部は底部から外湾しつつ立ち上がる。墨書土師器皿の 74 ～ 80 もこのタイプである。97 ～ 102 は中サイズのロクロ調整皿である。体部がわずかに外湾しつつ立ち上がるもの（97 ～ 99）と底部から直線的に立ち上がるもの（100 ～ 102）がある。墨書土師器皿の 77 はこのサイズの後者のタイプである。

045SU の出土遺物について、中世土師器の皿（95・99）、常滑の壺（103・104）、瀬戸美濃の平碗（105）、卸皿（106）、甕（107）、桶（108）がある。95・99 の土師器のロクロ調整皿は先述した。103 は常滑の茶壺写しの壺の口縁部から肩部である。中野編年の 12 型式である。しかしこれのみ年代が極端に異なる。104 は玉縁口縁の壺の口縁部である。中野編年の 10 型式である。105 は瀬戸美濃の平碗である。内外面に灰釉が施されるが、高台およびその周辺は露胎である。古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。106 は卸皿の口縁部である。これは 039SK 出土の破片と接合した。口縁部内外面に灰釉が掛けられる。底部内面にはヘラにより卸目が付けられている。古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。107 は瀬戸美濃の甕の口縁部である。外面には灰釉が施される。古瀬戸後Ⅲ期ないしⅣ期のものである。108 は瀬戸美濃の桶の口縁から体部である。内外面とも鉄釉が施されている。これも古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。

034SD 出土土器・陶磁器の時期について、中野編年の 6a 型式から 12 型式まで、藤澤編年の山茶碗の第 11 型式、古瀬戸の後期Ⅳ期古段階までである。しかし中野編年 12 型式とした常滑壺が 1 点のみあり、それ以外の常滑は 10 型式までとなる。多数は実年代としては 15 世紀後半までの時期が考えられるが、16 世紀後半まで新しくなる可能性がある。

036SD 出土土器・陶磁器：中世土師器の皿（113）、山茶碗の小皿（114 ～ 116）、碗（117 ～ 119）、瓦質土器鍋（121・122）、常滑の片口（123）が出土した。113 は土師器のロクロ調整皿である。体部は底部より直線的に立ち上がる。114 ～ 116 は山茶碗の小皿である。いずれも知多窯産で、114・115 は中野編年の 5 型式、116 は 6a 型式である。117 ～ 119 は山茶碗の碗である。いずれも知多窯産で、117・118 は中野編年の 5 型式、119 は 6a 型式である。121・122 は瓦質土器の鍋の口縁部から体部である。受口状口縁で口縁端部が平坦面になっている。外面は 121 ではタテハケの後、下半を横方向のヘラケズリ、内面は 121・122 ともヨコハケが施されている。123 は常滑の片口の口縁部から体部である。中野編年の 6a 型式である。

以上から遺物の時期は中野編年の 5 型式から 6a 型式である。実年代にして、13 世紀第 2 四半期から第 3 四半期である。

022NR 出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿（124 ～ 127）、碗（128 ～ 134）、片口鉢（135）、常滑の片口椀（136）、甕（137）、中国産陶器茶入（138）が出土している。124 ～ 127 は山茶碗の小皿である。124 ～ 126 は知多窯産で、127 は瀬戸窯産である。124 は中野編年の 4 型式、125 は 5 型式、126 は 6a 型式である。127 は藤澤編年の尾張型第 7 型式である。128 ～ 134 は山茶碗の碗である。128 ～ 131 が知多窯産、132・133 が瀬戸窯産、134 は東濃型である。128 は中野編年の 5 型式、130 が 2 型式、129・131 が 6a 型式である。132・133 は藤澤編年の尾張型第 7 型式、134 は東濃

型第 10 型式の大洞東 1 号窯式である。130 は底部内面に黒色物が付着している。転用硯の可能性がある。135 は片口鉢の底部である。断面三角形状の高台が付く。知多窯産で中野編年の 1b 型式である。136 は常滑の片口椀である。中野編年の 5 型式である。137 は甕の体部破片である。車輪文の押印が付く。138 は中国産茶入の体部である。いわゆる唐物茶入である。なで肩になるが肩衝になろう。器壁が大変薄く、中国産と判断した。外面に鉄釉が掛かり黒色を呈する。

遺物の時期は古くは中野編年 1b 型式の片口鉢、新しくは藤澤編年の東濃型山茶碗第 10 型式で、実年代では 12 世紀第 2 四半期から 15 世紀前葉である。

013SM 出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿（139 ～ 141）、碗（83・142 ～ 146）が出土した。139 ～ 141 は山茶碗の小皿である。いずれも知多窯産で、139、140 が中野編年の 5 型式、141 が 6a 型式である。142 ～ 146 は山茶碗の碗である。142 ～ 145 は知多窯産で、142 が中野編年の 4 型式、143 が 5 型式、144・145 が 6a 型式である。83 は墨書のある山茶碗の碗の底部である。底部外面に「寺」の墨書がある（巻頭図版第 4，図版第 10）。瀬戸窯産で、藤澤編年の尾張型第 10 型式である。146 は東濃型山茶碗で、藤澤編年の東濃型第 10 型式、大洞東 1 号窯式である。以上から出土遺物の時期は、古くは中野編年の 4 型式、新しくは藤澤編年の尾張型・東濃型第 10 型式の山茶碗から、実年代で 13 世紀第 1 四半期から 15 世紀前葉である。

026SM 出土土器・陶磁器：中世土師器の鍋（147）、羽釜（148）、皿（149）、山茶碗の碗（82・150）、白磁碗または皿（151）が出土した。147 は土師器の伊勢型鍋の口縁部から体部である。口縁部の折り返しの幅が広くなり、頸部が長くなっている。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の鍋 A5 に当たる。148 は土師器の羽釜の口縁部である。口縁は短く立ち上がり、口唇は内側に肥厚する。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の羽釜 A2 である。149 は土師器皿で、非ロクロ調整皿である。全体に摩滅が著しく、調整についてはよくわからない。150 は瀬戸窯産山茶碗の口縁部である。藤澤編年の尾張型第 6 または第 7 型式である。151 は白磁の碗Ⅳ類、あるいは碗Ⅴ類、または碗Ⅵ類、もしくは皿Ⅱ類である。底部外面は露胎である。82 は墨書のある山茶碗の碗底部である。高台内に「大日」の墨書がある。知多窯産で、中野編年の 4 型式である。

遺物の時期は北村編年では鍋 A5、羽釜 A2 はともに山茶碗の藤澤編年でいう尾張型第 7・第 8 型式に併行する。一方、藤澤編年で山茶碗の第 6 ないし第 7 型式が出土している。したがって総じて、藤澤編年の第 6 型式から第 8 型式あたりの時期が考えられる。実年代では 13 世紀中葉から 14 世紀前半にあたる。

027SM 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（152）が出土した。152 は知多窯産山茶碗の底部である。中野編年の 2 型式である。12 世紀第 3 四半期のものである。024SD からの混入の可能性がある。

029SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（153 ～ 155）、片口鉢（156）が出土している。153 ～ 155 はいずれも知多窯産山茶碗の碗である。中野編年で 153 は 6a 型式、154 は 3 型式、155 は 2 型式である。156 は同じく山茶碗の片口鉢の口縁部から体部である。内面は使用によりよく摩滅している。知多窯産で中野編年の 3 型式である。出土遺物の時期は中野編年で 2 型式から 6a 型式になる。実年代では 12 世紀第 3 四半期から 13 世紀第 3 四半期までの時期である。

046SK 出土土器・陶磁器：中世土師器の皿（159）と山茶碗の小皿（160）、瀬戸美濃の卸皿（161）

が出土している。159 は土師器の非ロクロ調整皿である。ヨコナデはなくユビオサエとナデで全体を仕上げている。160 は知多窯産山茶碗の小皿で中野編年の 3 型式である。161 は瀬戸美濃の卸皿の口縁部である。内面に刀子を使用したかと思われる卸目が内面に付けられている。古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。遺物の時期について古くは中野編年 2 型式、新しくは古瀬戸後Ⅳ期古段階になる。実年代で言えば、12 世紀第 3 四半期から 15 世紀中葉ということになる。

047SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿（157・158）が出土している。ともに知多窯産であり、中野編年の 3 型式である。

048SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（162）が出土している。162 は知多窯産山茶碗の碗で、中野編年の 4 型式である。2 次焼成により赤変している。

052SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（163）が出土している。163 は知多窯産山茶碗の碗で、中野編年の 4 型式である。

067SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（164）が出土している。164 は東濃型山茶碗の碗で、藤澤編年の第 7 ～第 8 型式、すなわち明和 1 号窯式～大畑大洞 4 号窯式である。

包含層出土土器・陶磁器：包含層から出土したもののうち、主要なものを報告する。瓦質土器の鍋（165）、中世土師器の羽釜（166）、山茶碗の小皿（167 ～ 171）、碗（172 ～ 175）、片口鉢（176）、白磁碗（177）である。165 は瓦質土器の鍋の口縁部から体部である。受口状口縁の鍋であり、口縁端部には水平な平坦面がある。外面は摩滅しているが、内面はヨコハケの後上半ナデが施されている。166 は羽釜の口縁部である。扁球状の体部で口縁部は内傾する。口縁端部は外に拡張する。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の羽釜 A2 である。167 ～ 171 は知多窯産山茶碗の小皿で、中野編年で 167 ～ 170 は 3 型式、171 は 5 型式である。172 ～ 175 は山茶碗の碗で、174 は東濃型、それ以外は知多窯産である。中野編年で 172・175 は 3 型式、173 は 5 型式である。174 は藤澤編年で東濃型山茶碗の第 7 型式、すなわち明和 1 号窯式である。176 は知多窯産山茶碗の片口鉢の底部である。高台は薄く高い。中野編年の 1a 型式である。177 は白磁碗Ⅴ類あるいはⅥ類である。内面に櫛描文が施される。

B　弥生土器

弥生土器は調査区全域から出土しているが、包含層や後世の遺構に混入した状態で見つかっている。そのなかで主要なものを報告する。時期としては前期（178 ～ 180）、中期（181・182）、後期（183 ～ 185）の各時期の弥生土器が出土している。

178 ～ 180 は前期の弥生土器である。178 は遠賀川式の壺の口縁部から頸部である。頸部には無沈線の削出突帯Ⅱ種が 1 条巡る。内外面へラミガキが施される。前期のものである。179 は壺の底部である。外面はタテハケの後へラミガキが、内面にもへラミガキが施される。中期に下がる可能性もある。180 は条痕紋系土器の深鉢の口縁部である。口縁端部の上面が平坦になり、外側に少し拡張する。外面は横方向の貝殻条痕が施される。内面はナデが施される。前期の樫王式である。178 は包含層、179 は 024SD、180 は 023SD 下層から出土した。

181・182 は中期の弥生土器である。181 は受口状口縁の太頸壺の口縁部から頸部である。口縁は内側に拡張して上面に平坦な面を作る。口縁外面には 3 条単位の細い櫛描直線紋が巡り、その下に凹線紋が 2 条巡る。外面は摩滅が著しいがヨコハケが一部残る。内面はヨコハケが施されている。弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。182 は壺の底部である。体部は底部か

ら丸みを持って立ち上がり、底部はやや突出する。外面はタテハケ、内面はナデが施される。弥生時代前期か中期のものであろう。181 は表採、180 は 022NR から出土した。

183 ～ 185 は後期の弥生土器である。183 は広口加飾壺の口縁部である。口縁端部は上下に拡張し面を作っている。その面に擬凹線紋が施される。また、口縁内側には羽状の刺突が施される。なお口縁端部には部分的に赤彩が残っている。山中式のものである。185 も広口加飾壺の体部片である。体部の上位の破片で、6 条単位の櫛描直線紋が 2 条とその間を斜位の刺突が施されている。山中式のものである。184 は台付壺の脚部である。外面はヘラミガキで仕上げられている。山中式のものである。183 は 043SU、184 は 026SM、185 は 036SD から出土した。

C　古代の土器

今回の調査で量的には弥生土器ほどではないが、古代の土器についても少量出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器が出土し、時期としては奈良時代から平安時代を中心とする時期の土器である。

186 は須恵器の坏身の口縁部から体部である。生焼けで全体に赤っぽく焼きあがっている。体部は丸みを持ちつつ立ち上がり、口縁部が少し短く外反する。底部には静止ヘラケズリにより整形されている。黒笹 14 号窯式のものであろう。187 は灰釉陶器の椀の底部である。三日月高台で、底部内面には陰刻花紋の一部が残る。灰釉は認められなかった。黒笹 90 号窯式のものである。186 は 038SE、187 は包含層から出土した。このほか知多式製塩土器 4 類の破片がいくつか採集されている。

D　瓦

調査区全域から瓦が出土しているが、出土した瓦には 2 種類ある。ひとつは知多窯産の硬質緻密な瓦の一群で、もうひとつは生産地不明の軟質黒色の瓦の一群である。前者を I 群、後者を II 群として報告する。I 群の瓦には軒丸瓦 (188 ～ 191)、軒平瓦 (192 ～ 194)、丸瓦、平瓦 (200) が出土している。II 群の瓦にも軒丸瓦 (195)、軒平瓦 (196 ～ 199)、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦 (201) がある。

188 ～ 191 は I 群の軒丸瓦である。すべて瓦当面の破片であるが、いずれも右巻きの三巴文にその周囲に連珠を配するものと推測される。188 ～ 190 は硬質緻密に作られているが、191 は胎土に砂を多く含み、あまり緻密ではない。時期的にやや新しくなるものであろう。東畑遺跡出土瓦と同様、知多窯で焼かれていた瓦と同類である。12 世紀後半のものと考えられる。188 は 024SD 下層、189 は包含層、190 は 057SD、191 は 022NR から出土した。

192 ～ 194 は I 群の軒平瓦である。すべて瓦当面の破片であるが、杏葉唐草文の軒平瓦である。同文の瓦は社山古窯、論田古窯で出土している。192 は瓦当外縁上端を面取りし、平瓦部の側面凹面側も面取りをする。また顎凸面を面取りしている。193 は瓦当外縁上端を面取りしない。また、顎凸面も面取りせず、丸く収める。194 は瓦当外縁上端を欠損しており、面取りしたかどうかわからない。また顎凸面を面取りしている。瓦当紋様は同文であるが、破片なので同笵かどうかはわからない。しかし、瓦当面の製作技術を少し見ただけでも、三者三様である。製作者が異なることが明白である。瓦当文様から 12 世紀後半のものである。192・194 は包含層、193 は 036SD から出土した。

200 は I 群の平瓦の破片である。広端面の左の隅の部分と考えられる。隅を L 字に切り取っ

ているが、これは屋根の隅に用いる瓦であるからである。凹面は離れ砂が多量に付着する。凸面は丁寧なナデにより仕上げられている。022NR から出土した。

195 はⅡ群の軒丸瓦である。ほぼ完形である。瓦当文様は右巻きの三巴文で周りに珠文を配する。巴は知多窯産の軒丸瓦に比べると頭が丸くなり、尾はそれぞれがつながっている。珠文は 14 個残存する。瓦当面左上あたりの珠文がなくなっているので、本来珠文の数はもう少しあったはずである。これは瓦笵自体かなり痛んでいたためと思われる。反対側の珠文の崩れ方も著しい。また瓦当に離れ砂が使用されている。丸瓦部について、まず玉縁がない。これはそもそもこの瓦が小型瓦であり、棟を葺くためのものであることに起因する。凹面はナデ。凸面は縦方向のヘラケズリの後ナデが施されている。側面と挟端面はヘラケズリが施された後、凹面側を面取りされている。焼成について表面は黒色化しており、断面観察では内部は白色を呈しているので還元焔焼成がされている。焼き締まっているが、知多窯産ほど堅緻ではない。031SK から出土した。

196 ～ 199 はⅡ群の軒平瓦である。5 点出土し、いずれも連珠文の軒平瓦である。この内 196 の 1 点は瓦当面がほぼ完全に近い状態のものである。珠文は 15 個で界線を巡らす。ほかも同様の界線を持つ連珠文である。珠文の形や間隔を比較すると、いずれも 196 の瓦当文様にたどり着くので、瓦笵は 1 つと見られる。瓦当面は瓦当貼り付け技法により接合されている。199 は接合面より瓦当面が剥がれた破片である。顎凸面には横方向のヘラケズリが施される。瓦当外縁上端と顎後縁が面取りされる。197 の顎裏面にはヨコナデが入る。平瓦部について凹面・凸面ともに離れ砂の付着が顕著で、逆に布目痕がない。凹面は丁寧なナデにより仕上げられている。なお、凸面には弧線圧痕が付いている。側面のヘラケズリはなされるが面取りはされない。瓦当文様の連珠文は 13 世紀後半に畿内や鎌倉で盛行する文様であるが、顎後縁が面取りされるのは 14 世紀中葉以降のことである。したがってこの種の軒平瓦の所属時期は 14 世紀中葉に位置づけたい。焼成については、表面が部分的に黒色化しているが、全体的に赤っぽく焼きあがっている。知多窯産ほど堅緻ではない。196・198 は 031SK、197 は 022NR、199 は包含層から出土した。

201 はⅡ群の面戸瓦で、蟹面戸瓦の完形品である。凹面は板状工具により一部ナデ調整された後全体をナデにより仕上げている。凸面については縦方向のヘラケズリがなされた後ナデにより仕上げられている。側面についてはヘラケズリが施されているが、上端面については、ヘラで切り目を入れて折り取られた痕跡をナデにより調整している。焼成について部分的に黒色化している。焼き締まっているが、知多窯産ほど堅緻ではない。034SD から出土した。

瓦の時期については、以上からⅠ群は 12 世紀後半であるが、その中でも若干の時期差がみられる。Ⅱ群は 14 世紀中葉と考えたい。

E　土製品

土製玉 (202)、管状土錘 (203 ～ 205)、陶丸 (206･207)、加工円盤 (208･209) が出土している。土製玉は一部欠けているが、平面円形、断面六角形を呈する。中央に 7㎜ ほどの穴が貫通する。管状土錘はいずれも完形品である。東畑遺跡出土の管状土錘と同様、大形のもの (203) と小形のもの (204・205) がある。陶丸はどちらも完形品である。胎土から 206 は知多窯産、207 は瀬戸窯産と判断できる。陶丸も決して近くばかりでなく、遠隔地からも持ち込まれるという一例

である。208・209は加工円盤である。208は常滑の甕の体部片を、209は山茶碗の碗底部を加工したものである。202・204～206・208は包含層、203は022NR、207は057SD、209は045SUから出土した。

F　銭貨

210は景徳元寶である。北宋銭で初鋳は真宗の景徳元年(1004)である。銭径24.8mm、内径19.9mm、銭厚1.15mm、重量3.2gを計る。024SD上層から出土した。

G　石器・石製品

石鏃(211)、石錐(212～214)、両刃石斧(215・216)、敲石(217)、砥石(218・220)、礫石錘(219)、石鍋(221)、軽石(222～224)が出土している。

211は石鏃である。凹基式の無茎石鏃で、下呂石製である。212～214は石錐である。212・213は基部の一部が欠ける。214は錐の先端が欠ける。212・214は下呂石、213はチャート製。215・216はともに両刃石斧の刃部片である。215は斑レイ岩製、216は砂岩製である。217は磨製石器製作用の敲石である。チャート製で完形品である。218・220は砥石である。218の石材は緑色を呈する凝灰岩で、産地は北陸が想定される。220も凝灰岩であるが、地元の石材である可能性がある。219は礫石錘である。紐をかけるところを打ち欠いている。アプライト製である。221は滑石製の石鍋で温石に再加工したものである。口縁部から体部の破片である。口縁部はやや内湾気味で口縁端部は肥厚する。口縁部外面にはノミ痕が残るが、それ以外は研磨されている。口縁部の形態と鍔がないことから、木戸編年のⅠ類ないしⅡ類に相当し、11世紀代の石鍋と考えられる(木戸1995)。222～224は軽石である。これは周辺には転がっていない石材なので人間が選択的に持ち込んだものと考えられる。また遺物の表面には使用による面の形成があり、各遺物とも1面以上の使用面が確認できる。

211・215は032SK、212・214・216・219・221・224は包含層、213は021SM、217は023SD下層、218は022NR、220・222は024SD下層、223は013SMから出土した。211～217・219は弥生時代の遺物であろう。218・220・221は中世の遺物と考えられる。222～224はどの時代でも使用されるので限定できない。

H　木製品

木球(225)、板(226)、折敷底板(228)、建築部材(229)、柄(230)、たたり未製品(231)、不明木製品(227)が出土した。

225は木球の1/2片である。使用により表面が荒れている。226は板片であるが、墨痕らしき黒ずみが表面にある。木簡の可能性がある。227は箱物の部品かとみられるものである。別の板材と組み合わせるためのほぞが両端に掘ってあり釘穴も開いている。中央には何か通す穴を開けた上、一方の側縁とつなげている。何かを差し込むためのものであろう。228は折敷の底板で非常に薄い。229は建築部材と思われる。四角柱状の木材の一面に長さ約5cm、幅約3cm、深さ2cmほどのほぞ穴が開けてある。樹種はコウヤマキである。230は柄で端部を丸く仕上げている。樹種はクワ科クワ属である。231は樋上昇氏のご教示によればたたり未製品である。たたりとは糸繰りに用いる道具で絁糸を引っ掛けて糸枠に繰るための台のようなものである。重い樹種を使用するらしいが、樹種鑑定の結果アカガシ亜属であったので、その点矛盾がない。

(桐山)

第 4 章　自然科学分析

第 1 節　畑間遺跡で検出された 013SM 硬化面の地質学的検討

鬼頭　剛

東海市の畑間遺跡において考古学的に道路と思われる遺構 013SM が検出された。この遺構が道路なのか否かの検討のため、道路遺構を構成する地層の断面観察と軟 X 線写真撮影による内部構造の観察を行なったので報告する。

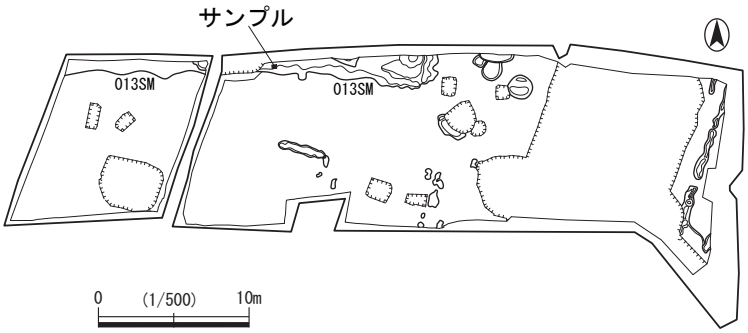
1. 試料および分析方法

道路遺構は畑間遺跡の調査スタッフにより道路の表面と推定されている固結の進んだ硬化面から地下方向へブロック（レンガ）状に試料が切りだされた（第 40 図）。試料は道路の表面と考えられる硬化面から地下方向へ深さ 16.5cm、幅 10.5cm、厚さ平均 3cm（最大 3.5cm）のブロック試料である。本試料の内部構造を確認するため、地層断面の肉眼観察と軟 X 線写真撮影をもとに検討を加えた。

2. 分析結果

a. 地層断面の観察

ブロック試料の断面には、水理条件の変化によって形成される堆積学的に明瞭な層理面は認められない。だが、砂層に含まれる貝殻片の量比、固結度、色調の差異によって便宜的に大きく 3 層に分けられる。下位層より順に記載する。



第 40 図　畑間遺跡 013SM の土壌サンプルの取得位置（1/500）

最下位層は全体に黄灰色（標準土色帖によるマンセル表記で 2.5Y4/1：以下同様）を呈する。貝殻片の量が上位層にくらべて多く含まれる、貝殻片混じりのシルト質砂層である。層厚は 12.5cm である。砂粒子は中粒砂サイズで淘汰度はよい。含まれる鉱物は石英がほとんどで、堆積学的な砂層の記載方法で表わせば、基質に含まれる泥質分の含有量が少ない石英アレナイト（岡田，1968a，1968b）状を呈する。砂層に含まれる貝殻片は殻長 3cm ほどの離弁したシジミの貝殻がほとんどで、まれに合弁のものがみられる。これらの貝殻片の内部を埋めるのは中粒砂サイズの砂粒子と貝殻片である。砂層中での貝殻片の配列には規則性はみられず、地層の中であらゆる方向を向いて分散する。さらに小さな径 1 ～ 8mm 程度の貝殻の細片も含まれる。本層を覆う上位の地層にくらべると固結度が低く、軽い衝撃や軽く手で触れただけで簡単に破壊され、貝殻片と砂粒子が接する部分では殻の湾曲部に沿って割れる。

貝殻片混じりのシルト質砂層の上を黄灰色（2.5Y6/1）を呈する貝殻片混じりのシルト質砂層が覆う。層厚は 5cm である。下位層とは層相に大きな違いはなく、砂層に含まれる貝殻片の量が下位層に比べて少ないことで分けられる。砂粒子は中粒砂サイズで淘汰は良好である。含まれる鉱物は石英がほとんどで、石英アレナイト状を呈する。砂層に含まれる貝殻片は不規則に配列する殻長 3cm ほどの離弁したシジミの貝殻で、さらに径 1 ～ 8mm ほどの貝殻の細片が含まれることも下位層

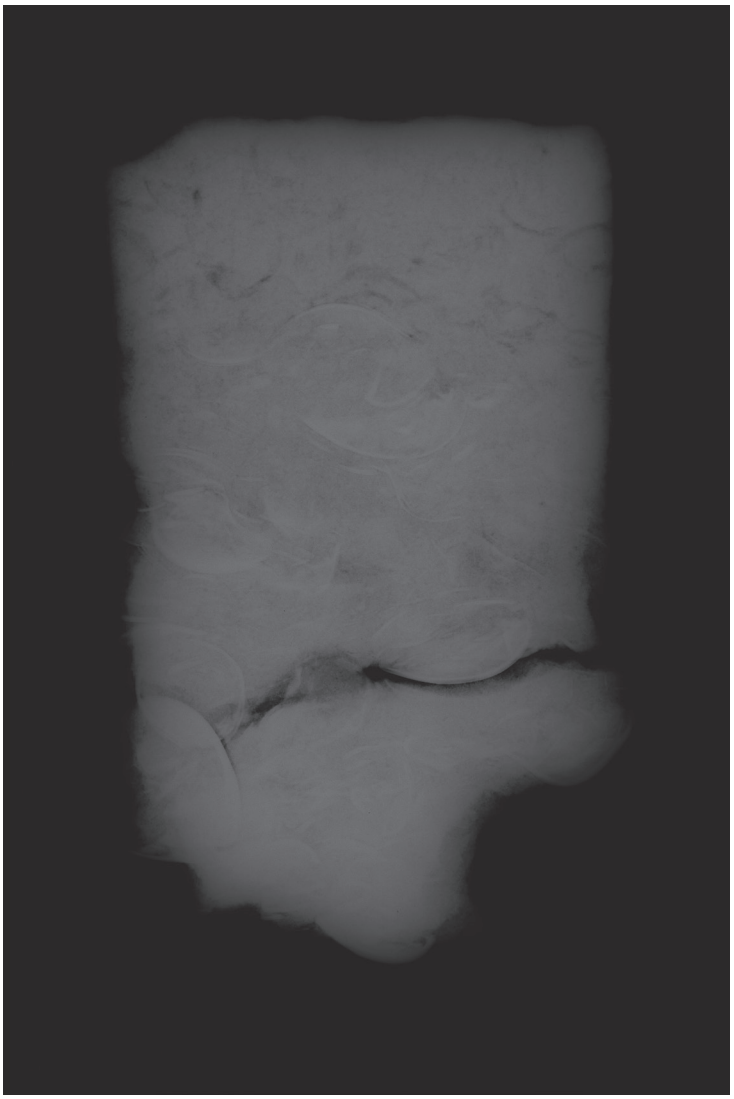
と同様である。本層は下位層に比べると若干固結度が高い。

下位の貝殻片の混じるシルト質砂層の 2 層を覆っているのが、にぶい黄褐色（10YR5/3）の砂質シルト層である。本層の頂部が道路遺構の検出面となる。層厚は 4cm、砂層をつくる砂粒子は中粒砂サイズで石英粒子がめだつ。砂粒子の淘汰度はよい。基質はシルトである。堆積構造は認められない。径 1mm 程度の砂の粒子や同程度の大きさの貝殻片の細片が混じる。下位の 2 層に比べると含まれる貝殻片の量は極めて少なくなり、貝殻の形態を示すものは認められなくなる。下位層との層理面は砂層に含まれる貝殻片の量比で便宜的に分けられる。本層は全体に下位の 2 層にくらべて固結度が高く、頂部の硬化面に近づくほど固結度が高くなる傾向がある。砂の粒子どうしは基質となるシルトを介してお互いが強固に結びついており、軽い衝撃や手で触れただけでは破壊されない。

b. 軟 X 線写真解析

ブロック試料内部の構造をさらに検討するために軟 X 線写真を撮影した。撮影にはソフロン株式会社製の軟 X 線写真撮影装置（SOFRON BST-1505C 6IITV 型）を使用し、撮影は電圧 45kV、電流 2mA で 40 秒間照射した（第 41 図）。物体を透過して X 線フィルム上に到達する X 線の強弱により、写真には白色のつよい明色部と黒色のつよい暗色部の濃淡の差となって現われる。X 線がより透過したところは暗色部、逆に透過しなかったところは明色部となる。

透過 X 線写真をみると、白色を呈し厚さ 1mm ほどの湾曲した針状を呈する構造がみられる。これは貝殻片の断面である。このブロック試料内部に認められる貝殻片の相対的な量比により、上部・中部・下部の大きく 3 つの部分に分けられる。下部では殻長 3cm ほどの貝殻片が不規則に分布する状況がみてとれる。また、ブロック試料中部にも下部と同様に貝殻片が不規則に含まれているが、砂層の中の貝殻片の密度が下部に比べると小さいことがわかる。上部では明らかに貝殻片と思われるものがなくなり、全体に砂粒子が卓越していることがわかる。



第 41 図　畑間遺跡 013SM 土壌サンプルの X 線透過写真

3. 考察

道路遺構のブロック試料の地層断面の観察では、砂層の中に含まれる貝殻片の相対的な量比から 3 層に分けられた。透過 X 線写真でも含まれる貝殻片の量比から 3 つの部分に分けられ、地層断面の観察結果と透過 X 線写真の解

析結果から分けられる各部分はそれぞれよく対応する。X 線は砂粒子をほとんど透過しないため写真では白色の領域として写る。ここでブロック試料上部をさらに詳細に観察してみると、内部には厚さ 1mm で湾曲した針状の暗色部が不規則に並ぶ構造がみられる。暗色部がみられるということは、他の部分よりも X 線がより透過した状態、つまり、試料の厚さが薄いか、ブロック試料の内部を埋めているものの密度が小さいことを示す。撮影したブロックは厚さ 3cm でほぼ均一といって良いため、暗色の部分は内部に詰まったものが少ないことを意味する。ここで注目したいのは、認められる暗色部の形態である。厚さ 1mm ほどで湾曲した針状の構造は貝殻片の断面の形態に似ており、もともとは破砕された貝殻片がそこにあった可能性が高い。貝殻は炭酸カルシウム(CaCo3) からなる。ふつう固体の炭酸カルシウムは水に溶けにくいが、二酸化炭素 (CO2) を含んだ水には以下の化学平衡により酸性炭酸塩となってよく溶け出すことが知られている。

$CaCO3 + H2O + CO2 \rightarrow Ca(HCO3)2$

もともとブロック試料の上部にも下位層でみられるのと同じように、砂層の中に貝殻片が混じっていたが、雨水に溶けて酸性炭酸塩となり砂層の中に溶脱してしまい、溶け出てなくなってしまった貝殻の跡だけが残されたのであろう。また、細粒な粘土粒子はケイ素 (Si) と酸素 (O) からなる Si-O 四面体構造をなし、それらが積み重なって粘土鉱物をつくっている。粘土の粒子はイオンを吸着する力がつよく、カリウム (K) やカルシウム (Ca) イオンなどが粘土に吸着されるとき、前に吸着していたイオンを置き換えて新たに粘土粒子に吸着される塩基交換 (base exchange) ということを行なう。貝殻片が密につまった状態の堆積物であれば溶け出すカルシウムイオンの量も多くなり、塩基交換がより活発に行なわれたと想像される。ブロック試料上部の硬化面の固結度と貝殻片から溶け出すカルシウムイオンが行なう塩基交換、そして塩基交換に伴う堆積物の固化作用とは何らかの相関関係があるように思われるが、そのメカニズムは不明である。今後の課題としたい。

ところで、ここで慎重に扱わなければならないのは、地層の固結度が高いからといってそれが道路遺構であるとは言えないことである。考古遺跡の発掘調査に従事する方ならば、炉跡などで堆積物が被熱して固結度が高くなった例をご存知であろう。熱を帯びても堆積物は硬化する。堆積物が硬くなることは道路遺構の要素のひとつかも知れないが、それが単純に道路であることを証明することにはならない。道路として証明をするならば、固結度のほかにも遺構の平面形態や他の道路遺構の要素など考古学的な状況証拠がさらに必要であるように思う。残念ながら全国的に道路遺構の検出例や自然科学的な分析例は極めて少なく、比較・検討するための基礎データがない。今回は観察事実のみを提示しておくだけにとどめたい。

引用文献

岡田博有，1968a，砂岩の分類と命名，地質雑，74，371-374.

岡田博有，1968b，砂岩の分類と命名－補遺，地質雑，74，617-622.

第 2 節　畑間遺跡出土山茶碗付着の赤色顔料分析

堀木真美子

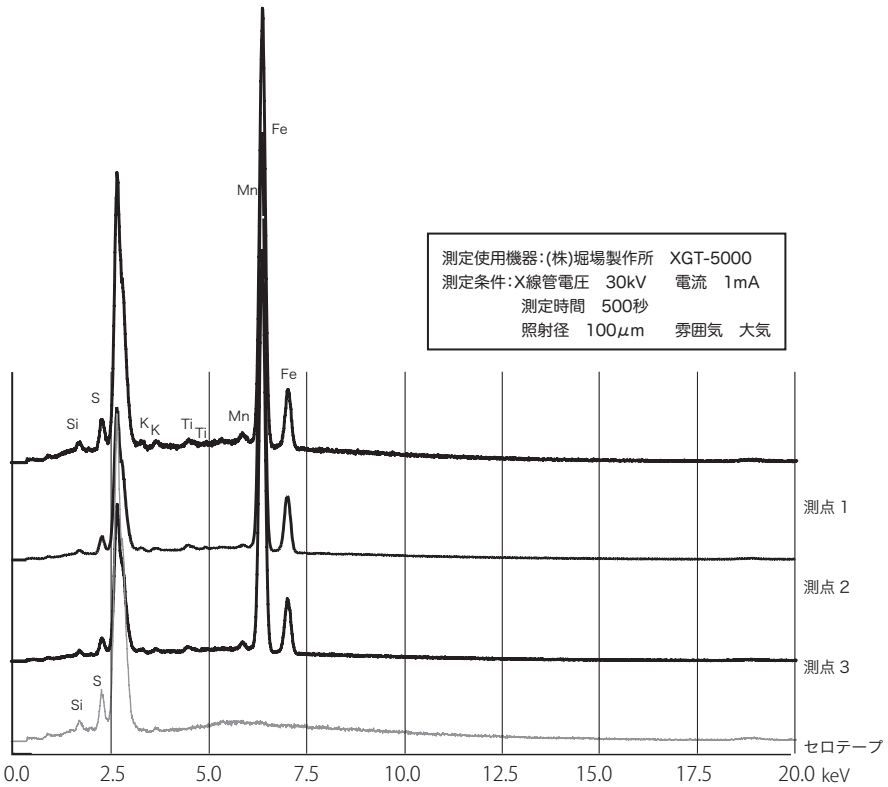
1. 試料および分析方法

今回分析を行った試料は、山茶碗（134）の内面に付着していた赤色顔料である。

測定方法は、赤色部分を中心に接着テープを用いて少量採取し、この試料に X 線を照射する方法で行った。測定機器は（株）堀場製作所製 XGT-5000、X 線管電圧 30kV、測定時間 500 秒、照射径 100 μ m、雰囲気は大気。接着テープには Si と S が検出される。測定箇所は、採取した試料の異なる 3 点を測定点とした。

2. 測定結果

測定結果を第 42 図に示す。測定の結果、Si,S,K,Ti,Mn,Fe の元素が確認された。測定箇所の違いによる元素の違いは認められなかった。顔料の状況および蛍光 X 線分析結果より、鉄を主成分とする顔料（ベンガラ）であると判断される。



＊山茶碗　内面の赤色顔料

＊３粒の測定の結果より、Fe（鉄）が明確に検出。

＊他の元素としては、K(カリウム)、Ti（チタン)、Mn(マンガン)、Si(珪素)、S(硫黄）が確認された。

第 42 図　畑間遺跡出土の赤色顔料分析結果

第３節　畑間・東畑遺跡における動物遺存体

西野　順二

はじめに

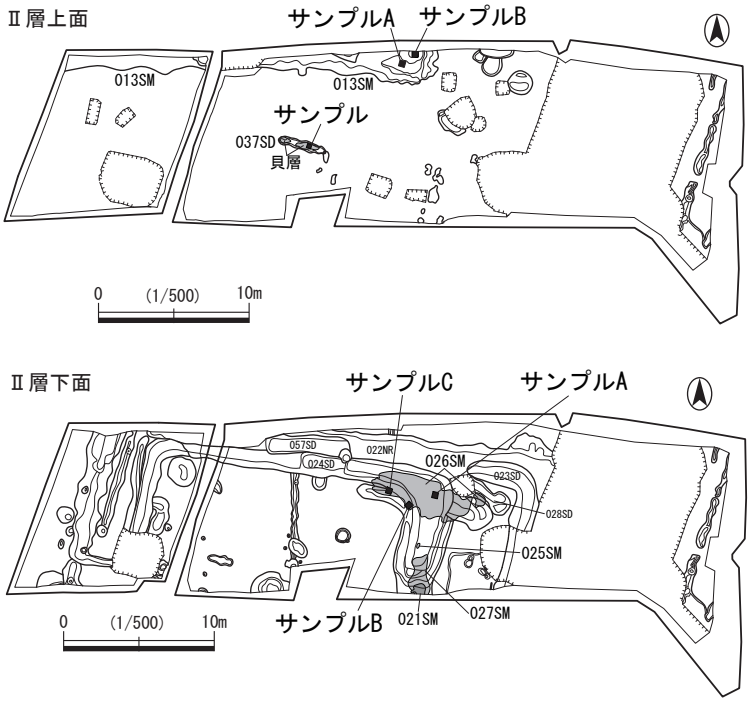
東畑遺跡及び畑間遺跡は、砂堆の東端に位置する。平成20年度の大田川駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査において、西暦13世紀前後に比定される中世の貝塚が検出された。特に、畑間遺跡では良好な貝塚が認められたため、ブロックサンプル及びコラムサンプルを設定し内包する動物遺存体の分析を行った。東畑遺跡ではサンプルが採られておらず、篩選別は行っていないため、取得された貝類及び動物骨について述べることとする。

近年、周辺地域において大草城跡（知多市）や金山屋敷遺跡（常滑市）で中世の貝塚の報告などがあり、中世の貝塚遺跡が確認されつつあるが、出土した動物遺存体に対する詳細な報告は少ない。そこで、本遺跡にて取得した動物遺存体の種別を明らかにし、知多半島における中世の人々の動物資源の利用状況や生業、また当時の周辺環境の解明につなげていきたい。なお、同定及び解析は、筆者がすべて行った。

1.　試料

東畑遺跡では、集積遺構などから出土した貝類及び獣骨である。ここで採取された貝類に関しては定量的に採取されたものではなく、目に付いたもののみを取り上げているため、選択的な影響が強い。

畑間遺跡では、各貝塚における貝層サンプルに含まれる動物遺存体と個別に出土した獣骨である。貝層サンプルは、基本的に40cm四方の範囲で取り出し、026SMサンプルAは貝層が厚く堆積していたため、深さ5cmごとに分け、コラムサンプルとした（第43図）。これらの貝層サンプルは、5mm、3mm、1mmメッシュの網籠で水洗選別を行い、すべての動物遺存体を抽出した。それらの試料については、結果とともに第7表に記す。なお、二枚貝については、すべての蝶番を左右に分けそれぞれをカウントしており、分析には最も多い側を最小個体数として使用している（第7表のゴシック体文字）。



第43図　畑間遺跡における貝層サンプル取得位置（1/500）

2.　分析方法

基本的に参考文献9及び10に従って、試料を現生資料と比較し肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類及び部位の同定を行う。また魚類などの微小骨資料については、肉眼で判別できるもののみ抽出し、詳細な分類は行わなかった。なお、哺乳類及び鳥類については名古屋大

学大学院情報科学研究科新美研究室所蔵の現生資料と比較し同定を行った。カメ類の一部については、愛知学泉大学の矢部隆氏の鑑定による。

3.　結果及び考察

出土した動物遺存体の分類群の一覧を第 4 表に示す。また本遺跡から出土した動物遺存体については第 5・6 表にまとめ、写真を図版第 48 ～ 50 に掲げた。さらに、畑間遺跡における貝層サンプルについては、第 7 表と第 44 ～ 48 図にまとめた。動物遺存体の出土した遺構の詳細は、遺構の章を参照していただきたい。

A　東畑遺跡

東畑遺跡では、中世の遺構と包含層から獣骨及び貝類が出土した。

001SU（第 5・6 表）

土器集積と共に、アカニシが 4 点と鳥類（種不明）の橈骨が左右各 1 点出土した。

002SM（第 5・7 表）

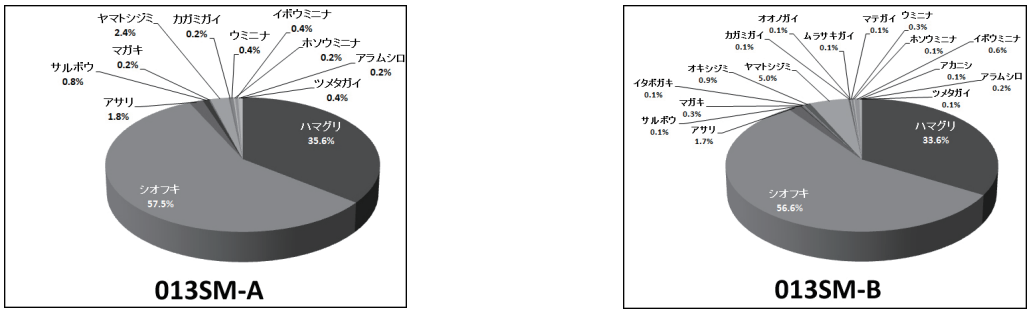
調査区の南端で検出した地点貝塚において、約 30 × 30 × 10cm のサンプルを採取した。そこには、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、ヤマトシジミ、カガミガイ、マガキ、イタボガキ、アカニシ、ウミニナ、ツメタガイ、バイガイといった貝類と魚類の骨が含まれていた。ただしこれには細かな水洗選別を行わなかったため、微小な魚骨や小型動物の骨は見つかっていない。

包含層（第 5・6 表）

1 地点では、遺構検出における包含層内から哺乳類の骨の小破片が出土した。一部は、大きさからイヌと思われるが、残存部位が少なく種の同定はできなかった。2 地点では、遺構検出における包含層からシカの側頭骨（右）1 点と、貝類（ハマグリ、サルボウ、ヤマトシジミ、イタボガキ、アカニシ）が出土した。その他に、種不明の陸生哺乳類の骨片が出土している。

B　畑間遺跡

畑間遺跡では、中世の良好な貝層が出土し、いくつかの地点で貝層サンプルを取り、内包する動物種の分析を行った。それらの貝層サンプルでは、中世の貝類利用の解明に重点をおくために貝類の分類を重点的に行った。陸生微小貝、魚類、両生類、爬虫類、小型哺乳類なども確認できたが、種同定及びカウントは行わなかった。それらについては、今後別の機会に報告させていただきたい。貝層サンプル以外にも自然流路や包含層などからイシガメ、イヌ、ウマ、ニホンジカなどが出土した。



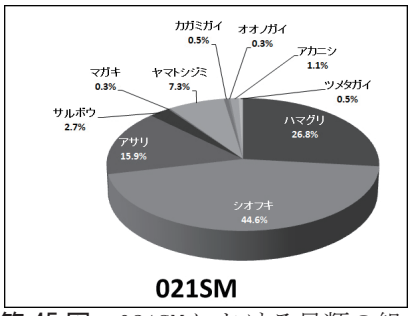
第 44 図　013SM における貝類の組成

貝層サンプル

013SM-A（第 44 図，第 7 表）

サンプルの規模は 40 × 40 × 10cm で採取した。

出土した貝類のほとんどがシオフキとハマグリで占められ、そのほかの種はあまり多くない。若干ヤマトシジミが目立つ程度である。そして、ウミニナ類などの複足網が少ないという特徴がある。主体は、シオフキである。



第 45 図　021SM における貝類の組成

013SM-B（第 44 図，第 7 表）

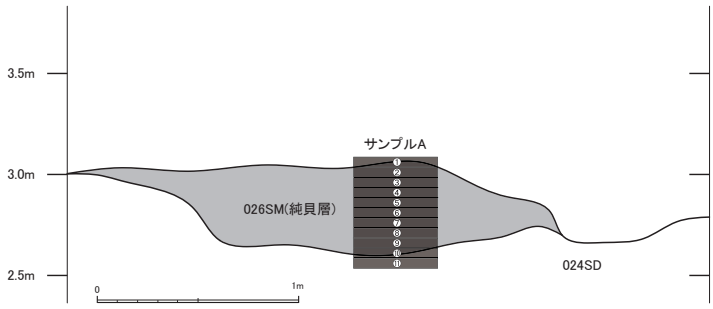
サンプルの規模は 40 × 40 × 20cm で採取した。

サンプル 013SM-A よりも多くの土量があり、含有する貝類の量も多かったが、013SM-A と同様の傾向を示す。

021SM（第 45 図，第 7 表）

024SD の南端に位置する小規模な貝層で全量採取した。

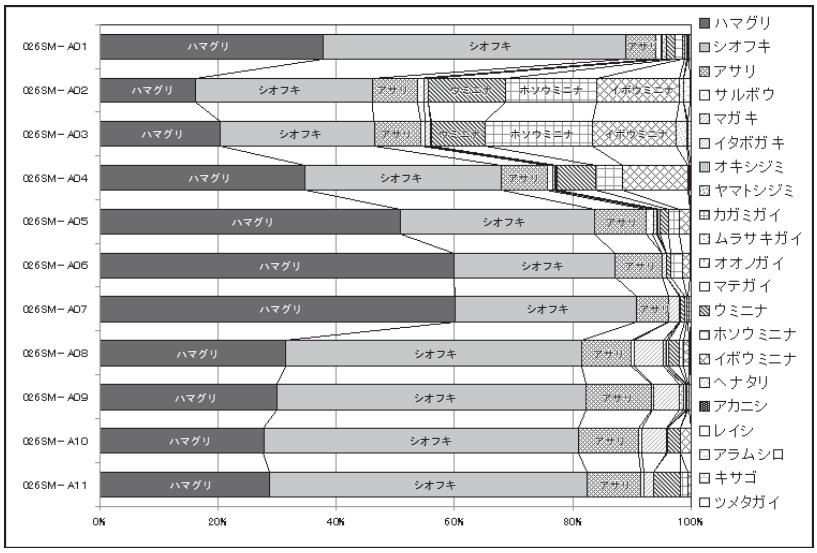
主体はシオフキとなるが、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミも比較的多く検出した。



026SM セクション図

026SM-A（第 46・47 図，第 7 表）

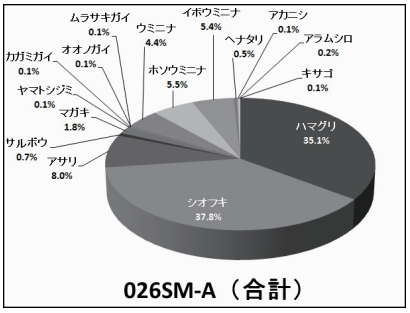
026SM における最も厚く堆積した貝層部分を 40cm 四方で深さ 5cm ごとに採取し、結果 11 層となった。2 ～ 4 層は貝層の上層部分で、他の地点と比べるとウミニナ、ホソウミニナ、イボウミニナといったウミニナ類が多い。4 層以下は、013SM と同様にシオフキとハマグリが大半を占めている。4 ～ 7 層においては、シオフキよりもハマグリが多く出土し、逆に 8 層～ 11 層では、シオフキが主体となしている。



第 46 図　026SM における層位別貝類の組成

こうしたことから、層位において貝類の出土傾向に特徴があり、シオフキ、ハマグリ、ウミニナ類などといった単位ごとに大量に廃棄した可能性がある。

各層をすべてまとめると、ややシオフキがハマグリよりも多く出土しているが、おそらく両方とも主体的に利用されていたと考えられる。また、アサリの占める割合もやや多



第 47 図　026SM における貝類の組成 (1)

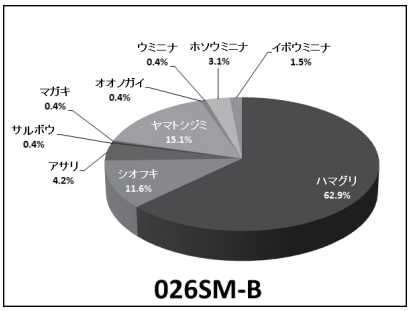
い。そして、微量ではあるが、サルボウガイ、ヤマトシジミ、マガキ、カガミガイ、ムラサキガイ、オオノガイ、ヘナタリ、アカニシ、アラムシロ、キサゴも含まれていた。

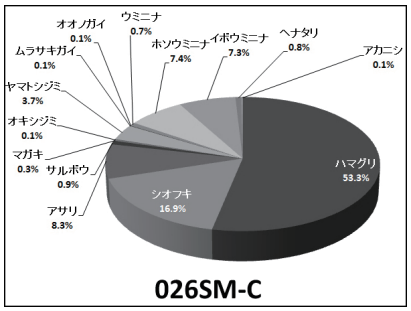
貝類の他に、魚類、爬虫類、両生類などの骨も出土している。

026SM-B（第 48 図，第 7 表）

026SM の南端において 40cm 四方で深さ約 5cm の体積で採取した。

同定した貝種はやや少なく、ハマグリ、シオフキ、アサリ、サルボウガイ、マガキ、ヤマトシジミ、オオノガイ、ウミニナ、ホソウミニナ、イボウミニナである。サンプル 026SM-A とは異なり、ハマグリが主体となし、続いてヤマトシジミの割が多くなっている。おそらく、ヤマトシジミのブロックがあったと思われる。





第 48 図　026SM における貝類の組成 (2)

026SM-C（第 48 図，第 7 表）

026SM の南西において 40cm 四方で深さ約 10cm の体積で採取した。サンプル 026SM-B と同様にハマグリが主体となしているが、ヤマトシジミの割合は低く、シオフキ、ウミニナ類、アサリが高い。

037SD（第 7 表）

溝状遺構の上に盛り上げられた混貝土層から 30cm 四方で深さ約 8cm の体積で採取した。細かいメッシュによる水洗選別を行っていないため、微小な貝類や骨は検出されていない。

主体はシオフキで、次いでハマグリが多い。その他はヤマトシジミ、カガミガイ、ウミニナ、ツメタガイで、それぞれ 1 ～ 2 点しか含まれていなかった。

貝層サンプル以外

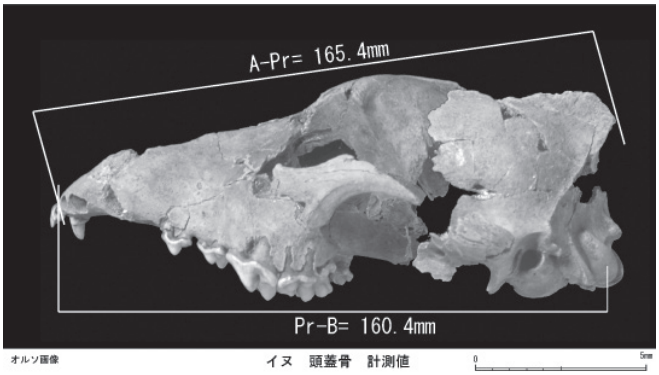
013SM（第 5・6 表）

貝類に関しては、貝層サンプル以外の種の貝類は含まれていなかった。

貝層内から数点カメの甲羅の破片とウマの門歯が 2 点出土している。

022NR（第 49 図，第 5・6 表）

自然流路の堆積土からウマ、イヌ、イシガメが出土した。ウマは、尺骨・橈骨の中間部が 1 点のみである。イヌは、頭蓋骨がほぼ完存した状態で出土した。しかし、保存状態はあまり良くなく、洗浄後復元をしたが非常に脆いため、オルソ画像による計測を試みた。結果は頭蓋骨最大長（A-Pr）=165.4mm、基底全長（Pr-B）=160.4mm である。さらにやや地点は離れるが下顎骨、上腕骨、大腿骨も出土している。出土状況において、人為的に埋葬されている様子はなく、部位がま



第 49 図　022NR 出土イヌ頭蓋骨

とまって出土していないため、おそらく死亡してから自然流路によって流され埋積されたものと思われる。大腿骨には、カットマークが残されたものもあり、人為的に殺された可能性があるものも見受けられる。イシガメは、大きさが大、中、小のものが並んで出土した。大と中のものは甲羅が幾分変形しており、埋積過程において大きな圧力がかけられたと思われる。もしかすると、洪水などによって大量の土砂に突然埋まったことによって、そのまま自然死したかもしれない。

023SD（第5表）

同一個体と思われるイヌの環椎、軸椎、寛骨、大腿骨、上腕骨が出土した。

026SM（第5・6表）

貝類は、貝層サンプル以外の種は出土してない。イヌの下顎骨（L）が1点出土している。そこに残された歯牙の多くにう歯が認められる。

027SM（第6表）

この貝層には、シオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミニナが認められた。

028SD（第5表）

イヌの下顎骨（R）と大腿骨（R）が出土した。

西トレンチ（第5・6表）

サルボウガイとシオフキが採取されているが、これらは026SMの貝類である。

哺乳類と思われる長骨が出土したが、摩耗及び風化が激しく種の同定はできなかった。

北壁・西壁（第5・6表）

ニホンジカの足根骨が1点出土した。

包含層（第5・6表）

3地点では、2面検出時にカメと哺乳類の骨片が出土した。表土から、ウチムラサキが採取されているが残存状態及び出土状況などから、これは現代の廃棄物であると思われる。

4地点では、哺乳類の頭骨片や鳥骨片と思われるものが出土しているが、小破片であることと残存状態が悪いために種の同定はできなかった。頭骨片に関しては、ヒトの可能性がある。このほかニワトリの大腿骨が3点採取されているが、出土地点が撹乱の真下であることなどから、これは現代の廃棄物である可能性が高い。

4.　まとめ

東畑遺跡において出土した動物遺存体はあまり多くはなかったが、001SUにおけるアカニシの出土状況と002SMにおいて比較的アカニシが多く含まれている点が興味深い。アカニシは、内湾の砂泥域に生息する種であり、縄文時代早期からこの地域で利用されていた。他の地域では、戦国時代にアカニシに柄をつけて柄杓として使用されていたところもある（参考文献11）が、今回出土したアカニシは比較的大きな個体が多かったが、加工した痕跡は認められなかった。

畑間遺跡においては、良好な貝層が残存していたこともあり、やや多くの動物遺存体が出土したが、貝層における陸獣の含有量は非常に少ない。それに、詳しく分類を行えなかったが、魚類に関しても経験的に出土量が少ないように感じる。さらに、共伴する土器なども少ない。また026SMの層位によって貝類に出土傾向がみられることなどから、比較的短い期間に貝種ご

とに大量に処理し、廃棄していたのではないかと思われる。

またキセルガイ科などの陸生微小貝が貝層サンプルすべてで確認できたことや爬虫類の中にはヘビ科と思われるものも見られたため、おそらく貝層が形成されてからすぐに土に埋まることはなく、地表面に晒されていたと考えられる。

さらに、013SMは薄く帯状に検出され、表面が固く締まり、上面の貝層は細かく破砕されていることから道路遺構の可能性を指摘されている。この固結した土壌の状況を調べるために土壌分析を行った（第4章第1節参照）。その結果から貝層の貝殻が雨水などに溶けることによって周りの土壌と化学反応を起こし、土壌を硬化させることができることがわかった。このような貝殻の特性を利用した土木工事の痕跡が、知多市の大草城の土塁の調査で確認されている（参考文献2）。この土塁は16世紀末のものであるため時代がやや下るが、土塁築造にあたって大量の貝殻（95%がカキで占められる）を用いて土壌を固く締まらせ基盤層を築いていた可能性が指摘されている。すなわち貝殻を含んだ土壌が雨水により硬化するのは自然の化学反応であるが、それを意図して貝殻を土に混ぜたということも推測できる。本遺跡で確認された013SMでの状況は、大草城の土塁で発見された貝塚とは異なり含有する動物遺存体の構成比が多種多様であり、またその貝類の構成比が本遺跡の別時期の貝層と同様にシオフキとハマグリが主体となっている。そして、その貝層の出土状況は、長い間地表面にあったことを示唆するものであるが、土壌の硬化を狙って貝類を混ぜたかどうかはわからない。

基本的に、畑間遺跡で認められた貝層は、シオフキとハマグリがその大部分を占め、それ以外の種は比較的少ない。常滑市の金山屋敷遺跡で多く出土していたオオノガイは、少量ではあるが含まれていた。他には、アサリやヤマトシジミが多く出土している。アカニシは、東畑遺跡のようにまとまった出土はなく、その大きさも比較的小さい。こうした貝層に含まれている貝類は、今でも伊勢湾沿岸で採ることができるもので、当時の環境は今とさほど変わらないのかもしれない。しかし、知多半島において縄文時代早期から晩期にかけて大量に採取されていたハイガイが全くみられなかった。これまでに周辺地域で行われた試掘調査や周辺地域における中世の貝塚などでもハイガイの報告はない。三河湾においてハイガイは近年まで生息していたが、知多半島の伊勢湾沿岸では中世の頃にすでにハイガイは生息していなかったのかもしれない。

陸生哺乳類については、ウマ、ニホンジカ、イヌが出土している。東畑遺跡で出土したシカの側頭骨には角座が残っていたが、人為的に加工された痕跡はなかった。それから、イヌは比較的多く出土した。おそらく3個体は存在すると思われる。中には、カットマークがつけられているものもあり、食用にされていたのかも知れない。それらのイヌの中には、大きさが現在の柴犬よりもやや大きいものもある。

カメについては、イシガメがほぼ形を保った状態で出土し、大きさの異なる3体が平行して出土した状況から、急激な自然現象などによって自然死したものであると考えられる。金山屋敷遺跡では、骨板片に打ち叩いた痕跡があり食用にされた可能性が指摘されているが、ここでは人為的な痕跡は認められなかった。

魚類について、貝層サンプルより少量であるが魚類の骨を確認した。確認できたものの中で椎骨をみると非常に小さく、おそらくカタクチイワシなどのニシン科のものなど数種が含まれ

ている。今回は時間的制約もあり分類することができなかったが、地引網漁法用の大型の土錘や刺網漁法用の小型の土錘が出土していることなどから、当時の漁労活動を知る上でも重要であるため、今後別の機会に報告させていただきたい。

5．謝辞

末筆でございますが、本報告を書くにあたって多くの諸関係者及び関係機関からご助言、ご助力をいただき、厚くお礼申し上げます。また出土したカメの鑑定には愛知学泉大学の矢部隆教授、そして現生資料を閲覧させていただいた名古屋大学大学院情報科学研究科の新美倫子准教授及び同大学院蜂須賀敦子氏、大谷茂之氏にも、併せてお礼申し上げます。

参考文献

1. 常滑市教育委員会　2004 『特養建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書　金山屋敷遺跡』（『常滑市文化財調査報告書』第 27 集）。
2. 知多市教育委員会　2008 『愛知県知多市大草　大草城跡』（『知多市文化財資料』第 40 集）。
3. 知多市教育委員会　2005 『愛知県知多市八幡　楠廻間貝塚』(『知多市文化財資料』第 38 集)。
4. 東海市教育委員会　1997 『愛知県東海市　東畑遺跡等試掘調査報告』。
5. 東海市教育委員会　1999 『愛知県東海市　上浜田遺跡発掘調査報告』。
6. 東海市教育委員会　2004 『愛知県東海市　畑間遺跡発掘調査報告』。
7. 東海市教育委員会　2005 『愛知県東海市　松崎遺跡確認調査報告』。
8. 奥谷喬司　2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会。
9. 松井章　2008 『動物考古学』 京都大学学術出版会。
10. 西本豊弘　松井章　1999 『考古学と動物学』（『考古学と自然科学』②）　同成社。
11. 丸山真史　2007 「中世遺跡に見る『都市的な場』－阪神間の遺跡における動物遺存体の研究－」『動物考古学　第 24 号』掲載　動物考古学研究会。

第４表　検出動物分類一覧

*括弧内の数字は図版第48の番号に対応する

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA
- 複足綱　Class　GASTROPODA
  - 前鰓亜綱　Subclass PROSOBRANCHIA
    - 古複足目　Order Vetigastropoda
      - ニシキウズガイ上科 Superfamily Trochoidea
        - ニシキウズガイ科　Family trochidae
          - キサゴ　*Umbonium costatum* (5)
    - 盤足目　OrderDiscopoda
      - カニモリガイ上科　Superfamily Centhioidea
        - ウミニナ科　Family Batillariidae
          - ウミニナ　*Batillaria multiformis* (1)
          - イボウミニナ　*Batillaria znalis* (2)
          - ホソウミニナ　*Batillaria cumlngii* (3)
        - フトヘナタリ科　Family Potamidiae
          - ヘナタリ　*Cerithidea cingulata* (4)
      - タマガイ上科　Superfamily Naticoidea
        - タマガイ科　Family Natieidae
          - ツメタガイ　*Glossaulax didyma* (9)
    - 新複足目　Order Discopoda
      - アッキガイ上科　Superfamily Muricoidea
        - ムシロガイ科　Family Nassariidae
          - アラムシロ　*Reficumassa fesliva* (6)
        - エゾバイ科　Family Buceinidae
          - バイ　*Balylonia japonica*
        - アッキガイ科　Family Muicidae
          - アカニシ　*Rapana venosa* (8)
          - レイシガイ　*Thais bronni* (7)
- 二枚貝綱　Class BIVALIA
  - 翼形亜綱　Sub class PTERIOMORPHIA
    - カキ目　Order Ostreoida
      - カキ亜科　Suborder Osteina
        - カキ上科　Superfamily Ostracea
          - イタボガキ科　Family Ostreidae
            - イタボガキ　*Ostrea denselamellosa* (20)
            - マガキ　*Crassostrea gigas* (19)
      - フネガイ目　Order Arcoida
        - フネガイ上科　Superfamily Arcacea
          - フネガイ科　Family Arcidae
            - サルボウガイ *Scapharca kagosimaensis* (11)
    - 異歯亜綱　Subclass HETERODONTA
      - マルスダレガイ目　Order Veneroida
        - バカガイ上科　Superfamily Mactracea
          - バカガイ科　Family Mactridae
            - シオフキ　*Mactra venenforms* (10)
        - マテガイ上科　Superfamily Solenacea
          - マテガイ科　Family Solenidae
            - マテガイ　*Solen strictus*
        - ニッコウガイ上科　Super Tellinacea
          - シオサザナミ科　Family Psammobiidae
            - ムラサキガイ　*Soletellina diphos* (17)
        - シジミ上科　Superfamily Conbiculacea
          - シジミ科　Family Corbiculidae
            - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* (12)
        - マルスダレガイ上科　Superfamily Veneracea
          - マルスダレガイ科　Family Veneridae
            - カガミガイ　*Phacosoma japonicum* (14)
            - アサリ　*Rditapes philippinarum* (16)
            - ハマグリ　*Meretrix lusoria* (13)
            - オキシジミ　*Cyclina sinensis* (15)
            - ウチムラサキ　*Saxidomus purpurata*
      - オオノガイ目　Order Myoida
        - オオノガイ亜目　Suborder Myina
          - オオノガイ上科　Superfamily Myacea
            - オオノガイ科　Family Myidae
              - オオノガイ　*Mya arenaria oonogai* (18)
- 脊椎動物亜門　Subphylum VERTEBRATA
  - 軟骨魚綱　Class CHONDRICHTHYES
  - 硬骨魚綱　Class OSTEICHTHYSE
  - 両生綱　Class AMPHIBIA
  - 爬虫綱　Class REPTILLIA
    - カメ目　Order Testudines
      - バタグールガメ科　Family Bataguridae
        - イシガメ　*Mauremys japonica*
  - 鳥綱　Class AVES (図版第49-3,4)
  - 哺乳綱　Class MAMMALIA
    - 奇蹄目　Order Perissodactyla
      - ウマ科　Family Equidae
        - ウマ　*Equus caballus* (図版第49-5,6)
    - 鯨偶蹄目　Order Cetartiodactyla
      - ウシ亜目　Suborder　RUMINANTIA
        - シカ科　Family Crvidae
          - ニホンジカ　*Cervuss nippon* (図版第49-1,2)
    - ネコ目 Order Carnivora
      - イヌ科　Family Canidae (図版第50)

第5表　　出土動物遺存体一覧表（脊椎動物）　個別採取

試料	遺跡	地点	遺構	グリッド	分類群		部位	左右	部分	数量	備考
個別採取	東畑遺跡	1	包含層	d3	哺乳網	種不明	不明	不明		3	一部イヌの可能性あり
		2	001SU	b9	鳥網	種不明	橈骨	R	中間部	1	同一種
								L	中間部	1	
			002SM	c10	硬骨魚網	種不明	鰭棘骨			1	
			包含層	b8	哺乳網	ニホンジカ	側頭骨		破片	1	角座残存
					哺乳網	種不明			破片	2	
	畑間遺跡	3	013SM	f1	爬虫網	カメ	腹甲骨板		破片		
			022NR	f2	哺乳網	ウマ	尺・橈骨	L	近位側中間部	1	
					爬虫網	カメ	腹甲骨板		破片		イシガメか？
					哺乳網	イヌ	上腕骨	L	近位破損	1	
							大腿骨	R	ほぼ完存	1	カットマーク有り、幼～若
				g1	爬虫網	イシガメ	全体		ほぼ完存	3	・大＝幅(15.16cm)　長さ(20.50cm) ・中＝幅(13.72cm)　長さ(不明) ・小＝幅(8.27cm)　長さ(11.24cm)
					爬虫網	カメ	腹甲骨板		破片		イシガメか？
					哺乳網	種不明	指骨	不明	破片	1	
				g2	哺乳網	イヌ	頭蓋骨	R+L	ほぼ完存	1	歯牙：R＝I1,P2,P3,P4,M1,M2, L＝I3,P3,P4,M1,M2
					爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
				h2	哺乳網	イヌ	下顎骨	L	破片	1	歯牙：P3,P4
			023SD	g2	哺乳網	イヌ	環椎	L	半分	1	柴犬よりやや大きい
							軸椎		完存	1	柴犬よりやや大きい
							寛骨	L	破片	1	
							大腿骨	L	近位端	1	
				h2	哺乳網	イヌ	上腕骨	R	中間部	1	
			026SD	g2	哺乳網	イヌ	上顎骨	L	破片	1	歯牙：P2,*P3,P4,M1,M2*（＊斜字はう歯）
			028SD	g2	哺乳網	イヌ	下顎骨	R	破片	1	歯牙：P2,M2
							大腿骨	R	近位端	1	
			包含層 2面検出	f1	爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
				g1	爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
					哺乳網	種不明	長骨		破片		
				h1	爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
		4	013SM	c1	爬虫網	カメ	縁骨板		破片		
				d1	爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
				e1	哺乳網	ウマ	門歯	L？	完存	2	歯牙：I1,I2
			西トレンチ	a2	哺乳網	種不明	長骨		破片		残存状態不良
			北壁・西壁		哺乳網	ニホンジカ	足根骨	L	完存		
			包含層 2面検出	a2	哺乳網	種不明	頭蓋骨		破片		
				a3	哺乳網	種不明	長骨		破片		
				b3	哺乳網	種不明	頭蓋骨か		破片		
							長骨		破片		残存状態不良
				d1	爬虫網	カメ	腹甲骨板他		破片		
			清掃	b1	哺乳網	種不明	長骨		破片		
				b2	哺乳網	種不明	長骨		破片		
					鳥網	ニワトリ	上腕骨	R	完存		若、撹乱周辺から出土
								L	完存		若、撹乱周辺から出土
								L	中間部		若、撹乱周辺から出土

第6表　　出土動物遺存体一覧表（無脊椎動物）　個別採取

試料	遺跡	地点	遺構	グリッド	二枚貝綱													腹足綱								
					ハマグリ	シオフキ	アサリ	サルボウガイ	マガキ	イタボガキ	オキシジミ	ヤマトシジミ	カガミガイ	ムラサキガイ	オオノガイ	マテガイ	ウチムラサキ	ウミニナ	ホソウミニナ	イボウミニナ	ヘナタリ	アカニシ	レイシ	アラムシロ	キサゴ	ツメタガイ
個別採取	東畑遺跡	2	001SU	b9																		●				
			009SD	c7																		●				
			包含層	b8	●			●		●		●										●				
				c8	●	●				●												●				
	畑間遺跡	3	013SM	f1	●	●	●	●		●		●						●				●				●
			026SM	f2	●		●	●																		
				g2	●	●	●	●	●													●				
			027SM	f2	●	●	●					●						●								
			西トレンチ	f1		●		●																		
			包含層	f1								●														
				f2																		●				
				g1																		●				
			表土		●	●		●									●					●				
		4	013SM	c1						●												●				
				d1						●																
			北壁・西壁																			●				
			北壁																			●				

※ ●は1点以上を確認したもの

第7表　出土動物遺存体一覧表　貝層サンプル

種名			二枚貝網																								腹足網										合計	陸生微小貝			魚網	両生網	爬虫網	哺乳網
			ハマグリ		シオフキ		アサリ		サルボウ		マガキ		イタボガキ		オキシジミ		ヤマトシジミ		カガミガイ		ムラサキガイ		オオノガイ		マテガイ		ウミニナ	ホソウミニナ	イボウミニナ	ヘナタリ	アカニシ	レイシ	アラムシロ	キサゴ	ツメタガイ	バイガイ		キセルガイ科	オカクチキレガイ科	ヒラマキガイ科				
左 右			R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	不明																				
東畑遺跡		002SM	109	105	187	169	1		3	6		2	1	3															1		37				4	1	629								
貝層サンプル	畑間遺跡	013SM-A	180	181	221	292	5	9		4	1						12	11		1							2	1	2				1		2		925	●	●	●	●	●	●	●
		013SM-B	456	463	772	649	23	22	2	1	1	4	1		12	8	57	68	2	1	1		1		1		4	2	8		1		3		1		2564	●	●	●	●	●	●	●
		013SM（合計）	636	644	993	941	28	31	2	5	2	4	1	0	12	8	69	79	2	2	1	0	1	0	1		6	3	10	0	1	0	4	0	3	0	3489	●	●	●	●	●	●	●
		021SM	86	99	165	165	59	50	10	9		1					27	20	2				1								4				2		700		●	●	●	●	●	●
		026SM－AO1	150	141	197	203	20	19	3	4	1							2							1		5	5	2	1	1		1	1			757	●	●	●	●	●		●
		026SM－AO2	109	115	213	166	54	53	9	5	5	3															93	110	98	6	1		7	1			1048	●	●	●	●	●		●
		026SM－AO3	157	150	201	194	45	60	6	5	7	7							1								70	141	109	13	1	1		4			1172		●	●	●	●		●
		026SM－AO4	198	224	189	214	47	50	3	6	1	2			1					1			1				42	30	70	2	2						1083		●	●	●	●		●
		026SM－AO5	303	281	195	178	52	52	7	7	3				1	1			1				2				8	12	10	1							1114		●	●				●
		026SM－AO6	313	304	143	141	41	34	1		1	3															4	10	7	1							1003		●	●	●			●
		026SM－AO7	242	235	123	108	16	22			7	6	1	1													3	1	1	2							768		●	●	●			
		026SM－AO8	242	242	383	378	54	64	4	2	19	38							1	3	2		2				14	5	8				1		1		1463		●	●	●	●		●
		026SM－AO9	130	123	226	207	44	48		1	11	19					1	3	1		1		1					1	1						1		819		●	●	●	●	●	●
		026SM－A10	87	97	146	186	30	35	2	1	4	14									1						8		6								617		●	●	●	●	●	●
		026SM－A11	51	46	82	95	16	13	1			3															8	2	1								318		●	●	●	●	●	●
		026SM-A（合計）	1982	1958	2098	2070	419	450	36	31	59	95	1	1	2	1	1	5	4	4	4	0	6	0	1		255	317	313	26	5	1	9	6	2	0	10162	●	●	●	●	●	●	●
		026SM-B	163	134	28	30	11	6		1		1					39	39					1	1			1	8	4								467		●	●	●	●	●	
		026SM-C	365	404	103	128	63	60	6	7	2					1	28	6				1	1				5	56	55	6	1						1298		●	●	●	●	●	●
		026SM（合計）	2510	2496	2229	2228	493	516	42	39	61	96	1	1	2	2	68	50	4	4	4	1	8	1	1		261	381	372	32	6	1	9	6	2	0	11927		●	●	●	●	●	●
		037SD	20	19	46	43											1	1		1							1								1		133							

第４節　愛知県畑間・東畑遺跡から検出された昆虫化石について

奥野絵美・森　勇一

Ⅰ．はじめに

昆虫は地球上の生物群の中で最も種類が多く、世界で約 100 万種、日本だけでも約３万種存在しているとも推定されている。生息環境も実に様々であり、池沼や河川などの水中や水面（水生昆虫）、林床や獣の糞・屍体などの地表面（地表性歩行虫）、森林や草原などの植物上（樹上性昆虫）など多岐にわたっている。食性についても、食植性から、食肉性・食糞性・食屍性・食菌性・雑食性など非常に多種多様である。

したがって、遺跡から昆虫の化石（遺体ともいう）が見つかれば、それらの生態学的な特徴に基づいて、遺跡の古環境を非常に詳細なレベルで復元することが可能である。日本では、筆者の一人森が中心となり、愛知県を中心とした遺跡で分析を行い、先史時代から歴史時代に至る古環境の復元に大きな成果を挙げている[(1)]。

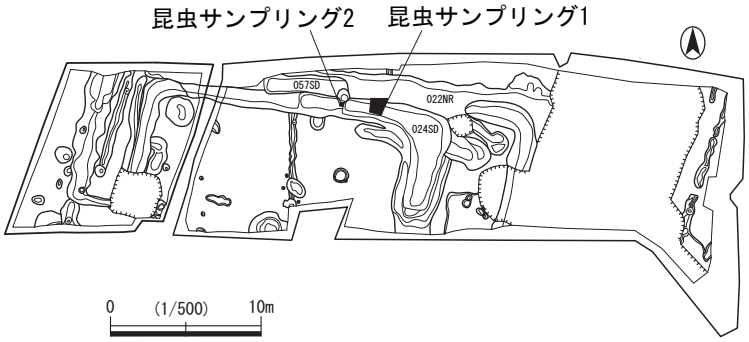
本論では、愛知県畑間・東畑遺跡でから得られた昆虫化石について、その分析結果の概要を述べる。

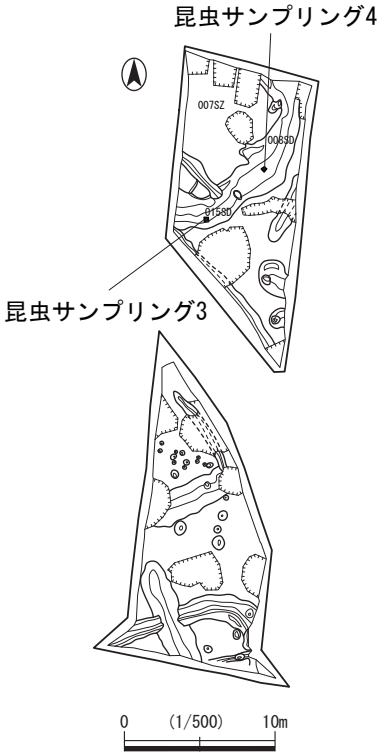
Ⅱ．試料および分析方法

畑間・東畑遺跡（愛知県東海市）は、知多半島付け根の沖積地に位置し、太田川右岸の砂堆上に立地する、弥生時代～中世を中心とした集落遺跡である。付近には古墳時代～古代の製塩遺跡として知られる松崎遺跡が存在している。

昆虫化石分析試料は、畑間遺跡で２地点（試料１・２：024SD　第 50 図）、東畑遺跡で２地点（試料３・４：008SD　第 50 図）の計４地点で採取されたものである。分析試料の湿潤重量は畑間遺跡が計 51.0kg、東畑遺跡の分析試料が約 60.0kg であった。発掘調査の成果によれば、試料の相対年代は試料１・２が鎌倉時代前半、試料３・４が古墳時代前期である。

昆虫化石の検出は、畑間・東畑遺跡の発掘調査事務所においてブロック割り法を用いて肉眼で土を細かく砕きながら昆虫化石の検出を行った後、さらに微細な化石を検出するために水洗浮遊選別法（フローテション法）にかけて行った。浮遊選別法にあたっては、径 200mm、500 μ m の篩を使用した。





第 50 図　東畑遺跡・畑間遺跡における昆虫サンプリング位置（1/500）

第８表　畑間遺跡から産出した昆虫化石

生態		和名	学名	試料１	試料２	小計	
水生	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	P2 L1		3	7
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (Walker)	E2		2	
		ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes* (Fabricius)	P1		1	
		ネクイハムシ亜科	Donaciinae	L1		1	
地表性	食糞性	コガネムシ科(食糞性)	Scarabaeidae (Laparosticti)	P1		1	25
		エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.	H2 P3 E6 T1 L5		17	
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atripennis* Waterhous	E1		1	
		マグソコガネ属	*Aphodius* sp.	L1		1	
		マグソコガネ	*Aphodius rectus* (Motschulsky)	P1 E3 L1		5	
	食屍性	エンマムシ科	Histeridae	P1 E1	P1	3	3
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae	H9 An3 P11 E11 T1 A3 L6 O1	E1	46	57
		ミズギワゴミムシ属	*Bembidion* sp.	E1		1	
		ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus* sp.	E1	E1	2	
		ヒラタゴミムシ族	Platynini	P2		2	
		ナガヒョウタンゴミムシ	*Scarites terricola pacificus* Bat	P1		1	
		ハネカクシ科	Staphylinidae	P1 E2 A2		5	
陸生	食植性	コガネムシ科(食植性)	Scarabaeidae(Pleurosticti)	P2 E5 A2 L2		11	274
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.	H3 P15 E19 T1 A8 L5		51	
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope	E2		2	
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	H9 S3 P36 E93 T13 A11 L27	H1 P2 E7	201	
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae	E1		1	
		コアオハナムグリ	*Oxycetonia jucunda* (Faldermann)	E1		1	
		ノコギリカミキリ	*Prionus insularis* Motschulsky			1	
		ハムシ科	Chrysomelidae	E2 L1		3	
		ゾウムシ科	Curculionidae	E3		3	
その他		不明甲虫	Coleoptera	M1 E4 A1 L3 O1		10	12
		水生甲虫	Aquatic beetle	P1 E1		2	
合計				364	13	377	

(検出部位凡例)

H(Head):頭部　**An**(Antenna):触角　**M**(Mandible):大腮　**S**(Scutellum):小楯板　**P**(Pronotum):前胸背板　**C**(Chrysalis):囲蛹

E(Elytron):鞘翅　**W**(Wing):上翅　**T**(Thorax):胸部　**A**(Abdomen):腹部　**L**(Leg): 腿脛節　**O**(Others):その他

化石はクリーニングを行ったあと、顕微鏡下で一点ずつ現世の標本と比較しながら同定し、重要なものに関しては写真撮影を行った。同定後の標本は、50％濃度のエチルアルコールを注入し、密閉容器に入れ保管してある。

Ⅲ．分析結果

1．昆虫化石群集

昆虫化石の同定結果を第８表および図版第51・52に示した。畑間遺跡の鎌倉時代前半の溝跡（024SD）から発見された昆虫化石は、試料１で364点、試料２で13点であり、合計で377点であった。試料２については検出点数が少なく、分析結果に有為な差が認められなかったため、本論では試料１と一括して述べる。また、東畑遺跡の分析試料（試料3･4）に関しては、ブロック割り法およびフローテーション作業を用いて試料1･2と同様に検出作業を行ったが、昆虫化石を得ることはできなかった。

畑間遺跡から出土した昆虫化石を分類群ごとにみると科レベルでは８科計75点（19.9％）、亜科レベル２亜科２点（0.5％）、属レベルは５属72点（19.1％）、種まで同定できたものは９種215点（57.5％）であった。これ以外にその他としたものは、12点（3.2％）であった。

検出別部位では鞘翅（Elytron）が最も多く、つづいて腹部（Abdomen）、腿脛節（Legs）、前胸背板（Pronotum）などが多く検出された。

生息環境および生態による分類では、食肉性ないし食植性の水生昆虫が１科１亜科２種計７点（1.9％）、食糞性ないし食屍性の地表性歩行虫が２科２属１種計28点（7.4％）、その他

の地表性歩行虫が計２科２属２種 57 点（15.1％）、陸生の食植性昆虫が３科１亜科１属４種計 274 点（72.5％）であり、その他の昆虫は計 12 点（3.2％）であった。なお、ここに記した昆虫化石の点数はいずれも節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。

特徴的な種についてみると、畑間遺跡では、出土した昆虫化石のほとんどが食植生昆虫で占められた。なかでも、野菜類や果樹などの栽培植物を食害する[(2)]昆虫であるヒメコガネ *Anomala rufocuprea*（201 点）や、サクラコガネ属 *Anomala* sp.（51 点）、同じく食植性昆虫である訪花性のコアオハナムグリ（1 点）*Oxycetonia jucunda* や、ハナムグリ亜科 Cetoniinae（1 点）、ブドウなどの葉を食害するドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（2 点）といった食植性のコガネムシ類が多産し、昆虫組成の大半を占めた。ヒメコガネは上翅（93 点）・前胸背板（36 点）・脛腿節（27 点）など、多数の部位が検出された。サクラコガネ属の多くはヒメコガネであると考えられるが、みつかったのが破片のみであり、種名の同定までには至っていない。また、同様に食植性昆虫のノコギリカミキリ *Prionus insularis*（1 点）、ハムシ科 Chrysomelidae（3 点）や、ゾウムシ科 Curculionidae（3 点）の昆虫も検出された。

地表性歩行虫については、雑食性のオサムシ科 Carabidae（46 点）・ハネカクシ科 Staphylinidae 、湿潤地表面に生息するミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.（1 点）、ヒラタゴミムシ族 Platynini（2 点）や、ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.（2 点）、平地の畑や野原などで見られるナガヒョウタンゴミムシ *Scarites terricola pacificus*（1 点）が検出された。オサムシ科に関しては、前胸背板（11 点）や上翅（12 点）など、多くの部位が確認された。だが、本分類群に所属する昆虫は破片のみで種の同定をすることが難しく、食性や生活環境も種によって様々であることから、本種の多産から古環境復元に関する詳細な情報を得ることは困難である。

その他の地表性歩行虫に関しては、コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*（1 点）、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.（17 点）、マグソコガネ属 *Aphodius* sp.（1 点）やマグソコガネ *Aphodius rectus*（5 点）など、人為度の高い環境を指標し、人や動物の糞に集まる食糞性昆虫をはじめ、動物の屍体や糞便を好む食屍性のエンマムシ科 Histeridae（3 点）が検出された。エンマコガネ属に関しては、朝日遺跡をはじめとする集落遺跡で多く認められる[(3)]コブマルエンマコガネかこの近似種に同定されると考えられる。

水生昆虫に関しては、発見された点数は少なく、池沼などの浅い止水域に生息する食植生のガムシ科 Hydrophilidae（3 点）や、水田耕作土から多く認められるセマルガムシ *Coelostoma stultum*（2 点）やヒメガムシ *Sternolophus rufipes*、湿地に生息するネクイハムシ亜科 Donaciinae（1 点）がみつかったのみであった。

Ⅳ．推定される古環境

本分析では畑間遺跡の鎌倉時代前半の溝（024SD）より、陸生の食植性昆虫を中心とした昆虫化石群を得た。このうち最も多く検出されたのは、成虫がマメ科植物や果樹の葉などを加害するヒメコガネであった。畑間遺跡およびその周辺に果樹・桑・マメ科植物などが植栽された畑作地帯が広がっていた可能性がある。ヒメコガネは、名古屋市若葉通遺跡や一宮市大毛沖遺跡・稲沢市下津北山遺跡などの愛知県内の遺跡をはじめ、静岡県川合遺跡、山梨県宮

沢中村遺跡など、日本各地の中世（鎌倉～室町時代）の遺跡で多産しており、この時代の昆虫群集の大きな特徴のひとつとなっている[(4)]。

ヒメコガネは本来、自然の山林や雑木林の林縁部を構成する小灌木などの葉を加害するにとどまっていたとされる。しかし、人々が人家周辺に果樹や畑作物を多数植栽したことにより、これらを加害するようになり、深刻な害を与えていたと指摘されている[(5)]。一宮市大毛沖遺跡や同大毛池田遺跡・同田所遺跡では、地面に穴を掘り、同じヒメコガネを駆除・投棄した中世の遺構（昆虫土坑）が見つかっており[(6)(7)(8)]、被害の甚大さが伺える。これらの成果から、中世初頭には濃尾平野周辺では土地改変が進行し、森林植生が伐採された人為度が高い空間であったことが推定されている。今回の分析結果から同様の人為的な改変が知多半島北西部に位置する本遺跡においても進んでいたことが指摘できる。

また、地表性歩行虫のエンマコガネ属やマグソコガネなども、中世の多くの遺跡で確認されており、畑作地など今日の人里周辺に普通にみられる昆虫である。これらのことから、化石産出地点およびその周辺は人里生態系が設立していたことが伺える。また、水生昆虫が殆ど検出されなかったことからも、昆虫化石を産出した畑間遺跡の鎌倉時代の溝（024SD）は、人為度の高い撹乱環境下にある溝であり、周辺に安定した止水域は存在しなかったことが伺える。

Ⅵ．まとめ

畑間・東畑遺跡の遺構中より採取した試料より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集は、畑作物を加害するヒメコガネやサクラコガネ属など、人里環境を指標する食植性の昆虫で多数が占められていた他、食糞性や食肉性の地表性歩行虫、多数の雑食性の地表性歩行虫が検出された。この結果から化石産出地点およびその周辺には、近現代の農村地帯でみられるような人間の居住域や農耕地が混在する人里空間が展開していたと推定される。

謝辞

本分析を行うにあたって、宮澤浩司氏（東海市教育委員会）および国際文化財株式会社のみなさまには試料採取・分析にあたってもご尽力頂き、大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

註

(1) 森　勇一（1999）「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集　国立歴史民俗博物館。

(2) 日本応用動物学会編（1987）『農林有害動物・昆虫名鑑』　日本植物防疫協会。

(3) 奥野絵美・森　勇一（2009）「昆虫化石からみた朝日遺跡の変遷」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第154集　朝日遺跡Ⅷ』　愛知県埋蔵文化財センター。

(4) 森　勇一（2009）「遺跡産昆虫から探る人々の暮らし」『BIOSTORY』vol.11　誠文堂新光社。

(5) 森　勇一（2000）「愛知県下津北山遺跡から産出した昆虫化石の語るもの」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第88集　下津北山遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター。

(6) 森　勇一（1996）「愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫化石群集について」『愛知県埋蔵文

化財センター調査報告書　第 66 集　大毛沖遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
(7) 森　勇一 (1997)「畑作農村地帯を特徴づける愛知県大毛池田遺跡 (中世) の食植生昆虫について」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 72 集　大毛池田遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
(8) 森　勇一 (1997) 「畑作農村地帯を特徴づける田所・西上免遺跡の地表性歩行虫」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 71 集　田所遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。

第5章　まとめ

今回の調査では前述のように東畑遺跡1・2地点と畑間遺跡3・4地点の大きく2つに分けられるが、それぞれについて、若干の考察を加えつつまとめたい。

1．東畑遺跡1・2地点について

弥生・古墳時代と中世の大きく2時期に分かれる。

弥生・古墳時代の遺構　弥生・古墳時代の遺構について方形周溝墓3基が見つかった。詳細を見れば、007SZと024SZが弥生時代中期後葉に構築され、023SZが古墳時代前期初頭に築かれている。また、007SZの周溝の一部は、古墳時代前期初頭に再掘削され利用されているようである。なお、007SZについては、平面形が不整な楕円形を呈している点、周溝が連続した形で検出されている点は、023SZと024SZが隅の切れる方形周溝墓で平面形が方形であるのと異なる。007SZが方形周溝墓ではなく、祭祀に係わる壇状遺構の可能性もある。いずれにせよ、今回の調査地は、弥生時代中期後葉と古墳時代前期初頭には墓域として利用されていたと考えてよい。また、024SZについて、周溝が掘削直後に砂で埋没し、その後土器が廃棄されている状況が確認できた。

弥生・古墳時代の遺物　弥生・古墳時代の遺物について、前期・中期の弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器・土製紡錘車・抉入柱状片刃石斧・両刃石斧・敲石・台石といった石器が出土している。このうち弥生時代前期の樫王式・水神平式土器やこれに伴うとみられる抉入柱状片刃石斧は、遺構に伴わないが、知多半島の弥生時代前期の遺跡を考える上で重要な資料である。ほか条痕紋系土器が出土しており、弥生時代前期から中期前葉にかけての遺跡が周辺に存在したことを示す。また、古墳時代後期の須恵器やその後の奈良時代の土師器・須恵器も同様に該期の遺跡の存在が推測できる。

中世の遺構　中世の遺構については、地点貝塚1基、土器集積遺構1基、溝4条と土坑3基、ピット群が見つかっている。遺構内から出土した遺物はいずれも13世紀代を示しているが、遺構もこの時期と考えられる。

まず、009SDと019SDは、1地点と2地点の間にある現在の生活道路を挟み平行する溝である。規模や形状が近似するこの2条の溝は道路の側溝として捉えることができ、その場合この現在の生活道路が中世まで遡ると推測できる。そしてこの道を中心に中世の遺構を解釈することができる。2地点の014SDは、方向を変える東端部以外ではこれに直交する溝である。宅地を画する溝と考えることができる。また、この溝に伴う犬走り状の遺構も考慮すると、この溝の北に特別な1区画あると推測できる。そこには014SDに平行する形で001SUが形成されている。その北側にはピット群があり、建物の存在がうかがわれる。しかし、それほど大きな柱ではなく、かつまとまりがなく、どのような建物か復元が難しい。建物があったにせよ、雑舎程度のものしか想定できない。一方014SD北側は、地点貝塚002SMや土坑003SKが形成される。014SDを挟んで北と南では遺構のあり方が異なる。

2地点ではほか出土遺物として12世紀後半の瓦が目立つ。瓦葺建物の存在を可能性として考えれば、2地点北の区画は候補として考えることができるだろう。しかし、その場合建物は調査区外に想定しなければならない。しかし、別の視点として、社山古窯の瓦が京都などに持

ち運ばれた瓦であることを考えれば、流通の中継地として持ち込まれた可能性も否定できない。

1地点については、019SDや道と平行する溝010SDがある。その西には廃棄土坑と考えられる020SKが形成されている。特に宅地等を示す遺構に恵まれず、2地点のように場の意味を探りにくいが、010SDや020SKの存在によって、とりあえず何かの区画があって、その中で土地利用がなされていたことが推測できる。

中世の遺物　中世の遺物には中世土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器鍋、山茶碗耳皿・小碗・小皿・碗・片口鉢、常滑小形盤・片口、瓦、管状土錘、陶丸、加工円盤が出土している。中世の遺物には包含層出土も含め全体としては、11世紀後半から15世紀前葉の遺物も含まれている。今回の調査地において、遺構は明確ではないが、中世の遺跡が展開し始めるのは11世紀後半代で、これが15世紀前葉まで続くと考えたほうがよいかもしれない。特記すべき遺物としては、瓦器椀、瓦質土器鍋、瓦があげられる。ここでの瓦器椀は、近畿地方の瓦器椀の系譜を引く土器であるが、還元焔焼成はしておらず器形も近似しない。内面黒色化している点と見込みにジグザグ状の暗文が入れられている点は近畿地方の瓦器椀を模倣していると推測される。器形は近畿地方の瓦器椀とは全く異なり、むしろ山茶碗に近いのではないかと思われるが、破片が小さく推測の域を出ない。今後の課題である。とりあえず現段階では、近畿地方の瓦器椀の影響を受けた土器として位置づけ、瓦器椀と呼んでおきたい。この類例について管見では愛知県内では見つからなかった。次に瓦質土器の鍋である。これもまず中世前期の瓦質土器としては、愛知県内では見当たらなかった。また、それが受口状口縁をしている点も全くなかった。類例をさぐれば、13世紀の京都および丹波とその周辺の日本海側に近似した瓦質土器鍋を見出すことはできる（吉岡編1997）。詳細な比較検討を行っておらず今後の検討課題であるが、現段階ではまず京都周辺の瓦質土器鍋の影響の可能性を想定しておきたい。なお、知多窯においても受口状口縁の鍋を製作しているが、口縁端部を丸く仕上げるなど若干異なる点がある。瓦については軒丸瓦や丸瓦が出土しているが、軒丸瓦については12世紀後半から12世紀末までのものがみられた。比較的古い段階の軒丸瓦が入っている点も重要であるが、その瓦笵の文様と笵傷の詳細が明らかになったことは、今後同笵関係や笵傷の進行に基づく知多窯産瓦の生産地と消費地の関係を解明する上で重要な手がかりとなってこよう。

2. 畑間遺跡3・4地点について

遺構としてはほぼ中世のみである。遺物として弥生時代から平安時代までの遺物が出土している。

中世の遺構　中世の遺構では竪穴建物跡1基、井戸1基、溝10条、土坑30基、貝層5基、土器集積遺構3基、焼土集積遺構10基、ピット3基、洪水砂層1条があった。この内Ⅱ層の上面の遺構と下面の遺構に分けることができ、下面についてはさらに4時期にわけることができた。それをⅠ～Ⅴ期として整理すると次のようになる。

Ⅰ期：竪穴建物跡011SBと溝041SDがある。024SDなどの溝による区画が成立する以前の段階である。ともに正方位に近い方向である。正方位であるということは、古代条里制などが想起され、古い特徴ではなかろうかと思われる。しかし、出土する遺物には山茶碗が含まれており、中世の遺構であることは間違いない。時期を特定する遺物に恵まれていないが、ここではとり

あえず中世前期の古い時期としておく。Ⅱ期の年代との関係で、Ⅰ期はおおよそ12世紀前半を中心とする時期になってこよう。なお、011SBは竈などがなく、日常生活していた住居とは考えにくい。裏づけとなる有力な出土遺物がないが、作業場として機能していたと考えたい。

Ⅱ期：024SD、035SD、036SDによって区画される時期である。029SK、038SE、048SK、049SK、052SK、058SKはこの時期の遺構であろう。また、遺物はないが遺構の位置から040SKや061SKもこの時期の遺構と思われる。遺構の主軸は、遺構によりばらつきがあるがN-10°～16°-Eと東にやや振っている。時期は知多窯の中野編年で2型式から6a型式、実年代で12世紀後半から13世紀中葉にかけての時期である。3・4地点中央に024SDと036SDによって区切られた区画が成立する。この区画は東西約17mを計る。東辺を画する024SDは調査区南端で収束しつつあり、西辺を画する036SDもb3・c3区の撹乱を超えて南には続かない。これは東西に溝が切れている部分があり、この区画の出入り口が開いていたことを示している。このあたりをこの区画の東西方向の中軸線と仮定すると南北の幅は約16mとなり、この区画はほぼ正方形の区画であったと推測できる。区画の内部には井戸038SEがある。この井戸は先ほど仮定した中軸線上にあり、おそらく区画のほぼ中央に位置するものと思われる。ただし、中野編年の4型式ごろ、この井戸は廃棄されて埋められているようである。また、036SDの西側には約1m離れて036SDに平行する溝035SDがある。036SDと035SDはセットになってこの区画の西辺の境界を示している遺構と考えられる。なお、柵や塀の痕跡はこの時期のこの区画では見つからず、溝のみで区切られているとしかいえない。また、緑釉陶器火舎香炉やⅠ群の瓦はこの時期に伴うものである。このような遺物は一般の集落とは考えられず、寺院跡を想定したい。しかし建物跡が全く確認できておらず、あくまで想定に留まる。

Ⅲ期：地点貝塚021SM、025SM、026SM、027SMが形成され、024SD・036SDが埋没する時期である。そのほか028SKがある。知多窯の中野編年の6a型式から7型式、藤澤編年の尾張型および東濃型第7型式から第8型式に当たる。実年代では13世紀中葉から14世紀前葉になる。024SDや036SDが埋まりきらず窪み状に残り、その中に地点貝塚が形成される。025SMと027SMは比較的早い時期に、026SMと021SMはやや遅れて形成されたと考えられる。026SMの時期は、遅くとも藤澤編年の第8型式であり13世紀末から14世紀前葉に位置づけられる。なおこの区画ではこの時期廃棄が盛んに行われおり、この点前のⅡ期とは非常に異なっている。区画が維持されなくなり、廃棄の場になった時期と捉えられよう。

Ⅳ期：023SD、034SD、050SD、057SDによって区画される時期である。この時期の遺構には土器集積遺構043SU、044SU、045SUがあり、そのほか031SK、032SK、039SK、046SK、067SKがある。遺構の主軸はこれも遺構によって若干のばらつきがあるが、N-4°～14°-Eと前時期の遺構に比べ真北よりである。この時期はⅡ期に成立した区画が拡張される時期である。すなわち東辺から東北隅を023SD、北辺を057SD、西辺を034SDによって区切られた区画が成立する。東西は約27mを計る。034SDはa3・b3区境界付近で東へ直角に屈曲するので、西辺については前時期と同様、区画への出入り口とみられる部分があるが、東辺では023SDが切れるところがない。西辺の出入り口とみられる部分を利用して中軸線を仮定して計れば南北は約17mに一応復元できる。この時期の区画は拡張して東西に長い長方形になった可能性がある。また、034SDの東側には約1.5m離れて034SDに平行する溝050SDがある。034SDと050SDはセットになって

この区画の西辺の境界を示している遺構と考えられる。なお、この時期も柵や塀の痕跡はこの区画では見つからず、溝のみで区切られているとしかいえない。

この時期について、知多窯の中野編年の8型式から10型式、藤澤編年の尾張型および東濃型第10型式から第11型式に当たると考える。Ⅲ期の遺構とⅣ期の遺構には切り合い関係がなく、またⅣ期の遺構の出土遺物にはこれより古い時期の遺物も少なからず出土しており遺構の形成時期が特定できていない。しかし、状況として次のように考えられる。すなわち、024SD・035SD・036SDの区画から023SD・034SD・050SD・057SDの区画への拡張が連続的に行われたとした場合、拡張した区画内には024SD・036SDが埋まらずに窪みとして残っており、そこで廃棄行為が行われている状況を想定しなければならない。023SDや057SDを掘削する際には024SDを埋めなければ作業が困難に思われるが、埋めた痕跡が認められない。いずれも、不自然と思われる。そこで区画の拡張を連続したものと考えず、時間を置いて行われたと考えれたい。つまり024SD・035SD・036SDが廃棄等により完全に埋没した後に区画の拡張が行われたと考えれば、こうした不自然さは解消される。

また、Ⅳ期とした遺構からは15世紀前葉から中葉の遺物は多数出土し、この時期の遺構とすることに問題はない。また、調査区全体の出土遺物は、Ⅲ期との間で、藤澤編年の第9型式の遺物が欠落している。そこで、藤沢編年の尾張型・東濃型第10～第11型式の時期、すなわち15世紀前葉から中葉の時期をⅣ期と考えた。

ただし、ここでも問題が1つある。045SUから出土した常滑の茶壺写しの壺（103）である。中野編年の12型式、16世紀後半に位置づけられ、この遺構の年代観と矛盾する。調査区全体を見ても16世紀台の遺物はほとんどない。とりあえず、Ⅱ層上面出土の焼土を天文年間の火災と関連付けて解釈しようとしているので、Ⅱ層下面の遺構は新しくとも16世紀前葉までと考えている。しかし、この焼土の由来が別の時期のものであることがわかれば、Ⅱ層上面・下面の年代観を修正して位置付けることも可能になってくるかもしれない。とりあえず、現段階ではⅣ期の年代観はこのままとして常滑の壺の問題を指摘しておくこととする。

この時期には、034SDに土器集積遺構が形成される。043SU、044SU、045SUがそれである。044SUは「隆珎」や「六親　七世父母」墨書土師器皿を含め、土師器皿を組み合わせて034SDの埋没途中の窪みに埋納したものである。この時期のまじないに係わる祭祀遺構としても重要である。また、この時期の土師器皿の一括資料としても価値がある。また、Ⅱ群の瓦はこの時期に伴うものである。それはこの時期、この瓦を葺く建物が造営されたことが推測できる。Ⅱ群の瓦の出土地点は4地点西区に偏っており、4地点の西に建物はあったと推測したい。また「寺」墨書の山茶碗もこの時期のものであり、その建物が寺院である可能性が高い。

Ⅴ期：Ⅱ層上面の遺構がこれにあたる。主に022NRやほかの洪水砂層の堆積後である。013SMと037SD、焼土集積遺構019SU-1～10がある。時期は16世紀以降であるが、遺構からこの時期を示す遺物がほとんどないため、明確に述べることは難しい。013SMは貝を多量に含んだ遺構であるので一応貝塚として扱っているが、報告でも述べたとおり、道路遺構の可能性があると考えている。焼土集積遺構は、建物の土壁が火災等で被熱したものを廃棄した遺構である。天文年間の龍雲院火災かあるいは弥勒寺寺伝の織田信長の兵火と関連付けて考えたい。この地が集落の廃棄の場であったことを示すものである。

中世の遺物　中世の遺物については、中世土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器鍋・花瓶、山茶碗の輪花碗・小皿・碗・片口鉢、緑釉陶器火舎香炉、常滑鉢・擂鉢・甕・壺・広口瓶・三筋壺・片口椀・片口・盤・羽釜、瀬戸美濃平碗・卸皿・直縁大皿・四耳壺・甕・桶、白磁碗・皿、青磁碗・皿、中国産陶器茶入、瓦、銭貨、木球、板材、折敷底板、建築部材、柄、たたり未製品など木製品がある。特記すべき点として4点あげられる。

まず、知多半島の中世の良好な一括遺物が出土したことがあげられる。今回の発掘調査で中世前期の一括資料が得られたことから、これまであまりよくわからなかった知多半島の中世の土器様相がある程度わかるようになった。それは具体的には、Ⅱ期の038SE出土遺物、024SD下層・036SD出土遺物、Ⅲ期の026SM出土遺物、Ⅳ期の034SD出土遺物、044SU出土遺物である。それに伴い興味深い点がいくつか明らかになった。それはまず土製煮炊具が特異であること。これは東畑遺跡の項でも指摘したが、受口状口縁の瓦質土器の鍋がⅡ期の一括資料に含まれる。これは愛知県内ではこの時期の遺跡では見られなかった種類であり、器種･器形である。また山茶碗のあり方について、この遺跡は知多窯という生産地に近いが、13世紀中葉以降瀬戸窯産山茶碗や東濃型山茶碗が入ってきていることが明らかとなった。また、044SU一括資料ではⅣ期の土師器皿の組み合わせを知る上でも貴重な資料である。かつ墨書土師器皿の墨書の内容はまじないの内容や意味がある程度つかめるものであり、当時の信仰を知るうえで貴重な資料である。

緑釉陶器火舎香炉は特筆すべき遺物である。この時期については型式学的検討が必要であるが、ここでは出土状況からみて藤澤編年の尾張型第3～第4型式に伴うものではないかと思われる。古代以来の猿投の緑釉陶器生産の最末に位置づけられる資料である。

瓦質土器の鍋のほか花瓶が出土している。13世紀代の瓦質土器生産は愛知県内ではこれまで知られてこなかった。鍋の器形も特異であるが､その生産も愛知県内では特異な存在である。器形とともに由来を探る必要がある。

瓦については2種類の瓦を確認した。Ⅰ群とした瓦は12世紀後半の知多窯産の瓦である。なかでも杏葉唐草文を配する軒平瓦は社山古窯や論田古窯で生産され、遺跡近くの観福寺の所蔵品にある。また同文の軒平瓦は熱田神宮でも採取されており、関係の解明が待たれる。畑間遺跡では、これと三巴文の軒丸瓦がセットになると考えられる。Ⅱ群とした瓦は14世紀中葉に位置づけられる。生産地不明である。燻し焼きにより黒色化しているが、還元焔焼成が不十分で、一部赤く発色している。連珠文軒平瓦と三巴文軒丸瓦がセットになる。瓦当文様や瓦当貼り付け技法など畿内の影響がみられるが、凹面に布目痕がないなど全て畿内的ではない。この瓦の製作地や分布圏、時期的変遷や系譜の解明が今後の課題である。

このようにみてくると、遺物については特異な点が多い。瓦質土器鍋や緑釉陶器火舎香炉、瓦など、これから検討すべき課題も多い。また、瓦や火舎香炉、花瓶、三筋壺など集落遺跡ではあまり見ない遺物が出土することから、寺院跡の可能性を遺物からも指摘できる。今回挙げた課題を追究する中で、畑間遺跡やそれを含む知多半島の中世遺跡の特徴が改めて明らかにされてくるであろう。

弥生時代から古代の遺物　弥生時代前期・中期・後期の弥生土器や石器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器、平安時代の灰釉陶器が出土している。いずれも遺構からの出土では

なく、包含層ないし後世の遺構からの出土である。付近にこうした時期の遺跡の存在が予想される。（桐山）

引用参考文献

石川松衛　1928『横須賀町誌』愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場。

立松彰　1997『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』東海市教育委員会。

立松彰ほか　1998『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会。

立松彰・永井伸明　2004『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会。

長島広・柴田直光　1999『愛知県 知多半島遺跡詳細分布調査 報告書』愛知県教育委員会。

永井伸明・宮澤浩司　2007「伊勢湾を望む海辺の遺跡―東畑遺跡等発掘調査概報―」東海市文化調査委員会編『研究報告とうかい』創刊号掲載　東海市教育委員会。

半田市立博物館　1993『知多の古瓦』

文化庁文化財保護部　1975『全国遺跡地図』23 愛知県　国土地理協会。

福岡猛志　1991『知多の歴史』松籟社。

宮澤浩司　2009「伊勢湾を望む海辺の遺跡 (2)- 平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査概要報告 -」海市文化財調査委員会編『研究報告とうかい』第 2 号掲載　東海市教育委員会。

遺物については下記の参考文献に拠った。

＜弥生土器＞

永井宏幸・村木　誠　2002「尾張地域」『弥生土器の様式と編年―東海編―』所収　木耳社。

赤塚次郎　1992「山中式土器について」『山中遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集）所収　（財）愛知県埋蔵文化財センター。

石黒立人・宮腰健司　2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』所収　同刊行会。

＜土師器＞

赤塚次郎　1990「廻間式土器」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集）所収（財）愛知県埋蔵文化財センター。

赤塚次郎　1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集）所収　（財）愛知県埋蔵文化財センター。

＜須恵器＞

齊藤孝正・後藤健一編　1995『須恵器集成図録　第 3 巻　東日本編Ⅰ』雄山閣出版。

尾野善裕　2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅―猿投窯・湖西窯編年の再構築―』（第 1 回東海土器研究会資料）所収　東海土器研究会。

＜灰釉陶器＞

齊藤孝正　2000「猿投窯出土の灰釉･緑釉陶器碗･皿類の変遷」『越州窯青磁と緑釉･灰釉陶器』（『日本の美術』第 409 号）掲載　至文堂。

＜鎌倉・室町時代土師器鍋・釜＞

吉岡康暢編　1997 『[共同研究] 中世食文化の基礎的研究』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集)　国立歴史民俗博物館。

北村和宏　1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮炊具の編年」『年報平成 7 年度』所収　(財)愛知県埋蔵文化財センター。

同　1996 「尾張の『伊勢型鍋』」『鍋と甕　そのデザイン』(第 4 回東海考古学フォーラム資料集)所収　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会。

＜山茶碗＞

藤澤良祐　1994 「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第 5 輯　三重県埋蔵文化財センター。

岡本直久　2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集(第 2 版)』 同シンポジウム実行委員会。

＜常滑＞

赤羽一郎・中野晴久　1994 「生産地における編年について」『シンポジウム　中世常滑焼を追って』資料集所収　同シンポジウム実行委員会。

中野晴久　1996 「常滑羽釜」『鍋と甕　そのデザイン』(第 4 回東海考古学フォーラム資料集)所収　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会。

同　2005 「常滑・渥美」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集(第 2 版)』所収　同シンポジウム実行委員会。

＜瀬戸美濃＞

愛知県史編さん委員会編　2007 『愛知県史』別編窯業 2(中世・近世　瀬戸系)　愛知県。

藤澤良祐　2009 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院

＜中国産磁器＞

横田賢次郎・森田　勉　1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 所収　九州歴史資料館。

森田　勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 掲載　貿易陶磁研究会。

上田秀夫　1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 掲載　貿易陶磁研究会。

山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』所収　真陽社。

＜石鍋＞

木戸雅寿　1995 「石鍋」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』所収　真陽社。

(註)畑間遺跡・東畑遺跡出土遺物について専門の研究者に実見していただいて、ご教示をいただいている。瀬戸・猿投窯産山茶碗と瀬戸美濃については藤澤良祐氏、知多窯産山茶碗と常滑については中野晴久氏、中世の土器・陶磁器全般、とりわけ緑釉陶器については尾野善裕氏、中国産陶磁器については山本信夫氏、中国産茶入については稲垣正宏氏、瓦については柴垣勇夫氏、小林康幸氏、芦田淳一氏、浜中邦弘氏、梶原義実氏、中村信幸氏にご教示をいただいた。記して謝意を表する。

第9表　東畑遺跡出土土器・陶磁器遺物観察表

1.器種・型式・その他用語については本文の遺物の記載で準拠した文献に基づく。
2.残存率は、基本的に口縁部にて計測し、12分のいくつかで記載した。ただし底部破片の場合は底部で計測した。
3.括弧付きの数値について、直径・底径では復元径を、器高では残存高を示す。
4.内面と外面の項目では調整技術を記載した。
5.胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
6.色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
7.備考のｄで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
1	1	b4	015SD	弥生土器	太頸壺	2/12	(12.2)	(19.2)	－	摩滅	摩滅	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	古井式	d106
2	1	b4	015SD	弥生土器	壺	12/12	－	(7.3)	5.0	摩滅	タテハケ	砂粒を含む	外面 10YR8/3 浅黄橙色 内面 2.5Y5/1 黄灰色	弥生時代中期？	d106
3	2	c4	015SD	土師器	長頸壺	3/12	(11.7)	22.9	4.2	上半 ナデ 下半 ユビオサエ・板ナデ	タテのヘラミガキの後、体部ヨコのヘラミガキ	砂粒をほとんど含まない	10YR8/4浅黄橙色	廻間Ⅱ式	d105
4	1	c3	008SD	土師器	広口壺	－	－	(23.4)	－	ナナメハケ	頸部　突帯の上に刺突。体部　タテのヘラミガキ	砂粒をほとんど含まない	外面 10YR7/3 にぶい黄橙色 内面 2.5Y6/6 黄灰色	廻間Ⅱ式	d091
5	2	d5	017SD	土師器	広口壺	12/12	15.9	31.0	6.8	口縁部　ヨコハケ 体部　板ナデ	タテハケ・ナナメハケ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色	廻間Ⅱ式	d109
6	2	c11	011SK	弥生土器	深鉢	1/12	(22.0)	(3.3)	－	ナデ	(摩滅)	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	樫王式	条痕紋系土器
7	2	b10	014SD	弥生土器	鉢	－	－	(1.0)	－	ヨコナデ	条痕	砂粒を含む	7.5YR8/6 浅黄橙色		内傾口縁土器
8	2	c9	014SD	弥生土器	深鉢	1/12	－	(2.5)	(6.0)	ナデ	貝殻条痕	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色		条痕紋系土器
9	2	b8	006SD 上層	弥生土器	壺	－	－	(3.9)	－	ナデ	貝殻条痕	砂粒を含む	5YR6/6 橙色	水神平式	条痕紋系土器
10	2	b8	006SD 上層	弥生土器	深鉢	－	－	(3.4)	－	ナデ	貝殻条痕	砂粒を含む	10YR5/2 灰黄褐色	水神平式	条痕紋系土器
11	2	b9	包含層	土師器	器台	－	－	(6.3)	－	摩滅	ヘラミガキ	砂粒をほとんど含まない	10YR7/4 にぶい黄橙色	廻間Ⅱ式	d056
12	2	b10	004SD	弥生土器	太頸壺	12/12	21.0	(13.9)	－	ユビオサエ・ナデ	ナデ・ヘラ描斜格子紋後2条単位の櫛描直線紋で区画	砂粒を含む	5Y1/4 灰色	古井式新段階	d107
13	2	b9	004SD	弥生土器	細頸壺	12/12	7.0	22.2	4.5	ユビオサエ・ナデ	凹線文4条・刺突紋2段・タテハケ後4本単位の櫛描直線紋12単位・ハケ後4本単位の櫛描波状紋2単位・ヨコハケ後タテハケ	砂粒を含む	7.5YR8/6 浅黄橙色	高蔵式	d094
14	2	b9	004SD	弥生土器	太頸壺	－	－	(24.7)	－	上半　ナデ・ユビオサエ 下半　ヨコハケ後ナデ消し	上半 ヘラ描斜格子紋の後16本単位の櫛描直線紋後16本単位の櫛描波状紋 下半 タテ方向のイタナデ・ヨコミガキ	砂粒を含む	7.5YR5/4 にぶい褐色	古井式	d078・d079
15	2	b9	004SD	弥生土器	太頸壺	5/12	(21.2)	(3.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR6/4 にぶい黄橙色	古井式	d90

第９表　東畑遺跡土器・陶磁器観察表

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
16	2	b10	004SD	弥生土器	細頸壺	－	－	(9.1)	－	板ナデ	肩　2条単位の櫛描直線紋の後沈線による羽状紋 体部　3条単位の櫛描斜格子紋の後櫛描直線紋により上下を区画 ヘラミガキ	砂粒を含む	2.5Y6/3にぶい黄色	凹線紋系土器(高蔵式？)	d088
17	2	b10	004SD	弥生土器	高坏	5/12	(18.5)	(4.2)	－	摩滅	摩滅	砂粒を含む	5YR6/6橙色	高蔵式	d074
18	2	b10	004SD	弥生土器	甕	11/12	23.2	(21.9)	－	上半 粗いハケメ 下半 ケズリ	タテハケの後タタキ。その後下半タテハケ	砂粒を含む	5YR6/6橙色	高蔵式	d087
19	2	b10	004SD	弥生土器	甕	9/12	(21.0)	(15.8)	－	上半 細かいハケメ 下半 ケズリ	ハケメ	砂粒を含む	5YR6/6橙色	高蔵式	d073
20	2	b9	004SD	弥生土器	甕	3/12	(20.8)	(19.2)	－	上半 ハケメ 下半 ケズリ	タテハケの後タタキ。その後下半タテハケ	砂粒を含む	10YR7/6明黄褐色	高蔵式	d092
21	2	b10	004SD	弥生土器	甕	12/12	19.5	(12.3)	－	上半 ハケメ後ナデ 下半 ケズリ	タテハケの後タタキ。その後下半タテハケ	砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	高蔵式	d087
22	2	b10	004SD	弥生土器	台付甕	12/12	－	(14.5)	7.8	ケズリ	タテハケの後タタキ。その後下半タテハケ	砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	高蔵式	d072
23	2	b9	013SU	弥生土器	細頸壺	12/12	－	(23.2)	5.8	上半 ハケメ 下半 板ナデ	簾状紋・タテハケ後2本単位が2単位1組の複合櫛描直線紋12単位・ハケ後2本単位が2単位1組の複合櫛描波状紋2単位・ヨコハケ後タテハケ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	高蔵式	d100
24	2	b9	013SU	弥生土器	甕	7/12	(20.8)	(21.4)	－	上半 粗いハケメ 下半 ケズリ	タテハケ後下半タテハケ	砂粒を含む	5YR6/6橙色	高蔵式	d101・d102
25	2	b9	013SU	弥生土器	甕	9/12	18.0	(20.5)	－	上半 ハケメ 下半 ケズリ	上半 タタキ後タテハケ。その後 下半タテハケ	砂粒を含む	7.5YR6/6にぶい橙色	高蔵式	d099
26	2	b9	001SU	瓦質土器	鍋	2/12	(26.6)	(14.1)	－	板ナデ	摩滅	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色		d022
27	2	b9	001SU	瓦器	椀	1/12	－	－	(8.0)	ヘラミガキ	ナデ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色		
28	2	c10	002SM	山茶碗	小皿	12/12	8.2	2.0	6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	知多窯中野5型式	d003
29	1	c4	包含層	土師器	鍋	2/12	(23.8)	(4.7)	－	摩滅	ヨコナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色		伊勢型鍋d034
30	1	d3	包含層	山茶碗	耳皿	12/12	11.0	3.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/1灰白色	知多窯藤澤尾張型第3型式	d025
31	2	b8	包含層	山茶碗	小碗	8/12	5.0	3.5	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	2.5Y8/1灰白色	猿投窯藤澤尾張型第3型式	d067
32	1	d3	包含層	山茶碗	小碗	5/12	(9.4)	3.3	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	知多窯中野1b型式	d029

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
33	1	d3	包含層	山茶碗	小碗	5/12	(9.6)	3.2	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色	知多窯 中野2型式	d026
34	1	c4	包含層	山茶碗	小碗	3/12	-	(2.2)	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/4 にぶい黄橙色	知多窯 藤澤尾張型第3型式	
35	1	c4	包含層	山茶碗	小碗	2/12	-	(1.7)	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	知多窯 藤澤尾張型第3型式	
36	1	c4	包含層	山茶碗	小皿	7/12	8.0	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	d039
37	2	b8	006SD	山茶碗	小皿	7/12	7.7	1.8	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄色	知多窯 中野4型式	d063
38	2	c7	包含層	山茶碗	小皿	4/12	(8.3)	1.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	10YR8/1 灰白色	知多窯 中野5型式	d064
39	2	b10	南トレンチ	山茶碗	小皿	7/12	8.2	1.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄色	知多窯 中野5型式	
40	1	c4	包含層	山茶碗	小皿	4/12	(8.7)	2.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第6型式	内面を板状工具により調整 d033
41	2	c8	006SD	山茶碗	小皿	5/12	(8.0)	1.8	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白色	知多窯 中野6a型式	d062
42	2	b8	006SD 上層	山茶碗	小皿	8/12	7.2	2.8	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色	中野3型式に併行か？	d085
43	1	b4	包含層	山茶碗	碗	1/12	(12.9)	5.0	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第9?型式	d041
44	1	b4	包含層	山茶碗	碗	4/12	(13.0)	4.3	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第10型式	d028
45	1	c4	包含層	山茶碗	碗	3/12	(11.8)	(3.7)	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	東濃型大洞東1号窯式	
46	2	c8	包含層	山茶碗	片口鉢	3/12	-	(9.7)	(15.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄色	知多窯中野5型式	内面に多量の自然釉付着
47	2	b10	包含層	常滑	小形盤	2/12	(14.0)	3.5	(13.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙色	(不明)	d001
48	2	c8	包含層	常滑	甕	1/12	(37.0)	(4.1)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙色	知多窯 中野3型式	d054
49	2	c8	006SD	常滑	甕	1/12	(36.2)	(6.8)	-	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・板ナデ後ナデ	砂粒を含む	10YR5/1 褐灰色	知多窯 中野6b型式	口縁部摩耗顕著。押印あり d068
50	1	c4	010SD	常滑	片口	2/12	(21.6)	(10.0)	-	ナデ	ナデ・ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色	知多窯 中野6a型式	d082
51	2	c9	014SD	瀬戸美濃	平碗	底部 3/12	-	(3.7)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	古瀬戸中Ⅰ期	高台内に卸目

第10表　東畑遺跡出土軒丸瓦観察表

1. 括弧付きの数値について、直径・内区直径では復元径を、長さ・厚さでは残存値を示した。
2. 凹面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3. 胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5. 備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	直径(cm)	内区直径(cm)	内区紋様	外区幅(cm)	外区高さ(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	胎土	色調	備考
52	b9	001SU	軒丸瓦	15.4	12.4	3巴	1.4	1.3	(5.1)	-	-	-	砂粒を含む	7.5YR7/6 橙色	珠文24個 d007
53	b8	包含層	軒丸瓦	(14.4)	(11.4)	3巴	3.0	1.3	(8.0)	1.5	ナデ	ヘラケズリ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白色	珠文11個残存 d009
54	b8	006SD	軒丸瓦	(14.5)	(11.3)	3巴	1.6	1.3	(3.9)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	珠文10個残存 d093
55	b9	001SU	軒丸瓦	(14.4)	(11.2)	3巴	1.7	1.2	(3.4)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	珠文4個残存 d011
56	b3	包含層	軒丸瓦	-	-	3巴	-	-	(3.1)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	珠文不明 d023

第11表　東畑遺跡出土瓦観察表

1. 括弧付きの数値について、残存値を示した。
2. 凹面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3. 胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5. 備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	胎土	色調	備考
57	b9	001SU	丸瓦	(17.7)	(12.3)	1.6	(布目)	ナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白色	狭端幅7.2cm d021
58	b9	包含層	(不明)	(7.5)	(3.4)	(4.2)	-	-	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色	鬼瓦の一部？

第12表　東畑遺跡出土土製品観察表

1. 括弧付きの数値について、残存値を示した。
2. 外面調整の項目では調整技術を記載した。
3. 胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5. 備考では、紡錘車・土錘については孔径の直径を記載した。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	外面調整	胎土	色調	備考
63	c3	015SD	紡錘車	完形	4.6	4.6	0.8	17.7	(摩滅)	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	孔径 0.7cm
64	b8	006SD	土錘	約2/3残	(4.0)	3.0	-	(46.9)	(摩滅)	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色	孔径 (1.4cm)
65	b8	包含層	土錘	完形	5.2	1.5	-	8.9	(摩滅)	砂粒を含まない	2.5Y5/6 明赤褐色	孔径 0.5cm
66	b8	006SD	土錘	完形	4.3	1.1	-	5.4	(摩滅)	砂粒を含まない	5YR7/6 橙色	孔径 0.2cm
67	b9	014SD	土錘	完形	3.6	0.8	-	1.6	(摩滅)	砂粒を含まない	10YR8/4 浅黄橙色	孔径 0.3cm
68	c10	002SM	土錘	完形	3.4	0.9	-	2.5	(摩滅)	砂粒を含まない	5YR4/3 にぶい赤褐色	孔径 0.3cm
69	b8	006SD	陶丸	完形	2.5	2.1	2.2	12.2	ナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄色	
70	b8	006SD上層	加工円盤	完形	4.0	-	1.7	23.1	打欠	砂粒を含む	2.5Y6/8 灰白色	山茶碗の転用

第13表　東畑遺跡出土石器観察表

1. 括弧付きの数値について、残存値を示した。
2. 石材鑑定は堀木真美子氏による。
3. 備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
59	b9	004SD	抉入柱状片刃石斧	基部片	(6.2)	(3.3)	(4.6)	(146.3)	塩基性岩	
60	c3	包含層	両刃石斧	一部欠	10.4	(3.5)	1.7	(102.9)	ホルンフェルス	
61	b8	包含層	敲石	完形	8.3	3.4	2.8	(113.6)	砂岩	
62	b9	006SD	台石	完形	25.0	18.0	6.4	4000.0	砂岩	

第14表　畑間遺跡出土土器・陶磁器遺物観察表

1. 器種・型式・その他用語については本文の遺物の記載で準拠した文献に基づく。
2. 残存率は、基本的に口縁部にて計測し、12分のいくつかで記載した。ただし底部破片の場合は底部で計測した。
3. 括弧付きの数値について、直径・底径では復元径を、器高では残存高を示す。
4. 内面と外面の項目では調整技術を記載した。
5. 胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
6. 色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
7. 備考のｄで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
1	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	3/12	(9.0)	2.5	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/6 明黄褐色	知多窯 中野2型式	
2	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	7/12	8.4	2.5	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N7/0 灰白色	知多窯 中野3型式	d163
3	4	d3	038SE 上層	山茶碗	小皿	12/12	8.4	2.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	歪みあり d047
4	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	2/12	(8.6)	2.4	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	
5	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	10/12	7.8	2.3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	d163
6	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	4/12	7.4	2.3	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	7.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	d163
7	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	10/12	7.7	2.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	10YR8/2 灰白色	知多窯 中野3型式	d082
8	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	6/12	8.1	2.1	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	d163
9	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	12/12	8.5	2.0	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	d064
10	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	2/12	(8.0)	1.8	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野5型式	
11	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	3/12	(9.0)	1.5	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯 中野5型式	
12	4	d3	038SE	山茶碗	小皿	8/12	8.7	1.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	d088
13	4	d3	038SE	山茶碗	碗	4/12	(15.7)	5.2	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
14	4	d3	038SE	山茶碗	碗	4/12	15.2	5.5	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり d066
15	4	d3	038SE 上層	山茶碗	碗	6/12	15.6	5.0	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野4型式	籾殻痕あり d048
16	4	d3	038SE	山茶碗	碗	2/12	(15.0)	4.6	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	籾殻痕あり
17	4	d3	038SE	山茶碗	碗	5/12	-	(4.5)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5GY8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
18	4	d3	038SE	山茶碗	碗	4/12	-	(3.0)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
19	4	d3	038SE	山茶碗	碗	2/12	-	(2.9)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
20	4	d3	038SE	山茶碗	碗	1/12	-	(3.4)	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
21	4	d3	038SE	山茶碗	碗	3/12	-	(1.6)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野2型式	籾殻痕あり
22	4	d3	038SE	山茶碗	碗	3/12	-	(2.0)	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯 中野2型式	籾殻痕あり
23	4	d3	038SE	山茶碗	輪花碗	3/12	8.8	2.9	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 藤澤尾張型第4型式	d085
24	3	f3	038SE・024SD下層	緑釉陶器	火舎香炉	3/12	(8.1)	(2.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/2 にぶい黄橙色		d084
25	4	d3	038SE	常滑	壺	1/12	(9.0)	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯 中野3型式	三筋壺の可能性あり
26	4	d3	038SE	常滑	擂鉢	3/12	(22.0)	6.7	(12.3)	ロクロナデ・擂目	ロクロナデ・ナデ消し	砂粒を含む	2.5Y3/1 黒褐色	知多窯 中野7型式	
27	3	g2	023SD 下層	瀬戸美濃	卸皿	1/12	-	(1.2)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色		
28	4	e1・g2	013SM・023SD 下層	常滑	三筋壺	6/12	-	(8.5)	(4.0)	ヘラケズリ後ヨコナデ	ナデ・沈線	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野2型式	d159他
29	3	f3	024SD 下層	土師器	非ロクロ調整皿	2/12	(9.8)	(1.5)	(7.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/3 浅黄色		
30	3	f3	024SD 下層	土師器	非ロクロ調整皿	3/12	(9.0)	1.4	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含まない	10YR8/3 浅黄橙色		
31	3	f2	024SD 下層	土師器	非ロクロ調整皿	12/12	7.7	1.5	(5.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色		
32	3	f3	024SD 下層	土師器	非ロクロ調整皿	4/12	(8.0)	1.3	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含まない	5Y7/2 灰白色		

第 14 表　畑間遺跡出土土器・陶磁器観察表

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
33	3	f3	024SD 下層	山茶碗	小皿	12/12	7.8	2.3	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/6 明黄褐色	知多窯 中野4型式	
34	3	f3	024SD 下層	山茶碗	小皿	3/12	(8.2)	1.7	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野5型式	
35	3	f3	024SD 下層	山茶碗	小皿	12/12	7.8	1.8	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N6/0 灰白色	知多窯 中野6a型式	内面調整に板状工具を使用か
36	3	g3	024SD 下層	山茶碗	小皿	6/12	8.2	2.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	
37	3	f2	024SD 下層	山茶碗	小皿	9/12	(7.6)	(1.7)	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野6a型式	
38	3	f2	024SD 下層	山茶碗	小皿	12/12	8.0	1.6	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野6a型式	墨書か？
39	4	e2	024SD 上層	山茶碗	小皿	11/12	7.8	1.4	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/1 明褐灰色	知多窯 中野6a型式	歪みあり d101
40	4	e2	024SD 下半	山茶碗	小皿	2/12	(8.0)	1.3	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	生焼けにより土師質である
41	3	f3	024SD 下層	山茶碗	小皿	12/12	7.6	1.6	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野6a型式	
42	4	e1	024SD 上層	山茶碗	小皿	8/12	9.0	2.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第6型式	d076
43	4	e1	024SD 上層	山茶碗	碗	2/12	(16.0)	4.8	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y5/1 黄灰色	知多窯 中野4型式	d129
44	3	f3	024SD 上層	山茶碗	碗	5/12	(16.0)	(4.1)	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5YR8/1 灰白色	知多窯 中野4型式	籾殻痕あり
45	3	f3	024SD 下層	山茶碗	碗	6/12	(13.8)	(4.5)	(6.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯 中野4型式	内外面煤付着。籾殻痕あり
46	4	e2	024SD 上層	山茶碗	碗	4/12	(13.0)	5.8	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	籾殻痕あり。d150
47	4	d2	024SD 上層	山茶碗	碗	5/12	(14.6)	5.4	(5.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	d095
48	3	f3	024SD 下層	山茶碗	碗	7/12	12.6	5.4	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	籾殻痕あり
49	3	f3	024SD 下層	山茶碗	碗	12/12	12.6	5.2	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	籾殻痕あり
50	3	f3	024SD 下層	山茶碗	碗	8/12	12.7	5.2	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	内面に使用痕なし。籾殻痕あり
51	3	f3	024SD 下層	山茶碗	碗	12/12	12.6	5.5	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	籾殻痕あり
52	3	f2	024SD 上層	山茶碗	碗	8/12	12.4	4.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y8/2 灰白色	東濃型 大洞東1号窯式	籾殻痕あり
53	3	f2	024SD 下層	土師器	羽釜	1/12	(19.2)	7.2	－	板ナデ	ハケメ	砂粒を含む	10YR5/2 灰黄褐色		
54	3	f3	024SD 下層	青磁	碗	底部 2/12	－	(2.5)	(5.0)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	砂粒を含む	N7/0 灰白色	竜泉窯系 青磁碗Ⅱc類	
55	3	f3	024SD 下層	瀬戸美濃	四耳壺	1/12	－	7.4	(10.2)	ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	古瀬戸前Ⅰb期	
56	4	f1	024SD	常滑	鉢	1/12	(28.6)	9.8	(16.4)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ナデ	わずかに砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野6a型式	内面摩滅 d149
57	4	c2	024SD 下半	常滑	盤	2/12	(14.8)	6.6	(9.2)	ヨコナデ	板ナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯 中野5～6a型式	
58	3	f2	024SD 下層	常滑	羽釜	－	－	(4.4)	－	板ナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	5YR6/6 橙色	知多窯 中野3型式	被熱
59	4	f1	024SD	常滑	広口瓶	1/12	(19.2)	(8.8)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄色	知多窯 中野2型式	d144

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
60	3	f3	024SD	常滑	壺	1/12	(18.4)	(10.6)	-	指オサエ後ナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野6a型式	d009
61	3	f3	024SD 下層	常滑	甕	3/12	(40.0)	(13.2)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR6/6 明黄褐色	知多窯 中野5型式	
62	4	e2	024SD	常滑	甕	2/12	(41.0)	(8.4)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯 中野6a型式	d133
63	4	d1	057SD	土師器	ロクロ調整皿	3/12	-	(2.0)	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	10YR8/2 灰白色		d073
64	4	d1	057SD	土師器	ロクロ調整皿	12/12	7.8	1.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色		黒斑あり d079
65	4	e1	057SD	山茶碗	小皿	12/12	7.8	1.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	N7/0 灰白色	知多窯 中野6a型式	d099
66	4	d1	057SD	山茶碗	碗	3/12	(15.8)	5.4	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y5/1 黄灰色	知多窯 中野4型式	籾殻痕あり d118
67	4	b1・c1・d1・e1	057SD	山茶碗	碗	1/12	(14.2)	(3.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	
68	4	b1・c1・d1・e1	057SD	山茶碗	碗	底部 1/12	-	(1.5)	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野4型式	籾殻痕なし
69	4	b1・c1・d1・e1	057SD	山茶碗	碗	底部 2/12	-	(2.1)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
70	4	b1・c1・d1・e1	057SD	山茶碗	碗	底部 3/12	-	(2.9)	(5.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	内面煤付着
71	4	e1	057SD	青磁	皿	底部 12/12	-	(1.0)	(4.8)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	砂粒を含まない	7.5Y8/1 灰白色	同安窯系 青磁皿Ⅰb類	d142
72	4	d1	057SD	瀬戸 美濃	直縁大皿	2/12	(31.2)	(3.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/2 灰黄色	古瀬戸後Ⅰ期	d071・d096
73	4	e1	024SD 上層	常滑	甕	1/12	(36.6)	(10.0)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	5YR6/3 にぶい橙色	知多窯 中野10型式	d080
74	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.5	2.4	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		墨痕あり d107
75	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.5	2.5	8.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色		墨書あり d122
76	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.8	2.4	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/6 橙色		墨痕あり d125
77	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.3	2.3	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙色		墨書あり d127
78	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.4	2.3	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/1 浅黄橙色		墨書あり d132上
79	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	4/12	13.7	2.3	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙色		墨書あり d120上
80	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.5	2.3	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙色		墨書あり d132中
81	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	10/12	12.4	2.1	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙色		墨痕あり d104
82	3	g2	026SM	山茶碗	碗	底部 11/12	-	(2.3)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野4型式	墨書あり
83	4	e1	013SM	山茶碗	碗	底部 12/12	-	(1.3)	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第10型式	墨書あり
84	3	f3	024SD 下層	山茶碗	小皿	12/12	8.2	1.5	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	瀬戸窯 藤澤尾張型第7型式	墨書か?
85	4	e1	057SD	山茶碗	小皿	12/12	7.4	2.1	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	墨書あり d130
86	4	d1	057SD	土師器	ロクロ調整皿	底部 10/12	-	(0.6)	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/2 灰白色		墨痕あり d073
87	4	b2	044SU	土師器	非ロクロ調整皿	6/12	(8.0)	(1.6)	(4.2)	ナデ	指オサエ	砂粒を量含む	10YR8/3 浅黄橙色		
88	4	b2	044SU	土師器	非ロクロ調整皿	2/12	(7.6)	(1.2)	(3.8)	ナデ	指オサエ	砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙色		
89	4	b2	044SU	土師器	非ロクロ調整皿	3/12	(7.0)	(1.0)	(4.0)	ナデ	指オサエ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		
90	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	4/12	(7.1)	(1.3)	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙色		
91	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	底部 9/12	-	(0.7)	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙色		
92	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	13.5	2.3	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		d112

第 14 表　畑間遺跡出土土器・陶磁器観察表

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
93	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	8/12	13.6	2.3	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		d132下
94	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	11/12	13.8	2.3	(7.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		d124下
95	4	b3	045SU 上面	土師器	ロクロ調整皿	9/12	12.8	2.1	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙色		d116
96	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	11/12	12.1	2.9	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙色		d123
97	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	9/12	11.4	2.2	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙色		d120上
98	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	11.8	1.8	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙色		d126
99	4	b3	045SU 上面	土師器	ロクロ調整皿	10/12	14.0	2.0	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色		d116
100	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	12.0	2.3	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙色		d120下
101	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	12.6	2.2	6.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色		d131
102	4	b2	044SU	土師器	ロクロ調整皿	12/12	12.1	2.5	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5YR8/4 淡橙色		d126下
103	4	b3	045SU	常滑	壺	3/12	(16.6)	(9.5)	－	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・ナデ	砂粒を含む	2.5Y4/1 黄灰色	知多窯中野12型式	茶壺写し d117
104	4	b3	045SU	常滑	壺	3/12	(7.2)	(5.2)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む	10YR5/1 褐灰色	知多窯中野10型式	玉縁口縁の壺 d114
105	4	b3	045SU	瀬戸美濃	平碗	2/12	(16.0)	5.9	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白色	古瀬戸後Ⅳ期古段階	
106	4	a3・b3	039SK 045SU	瀬戸美濃	卸皿	3/12	(15.6)	(2.5)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色	古瀬戸後Ⅳ期古段階	
107	4	b3	045SU	瀬戸美濃	甕	2/12	(14.4)	(5.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	2.5Y7/1 灰白色	古瀬戸後Ⅲまたは Ⅳ期	d115
108	4	b3	045SU	瀬戸美濃	桶	1/12	(35.4)	(13.3)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色	古瀬戸後Ⅳ期古段階	
109	4	b2	034SD 下半	常滑	鉢	1/12	(37.4)	6.4	－	ナデ	ナデ	砂粒を含む	7.5YR6/3 にぶい褐色	知多窯中野10～11型式	
110	4	b1	034SD 下半	土師器	非ロクロ調整皿	6/12	7.7	1.5	－	ナデ	指オサエ	砂粒を含まない	7.5YR7/4 にぶい橙色		
111	4	b1	034SD	瓦質土器	花瓶	－	－	(6.1)	－	ロクロナデ	タテミガキ	砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙色		d148
112	4	b3	034SD	青磁	碗	底部 12/12	－	(3.0)	(6.2)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	砂を含まない	7.5Y8/1 灰白色	竜泉窯系青磁碗上田分類Ⅱ類	d128
113	4	c1	036SD	土師器	ロクロ調整皿	1/12	(8.0)	1.2	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	10YR8/3 浅黄橙色		
114	4	c2	036SD	山茶碗	小皿	11/12	8.1	2.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を多く含む	10Y8/1 灰白色	知多窯中野5型式	底部外面に板状圧痕 d137
115	4	c1	036SD	山茶碗	小皿	12/12	7.5	1.6	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野5型式	d147
116	4	c1	036SD	山茶碗	小皿	12/12	7.9	1.7	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を多く含む	N8/0 灰白色	知多窯中野6a型式	d113
117	4	c1	036SD	山茶碗	碗	4/12	(15.6)	5.3	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	知多窯中野5型式	内外面および断面にも煤付着 d102
118	4	c1	036SD	山茶碗	碗	2/12	(15.2)	4.2	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	知多窯中野5型式	籾殻痕あり
119	4	b2	036SD	山茶碗	碗	3/12	(14.6)	5.2	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y8/1 灰白色	知多窯中野6a型式	籾殻痕あり d151
120	4	b3	034SD	山茶碗	碗	7/12	12.2	3.1	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	東濃型脇ヶ島3号窯式	内面平滑で赤色顔料付着 d053
121	4	c2	036SD	瓦質土器	鍋	1/8	28.2	(8.4)	－	ヨコハケ	タテハケ	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色		d100

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
122	4	c1	036SD	瓦質土器	鍋	2/12	25.0	(7.4)	-	ヨコハケ後一部ナデ	摩滅のため不明	砂粒を含む	2.5Y7/3 浅黄色		d091
123	4	b2	036SD	常滑	片口	7/12	(28.8)	(9.1)	-	指オサエ後ヨコナデ	ヨコナデ・板ナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野6a型式	d152
124	3	h2	022NR	山茶碗	小皿	12/12	8.2	2.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野4型式	
125	4	e2	022NR	山茶碗	小皿	8.8	1.8	5.6	5/12	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を、礫を含む	10YR8/1 灰白色	知多窯中野5型式	d055
126	3	h2	022NR	山茶碗	小皿	7/12	7.6	1.5	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5Y8/1 灰白色	知多窯中野6a型式	
127	3	f2	022NR 下層	山茶碗	小皿	6/12	8.4	2.1	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	瀬戸窯藤澤尾張型第7型式	
128	3	f2	022NR 下層	山茶碗	碗	3/12	(15.8)	4.7	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯中野5型式	籾殻痕あり
129	3	f2	022NR 下層	山茶碗	碗	7/12	15.6	5.2	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野6a型式	
130	3	h2	022NR	山茶碗	碗	4/12	-	(2.5)	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野2型式	内面見込黒色化転用硯か？
131	3	f2	022NR 下層	山茶碗	碗	2/12	-	(2.9)	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/1 明褐灰色	知多窯中野6a型式	
132	3	f2	022NR 下層	山茶碗	碗	1/12	(14.0)	(3.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	瀬戸窯藤澤尾張型第7型式	内外面煤付着
133	3	f2	022NR 下層	山茶碗	碗	2/12	-	(2.3)	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	瀬戸窯藤澤尾張型第7型式	籾殻痕あり
134	3	f1	022NR 下層	山茶碗	碗	2/12	(14.0)	4.1	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/1 灰白色	東濃型大洞東1号窯式	籾殻痕あり
135	3	h2	022NR	山茶碗	片口鉢	2/12	-	(3.0)	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯中野1b型式	内面摩滅
136	3	f2	022NR 下層	常滑	片口椀	2/12	(14.4)	8.3	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR5/4 にぶい褐色	知多窯中野5型式	
137	3	g1	022NR 下層	常滑	甕	-	-	(6.5)	-	ナデ	ナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯中野6b型式	押印あり
138	3	f1	022NR 下層	中国産陶器	茶入	-	-	(2.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y7/2 灰白色		
139	4	e1	013SM	山茶碗	小皿	3/12	(9.7)	2.1	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯中野5型式	
140	4	e1	013SM	山茶碗	小皿	2/12	(8.3)	1.7	(5.1)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯中野5型式	
141	4	e1	013SM	山茶碗	小皿	3/12	(8.2)	1.7	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯中野6a型式	
142	4	e1	013SM	山茶碗	碗	1/12	(13.8)	4.5	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰白色	知多窯中野4型式	籾殻痕あり
143	4	e1	013SM	山茶碗	碗	3/12	(15.2)	5.2	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野5型式	籾殻痕あり
144	4	e1	013SM	山茶碗	碗	1/12	(14.0)	4.9	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野6a型式	籾殻痕あり
145	4	e1	013SM	山茶碗	碗	1/12	(14.6)	5.1	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯中野6a型式	籾殻痕あり
146	4	e1	013SM	山茶碗	碗	3/12	(13.0)	3.9	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	5Y7/1 灰白色	東濃型大洞東1号窯式	籾殻痕あり
147	3	g2	026SM	土師器	鍋	3/12	(29.8)	(10.2)	-	ユビオサエ	ハケメ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色		外面に煤付着
148	3	g2	026SM 貝層	土師器	羽釜	2/12	(24.0)	(4.5)	-	指オサエ・板ナデ	ヨコナデ・ヨコハケ	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色		外面に煤付着
149	3	f2	026SM	土師器	非ロクロ調整皿	1/12	(8.8)	1.5	(5.8)	摩滅のため不明	摩滅のため不明	砂粒を含む	10YR8/2 灰白色		
150	3	g2	026SM 貝層	山茶碗	碗	2/12	(14.0)	(5.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	瀬戸窯藤澤尾張型第6または第7型式	

第 14 表　畑間遺跡出土土器・陶磁器観察表

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
151	3	f2	026SM	白磁	碗か皿	-	-	(2.0)	-	ロクロナデ	ロクロ・ヘラケズリ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	白磁碗Ⅳ またはⅤ またはⅥ、あるいは白磁皿Ⅱ類	
152	3	f3	027SM	山茶碗	碗	1/12	-	(2.7)	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野2型式	内面摩滅・黒色化
153	3	g2	029SK	山茶碗	碗	6/12	14.0	5.1	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野6a型式	籾殻痕あり
154	3	g2	029SK	山茶碗	碗	1/12	(16.2)	5.1	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり
155	3	g2	029SK	山茶碗	碗	6/12	-	(4.5)	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野2型式	籾殻痕なし
156	3	g2	029SK	山茶碗	片口鉢	2/12	(33.0)	11.2	(13.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	砂粒を少量含む	5Y7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	内面摩滅
157	4	d3・e3	047SK	山茶碗	小皿	10/12	7.8	2.2	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	
158	4	d3・e3	047SK	山茶碗	小皿	3/12	(8.0)	(2.2)	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	知多窯 中野3型式	
159	4	a3	046SK	土師器	非ロクロ調整皿	2/12	(10.6)	2.3	(3.6)	ナデ	指オサエ	砂粒を含まない	7.5YR8/6 浅黄橙色		
160	4	a3	046SK	山茶碗	小皿	6/12	8.3	2.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野3型式	d094
161	4	a3	046SK	瀬戸美濃	卸皿	1/12	(11.0)	1.8	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	10YR6/2 灰黄褐色	古瀬戸後Ⅳ期古段階	
162	4	e2・e3	048SK	山茶碗	碗	2/12	(15.2)	(4.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙色	知多窯 中野4型式	2次焼成により赤変
163	4	c2	052SK	山茶碗	碗	1/12	(14.6)	(3.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	知多窯 中野4型式	
164	4	b1・c1・d1・e1	067SK	山茶碗	碗	1/12	(14.8)	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	2.5Y8/1 灰白色	東濃型明和1号窯式～大畑大洞4号型式	
165	4	c1	包含層	瓦質土器	鍋	1/8	30.0	(8.7)	-	ヨコハケ後上半ナデ	摩滅のため不明	砂粒を含む	2.5Y7/3 浅黄色		
166	4	a3	包含層	土師器	羽釜	1/12	(23.6)	(4.0)	-	ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコハケ	砂粒を含む	10YR8/3 浅黄橙色		
167	4	e2	包含層	山茶碗	小皿	10/12	8.1	2.1	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野3型式	d110
168	4	d3	包含層	山茶碗	小皿	8/12	8.0	2.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野3型式	d052
169	4	e3	包含層	山茶碗	小皿	10/12	7.5	2.3	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	N8/0 灰白色	知多窯 中野3型式	d110
170	4	e3	包含層	山茶碗	小皿	11/12	8.3	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/2 灰黄色	知多窯 中野3型式	d051
171	4	e2	包含層	山茶碗	小皿	8/12	9.4	1.7	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	知多窯 中野5型式	d049
172	4	e3	包含層	山茶碗	碗	3/12	(15.2)	5.4	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y5/1 黄灰色	知多窯 中野3型式	籾殻痕あり d138
173	4	d3	包含層	山茶碗	碗	12/12	14.5	4.9	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/1 灰白色	知多窯 中野5型式	籾殻痕あり d030
174	3	e2～f2	西トレンチ	山茶碗	碗	3/12	(13.8)	5.6	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	N8/0 灰白色	東濃型明和1号窯式	
175	4	e3	包含層	山茶碗	碗	-	-	(1.6)	6.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	知多窯 中野3型式	内面・断面に黒色化。転用硯の可能性あり。d119
176	4	d1	包含層	山茶碗	片口鉢	底部 4/12	-	(6.6)	(14.2)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	知多窯 中野1a型式	内面摩滅 籾殻痕なし d158
177	4	e3	包含層	白磁	碗	-	-	(2.8)	(6.2)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	白磁碗Ⅴ またはⅥ類	内面に櫛描文 d111
178	3	g1	包含層	弥生土器	壺	2/12	(15.2)	(6.4)	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	砂粒を含む	7.5YR7/6 橙色	遠賀川式	
179	4	e2	024SD 底	弥生土器	壺	底部 12/12	-	(4.9)	(8.6)	ナデの後ヘラミガキ	ハケメの後ヘラミガキ	砂粒を含む	10YR7/6 明黄褐色	弥生時代前期～中期	
180	3	h2	023SD 下層	弥生土器	深鉢	-	-	(5.3)	-	ナデ	貝殻条痕	砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄色	樫王式	条痕紋系土器
181	3		表採	弥生土器	壺	2/12	(20.0)	(7.6)	-	ハケメの後ナデ	ハケメの後ナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	高蔵式	凹線紋系土器

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	産地材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
182	4	e2	022NR	弥生土器	壺	-	(6.0)	8.6	底部12/12	ナデ	タテハケ	砂粒を含む	10YR6/1褐灰色	弥生時代前期～中期	
183	4	b3	043SU	弥生土器	広口加飾壺	1/12	(17.0)	(1.9)	-	ナデ	ナデ	砂粒を含まない	7.5YR8/4浅黄橙色	山中式	
184	3	f2	026SM	弥生土器	台付壺	4/12	-	(3.9)	(9.6)	ナデ	ヘラミガキ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	山中式	
185	4	b2	036SD	弥生土器	壺	-	-	(5.9)	-	板ナデ	ナデ	砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	山中式	
186	4	d3	038SE	須恵器	坏	4/12	(14.0)	(2.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含まない	10YR8/4浅黄橙色	黒笹14号窯式？	
187	3	f2	包含層	灰釉陶器	椀	3/12	-	(2.2)	(7.8)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	黒笹90号窯式	

第15表　畑間遺跡出土軒丸瓦観察表

1.括弧付きの数値について、直径・内区直径では復元径を、長さ・厚さでは残存値を示した。
2.凹面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3.胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4.色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5.備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	直径(cm)	内区直径(cm)	内区紋様	外区幅(cm)	外区高さ(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	胎土	色調	備考
188	f3	024SD下層	軒丸瓦	(15.2)	(11.8)	3巴	1.7	1.0	(3.2)	-	-	-	砂粒を含む	N7/0 灰白色	珠文4個残存 d013
189	c1	包含層	軒丸瓦	-	-	3巴	-	-	(1.0)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄色	珠文5個残存
190	e1	057SD	軒丸瓦	(14.8)	(12.6)	(不明)	1.1	1.0	(3.1)	-	-	-	砂粒を含む	N8/0 灰白色	珠文2個残存 d083
191	e1	022NR	軒丸瓦	-	-	3巴	-	-	(1.6)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白色	珠文2個残存 d044
195	a3	031SK	軒丸瓦	10.3	7.8	3巴	1.4	1.2	20.4	1.1	ナデ	ヘラケズリの後ナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/3 淡黄色	玉縁なし 珠文14個 d034

第16表　畑間遺跡出土軒平瓦観察表

1.括弧付きの数値について、残存値を示した。
2.凹面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3.胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4.色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5.備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	瓦当紋様	瓦当面厚さ(cm)	内区厚さ(cm)	上外区厚さ(cm)	下外区厚さ(cm)	外区高さ(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	胎土	色調	備考
192	e2	包含層	軒平瓦	杏葉唐草文	7.5	4.0	2.0	1.5	0.5	(5.6)	-	(布目)	-	砂粒を含む	10YR5/1 褐灰色	d023
193	c1	036SD	軒平瓦	杏葉唐草文	7.3	3.9	2.0	1.4	0.5	(6.4)	2.8	(布目)	ナデ	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色	d161
194	f2	包含層	軒平瓦	杏葉唐草文	(6.9)	3.9	(1.9)	1.1	0.5	(5.2)	-	(布目)	-	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰色	
196	a3	031SK	軒平瓦	連珠文	3.6	1.8	1.1	0.7	0.6	(9.1)	1.6	ナデ	ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙色	瓦当幅21.1cm 珠文15個 d026・d031
197	h2	022NR	軒平瓦	連珠文	3.7	1.9	1.1	0.7	0.6	(5.1)	1.8	(摩滅)	ヘラケズリ	砂粒を含む	7.5YR7/3 にぶい橙色	珠文9個残存
198	a3	031SK	軒平瓦	連珠文	3.7	1.9	0.9	0.9	0.7	(6.7)	1.4	ナデ	ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙色	珠文7個残存 d033
199	a3	包含層	軒平瓦	連珠文	(3.6)	1.8	0.9	0.9	0.5	(2.2)	-	-	-	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白色	珠文6個残存 d019

第17表　畑間遺跡出土瓦観察表

1.括弧付きの数値について、残存値を示した。
2.凹面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3.胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4.色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5.備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	胎土	色調	備考
200	h2	022NR	平瓦?	(6.0)	(6.1)	2.5	ナデ	ナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰色	
201	b3	034SD	面戸瓦	5.8	8.6	1.5	ナデ	ヘラケズリの後ナデ	砂粒を含む	10YR8/2 灰白色	d062

第18表　畑間遺跡出土土製品観察表

1.括弧付きの数値について、残存値を示した。
2.外面調整の項目では調整技術を記載した。
3.胎土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4.色調は、断面の色調を『新版標準土色帖』(例言参照)に基づき記載した。
5.備考では、土製玉・土錘については孔径の直径を記載した。また、dで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリッド	層位・遺構	種類	残存状況	長さ	幅	厚さ	重さ	外面調整	胎土	色調	備考
202	a2	包含層	土製玉	一部欠	4	2.9	－	52.5	ナデ	砂粒を含む	5YR5/6 明赤褐色	孔径0.7cm d017
203	f1	022NR上層	土錘	完形	7.2	3.4	－	(81.0)	(摩滅)	砂粒を含む	5YR7/6 橙色	孔径1.3cm
204	e3	包含層	土錘	完形	5.3	1.6	－	(10.5)	ナデ	砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙色	孔径0.5cm d037
205	f2	包含層	土錘	完形	4.6	1.0	－	(4.2)	ナデ	砂粒を含まない	2.5Y8/3 淡黄色	孔径0.4cm
206	d2	包含層	陶丸	完形	2.0	2.0	2.0	8.3	ナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	知多窯
207	e1	057SD	陶丸	完形	2.2	2.2	2.0	11.6	ナデ	砂粒を含まない	5Y7/1 灰白色	瀬戸窯 d086
208	b3	包含層	加工円盤	完形	2.6	-	1.1	8.2	打欠	砂粒を含む	5Y7/1 灰白色	常滑甕の転用
209		045SU	加工円盤	完形	3.0	-	1.0	8.1	打欠	砂粒を含む	5Y8/1 灰白色	山茶碗の転用

第19表　畑間遺跡出土石器・石製品観察表

1.括弧付きの数値について、残存値を示した。
2.石材鑑定は堀木真美子氏による。
3.備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

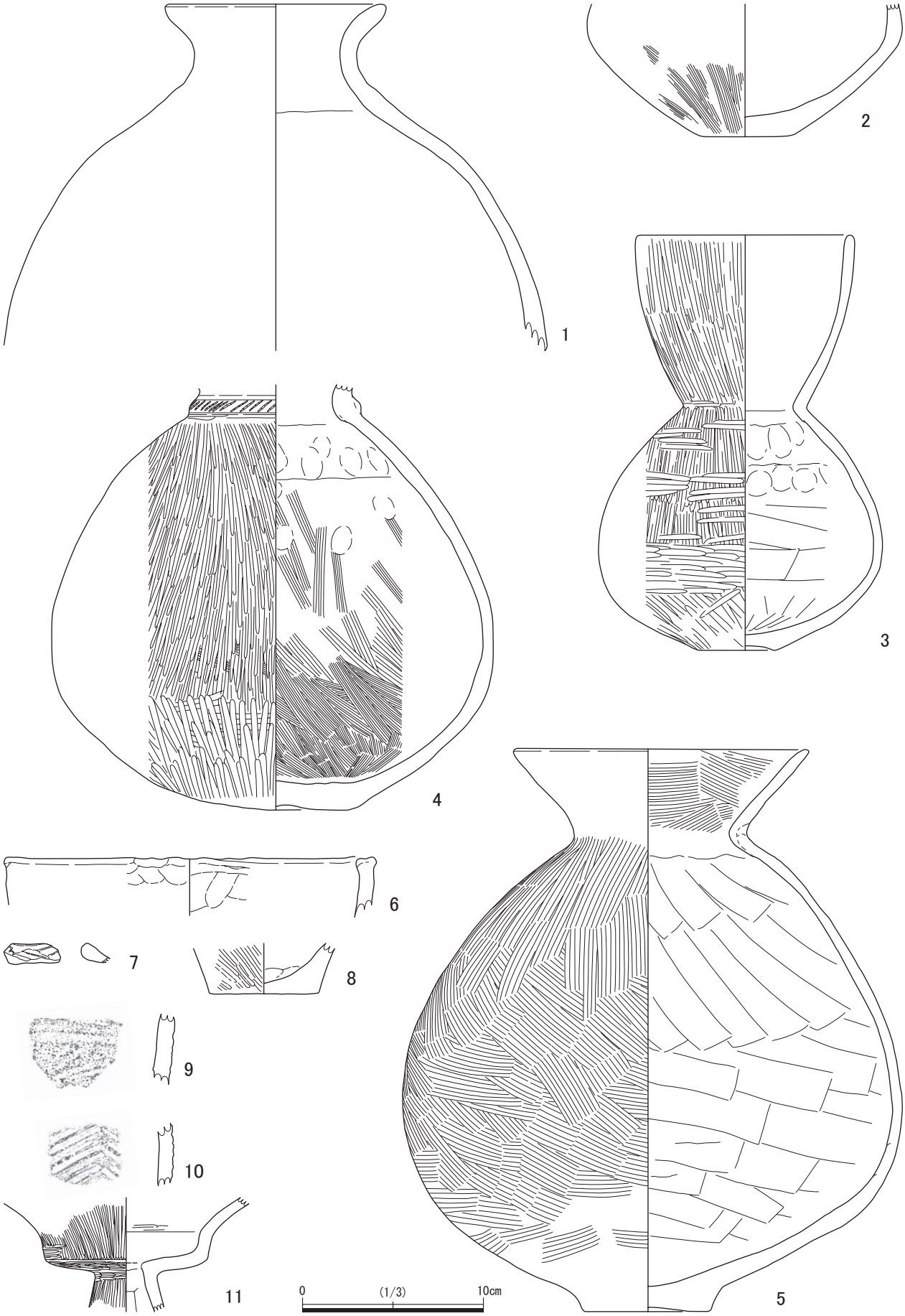
番号	グリッド	層位・遺構	種類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
211	a2	032SK	石鏃	完形	2.2	1.9	0.5	1.1	下呂石	d059
212	c2	包含層	石錐	一部欠	2.2	(1.7)	0.4	(1.0)	下呂石	d039
213	f3	021SM貝層	石錐	一部欠	2.5	1.8	0.7	(1.7)	チャート	
214	d2	包含層	石錐	一部欠	(3.0)	1.8	0.4	(1.7)	下呂石	d018
215	a2	032SK	両刃石斧	刃部片	(5.2)	(6.0)	(3.1)	(109.3)	斑レイ岩	d069
216	a2	包含層	両刃石斧	刃部片	(4.0)	(6.3)	(2.9)	(47.3)	砂岩	
217	h2	023SD下層	敲石	完形	5.7	4.9	3.5	(145.7)	チャート	
218	f2	022NR下層	砥石	(破片)	(2.6)	(2.1)	(0.8)	(6.7)	凝灰岩	緑色を呈する。産地は北陸か？
219	f3	包含層	礫石錘	完形	5.8	5.6	1.5	(81.2)	アプライト	
220	f3	024SD下層	砥石	半欠	(5.8)	5.0	4.5	(96.7)	凝灰岩	d008。白色を呈する。三河白に類似
221	a3	包含層	石鍋	(破片)	(復元径) (19.0)	(残存高) (5.1)	1.1	(56.7)	滑石	温石に再加工
222	e1	024SD下層	軽石	半欠	(2.6)	2.7	(2.1)	(5.0)	軽石	
223		013SM	軽石	完形	6.9	3.7	2.8	(15.0)	軽石	
224	f3	包含層	軽石	完形	8.9	4.9	4.0	(40.6)	軽石	

第20表　畑間遺跡出土木製品観察表

1.括弧付きの数値について、残存値を示した。
2.樹種鑑定は株式会社吉田生物研究所による。
3.備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

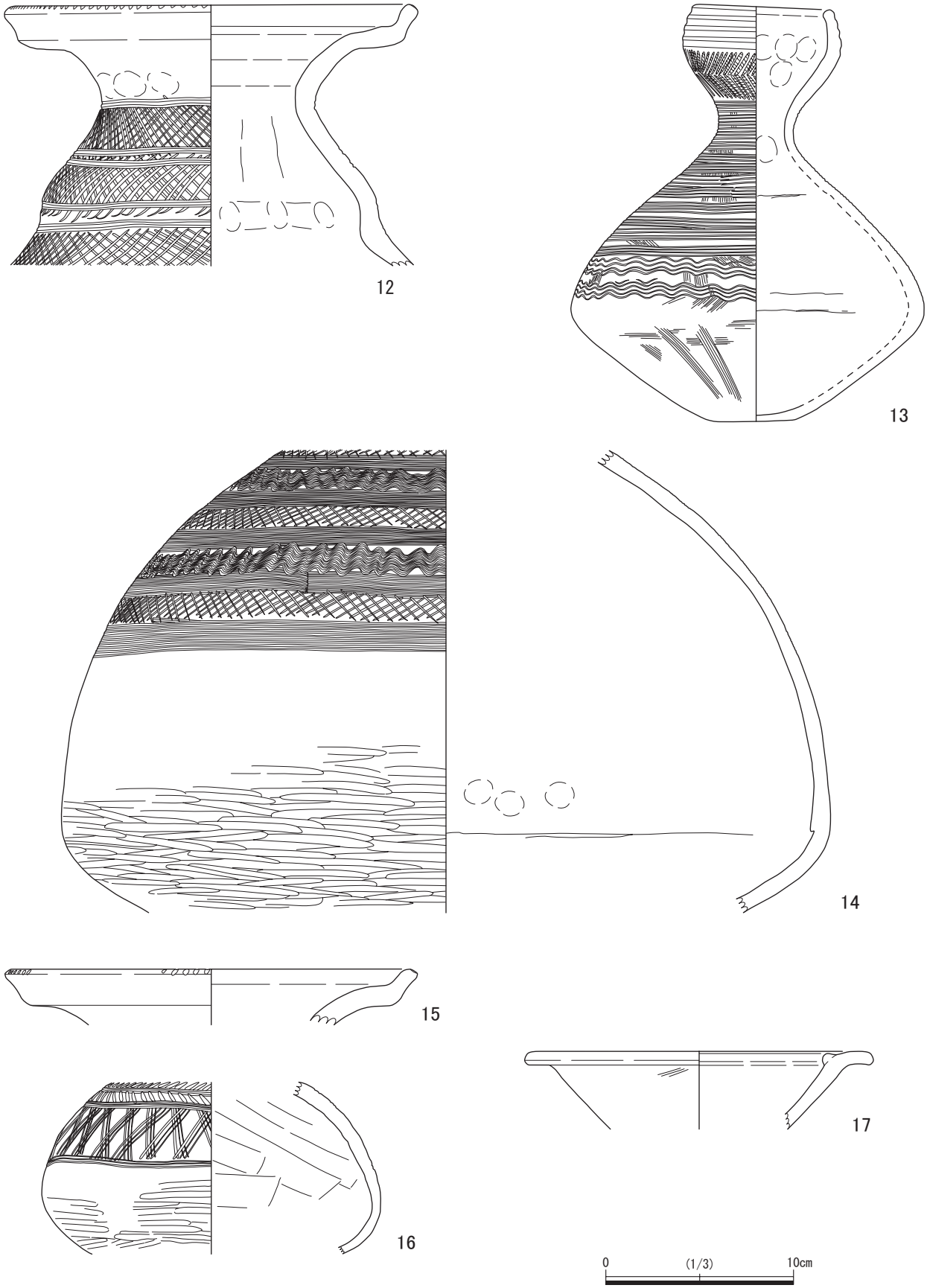
番号	グリッド	遺構	種類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	樹種	特徴	備考
225	e1	024SD	木球	約1/2片	3.9	4.2	(2.7)	芯持材	クスノキ科 タブノキ属		d136
226	e2	024SD	板	約1/2片	(7.1)	2.1	0.3	板目材	ヒノキ科 アスナロ属	木簡の可能性がある	d155
227	f2	024SD下層	(不明品)	完形	9.1	1.9	1.0	板目材	ヒノキ科 アスナロ属	箱物の部品？ ほぞ穴3箇所	
228	f2	024SD下層	折敷底板	約1/2片？	(12.1)	7.5	0.2	柾目材	ヒノキ科 アスナロ属	非常に薄い板材	
229	f3	024SD下層	建築部材	完形	15.5	5.0	3.1	柾目材	コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ	四角柱でほぞ穴1箇所	
230	f2	024SD下層	柄	一部欠	(61.6)	2.9	2.4	芯持材	クワ科クワ属	端部を丸く仕上げる	
231	e1・e2	058SK	たたり未製品	一部欠	66.7	13.5	5.6	板目材	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	全体に粗く削られている	d157

図　　版

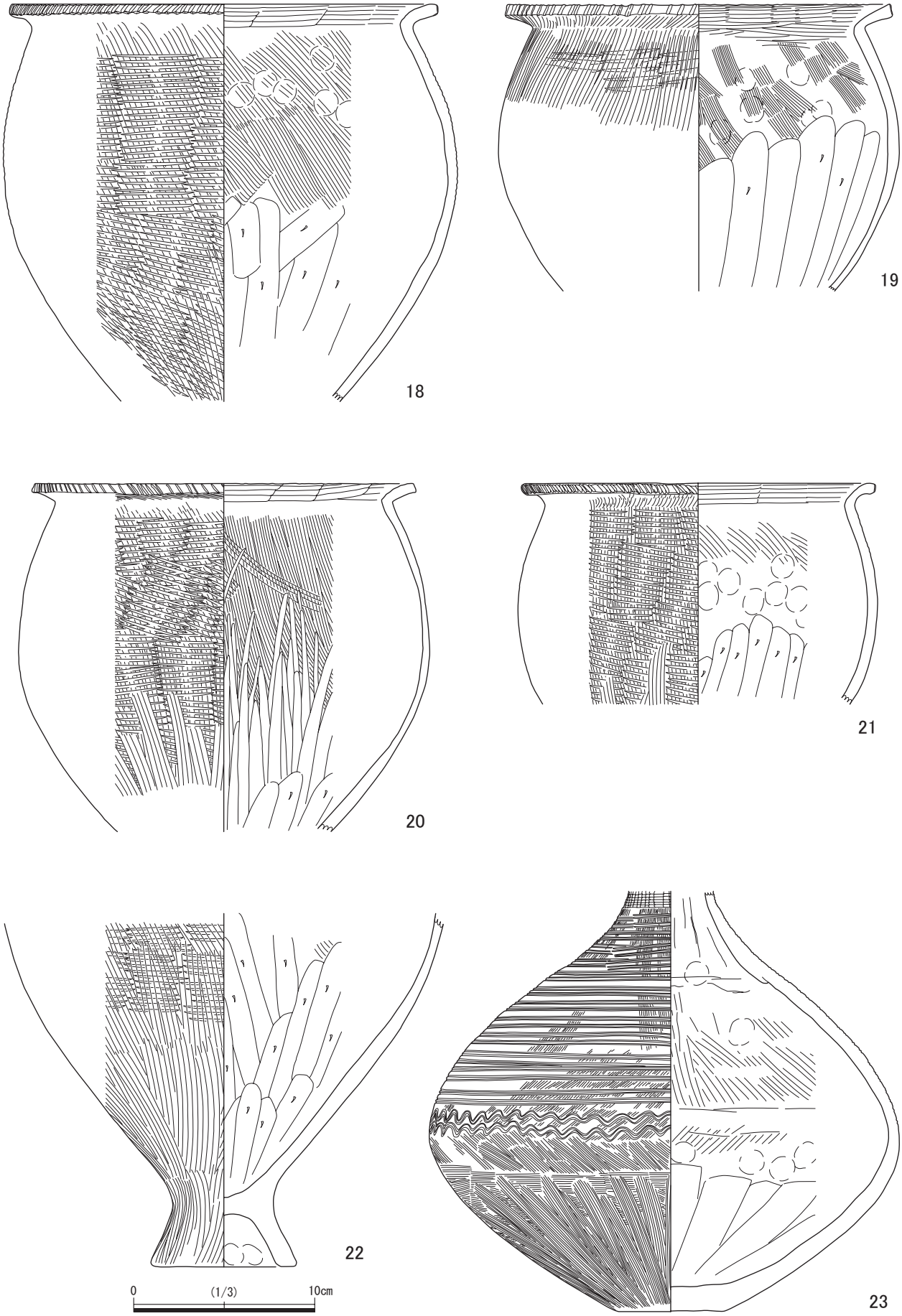


東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1/3) (1)

図版第 2

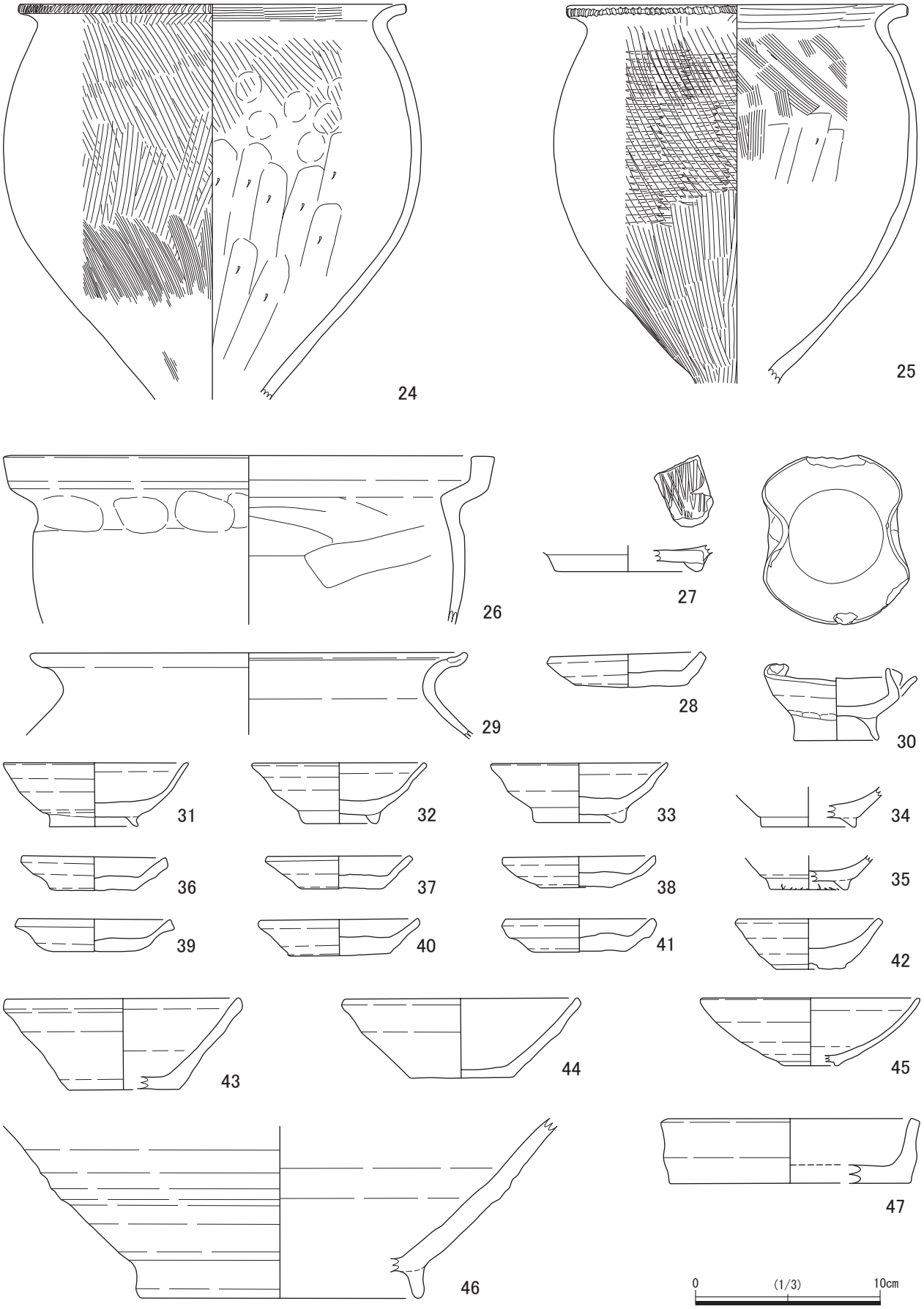


東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1/3)(2)

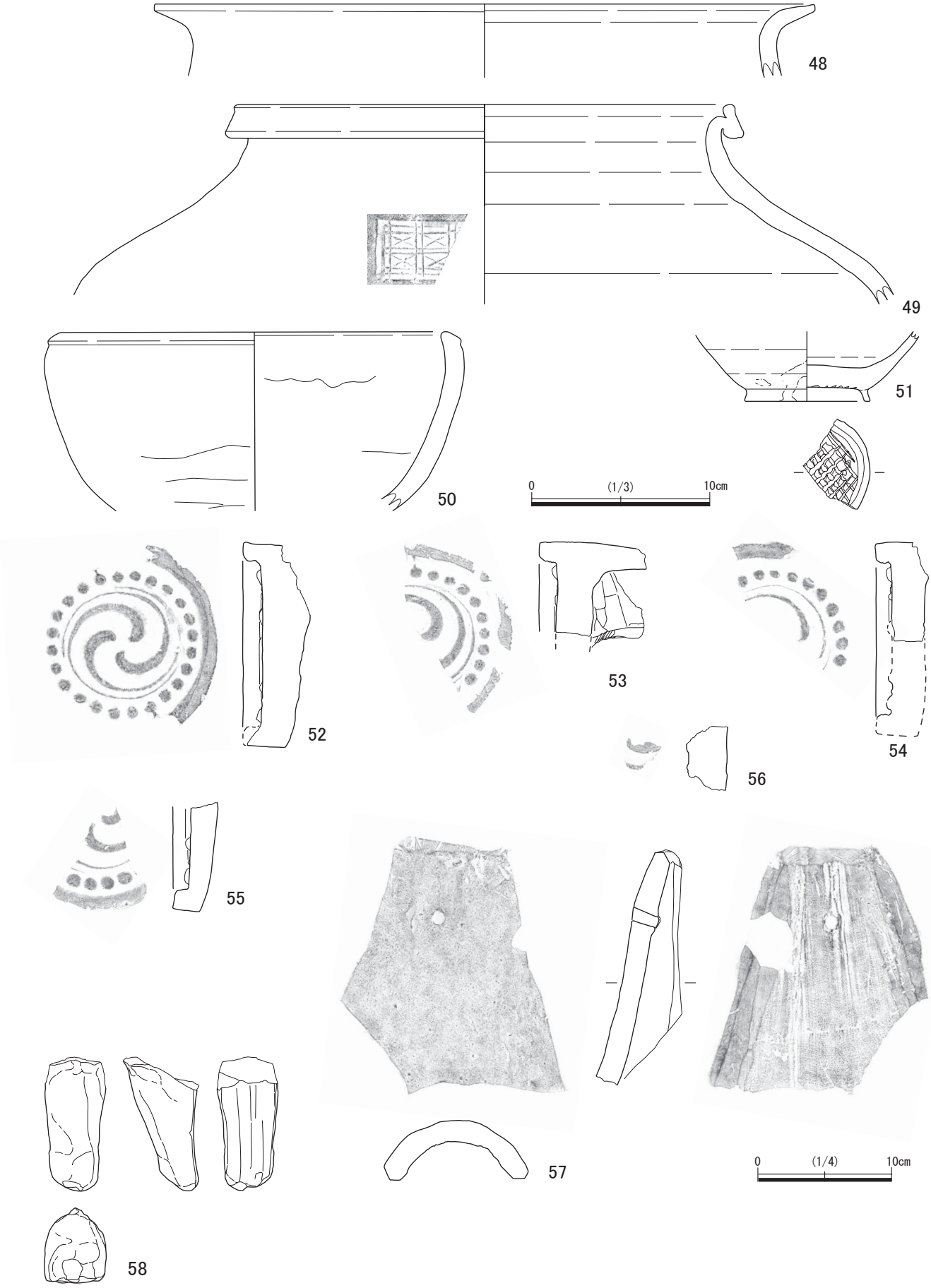


東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1/3) (3)

図版第 4

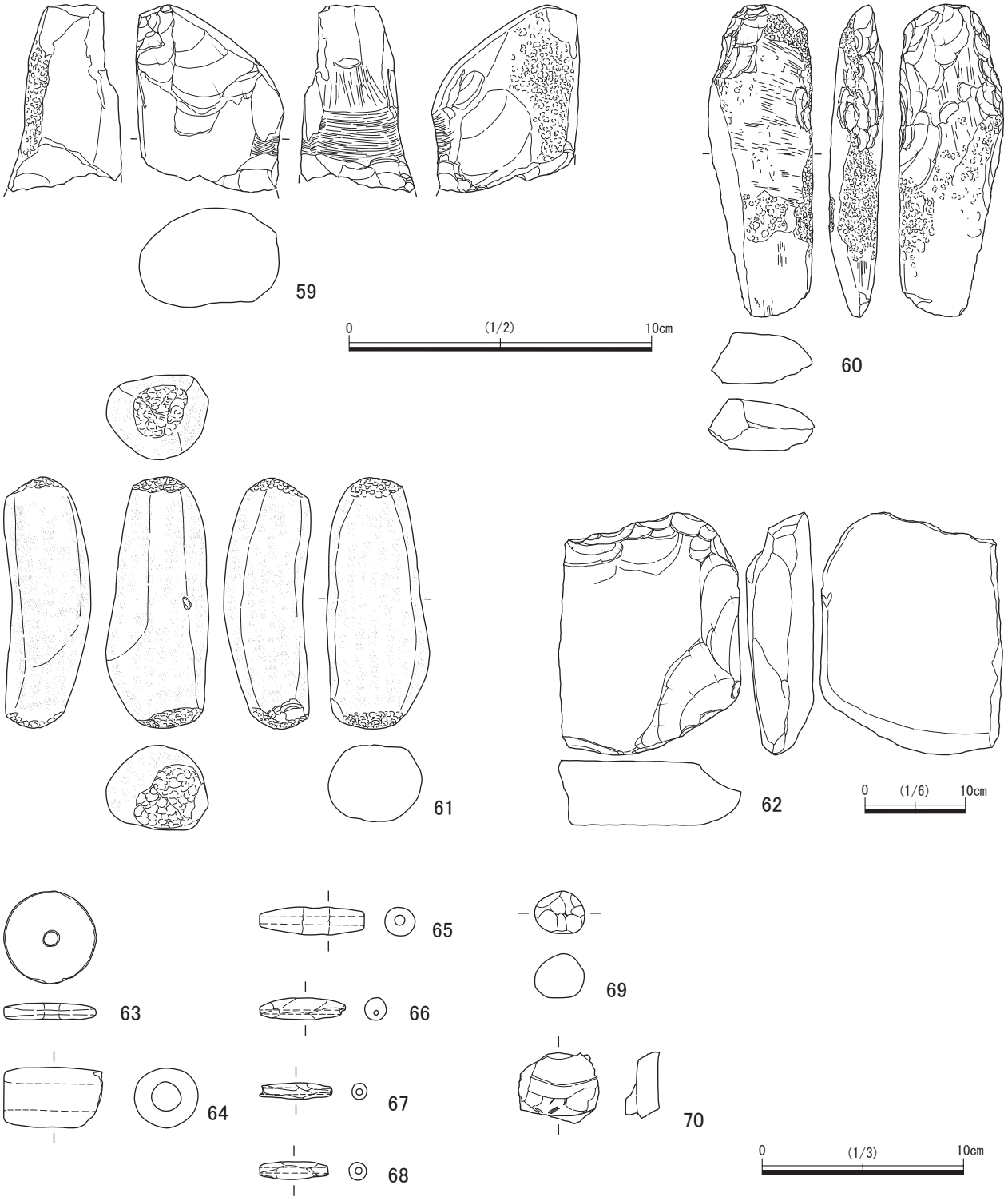


東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1/3) (4)

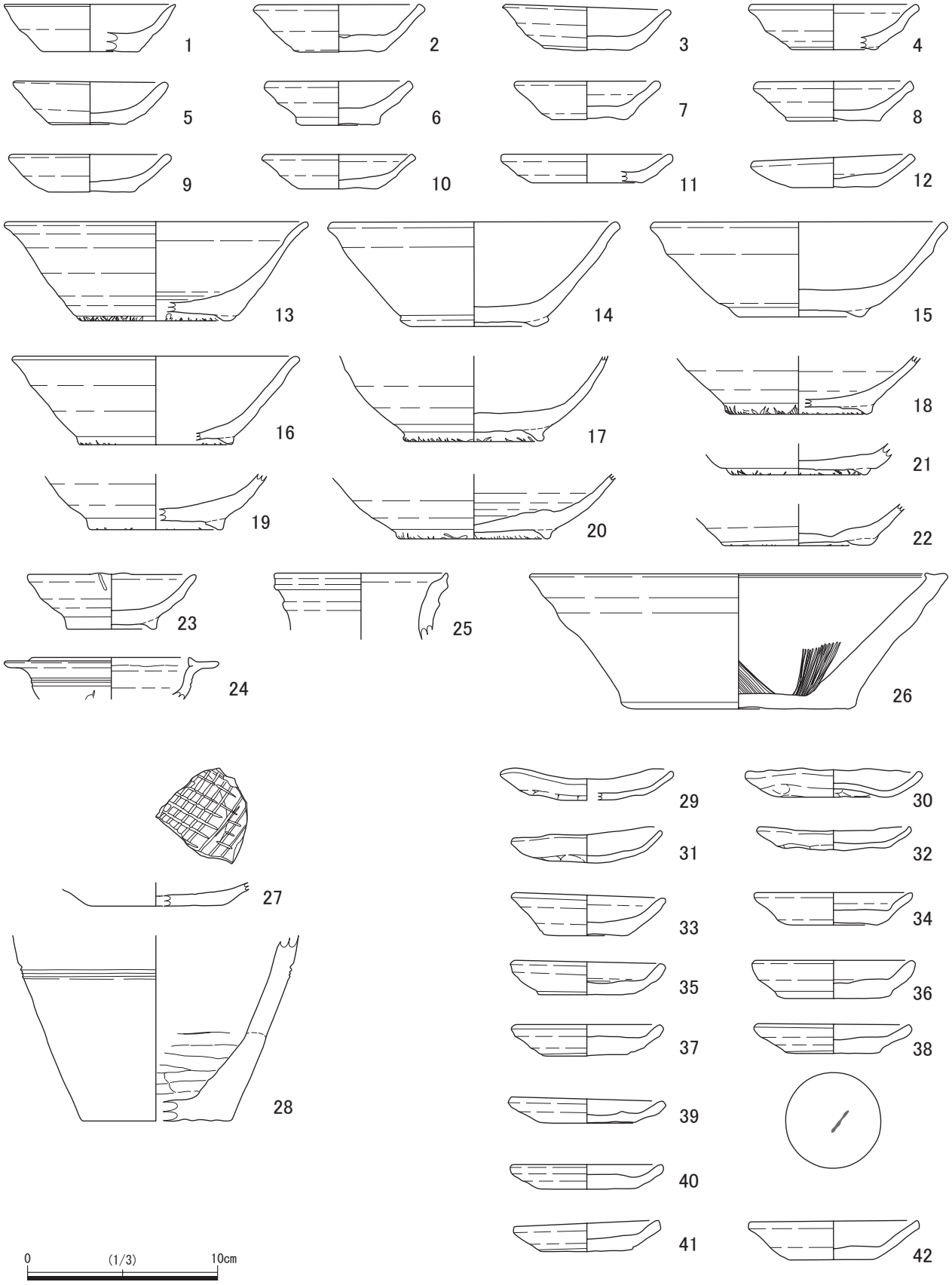


東畑遺跡 1･2 地点出土土器実測図 (1/3)(5)・瓦実測図 (1/4)

図版第 6

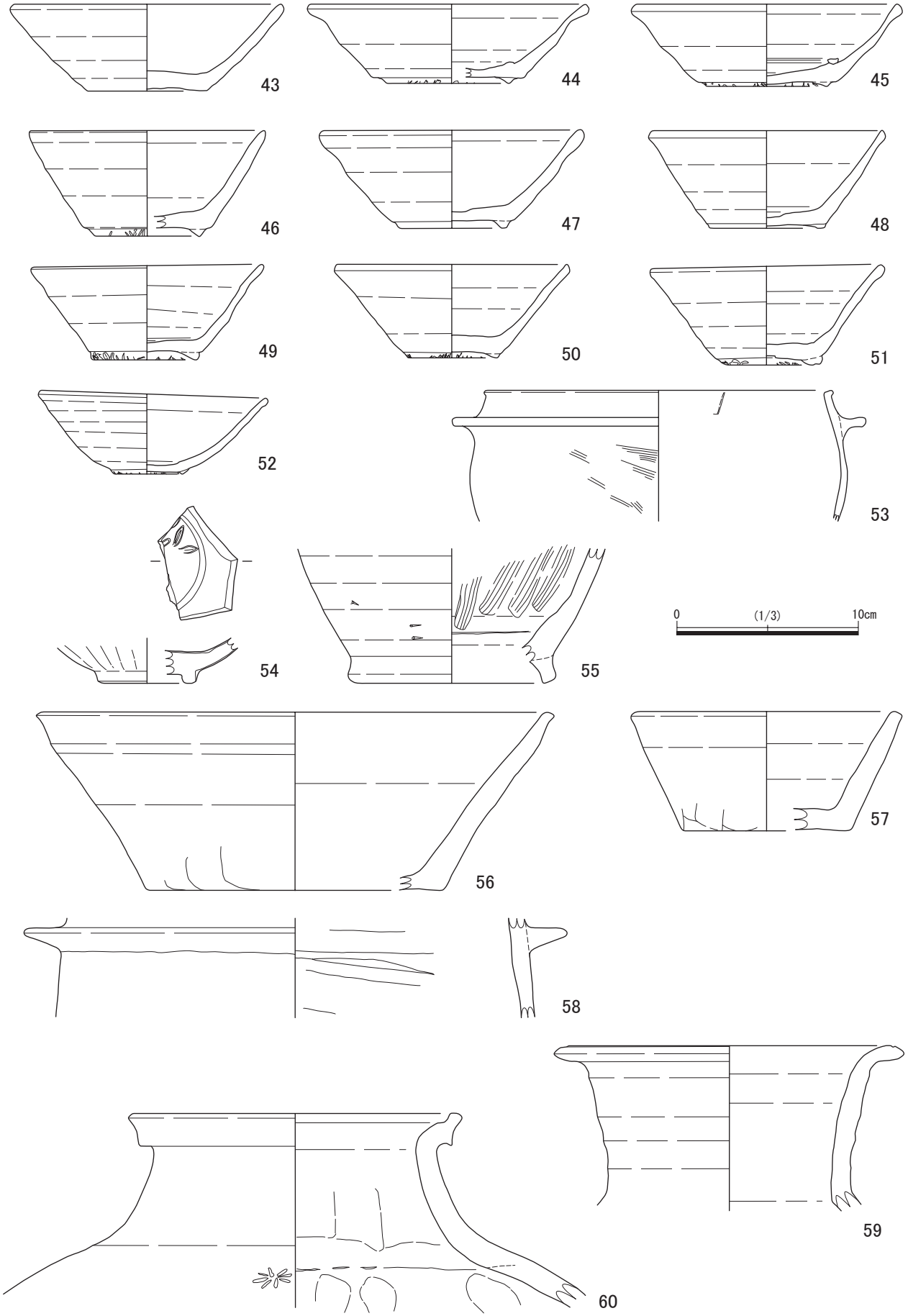


東畑遺跡 1･2 地点出土石器実測図（1/2, 6 のみ 1/6）・土製品実測図（1/3）

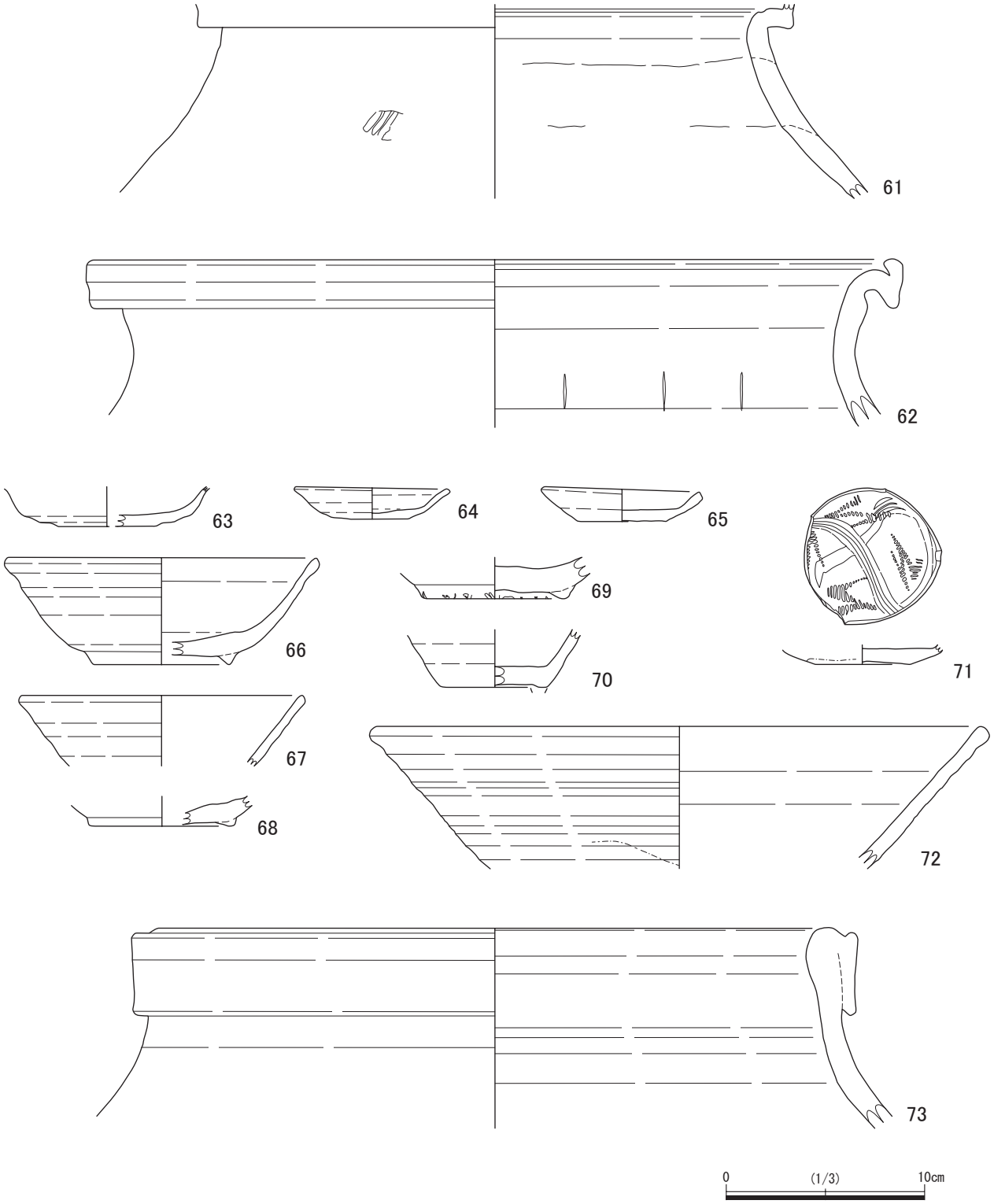


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (1)

図版第 8

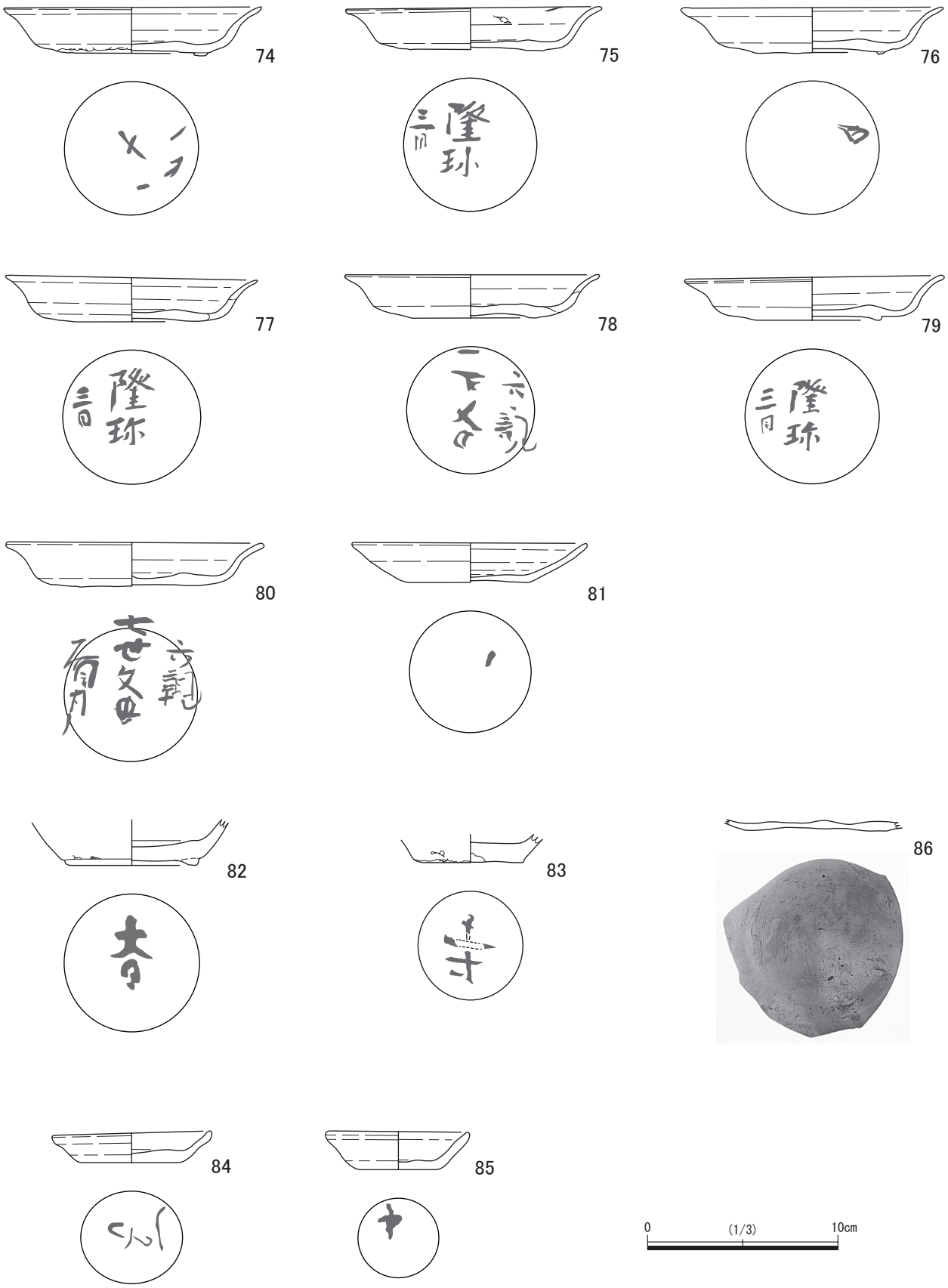


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (2)

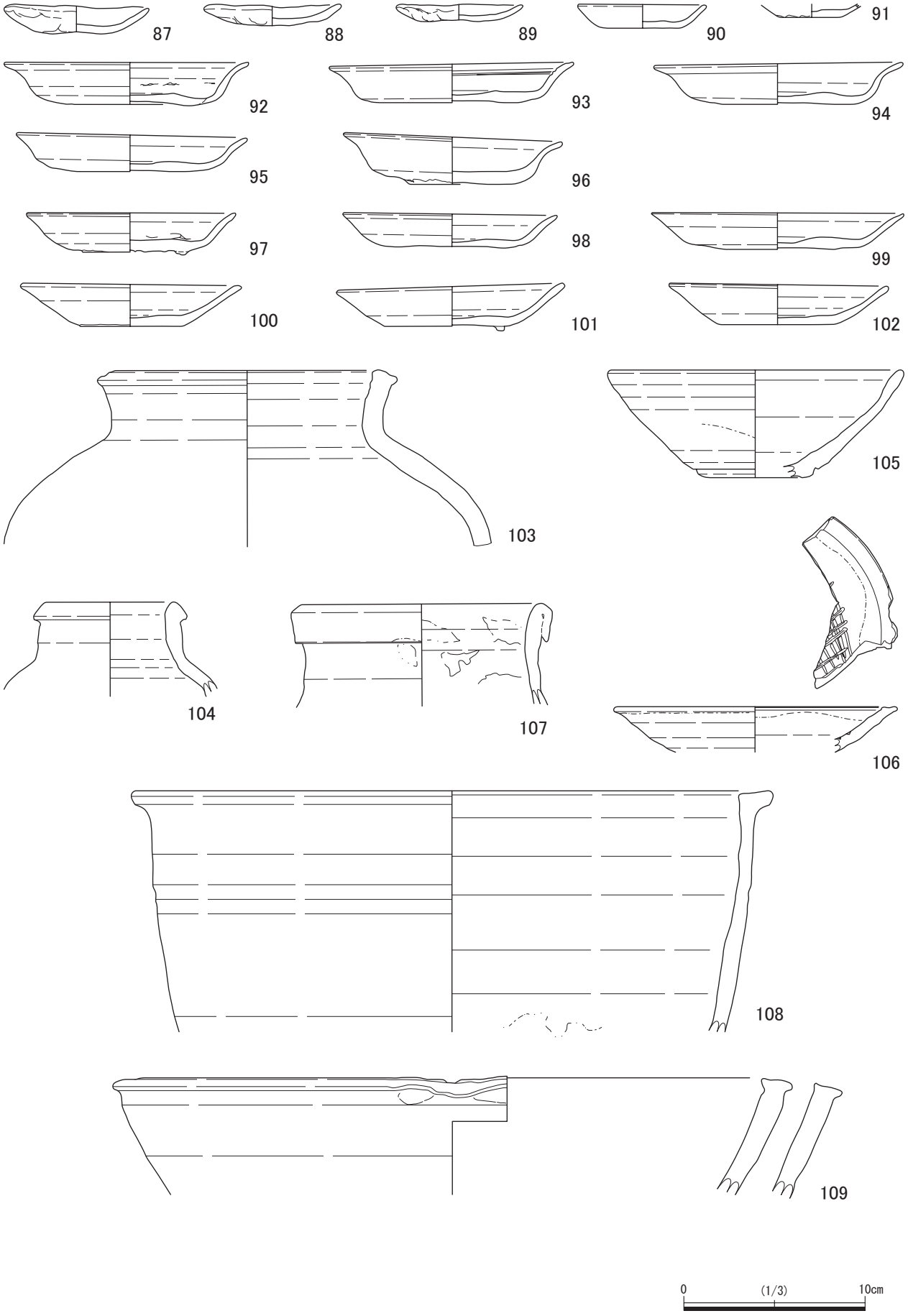


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (3)

図版第 10

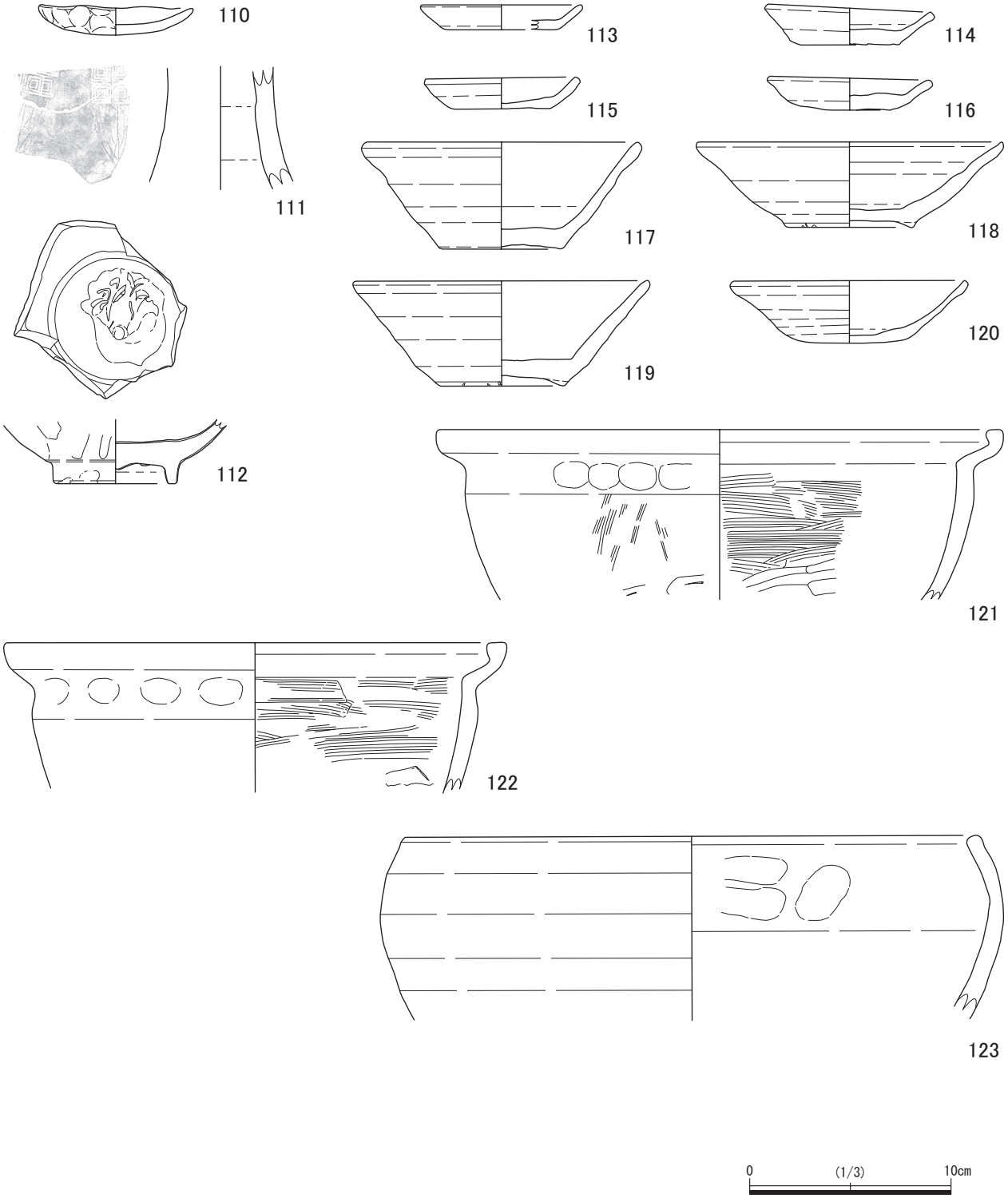


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (4)

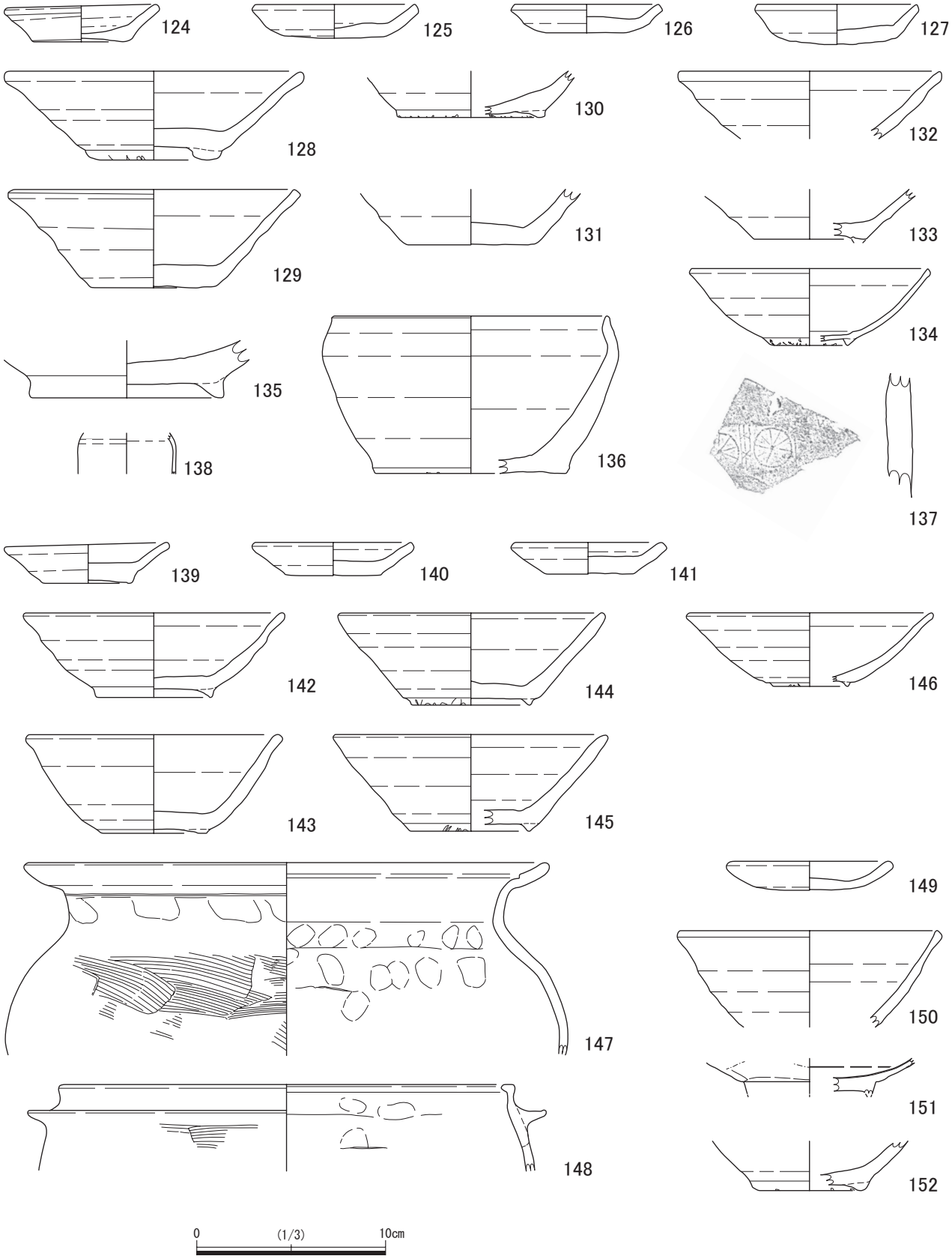


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (5)

図版第 12

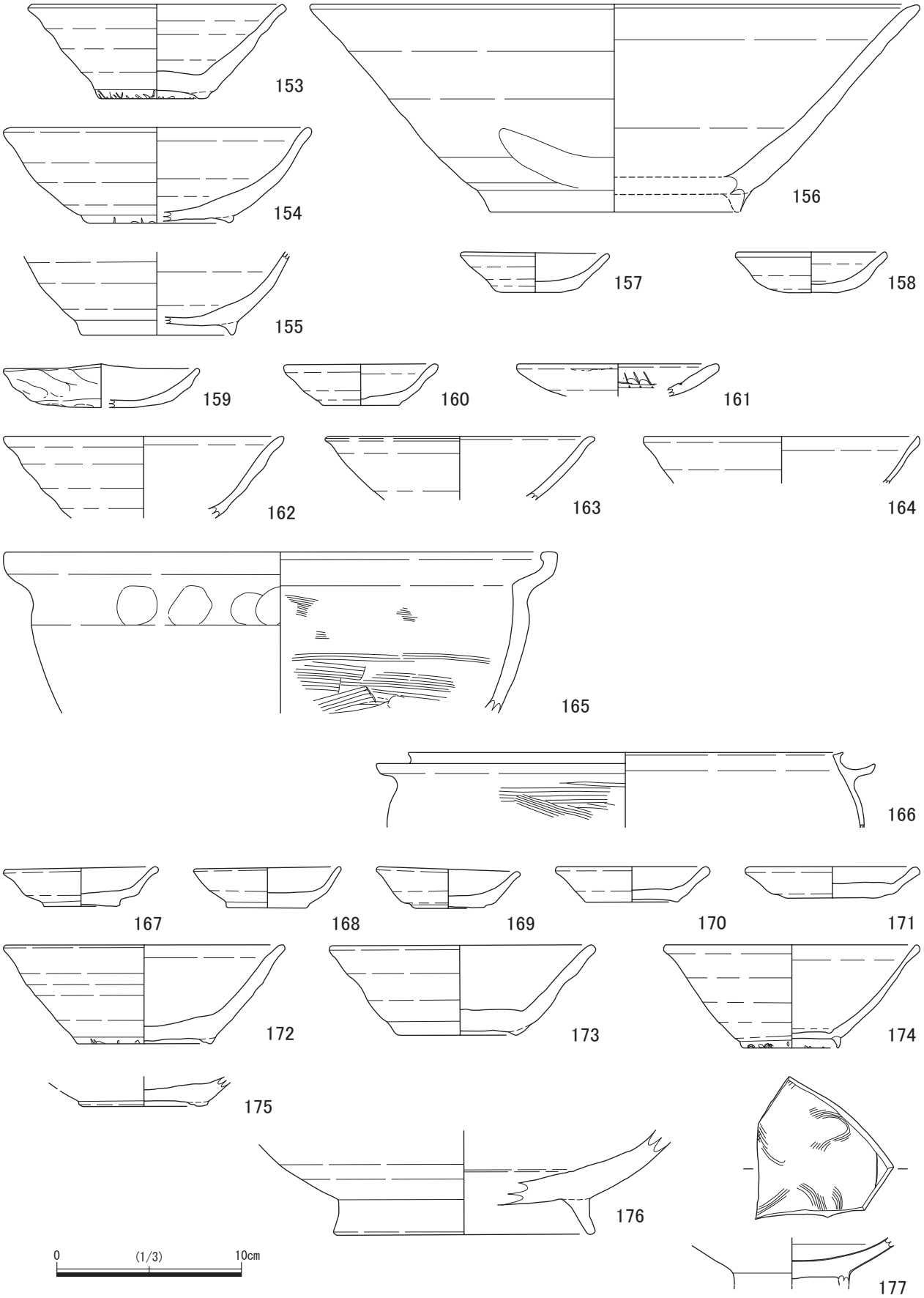


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (6)

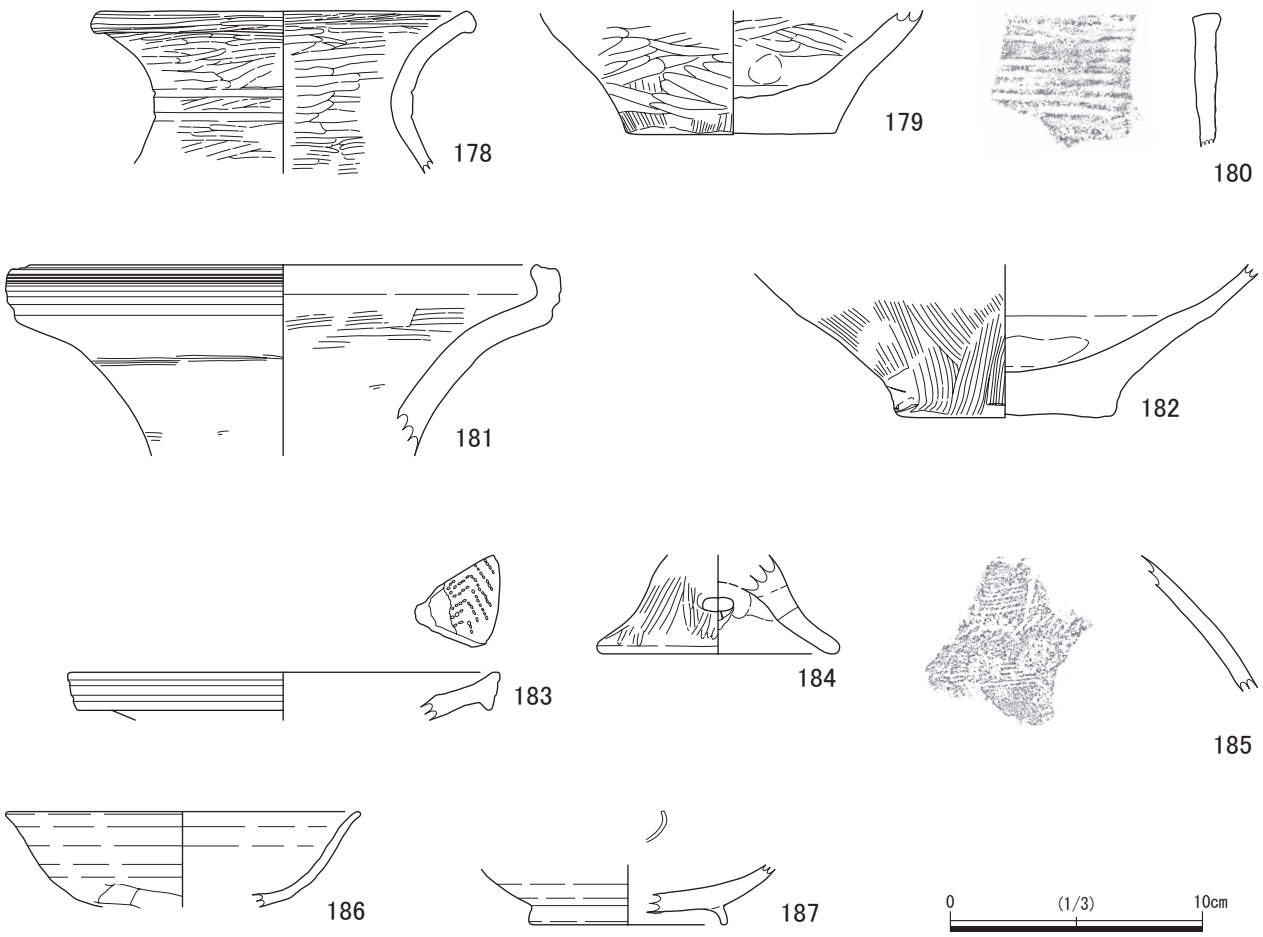


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3)(7)

図版第 14

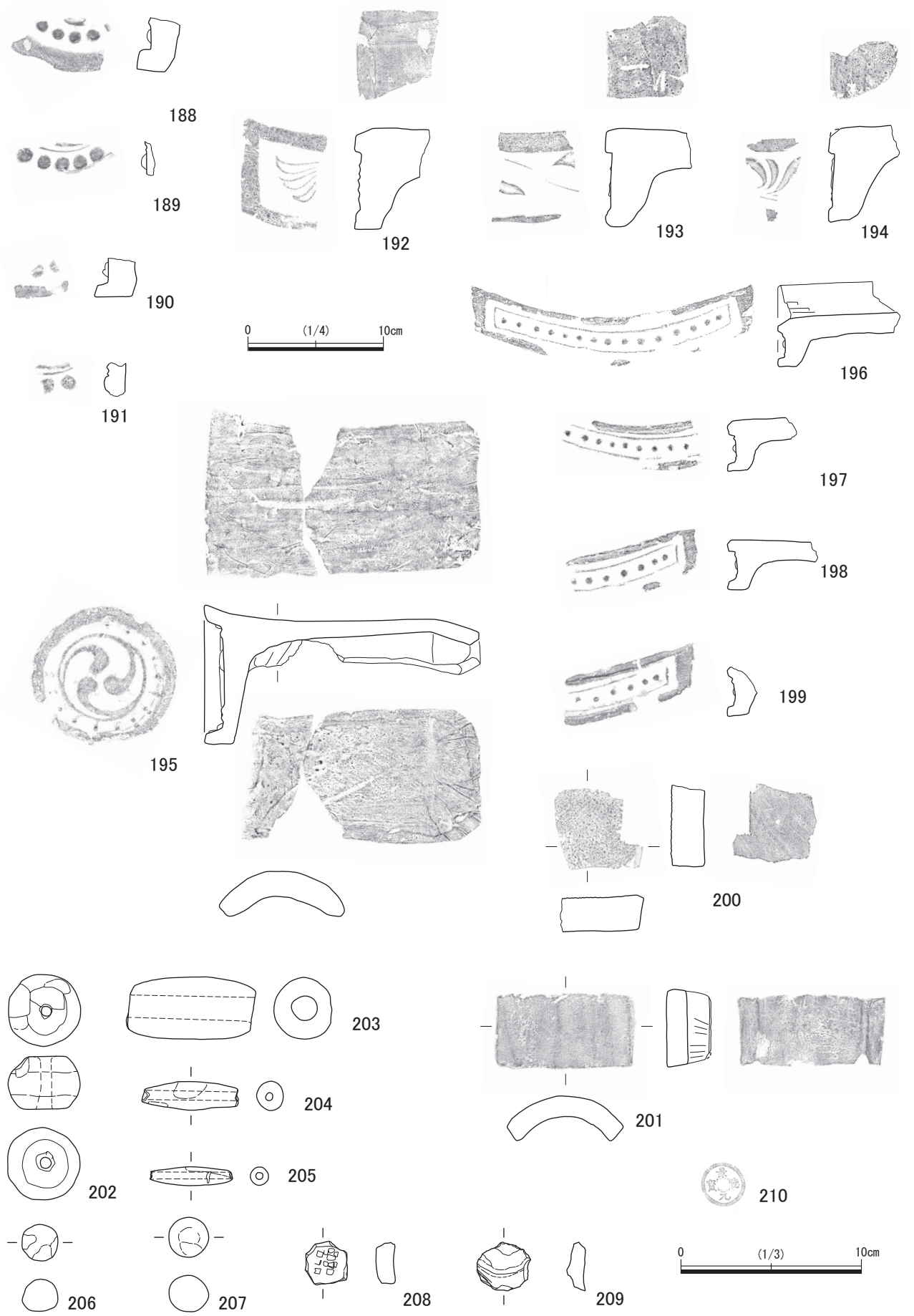


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3)(8)

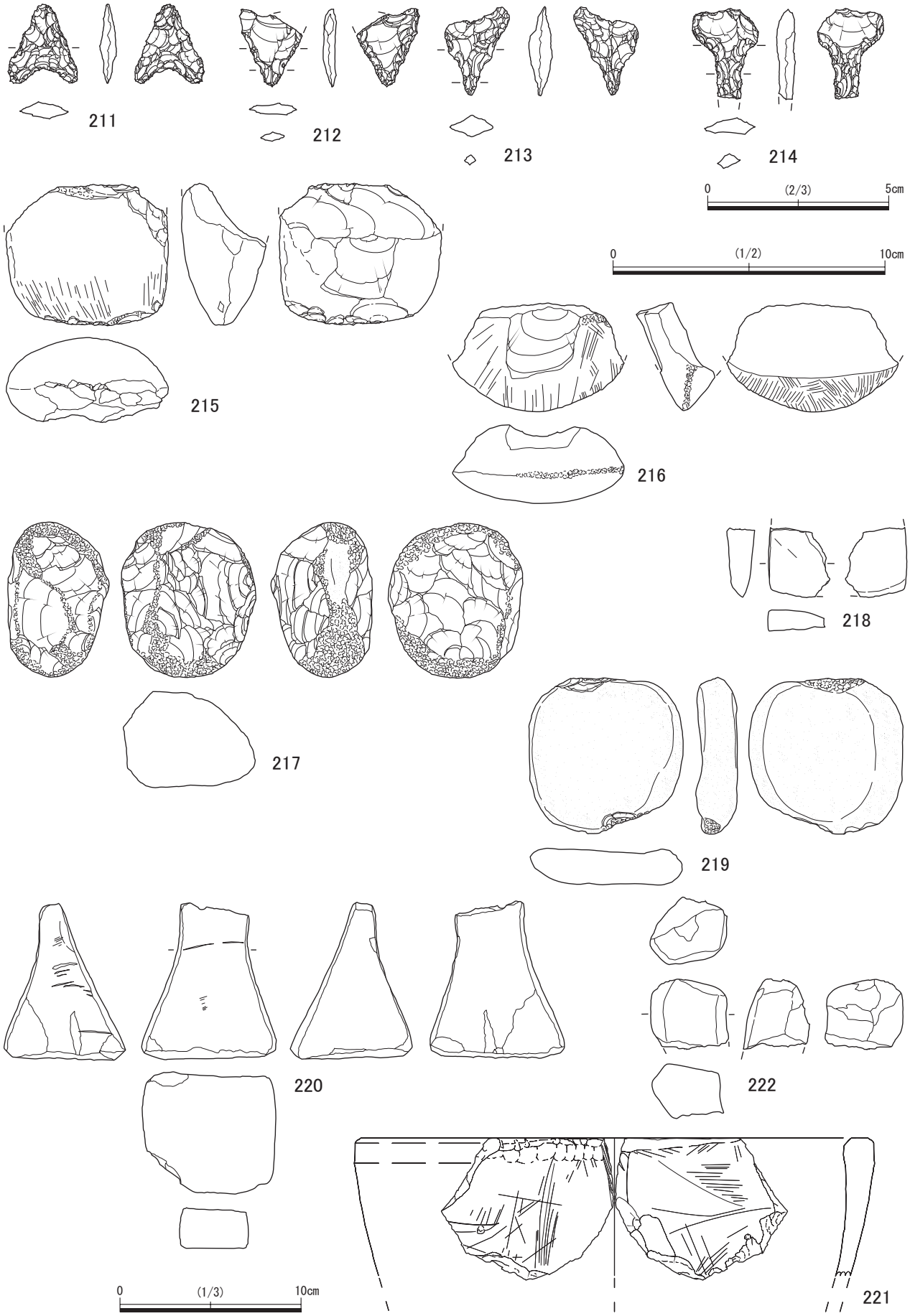


畑間遺跡 3･4 地点出土土器実測図 (1/3) (9)

図版第 16

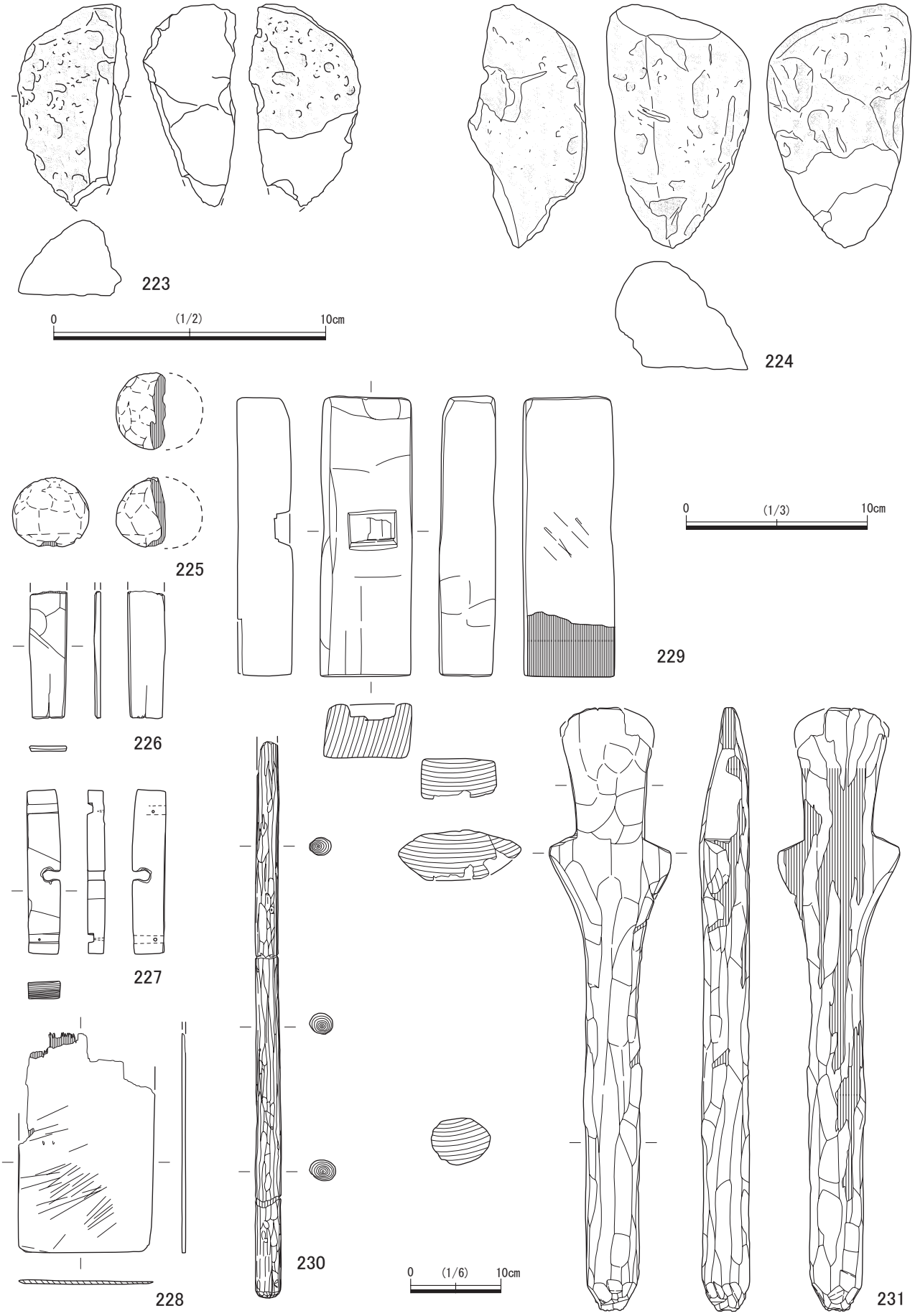


畑間遺跡 3･4 地点出土瓦実測図（1/4）・土製品・銭貨実測図（1/3）

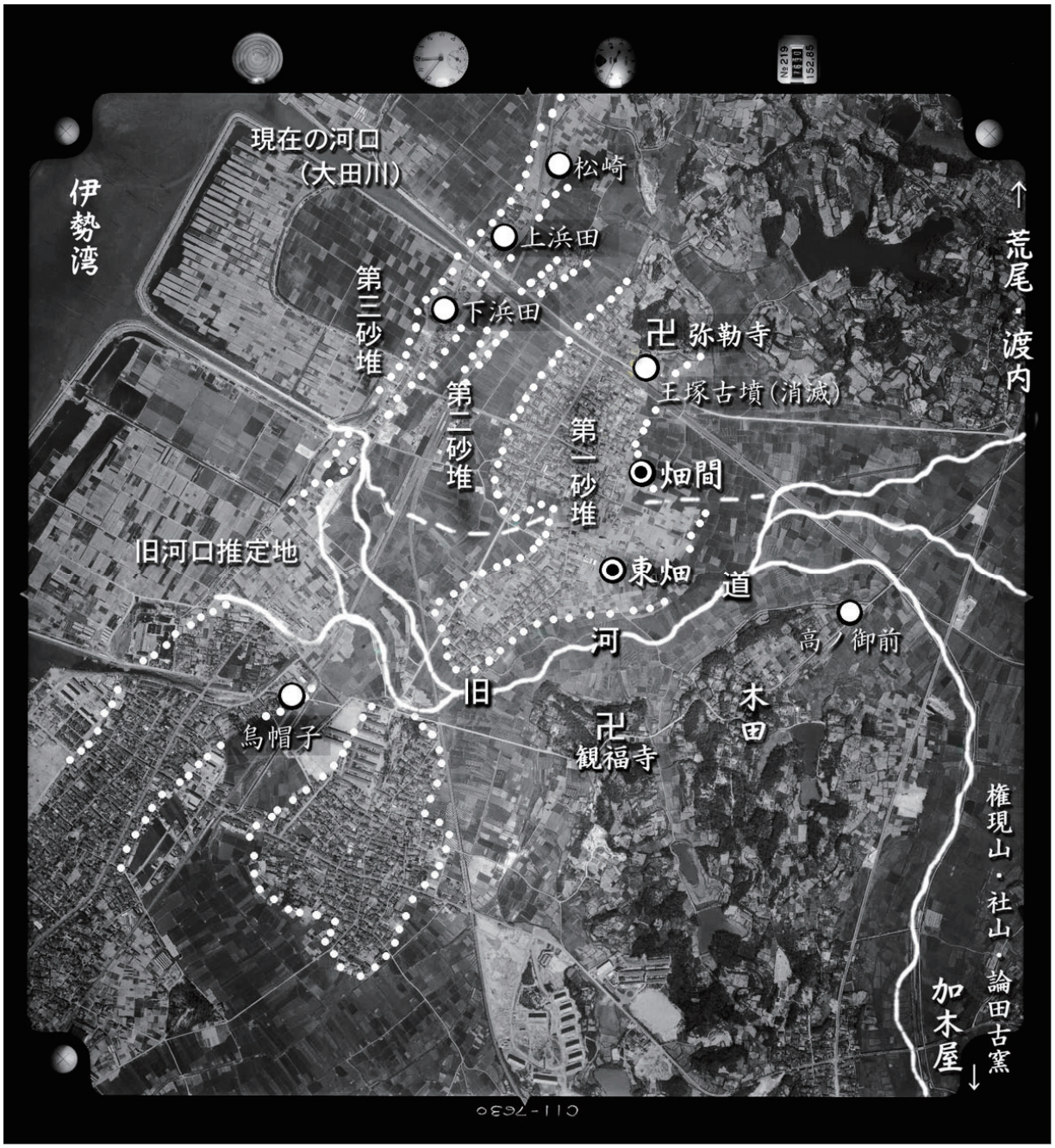


畑間遺跡 3･4 地点出土石器・石製品実測図（211 ～ 214 は 2/3, 215 ～ 220・222 は 1/2, 221 は 1/3）(1)

図版第 18



畑間遺跡 3･4 地点出土石器実測図 (1/2)(2)・木製品実測図 (1/3, 230 と 231 は 1/6)



畑間・東畑遺跡周辺空中写真（上空から）

上が北方位。旧河川と遺跡・寺院・集落の位置を加筆した。

東畑遺跡 1 地点調査区全景（北より）（上部中央は近代井戸の撹乱）

東畑遺跡 2 地点調査区全景（北より）

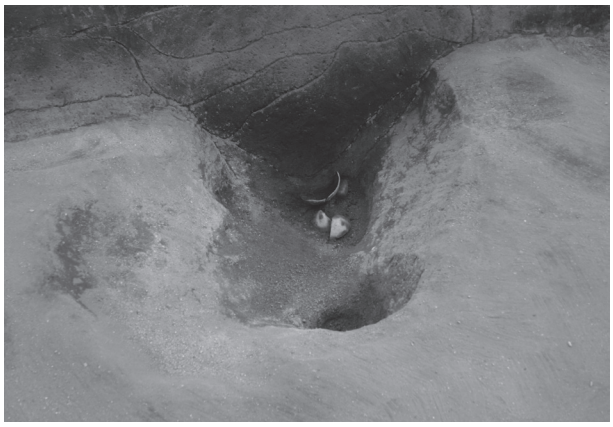
東畑遺跡 007SZ 完掘状況（1）（南東より）

東畑遺跡 007SZ 完掘状況（2）（北東より）（墳丘の高まりの残存を観察することができる）

図版第 22

東畑遺跡 023SZ 完掘状況（北西より）（周溝の切れた部分〔コーナー〕が観察される）

東畑遺跡 023SZ 断面（南西より）


東畑遺跡 017SD・021SP 完掘状況（西より）

東畑遺跡 017SD 土器出土状況 (1)（西より）

東畑遺跡 017SD 土器出土状況 (2)（北より）

東畑遺跡 008SD 断面（西より）

東畑遺跡 015SD 断面（東より）

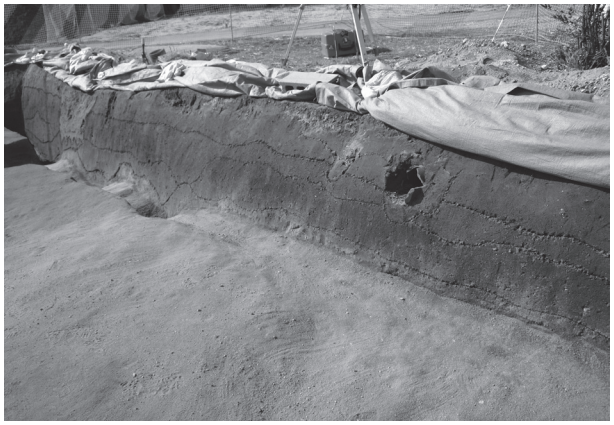
東畑遺跡 008SD 土器 (4) 出土状況（北より）

東畑遺跡 015SD 土器 (3) 出土状況（東より）

東畑遺跡 015SD 土器 (1･2) 出土状況（北より）

図版第 24

東畑遺跡 1 地点西壁土層断面 (1)(北東より)



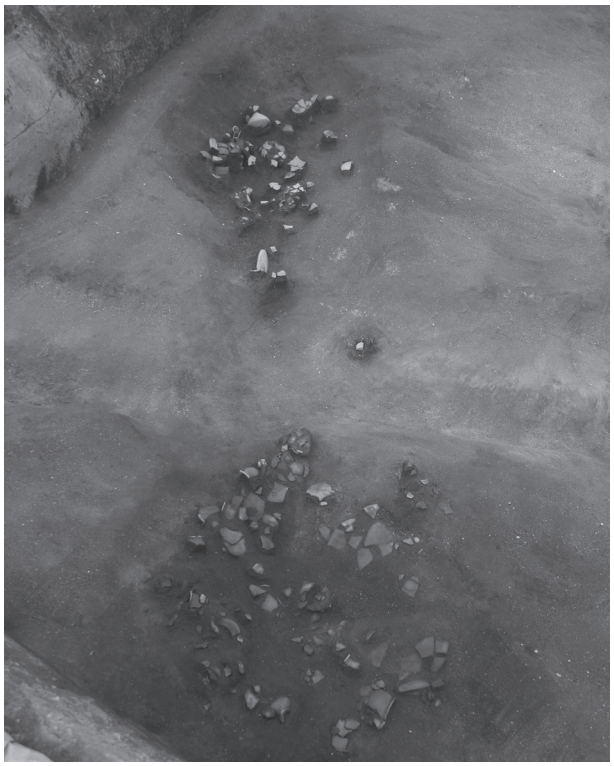
東畑遺跡 1 地点西壁土層断面 (2)(北東より)

東畑遺跡 2 地点西壁土層断面 (北東より)

東畑遺跡 002SM 検出状況 (北より)

東畑遺跡 001SU 検出状況 (1)(北東より)

東畑遺跡 001SU 検出状況 (2)(東より)

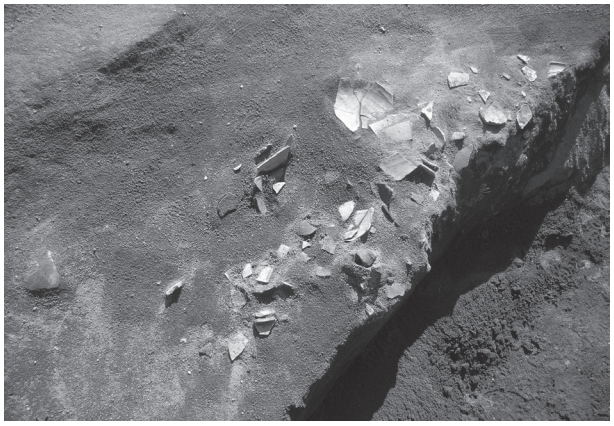


東畑遺跡 004SD 土器出土状況 (1)(南東より)

東畑遺跡 004SD 土器出土状況 (2)(北西より)

東畑遺跡 004SD 断面 (北より)

東畑遺跡 004SD 土器出土状況 (3)(北西より)



東畑遺跡 012SU 検出状況 (北西より)

東畑遺跡 006SD 断面 (東より)

図版第 26

畑間遺跡 3 地点西半完掘（1)（北東より）

畑間遺跡 3 地点西半完掘 (2)（南より）

畑間遺跡 4 地点調査区全景（東より）

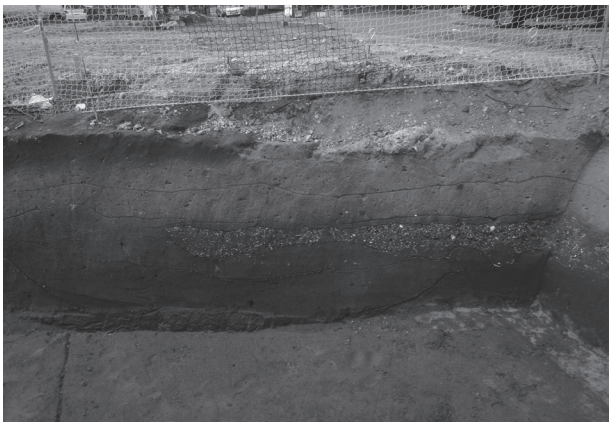
畑間遺跡 4 地点西半完掘（西より）

畑間遺跡 3 地点西壁断面 (1)(東より)

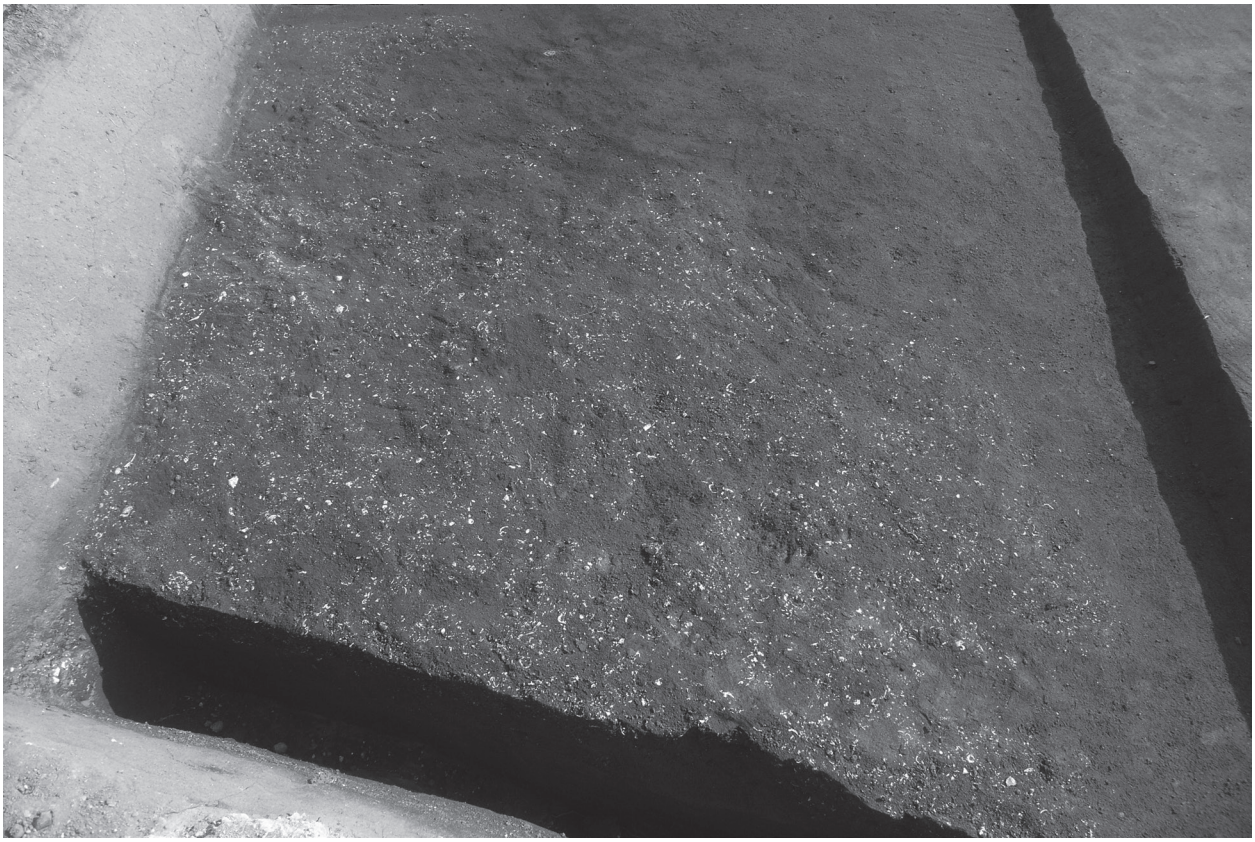
畑間遺跡 3 地点西壁断面 (2)(東より)

畑間遺跡 3 地点西壁断面 (3)(東より)

畑間遺跡 3 地点西壁断面 (4)(東より)



畑間遺跡 3 地点西壁断面 (5)(東より)



畑間遺跡 3 地点 013SM 検出状況（西より）（貝殻が敷き詰められ固まっている）

畑間遺跡 3 地点 013SM 完掘状況（南より）

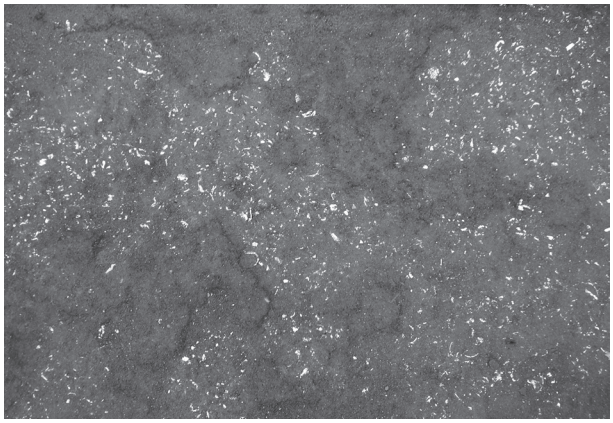
図版第 30

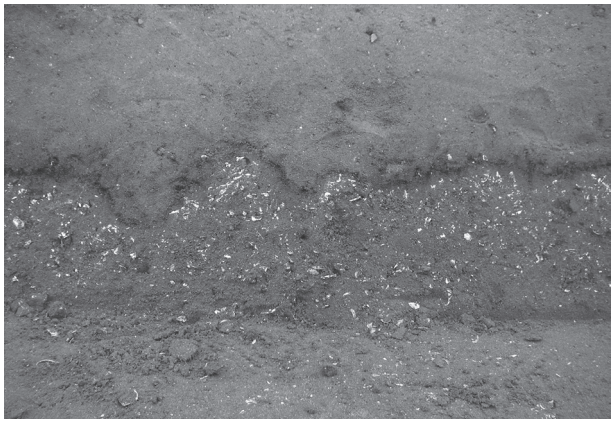
畑間遺跡 4 地点 013SM 検出状況（西より）（貝殻を伴う硬化面が帯状に展開している）

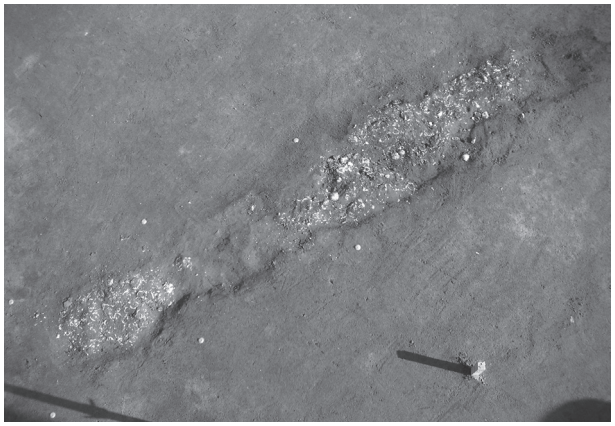
畑間遺跡 4 地点 013SM 完掘状況（東より）

畑間遺跡 3 地点 013SM 断面（南東より）

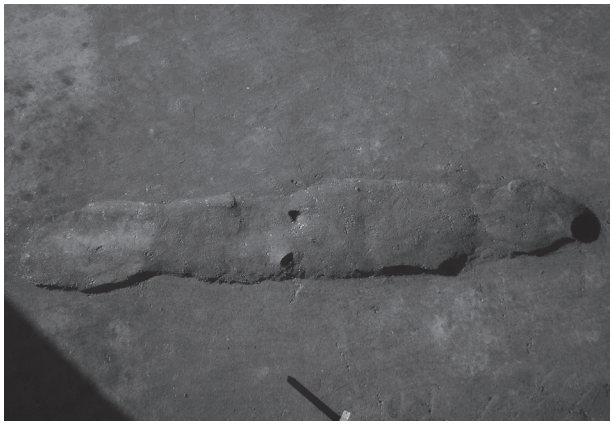
畑間遺跡 4 地点 013SM 断面および上面（東より）


畑間遺跡 4 地点 013SM 上面（拡大）


畑間遺跡 4 地点 013SM 断面（拡大）


畑間遺跡 037SD 検出状況 (1)（南より）

畑間遺跡 037SD 断面（南西より）


畑間遺跡 037SD 完掘状況（南東より）

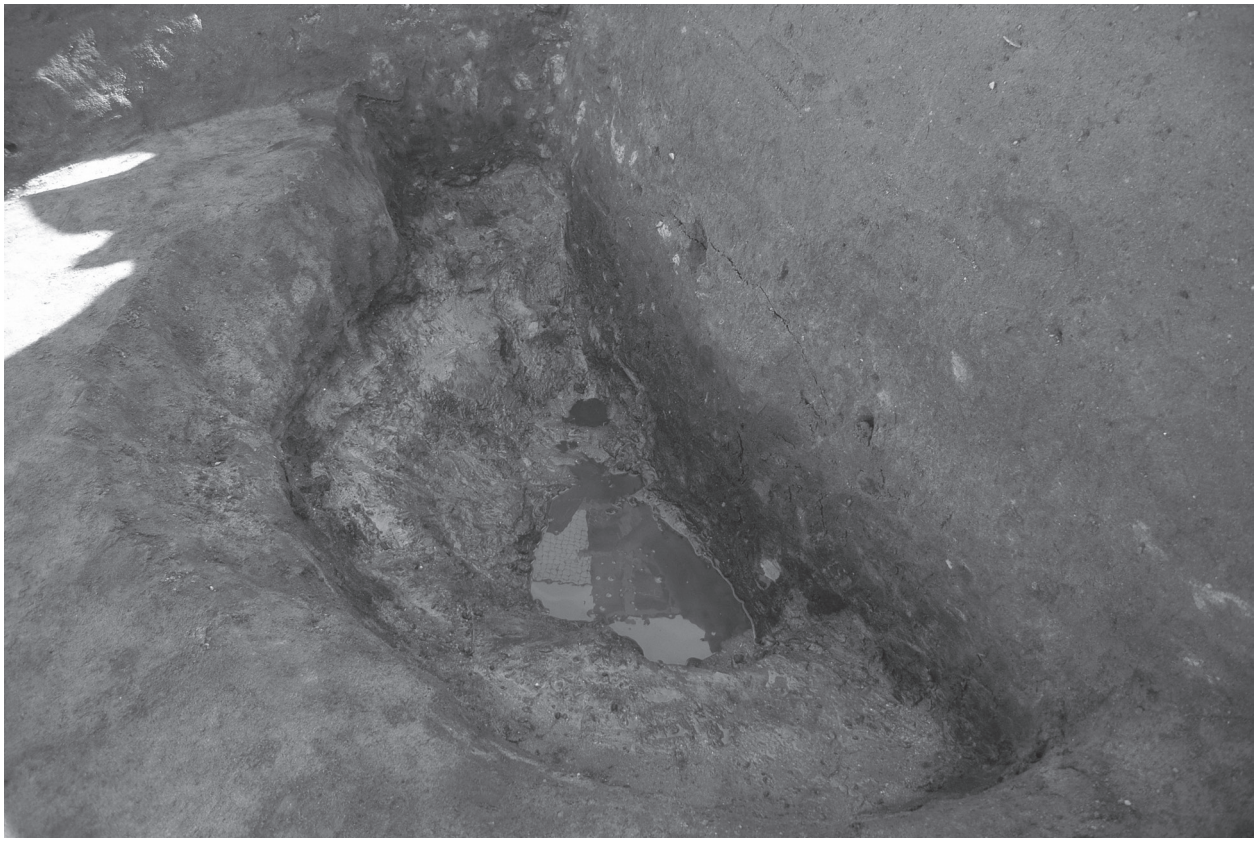
畑間遺跡 019SU-10 検出状況（北より）

図版第 32

畑間遺跡 011SB 完掘状況（北より）

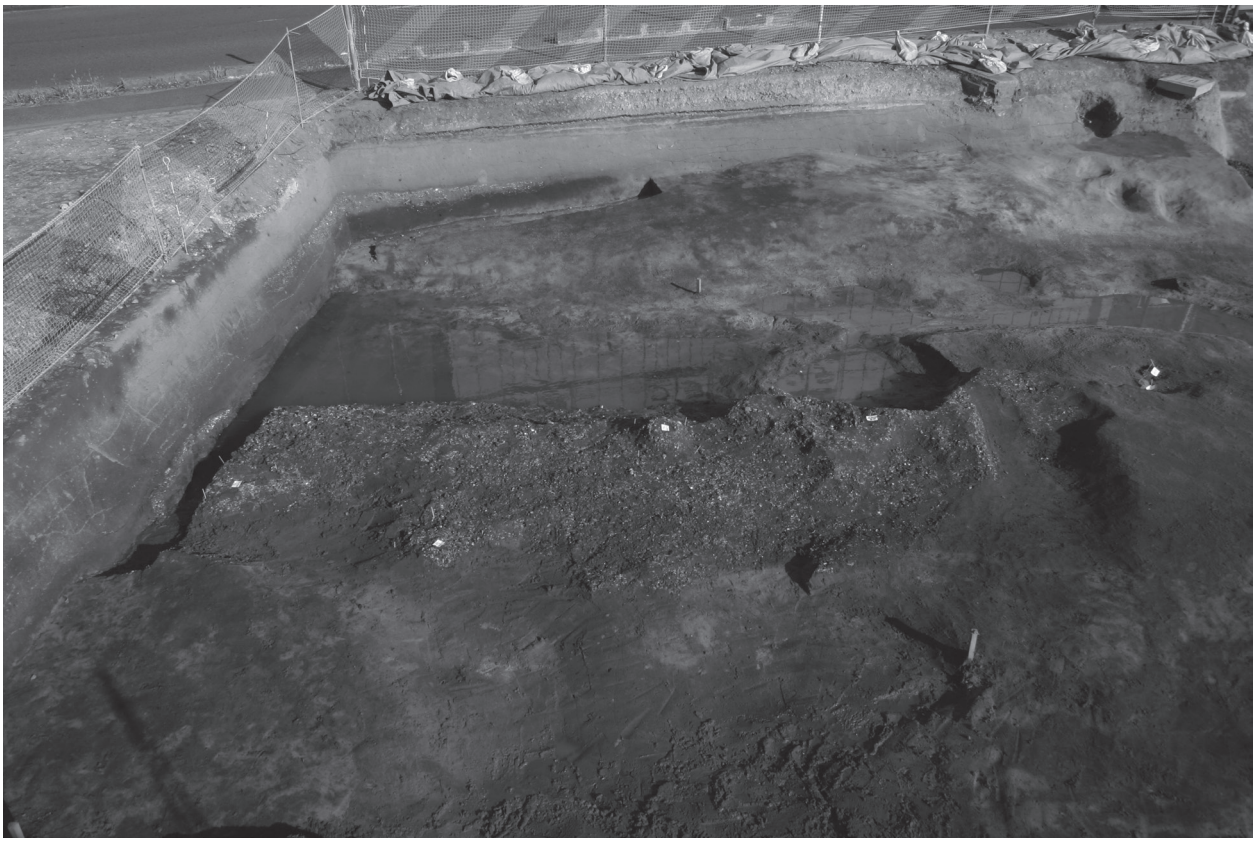
畑間遺跡 011SB 断面東半（北より）

畑間遺跡 011SB 断面西半（北より）

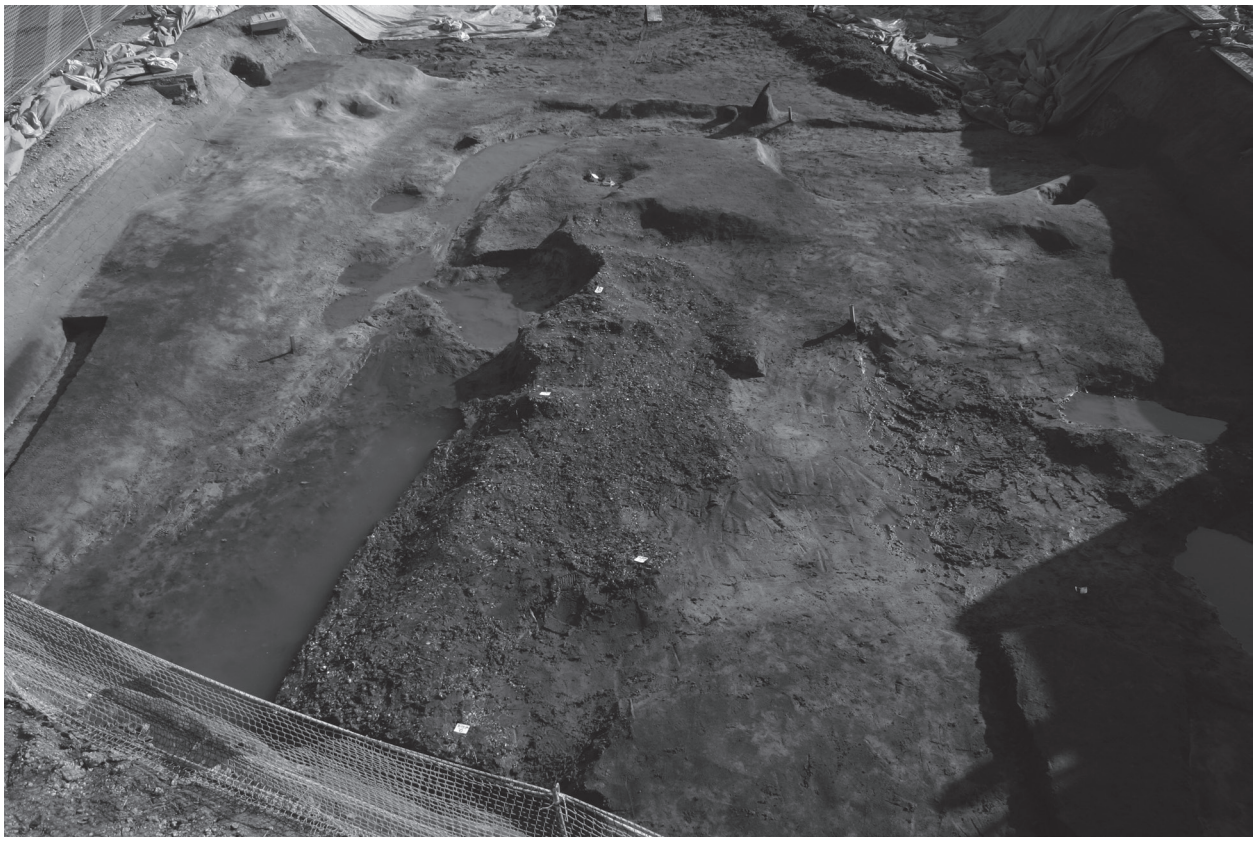


畑間遺跡 038SE 完掘状況（北西より）（段掘りされた井戸の構造がわかる）

畑間遺跡 038SE 断面（北より）（基盤層由来のシルトブロックが観察される）

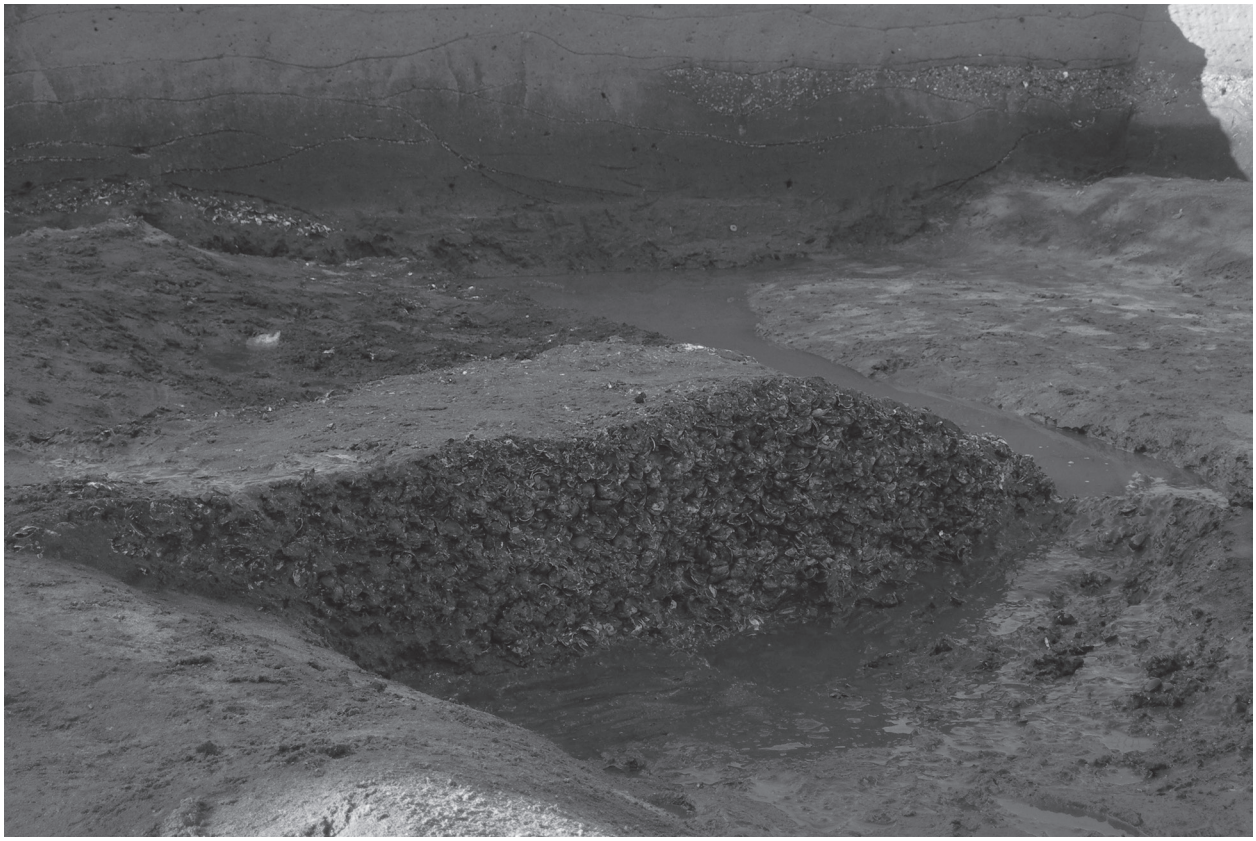


畑間遺跡 026SM 検出状況 (1)(南より)(貝層が溝に沿って帯状に広がっている)



畑間遺跡 026SM 検出状況 (2)(西より)

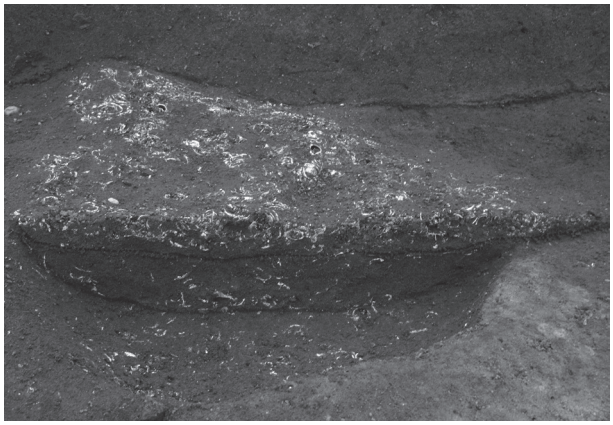
畑間遺跡 026SM 完掘状況（南東より）

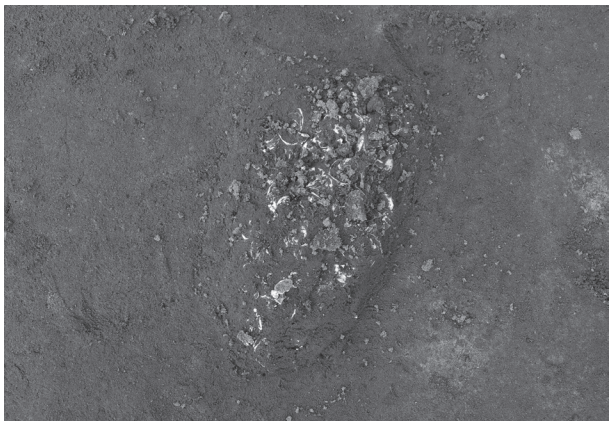


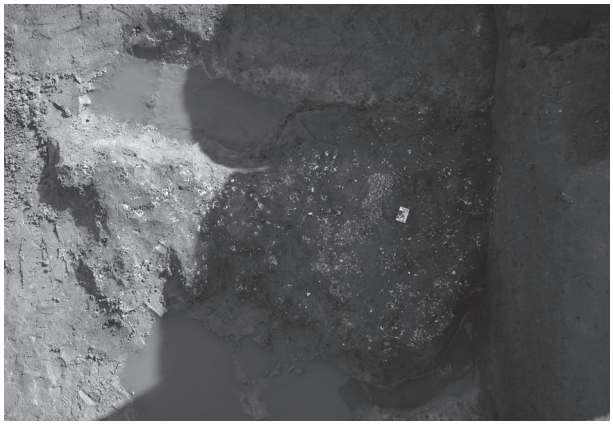
畑間遺跡 026SM 断面（南東より）（ほぼ純貝層であることがわかる）

図版第 36

畑間遺跡 021SM 検出状況（北より）


畑間遺跡 021SM 断面（北より）

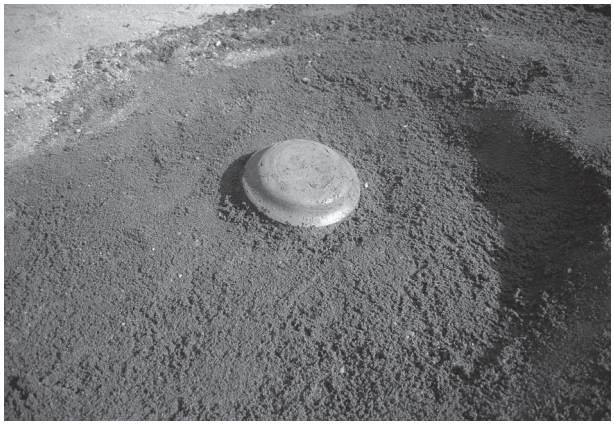

畑間遺跡 025SM 検出状況（東より）

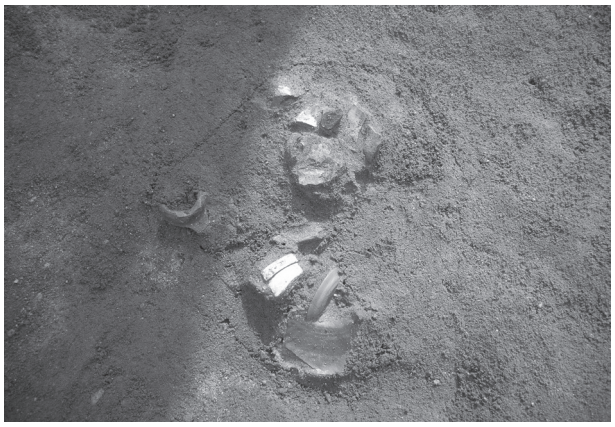

畑間遺跡 027SM 検出状況（西より）

畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (3)（東より）

畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (4)（東より）

畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (5)（東より）


畑間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (6)（東より）

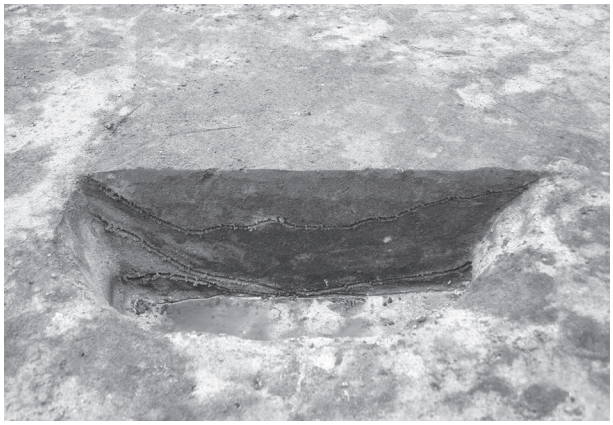

畑間遺跡 045SU 検出状況（東より）

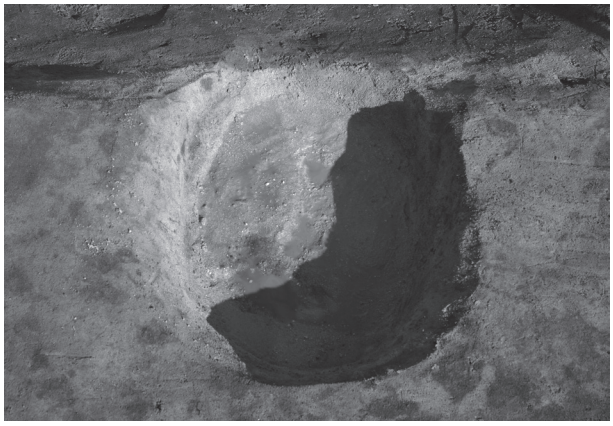
畑間遺跡 041SD 断面（南より）

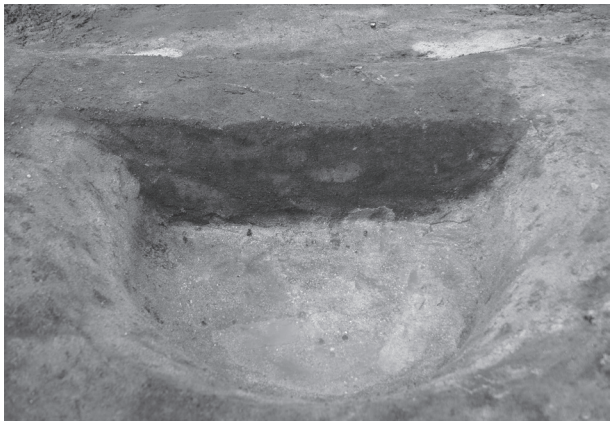
畑間遺跡 058SK 木製品出土状況（南より）

畑間遺跡 047SK 断面（南西より）

畑間遺跡 048SK 完掘状況（南より）


畑間遺跡 048SK 断面（南より）


畑間遺跡 049SK 完掘状況（南より）


畑間遺跡 049SK 断面（南より）

東畑遺跡 1 地点包含層掘削作業

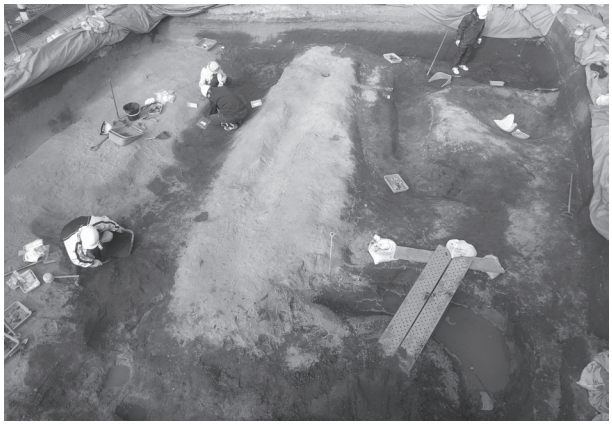
東畑遺跡 2 地点 013SU 遺物検出作業

畑間遺跡 3 地点包含層掘削・測量作業

畑間遺跡 3 地点 013SM 貝層サンプリング作業

畑間遺跡 3 地点 026SM 掘削作業

畑間遺跡 4 地点 044SU 遺物検出作業


畑間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (1)

畑間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (2)

東畑遺跡 015SD 出土土師器

東畑遺跡 017SD 出土土師器

東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (1)

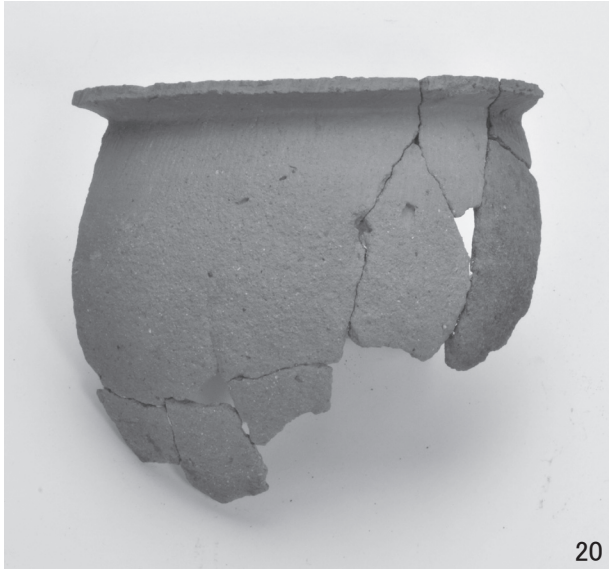
東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (2)

東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (3)

東畑遺跡 013SU 出土弥生土器 (1)

東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (4)

東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (5)



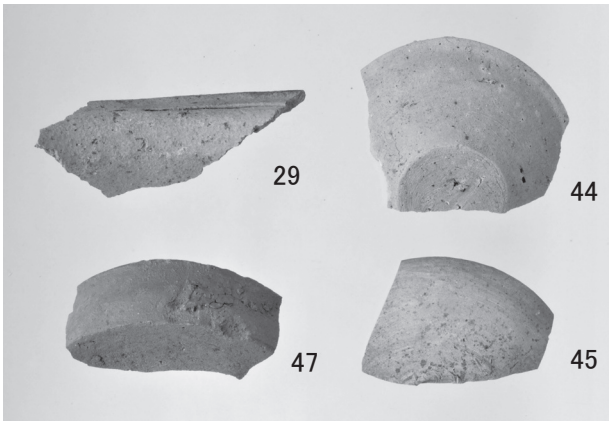
東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (6)

東畑遺跡 004SD 出土弥生土器 (7)

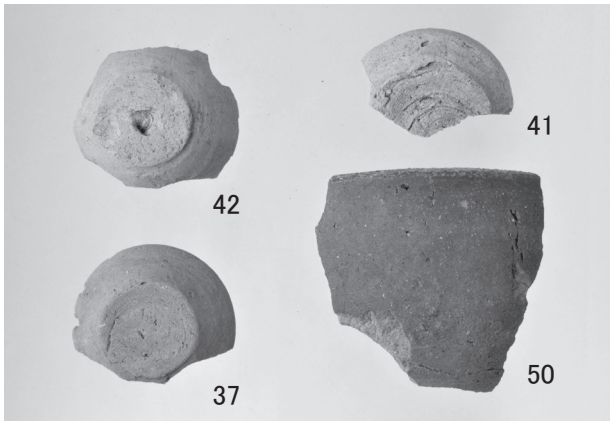
東畑遺跡 013SU 出土弥生土器 (2)

東畑遺跡 013SU 出土土器 (3)

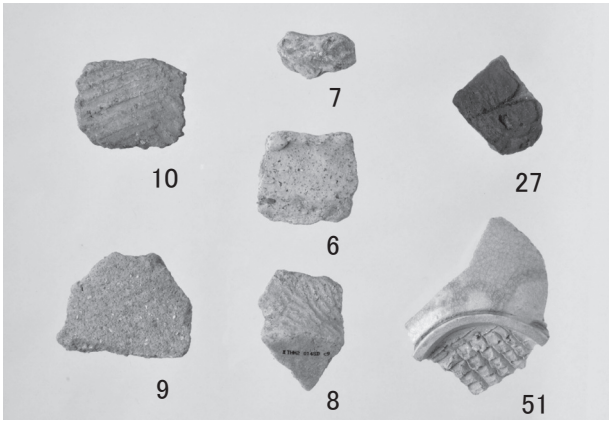
東畑遺跡出土山茶碗耳皿・小碗・小皿



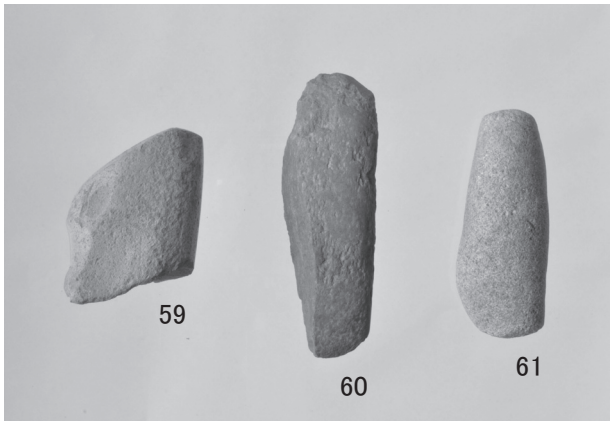
東畑遺跡出土土師器鍋・山茶碗・常滑



東畑遺跡出土山茶碗・常滑



東畑遺跡出土弥生土器・瓦器椀・瀬戸美濃平碗

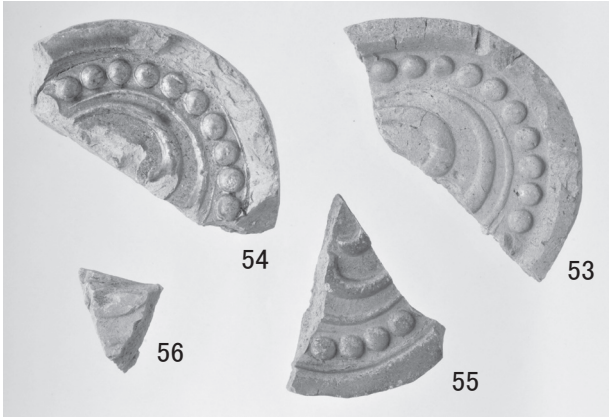


東畑遺跡出土石器

図版第 42

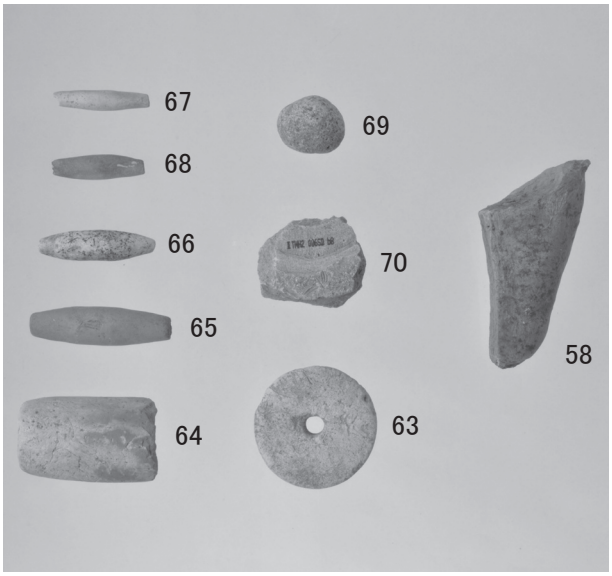
52

東畑遺跡出土瓦 (1)



東畑遺跡出土瓦 (2)

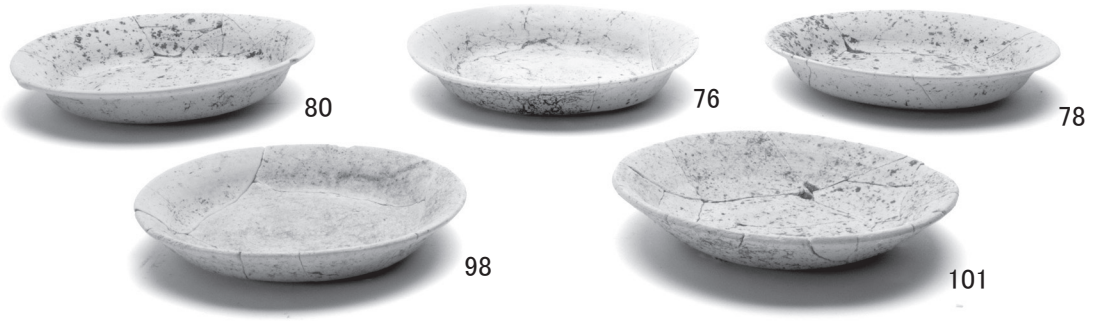
東畑遺跡出土瓦 (3)



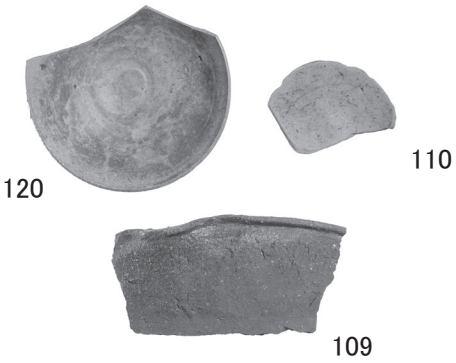
東畑遺跡出土土製品

畑間遺跡 038SE 出土山茶碗

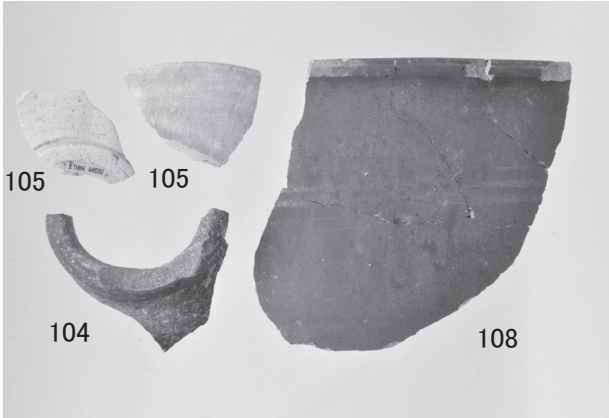
畑間遺跡 024SD 出土山茶碗



畑間遺跡 034SD(044SU) 出土土師器皿



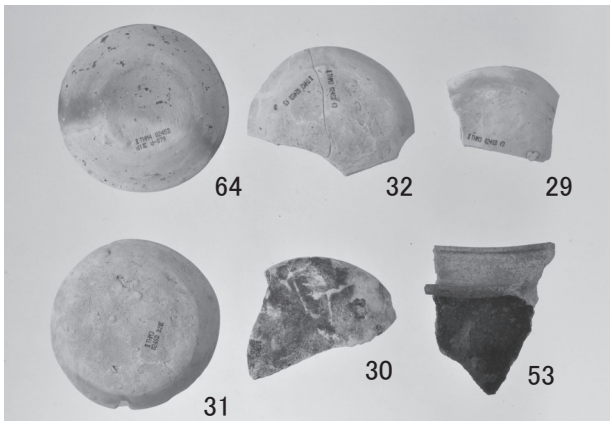
畑間遺跡 034SD 出土山茶碗・常滑



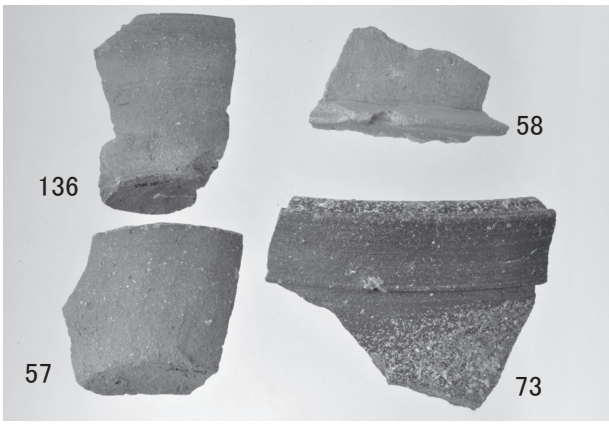
畑間遺跡 034SD(045SU) 出土瀬戸美濃・常滑

畑間遺跡 036SD 出土土師器鍋・山茶碗・常滑

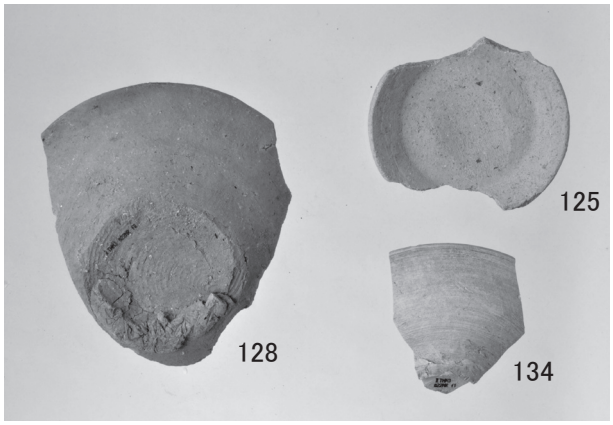
畑間遺跡 038SE 出土常滑擂鉢



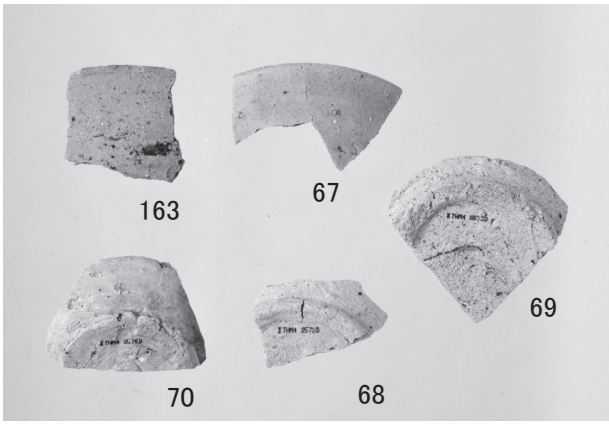
畑間遺跡 024SD・057SD 出土土師器皿・鍋



畑間遺跡 024SD・057SD・022NR 出土常滑



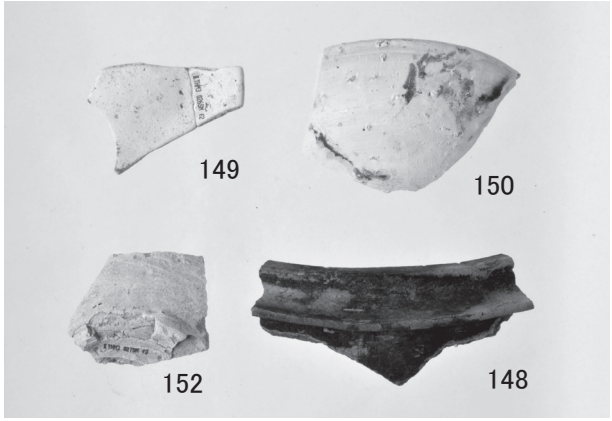
畑間遺跡 022NR 出土山茶碗



畑間遺跡 052SK・057SD 出土山茶碗

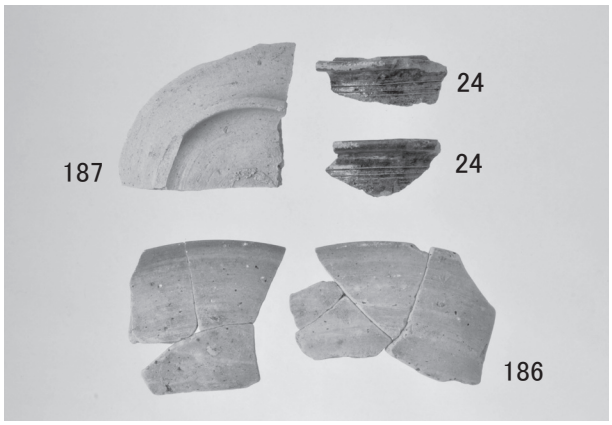
畑間遺跡 013SM 出土山茶碗・常滑

畑間遺跡 026SM 出土土師器鍋

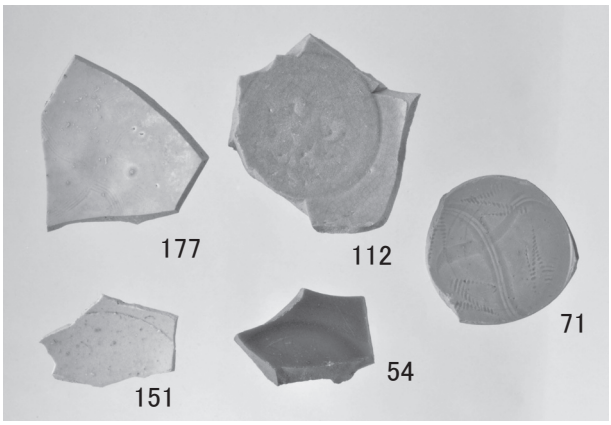


畑間遺跡 026SM・027SM 出土土師器皿・鍋・山茶碗

畑間遺跡 029SK 出土山茶碗

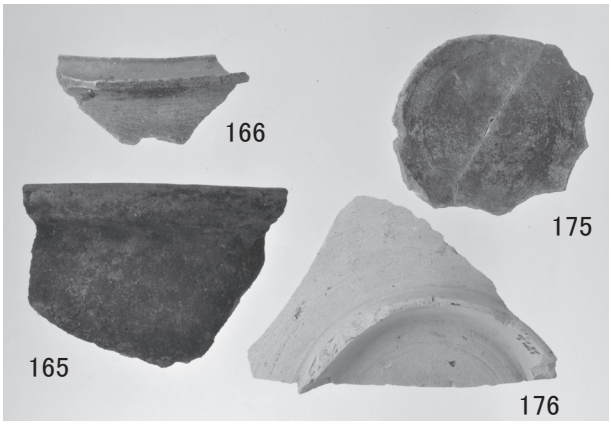


畑間遺跡出土須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器

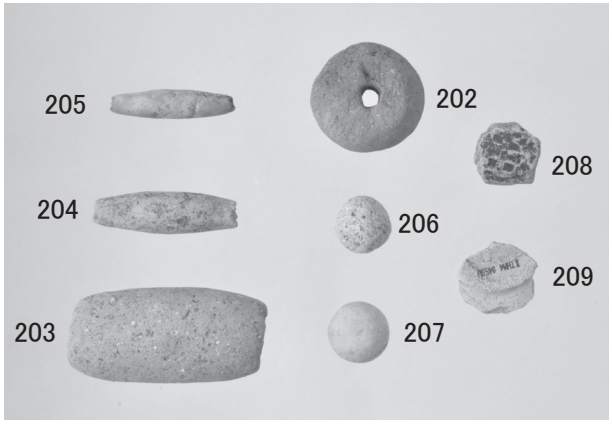


畑間遺跡出土白磁・青磁

畑間遺跡出土瀬戸美濃

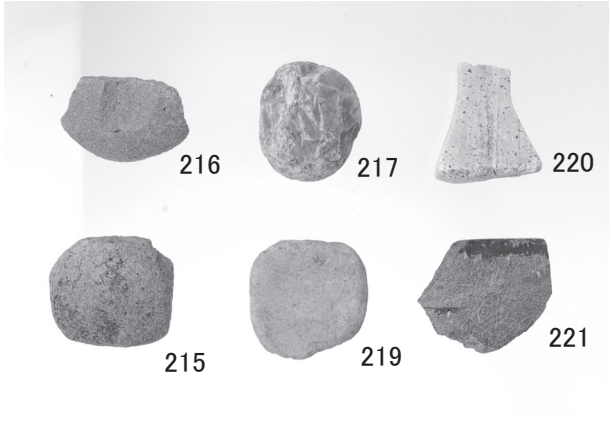


畑間遺跡包含層出土土師器・瓦質土器・山茶碗

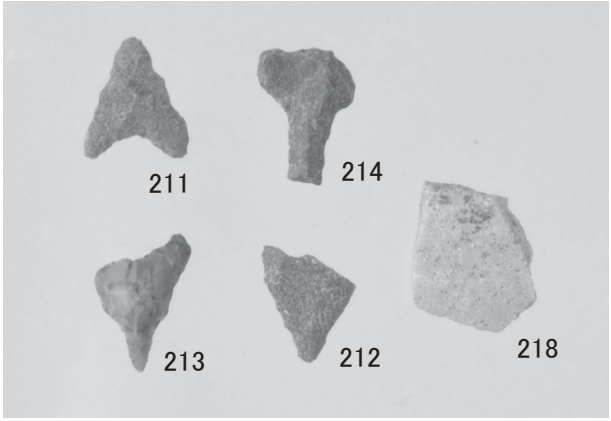


畑間遺跡出土土製品

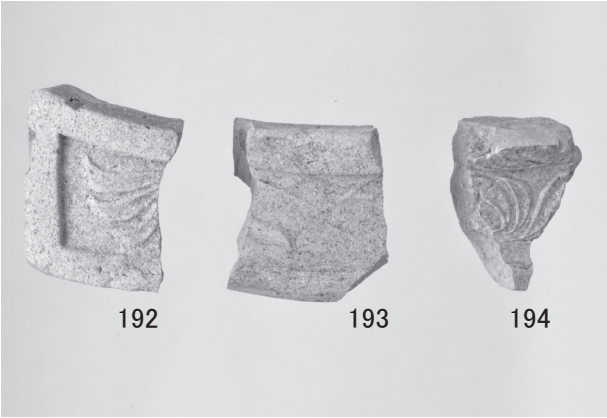
畑間遺跡出土焼土塊



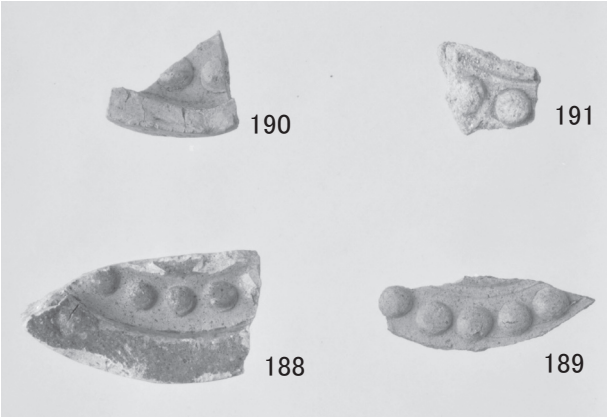
畑間遺跡出土石器・石製品 (1)



畑間遺跡出土石器・石製品 (2)



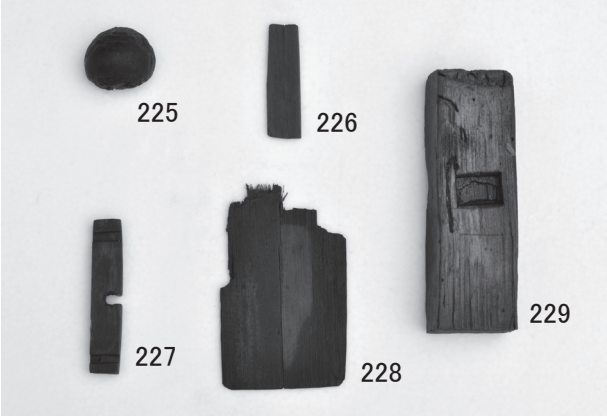
畑間遺跡出土瓦 (1)



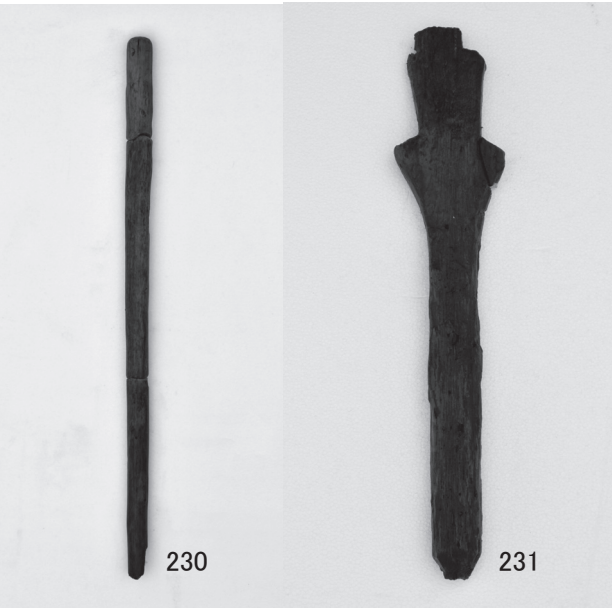
畑間遺跡出土瓦 (2)

畑間遺跡出土瓦 (3)

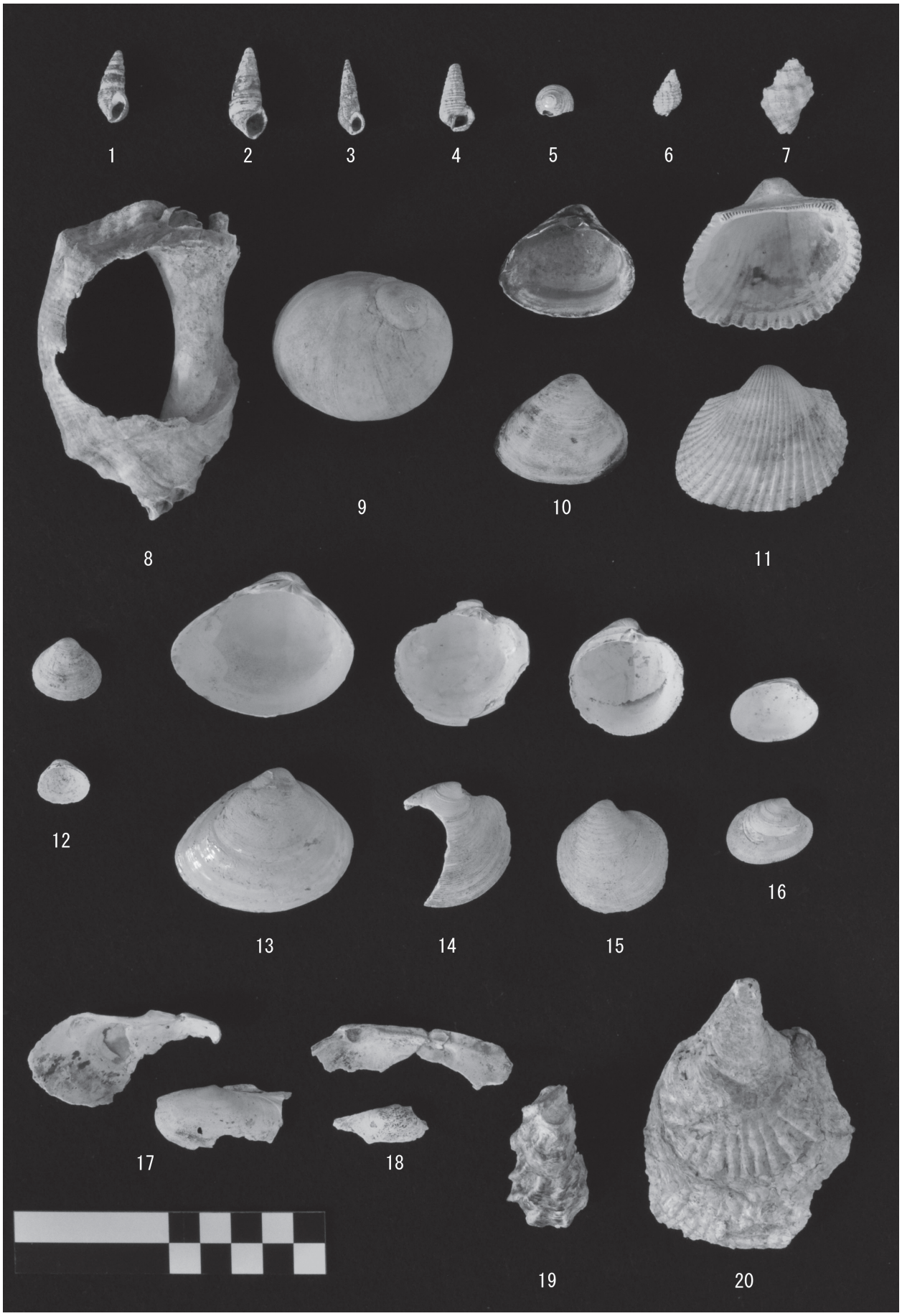
畑間遺跡出土瓦 (4)



畑間遺跡出土木製品 (1)



畑間遺跡出土木製品 (2)



畑間遺跡出土動物遺体 (1)(貝類)(スケールは全長 10cm)

畑間遺跡出土動物遺体 (2)(脊椎動物骨)(スケールは全長 10cm)

図版第 50

畑間遺跡出土動物遺体 (3)(脊椎動物骨)(スケールは全長 10cm)

写真１～８　畑間遺跡出土昆虫化石写真 (1)

1.　ヒラタゴミムシ族　Platynini　前胸背板 3.6mm
2.　ヒラタゴミムシ族　Platynini　前胸背板 2.6mm
3.　ナガヒョウタンゴミムシ　*Scarites terricola pacificus* Bates　前胸背板 4.9mm
4.　エンマコガネ属　*Onthophagus* sp.　前胸背板 3.2mm
5.　エンマコガネ属　*Onthophagus* sp.　前胸背板片 3.1mm
6.　マグソコガネ属　*Aphodius* sp.　左前脚 3.8mm
7.　コブマルエンマコガネ　*Onthophagus atripennis* Waterhouse　左上翅 3.2mm
8.　マグソコガネ　*Aphodius rectus* (Motschulsky)　左前翅 3.1mm

図版第 52

写真 9 ～ 13　畑間遺跡出土昆虫化石写真 (2)

9.　コアオハナムグリ　*Oxycetonia jucunda* (Faldermann)　右前翅片 6.2mm
10. ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* Motschulsky　中胸腹板 4.1mm
11. ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* Motschulsky　前胸背板 5.1mm
12. ノコギリカミキリ　*Prionus insularis* Motschulsky　左上翅 8.1mm
13. ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* Motschulsky　脛節 2.8mm

報告書抄録

ふりがな	はたま・ひがしはたいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	畑間・東畑遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮澤浩司・桐山秀穂・坂野俊哉・鬼頭剛・堀木真美子・西野順二・奥野絵美・森勇一
編集機関	国際航業株式会社
所 在 地	〒452-0901　愛知県清須市阿原神門95-1　　Tel 052-408-0245
発行機関	愛知県東海市教育委員会
所 在 地	〒476-8601　愛知県東海市中央町1丁目1番地　　Tel 052-603-2211
発行年月日	2009年8月7日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畑間遺跡（ハタマ イセキ）・東畑遺跡（ヒガシハタイセキ）	愛知県東海市（アイチケン トウカイシ）	23222	43050	35 1 6	136 53 47	20081110～20090219	820㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑間遺跡	集落跡	中世	区画溝など溝 井戸・土坑 貝塚・住居址	土師器皿・鍋,山茶碗 瀬戸美濃,常滑,白磁 青磁,瓦,弥生土器	緑釉陶器火舎香炉 「隆珎」「寺」ほか 墨書土器
東畑遺跡	集落跡	弥生時代・中世	方形周溝墓 溝・土坑	弥生土器,山茶碗 常滑,石器	弥生時代の方形周溝墓

愛知県東海市
畑間・東畑遺跡発掘調査報告

平成21年8月5日 印刷
平成21年8月7日 発行

編　　集　国際航業株式会社
〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1
TEL 052-408-0245
発　　行　愛知県東海市教育委員会
〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番
TEL 052-603-2211
印刷・製本　三星商事印刷株式会社